

中国日本語専攻大学生における異文化接触の持続の
ためのコミュニケーション能力
——異文化接触のプロセスを通して——

2019年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

目 次

第 1 章 序 章.....	1
1.1 研究の背景と問題の所在.....	1
1.2 研究の目的と研究課題.....	3
第 2 章 先行研究の概観.....	4
2.1 異文化間コミュニケーション能力に関する研究.....	5
2.1.1 異文化間コミュニケーション能力：言語関係.....	6
2.1.2 異文化間コミュニケーション能力：知識・スキル・態度と認知・行動....	14
2.1.3 まとめ.....	18
2.2 日中間の異文化間コミュニケーションに関する研究.....	20
2.2.1 日本人ホストにおける中国人との異文化間コミュニケーション.....	20
2.2.2 中国人ホストにおける日本人との異文化間コミュニケーション.....	22
2.2.3 まとめ.....	24
2.3 異文化間コミュニケーションの情意的要素に関する研究.....	25
2.3.1 動機づけ.....	25
2.3.2 不安.....	28
2.3.3 態度.....	29
2.3.4 まとめ.....	31
2.4 本研究の位置づけ.....	32
第 3 章 中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状.....	35
3.1 調査の目的と調査の実施.....	35
3.1.1 調査の目的.....	35
3.1.2 調査の実施.....	35
3.2 結果と考察.....	37
3.2.1 大学・学年別の異文化接触の経験.....	37
3.2.2 大学・学年別の異文化接触の持続.....	39
3.2.3 大学・学年別の、接触の対象・接触の場・接触期間・接触頻度・接触の主 な内容.....	41
3.2.3.1 接触の対象と接触の場.....	41
3.2.3.2 接触期間と接触頻度.....	45
3.2.3.3 接触の主な内容.....	46
3.3 まとめ.....	49
第 4 章 中国日本語専攻大学生における異文化接触の実態に対するインタビュー調査....	52
4.1 調査の目的.....	52
4.2 M-GTA 研究方法の選択.....	52

4.2.1	グラウンデッド・セオリーとはどんな理論か.....	53
4.2.2	GTA はどんな研究に適しているのか.....	55
4.2.3	M-GTA の主要特性.....	55
4.2.4	M-GTA の分析手順.....	57
4.3	調査の実施.....	58
第 5 章	中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス.....	63
5.1	分析結果の概要.....	63
5.2	接触前の状況.....	69
5.2.1	動機づけ.....	69
5.2.1.1	ツールとしての日本語のアウトプット欲求.....	69
5.2.1.2	ツールとしての日本語の活用による目的達成.....	73
5.2.1.3	他者による接触意欲への刺激.....	76
5.2.1.4	日本人の友人獲得の欲求.....	78
5.2.2	チャンスの獲得.....	78
5.2.2.1	人的リソースの利用.....	79
5.2.2.2	情報的リソースの利用.....	82
5.3	接触中の状況.....	85
5.3.1	困難.....	85
5.3.1.1	コミュニケーションの困難.....	85
5.3.1.2	対人関係の困難.....	90
5.3.1.2.1	異文化接触の対人関係の不安.....	90
5.3.1.2.2	接触場面における話題の選択・継続に難航.....	91
5.3.1.2.3	対等性の欠如による接触の困難.....	95
5.3.1.3	価値づけによる消極的な接触姿勢.....	98
5.3.1.4	異文化による摩擦.....	100
5.3.1.4.1	接触上の文化的差異.....	100
5.3.1.4.2	固定観念による文化摩擦.....	106
5.3.1.5	安定的な場の喪失.....	113
5.3.1.5.1	接触条件の不備.....	113
5.3.1.5.2	日本語の活用についての期待と実際とのギャップ.....	114
5.3.1.6	学業重視による接触の一時的放棄.....	118
5.3.2	努力と工夫.....	118
5.3.2.1	意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫.....	119
5.3.2.2	対人関係の工夫.....	122
5.3.2.2.1	対人関係の構築への努力.....	122
5.3.2.2.2	話題の選択・継続に関する工夫.....	128

5.3.2.3	異文化間摩擦への対応.....	131
5.3.2.3.1	異文化間知識の活用.....	131
5.3.2.3.2	異文化接触の摩擦への回避.....	132
5.3.2.3.3	文化的差異についての積極的な意見交換.....	134
5.3.2.3.4	異文化接触における客観的な姿勢.....	135
5.3.2.3.5	ポップカルチャーに起因するポジティブな観念.....	139
5.3.3	接触に対する相手の関与姿勢.....	141
5.4	持続中（断念）.....	142
5.4.1	効果.....	142
5.4.1.1	コミュニケーション能力の向上.....	142
5.4.1.2	目的の達成.....	144
5.4.1.3	対人関係の不安の軽減と満足感の獲得.....	144
5.4.1.4	他情報源から得た日本認識との総合.....	147
5.4.1.5	日本人イメージの具体化（個別化）.....	149
5.4.1.6	文化理解の意識化.....	152
5.4.1.7	日本文化の受容.....	155
5.4.1.8	異文化接触の経験の共有.....	156
5.4.2	異文化接触の持続と拡大.....	158
5.4.3	あきらめ.....	159
5.5	まとめ.....	162
第6章	異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力.....	170
6.1	ネットワークの構築能力.....	170
6.2	意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力.....	172
6.3	対人関係構築能力.....	174
6.4	異文化間能力.....	176
6.4.1	異文化間知識.....	176
6.4.2	異文化間スキル.....	178
6.4.3	異文化間態度.....	180
第7章	終章.....	182
7.1	まとめ.....	182
7.1.1	異文化接触の現状.....	183
7.1.2	異文化接触のプロセス.....	184
7.1.3	異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力.....	186
7.2	本研究の独創性とその成果.....	188
7.3	中国の日本語教育への示唆.....	194
7.4	本研究の限界とこれからの研究課題.....	198

参考文献.....	200
参考資料.....	204
添付資料.....	205
(1) 中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自由記述調査許可願	205
(2) 中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自由記述調査票....	206
(3) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに関するインタビュー調査 許可願.....	208
(4) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに関するインタビュー調査 の概要.....	209
(5) 分析ワークシート：中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス....	210

図表一覧

<第2章>

【Figure 2.1】 異文化間コミュニケーション能力モデル (Byram (1997 : 73) によって筆者が作成したもの)	7
【Table 2.1】 異文化間コミュニケーション能力 (文 (1999 : 9) によって筆者が作成したもの)	8
【Table 2.2】 外国語教育における中国大学生の異文化間コミュニケーション能力モデル (鍾・樊 (2013 : 23) によって筆者が作成したもの)	10
【Table 2.3】 異文化間コミュニケーション能力の構造と構成要素のモデル (石井 (2001 : 112) によって筆者が作成したもの)	11
【Figure 2.2】 異文化間能力のピラミッドモデル (Deardorff (2004 : 196) による)	13
【Table 2.4】 異文化間能力のキーワード (松尾・森茂 (2017 : 28) による)	15
【Table 2.5】 AUC-GS 学習モデル (田中 (2010 : 67) による)	17
【Table 2.6】 「異文化間能力 (文 : 1999)」と「ソーシャルスキル (田中・中島 : 2006)」の構成要素 (筆者の作成による)	18
【Figure 2.3】 文化的アイデンティティと異文化適応感の因果モデル (一二三 2008 : 3)	20
【Figure 2.4】 WTC モデル (MacIntyre et al.1998 : 547)	27
【Table 3.1】 調査協力者の内訳	36
【Table 3.2】 二大学における異文化接触の経験者および未経験者数の内訳	37
【Table 3.3】 大学別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳	38
【Table 3.4】 学年別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳 (「A 大学」)	38
【Table 3.5】 学年別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳 (「B 大学」)	39
【Table 3.6】 大学・学年別異文化接触の持続状況	40
【Table 3.7】 大学別「接触の対象」	41
【Table 3.8】 大学別「接触の場」	41
【Table 3.9】 学年・大学別「接触の場」	43
【Table 3.10】 接触の場別「接触期間」	45
【Table 3.11】 接触の場別「接触頻度」	46
【Table 3.12】 接触の話題内容	48
【Table 3.13】 接触の場別接触の話題内容	49
【Table 4.1】 インタビュー調査協力者一覧表	61
【Table 5.1】 本調査で生成された概念とその定義一覧表	66
【Figure 5.1】 中国日本語専攻大学生における異文化接触プロセスの結果図	67

第1章 序章

1.1 研究の背景と問題の所在

国際交流基金の最新データ¹によると、2015年度中国の日本語学習者数は95万人であり、2012年度の100万人と比べれば、約1割減とはなったものの、世界1位を占め続けている。そのうち、高等教育²における日本語学習者は62万あまりおり、初等教育・中等教育より多く、中国最多の割合を占める。一方、中日間の経済情勢などが変わりつつあり、今では日本語学習者の就職が厳しくなるなどの問題が目だってきた。そうした状況の中で、日本語学習者、特に日本語のみを学習する専攻大学生³にとって自分の将来の進路はどうか、また、将来の激しい競争に向けて大学の段階でどのような能力を身に付けておけば競争力が持てるかなどの問題に注目が集まってきている。今までの、日本語を聞く・話す・読む・書くの4言語技能の運用力を向上させればよいという言語至上主義、それに基づいて日本語能力試験N1かN2に合格できればよい就職が見つかるという意識は変えなければならない時期にきている。

中国国内での日本語教育は、日本語専攻における高学年段階の教学大綱が2000年、基礎段階の教学大綱が2001年に作成され、異文化間コミュニケーション能力⁴を養成するという目標が提起された（修2008：2）。それは、今まで言語知識の習得を中心に行われた日本語教育を、新しい国際情勢、社会情勢、社会のニーズに対応できるような人材養成を目標とするものに調整しつつあるということであると判断できる。しかし、それらの大綱の発表から20年経つ今、中国国内で行われている日本語教育においては、異文化間コミュニケーション能力の養成について共通に認められる問題がある。その問題点を以下に列挙する。

- ①「異文化間コミュニケーション能力」そのものに対する基礎的研究があまりなされておらず、異文化間コミュニケーション能力が単純に「日本語＋日本の文化を知っていること」と理解されている。そのため、異文化間コミュニケーション能力の養成を、日本語能力の上に日本文化についての知識を加えればよいと理解する考えが強い。
- ②「日本語＋日本の文化を知っていること」というパターンに基づいて展開されている

¹ 国際交流基金『2015年度日本語教育機関調査結果』による。<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/china.html#KEKKA> を参照。

² 「高等教育」は、学部レベルで、日本語専攻・非専攻第一外国語・非専攻第二外国語に分類される。

³ 中国国内には、日本語学習者が数多く存在しており、公立の学校教育（初等教育・中等教育・高等教育）以外に、民間の各種日本語学校や独学形態の日本語学習も多い。本研究では、「日本語を高等教育での専攻とする学習者」に言及するときは、「日本語専攻大学生」で呼ぶこととする。

⁴ ここでいう「異文化間コミュニケーション能力」は、日本人との異文化間コミュニケーションに特定する。本研究で取り扱っている「異文化間コミュニケーション能力」は、日本人に特定する「異文化間コミュニケーション能力」と国を特定せずに用いる「異文化間コミュニケーション能力」という2つの場合を指すが、「日本語専攻大学生の異文化間コミュニケーション能力」として用いるときは、日本人との「異文化間コミュニケーション能力」に特定する。

異文化間コミュニケーション能力の養成は、教える側の施策を中心に行われるものが多い。それに対して、学習者の立場からどのように異文化間コミュニケーション能力を身に付けるかという視点は欠如している。教える側としての日本語教師は、教室内での日本語学習にしか目を向けず、教室外で展開されている学習者の異文化接触への関心が薄く、それゆえ、異文化接触に対する支援、サポートなどはなおさらである。

八島（2004：81）は、外国語学習に「教室の先に広がる異文化間コミュニケーションの可能性を考慮して外国語学習の意味を考える」必要があると指摘しているが、教室外での異文化接触が実際の異文化間コミュニケーションの場であり、異文化間コミュニケーション能力が鍛えられる場であるということは、中国の日本語教育者において十分に認識されておらず、異文化間コミュニケーション能力の育成に対して、異文化接触のような、教室外からの視点が見落とされている。

2018年には、中国教育部高等学校教学指導委員会によって『普通高等学校本科專業類教学質量国家標準』（以下、『国家標準』と略称）が作成され、外国言語文学類専攻の学習者に対して、外国語運用力や異文化間能力が重要な能力として求められると明記された⁵。ここでは、「外国語運用力」に関しては以下のように記されている。

「能理解外语口语和书面语传递的信息、观点、情感；能使用外语口语和书面语有效传递信息，表达思想、情感、再现生活经验，并能注意语言表达的得体性和准确性；能借助语言工具书和相关资源进行笔译工作，并能完成一般的口译任务；能有效使用策略提高交际效果；能运用语言知识和基本研究方法对语言现象进行分析与解释。

（外国語の話し言葉と書き言葉によるメッセージ、考え、感情を理解すること。外国語の話し言葉と書き言葉を用いてメッセージを効果的に伝達し、考えと感情を表現し、生活経験を再現することができ、さらに、言葉遣いの適切性と正確性に注意すること。検索ツール・関連リソースを利用して文書を翻訳し、かつ、普通の通訳ができること。ストラテジーを活用してコミュニケーションの効果を向上させること。言語知識と基礎的研究方法を利用して言語現象を分析、解釈できること。筆者訳）」

一方、「異文化間能力」に関しては、次の通り定義されている。

「尊重世界文化多样性，具有跨文化同理心和批判性文化意识；掌握基本的跨文化研究理论知识和分析方法，理解中外文化的基本特点和异同；能对不同文化现象、文本和制品进行阐释与评价；能有效和恰当地进行跨文化沟通；能帮助不同文化背景的人士进行有效的跨文化沟通。

（世界文化の多様性を尊重し、異文化に共感性と批判的文化意識を持つこと。異文化研

⁵ 教育部高等学校教学指導委員会編（2018）『普通高等学校本科專業類教学質量国家標準』高等教育出版社，p.92を参照。

究の理論知識と分析方法を把握し、中国と外国文化のそれぞれの基本的特徴と双方の相違点を理解すること。異なる文化現象、文書と製品に対して解釈、評価できること。効果的、かつ適切な異文化間コミュニケーションが実施できること。異なる文化背景を持っている人に効果的に異文化間コミュニケーションができるよう支援できること。筆者訳)」

上掲の引用から、2000年に提起された「異文化間コミュニケーション能力」は、この『国家標準』で強化され、さらに、「外国語運用力」、「異文化間能力」に細分化されたことが判明した。また、「外国語運用力」・「異文化間能力」が明確に定義されているため、この『国家標準』は、外国語専攻における人材育成の目標として教育機関が準拠すべき枠組みを明示していると思われる⁶。しかし、その目標を達成するためには、上述したような2000年以降の認識と教育の施策を調整しなければならないと考えられる。

1.2 研究の目的と研究課題

教室外での異文化接触は、学習者における異文化間コミュニケーション能力の向上に重要な役割を果たし、そして、教室内の日本語教育実践に有意義な示唆を与え得るということも十分に考えられる。しかし、それが、中国の日本語教育者の間においては、十分に認識されていない。一方、学習者のほうは、教室内から有効な支援やサポートを受けられずに多くの困難を抱えながら異文化接触を経験している。そのような学習者の状況は、速やかに改善されなければならない。

上述のような問題を踏まえ、本研究では以下の研究目的を設定した。

- (1) 中国の日本語専攻大学生における異文化接触はどのようなものを認識できるように記述すること。
- (2) 中国における日本語専攻大学生が異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を同定すること。

上記の研究目的を敷衍して、以下のように課題を細分化した。

- (1) 中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状はどうであるか。
- (2) 彼らの異文化接触のプロセスはどのようなものか。
- (3) 彼らの異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力はどのようなものか。

では、上掲の研究目的を達成するため、以下、本研究の議論を展開する。

⁶ 本研究では、2018年に教育部によって提出された「外国語運用力」・「異文化間能力」を、細分化された「異文化間コミュニケーション能力」と捉えるため、以下はそれらを合わせて「異文化間コミュニケーション能力」と称し、表現上の統一を期する。

第2章 先行研究の概観

そもそも異文化接触とは何か。斎藤（1993：237）は、「異文化接触」を「文化的背景を異にする人々の間でなされる対面的相互作用」とした。インターネットの普及に伴い、インターネットを利用して、文化的背景を異にする人々と直接的に接触することは珍しくなくなっている。そのため、「接触」は必ずしも「対面」とは限らないものになっている。松尾・森茂（2017：28）は、「異文化間能力の教育実践が行われる場としては、SNSのようなメディアを通じた関わりの場が出てきていて、そのような場における異文化間能力についても検討があっても良いのかもしれない」という指摘をしているが、ここからも、必ずしも対面しなくても実現可能なSNSが、異文化間能力を検討する必要がある接触の場になっているものと言えよう。本研究では、「異文化接触」の概念に対して、斎藤（1993：237）を援用するが、「対面的相互作用」に関しては、「対面」での直接接触と、SNSのように、必ずしも対面でなくても、文字、音声、画像などで発信・受信する相互作用をも含むものとする。また、本研究では、「異文化接触」を「異文化間コミュニケーション」と区別して取り扱うことを特筆する。両者の相違点については、次の2点を挙げる。

まず、概念から言えば、石井他（1997：7）は、「異文化間コミュニケーション」を「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響しあう過程である」と定義している。ここでは、「異文化間コミュニケーション」は言語と非言語⁷メッセージの授受によって成されるものと狭義的に捉えられていると考えられる。これに対して、例えば、中国ホストの日本語専攻大学生が日本料理店でアルバイトし、日本人顧客と接触しているとき、ことばを交わさないものの、彼らのあいさつのしかた、乾杯の方法、割り勘の処理、互い同士の上下・同等の間柄でのやり取り一般、などを見聞きすることで、日本文化の一端に気づくような場合は、言語と非言語によるメッセージの授受より、行動を見聞きし、異なる文化に接触することに焦点を当てる⁸。その場合が「異文化接触」の一種と見なされる。そういう意味で、「異文化接触」は、「異文化間コミュニケーション」を含む上位概念であると考えられる。次に、用語自身の持っているニュアンスから言えば、「異文化接触」は、「異文化間コミュニケーション」と比べて、日常生活に深く関わる行動や現象としてより頻繁に利用されている一面が強いが、「異文化間コミュニケーション」は、学問的によく議論されている内容であるため、異文化接触より学問的なイメージが強い。そのため、学習者自身の立場からの、教室外での日本人との異文化間インタラクションをいう時は、学問性の強くない「異文化接触」を使うこととする。

⁷ この場合の「非言語」は言語に随伴する身振り、手振り、表情などのような「非言語」であるものと理解されるのが一般的である。

⁸ こういう場合、日本語専攻大学生が日本人顧客との間に相互作用がないとは限らず、言語と非言語によるメッセージの授受より、相手の行動を見聞きすることが強調されているため、異文化間コミュニケーションが広義的に捉えられている。

Fantini (2009 : 458) は、所属する集団の「文化 1」を持っている個人は、異文化間の接触によって、自分とは異なる「文化 2」と出会い、「文化 1」と「文化 2」を比較や対照をしたり、すり合わせたりして、「文化 3」を形成すると提起した。松尾・森茂 (2017 : 23) は、このようなプロセスの中で、異文化間コミュニケーション能力を培うことが可能であるという。逆に言えば、異文化接触の持続には異文化間コミュニケーション能力が欠かせない。山岸 (1997 : 39) は、異文化接触において重要と考えられてきた能力や資質を、「異文化適応」・「異文化間コミュニケーションと異文化トレーニング」・「学校教育」の 3 つの文脈に分けて整理する必要があると論じている。さらに、西田 (2000 : 16) は、異文化間コミュニケーション研究の主な領域について 5 点を挙げており、それぞれは、①未知の環境 (異文化) や文化背景の異なる人々に対する心理的反応に関する研究——例えば、偏見、ステレオタイプ、カルチャーショック、Uカーブ、Wカーブなど・②異文化適応および移民者の文化変容・③異文化間コミュニケーション能力・④価値観および価値志向・⑤言語および非言語行動であると指摘する。本研究は、異文化接触のプロセスを通して、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の持続のためのコミュニケーション能力を探究することを目的の 1 つとし、目標言語対象国に移動することのない外国語学習者を対象に議論するものであるが、日中間の異文化間コミュニケーションをより全面的に把握するために、中国人留学生の日本での異文化適応に関する先行研究をも視野に入れる。本研究は、西田 (2000) の提示している異文化間コミュニケーションに関する、上述の 5 つの領域から先行研究を概観することにする。

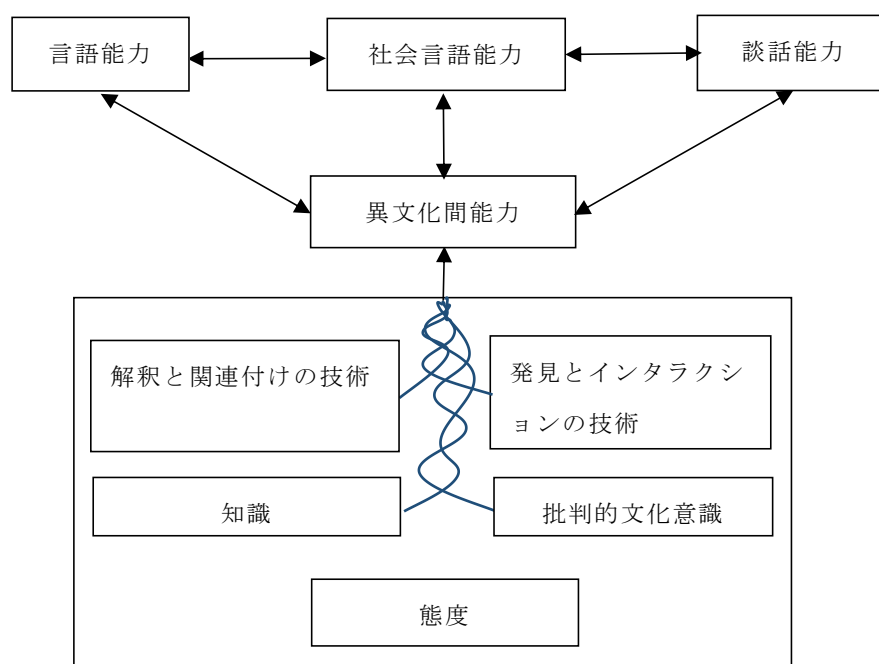
2.1 異文化間コミュニケーション能力に関する研究

異文化間コミュニケーション能力に関する研究は外国語教育、異文化間教育、コミュニケーション学、社会心理学、発達心理学など多岐にわたる分野において、多様な視点から関心を持たれ、盛んに議論されてきた。「異文化間コミュニケーション能力」に関しても、研究者たちが様々な視点から名付けを行っており、「異文化間能力」、「異文化間コミュニケーション能力」、「異文化リテラシー」、「異文化対応力」、「異文化理解力」などというように、様々な名称で研究されている (西岡・八島 2018 : 102 ; 王 2016 : 61)。それは学問領域、アプローチ、文脈などによって、研究が当てる焦点がそれぞれ異なり、その概念についてコンセンサスが得られておらず (松尾・森茂・工藤 2018 : 2)、異文化間コミュニケーション能力に対する認識も変遷してきているからであると解釈できよう。本研究は、中国の日本語教育への貢献に着眼し、外国語教育を土台とするため、外国語教育に一般的に用いられている「異文化間コミュニケーション能力」という呼び方を採用するが、先行研究をレビューする時、異文化間教育に一般に取り上げられている異文化間能力やソーシャルスキルに関する研究をも視野に入れる。

2.1.1 異文化間コミュニケーション能力：言語関係

外国語教育における異文化間コミュニケーション能力に関する研究は、「異文化間コミュニケーション能力」の概念とその構成要素と要素間の関係を構築したモデルがもっとも多く行われている。

Nishida (1985 : 249) は、「異文化間コミュニケーション能力」を文化背景の異なる者との間で適切な相互作用を行うために、状況に応じて適切なコミュニケーション行動をとることのできる能力と定義づけており、それと似た知見に、石井他 (1997 : 17) がある。ここでは、「異文化間コミュニケーション能力」に異文化の人々と相互作用をして、自分の目的が達成できるコミュニケーションの効果性と、異文化のさまざまな状況の中で適切でふさわしい行動がとれるという行動の適切性があると提唱している。しかし、石井 (2001 : 107) では、この定義では「言語至上主義、話し手中心主義、そして話し手の目的達成の価値観が顕著に認められ」、「一般コミュニケーション能力の構成要素の分類で指摘された認知面、行動面、そして情意面の構成要素を総合的に配分する視点が欠如している」と論じている。そのため、石井 (2001 : 108) では、新たに「異文化間コミュニケーション能力」を「一定の具体的な異文化間コミュニケーション場面において、コミュニケーションの各構成要素に内在する文化の影響を受けながら、複数の人間が言語メッセージおよび非言語メッセージを交換し意味を共有するための相互行為をする認知的、情意的、行動的、そして性格的能力」と定義している。この定義では、異文化間コミュニケーションの行う手段は言語と非言語メッセージの交換で、その目的は意味の共有であり、そこに必要な能力は認知的・情意的・行動的と性格的なものであると、コミュニケーションを全体的に捉えており、それまでの外国語教育が抱えてきた言語至上主義的で話し手中心主義的な、狭義的な異文化間コミュニケーション能力観に新しい知見をもたらした。



【Figure 2.1】 異文化間コミュニケーション能力モデル (Byram (1997 : 73) によって筆者が作成したもの)

Byram (1997) の構築した異文化間コミュニケーション能力モデルは、【Figure 2.1】の通りである。

Byram (1997) の提唱した異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence) は、言語に関わる「言語能力 (linguistic competence)」・「社会言語能力 (sociolinguistic competence)」・「談話能力 (discourse competence)」と文化に関する「異文化間能力 (intercultural competence) から成っている。「異文化間能力」と「異文化間コミュニケーション能力」はよく同様に取り扱われていると上に述べたが、Byram (1997 : 70) は、「異文化間コミュニケーション能力」は「他文化の人と外国語 (foreign language) でやりとりする能力」であるが、「異文化間能力」は「他文化の人と母語 (their own language) でやりとりする能力」とも捉えられると論じた。また、Byram (1997) の構築した「異文化間コミュニケーション能力モデル」における「異文化間能力」は、「知識(Knowledge)」・「解釈と関連づけのスキル(Skills of interpreting and relating)」・「発見とインタラクションのスキル(Skills of discovery and interaction)」・「批判的文化意識(Critical cultural awareness)」・「態度 (Attitudes)」の5つの要素からなっているものであるとされている⁹。「知識」は異文化間能力の中心的な能力であり、「社会集団や文化についての知識」、「個人、社会レベルのインタラクションの過程についての知識」などが幅広く含まれる。例えば、「自他国の歴史的・現代的関係 (両国の歴史に残る行事、事件、また現在のそれぞれの国の政治的経済的要因) についての知識」、「異文化の対話者間の誤解の原因、プロセスのタイプ (異文化間のコミュニケーションやインタラクションにおけるパラ言語・ノンバーバルの無意識な効果や、共有の概念・ジェスチャー・習慣・儀式の他の解釈) についての知識」などがあげられる。「解釈と関連づけのスキル」は、「他文化の文書と出来事を解釈し、説明できる能力」、「自文化の文書と関連付ける能力」であり、例えば、「インタラクションの誤解、不全箇所を特定し、それを互いの文化システムの用語で説明でき、そして、文書、出来事における自文化中心主義の特定、その原因の説明ができる」などがあげられる。「発見とインタラクションのスキル」は「文化や文化実践において新しい知識を獲得すること」ができ、「実際のコミュニケーション、インタラクションの中で知識、態度、技術を操作できる能力」と定義され、「他国・他文化と接触を容易にする公的、個人的機関を利用する能力」や「他国、他文化の対話者とやりとりするために、知識、技術、態度を即時に適当に組み合わせる能力。その際、国と文化の類似点と自文化と他文化の差異を考慮する」などが取り上げられている。「批判的文化意識」は、「批判的に、あるいは自他文化、国の明示的な基準、実践、生産物にしたがって評価できる能力」である。「態度」とは、異文化に対する「好

⁹ 以下 Byram (1997) の構築した「異文化間コミュニケーション能力モデル」に取り扱われている各概念に対する説明は、松浦・宮崎・福島 (2012 : 93) の訳を参考にした。

奇心にあふれ、開放的である態度」と「他者の意味、信念、行動に対する不信感、判断を保留する態度」のことを指す。Byram (1997) は、「コミュニケーション能力」を明確に提出しなかったが、上述の能力記述の中にはコミュニケーション能力の側面が見られ、そのため、Byram (1997) の異文化間コミュニケーション能力モデルはコミュニケーション能力と異文化間能力から構成され、さらに異文化間能力に知識、スキル、態度、意識が含まれると纏められる。そのうち、スキルに含まれている「解釈と関連付けのスキル」と「発見とインタラクションのスキル」は両方とも認知的・行動的視点から読み取れると考えられる。

一方、文 (1999) の構築した異文化間コミュニケーション能力モデルは、以下の【Table 2.1】のとおりである。

異文化間コミュニケーション能力	コミュニケーション能力	言語能力
		語用能力
		ストラテジー能力
	異文化間能力	敏感性
		寛容性
		柔軟性

【Table 2.1】 異文化間コミュニケーション能力 (文 (1999 : 9) によって筆者が作成したもの)

文 (1999) の構築した異文化間コミュニケーション能力モデルにおいて、異文化間コミュニケーション能力 (Cross-cultural Communicative Competence¹⁰) は「コミュニケーション能力 (Communicative Competence)」と「異文化間能力 (Cross-cultural Competence)」から構成されている。「コミュニケーション能力」には、「言語能力 (Linguistic Competence)」・「語用能力 (Pragmatic Competence)」・「ストラテジー能力 (Strategic Competence)」が含まれる。そのうち、「言語能力」は、「文法能力」と「談話能力」から、「語用能力」は「言語機能を実施する能力」と「社会言語能力」から、「ストラテジー能力」は「補償能力」と「交渉能力」から構成されている。「異文化間能力」は、「敏感性 (Sensitivity)」・「寛容性 (Tolerance)」・「柔軟性 (Flexibility)」に分けられており、「敏感性」は文化的差異に敏感に気付くことであるが、「寛容性」は文化的差異に対する寛容な態度であり、異文化間コミュニケーションの中で自文化と異なる他文化に対して嫌悪し、敵視し、自文化優越であるのではなく、理解し、尊重し、寛容に対処することである。「柔軟性」は、文化的差異に対応する時に捉えられる柔軟な技能である。また、「異文化間能力」を支えているこの3つの子能

¹⁰ 「異文化間コミュニケーション能力」は英文からの訳語であるが、英文文献自体にも「Cross-cultural Communicative Competence」と「Intercultural Communicative Competence」とが使用されている。文 (1999) は「Cross-cultural Communication Competence」を用い、Byram (1997) は「Intercultural Communicative Competence」を用いるが、本研究においては、この二者を同じものと捉える。

力は、孤立して存在しているのではなく、「敏感性」は最低層、「柔軟性」は最高層、「寛容性」は両者の間にあるという階層性を持っており、「異文化間能力」は低層から高層へと発展していくものであるという（文 1999：17）。

文（1999）の構築した異文化間コミュニケーション能力モデルは、「コミュニケーション能力」と「異文化間能力」を対等的に取り扱い、そして、「異文化間能力は必ず言語能力を基礎としており、言語能力を離れては異文化間能力は蜃気楼である。（文 1999：16）（筆者訳）」と強調したように、外国語教育という研究分野においては言語能力が重視されるという特徴が窺われる。そして、「異文化間能力は必ず言語能力を基礎としており、言語能力を離れては異文化間能力は蜃気楼である。」としているところから、文（1999）は、また、コミュニケーション能力と言語能力を同じように扱っていると見られる。さらに、文（1999：13）は「敏感性」は能力範疇にあり、他文化（国）の知識は知識範疇にあるが、他文化（国）の知識を得ることは目的でなく、手段であるため、他文化（国）の知識の得るという手段がなければ、「敏感性」が育たないと主張した。文（1999）の異文化間コミュニケーション能力モデルは、異文化間知識を取り扱ってはいないが、その記述から、異文化間知識が「敏感性」を獲得するのに重要な要素であるということはいえよう。

Byram（1997）と文（1999）を比較すると、両者には共通点と相違点がある。共通点には、両方とも「異文化間コミュニケーション能力」と「異文化間能力」を使い分けている点、また、「異文化間能力」が「異文化間コミュニケーション能力」の子能力であるとする点、外国語能力の異文化間コミュニケーション能力に対する重要な意義を強調している点（鍾・樊 2013：23）がある。相違点は、Byram（1997）の提唱した「言語能力」・「社会言語能力」・「談話能力」が文（1999）モデルの「コミュニケーション能力」に当たると見られるのに対し、Byram（1997）が「コミュニケーション能力」を明確に提出しなかった点（鍾・樊 2013：23）である。さらに、文（1999）は「コミュニケーション能力」に「ストラテジー能力」も含まれると論じているが、この考え方も Byram（1997）には見えない。また、「異文化間能力」の構成要素に関して、Byram（1997）モデルの「異文化間能力」は、「知識」・「態度」・「意識」・「スキル」から構成されているのに対して、文（1999）モデルにおいて「異文化間能力」は「敏感性」・「寛容性」・「柔軟性」から構成されており、そのうち、「敏感性」は異文化間知識に基づいたものであり、「寛容性」は態度で、「柔軟性」はスキルレベルの要素として捉えられている。文（1999）は「知識」レベルの要素を取り扱っていないが、それは「異文化間能力」を対処的視点から捉えているからだと考えられる。ただし、「敏感性」は知識に基づいたものであるという側面（文 1999：13）があることを特筆すべきである。

鍾・樊（2013：24）は、Byram（1997）と文（1999）を取り合わせ、中国の大学生における異文化間コミュニケーション能力モデルを、以下の【Table 2.2】のように構築した。

異文化間コミュニ	コミュニケー	言語能力
----------	--------	------

ケーション能力	ション能力	社会言語能力
		談話能力
		ストラテジー能力
	異文化間能力	スキル
		知識
		態度
		意識

【Table 2.2】 外国語教育における中国大学生の異文化間コミュニケーション能力モデル（鍾・樊（2013 : 23）によって筆者が作成したもの）

鍾・樊（2013）の構築した異文化間コミュニケーション能力モデルにおいては、「異文化間コミュニケーション能力（Intercultural Communicative Competence）」は「コミュニケーション能力（Communicative Competence）」と「異文化間能力（Intercultural Competence）」から構成され、「コミュニケーション能力」は「言語能力（Linguistic Competence）」・「社会言語能力（Sociolinguistic Competence）」・「談話能力（Discourse Competence）」・「ストラテジー能力（Strategic Competence）」に分けられ、「異文化間能力」は「スキル（Skills）」・「知識（Knowledge）」・「態度（Attitudes）」・「意識（Awareness）」から構成されている。そのうち、「言語能力」は、「言語知識の把握と言語スキルの運用」であり、言語知識の角度から言えば、「発音」・「語彙」・「文法」の能力であるが、言語スキルの角度から言えば、「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」・「訳す」の能力を含む能力である。「社会言語能力」は、具体的な場面による言語使用の規則を意識しながら、適切な言葉を使う能力であり、具体的に言えば、年齢、性別、身分、地位、親疎の程度などによって適切な言葉を使い分けることである。「談話能力」は、談話を組み立ててまとめた内容にするのに必要な知識と能力である。「ストラテジー能力」は、言語能力が不足で代用の言葉や非言語などを通して伝えられない内容を何とか相手に理解してもらうための能力であり、「回避（avoidance）」・「言い換え（paraphrase）」・「借用（borrowing）」・「援助の要請（asking for assistance）」・「非言語コミュニケーション（mime）」が取り上げられる。「異文化間能力」における「スキル」は、Byram（1997）の「解釈と関連付けの技術」と「発見とインタラクションの技術」を援用したものであり、文（1999）の取り上げている「柔軟性」も含まれる。「知識」には、「自文化と他文化に関係する社会文化知識」と「個人、社会レベルのインタラクションの過程についての知識」が含まれる。「態度」は、異文化に対する「好奇心にあふれ、開放的である態度」と「他者の意味、信念、行動に対する不信感、判断を保留する態度」であり、「意識」には「敏感性（文：1999）」と「批判的文化意識（Byram：1997）」が含まれている。

Byram（1997）と文（1999）の異文化間コミュニケーションモデルは、実証研究を通して検証されてはならず、概念モデルであるのに対して、鍾・白・樊（2013）は、鍾・樊（2013）

の構築した理論的枠組みを踏まえて「中国の大学生における異文化間コミュニケーション能力に対する自評量表」を構築した上で、量的調査を行い、モデルの妥当性を量的調査によって検証した。このモデルは、英語学習者を対象に行ったものであるが、中国大学の外国語教育という背景を反映するものであるため、本研究にとっては参考になる。

石井（2001：110）は、異文化間コミュニケーション能力モデルは、従来の主流文化適応型から対人関係確立型へ移行しているが、その背景には、異文化間の平等意識に基づく共文化の一般的認知や対人コミュニケーション論研究の普及などがあり、この種の対人関係確立型の異文化間コミュニケーション能力モデルは、自文化を重視し、目標言語による受信と発信の均衡意識に基づく異文化間の相互理解と相互努力の重要性を強調すると述べている。そして、Lustig et al（1996）の「知識（knowledge）・動機づけ（motivation）・行動（action）」説と Martin et al（1997）の「動機づけ（motivation）・知識（knowledge）・態度（attitude）・行動（behavior）・技能（skill）」説に基づき、石井（2001：111 - 113）は言語関係の「異文化間コミュニケーション能力の構造と構成要素のモデル」を、以下の【Table 2.3】の表に見るように構築した。

内的能力構成要素	1 認知的構成要素	知識 記憶 思考
	2 情意的構成要素	感情 関心 態度 動機づけ
	3 性格的構成要素	積極性 明朗性 柔軟性 忍耐力
技能・行動的能力構成要素	a 言語技能	聞く・話す・読む・書く言語技能
	b 非言語技能	音声の特徴 身振り
	c 方略的技能	コミュニケーション上の困難さや問題を処理するための技能
	d 目的達成技能	コミュニケーションの目的を認識し達成するための技能
	e 対人関係技能	対人関係を開始、発展、確立、そして、終了するための技能
	f コンテキスト適応技能	物理的、社会文化的、対人関係的コンテキストの条件を認識し、それらに適応するための技能

【Table 2.3】 異文化間コミュニケーション能力の構造と構成要素のモデル（石井（2001：112）によって筆者が作成したもの）

このモデルでは、異文化間コミュニケーションを行う双方のどちらかが相手の文化に一方的に適応するのではなく、相互適応のための相互努力によって健全な異文化間対人関係の確立および維持が期待されるのだが、その中の、「内的能力構成要素」とは外部から直接の観察が不可能な要素で、「技能・行動的能力構成要素」とは外部から直接の観察が可能な

要素であると区別されている。「内的能力構成要素」のうち、「認知的構成要素」は知識、記憶、思考等の認知面の要素であり、「情意的構成要素」は感情、関心、態度、動機づけのような情意的ものを指し、「性格的構成要素」は積極性、明朗性、柔軟性、忍耐力等の性格面のものである。「技能・行動的能力構成要素」のうち、「言語技能」は聞く・話す・読む・書くの技能、「非言語技能」は音声の特徴や身振り等の非言語メッセージを受信および発信する非言語技能、「方略的技能」はコミュニケーション上の困難さや問題を処理するための方略的技能、「目的達成技能」はコミュニケーションの目的を認識し達成するための技能である。「対人関係技能」は、対人関係を開始し、発展させ、確立し、そしてまた、終了するための技能、「コンテキスト適応技能」は、コミュニケーション活動が展開される物理的・社会文化的・対人関係的コンテキストの条件を認識し、それらに適応するための技能である。また、構成要素間の関係については、「技能・行動的能力構成要素」は「内的能力構成要素」を反映し、構成要素間が相互に関連し合いながら機能するという。

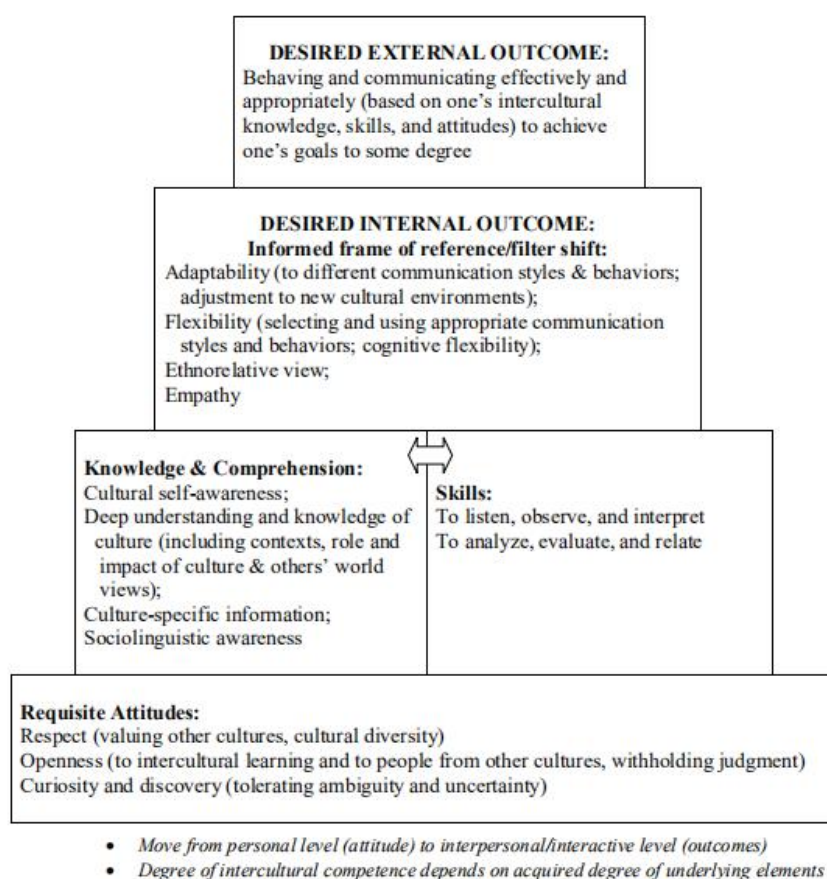
石井（2001）モデルを、Byram（1997）、文（1999）モデルと比較してみると、三者の共通点と相違点は、以下の①～④のように列挙できる。まず、①構成要素の項目から言えば、三者はみな、コミュニケーション能力の側面、異文化に関する知識、態度とスキルの側面を持っている。石井（2001）は、それらを「認知的能力」・「情意的能力」・「技能・行動的能力」と称するのみである。次に、②コミュニケーション能力の側面に関しては、石井（2001）は、これを「言語技能」・「非言語技能」・「方略技能」に分け、Byram（1997）モデルの「言語能力」・「社会言語能力」・「談話能力」や文（1999）モデルの「言語能力」・「語用能力」・「ストラテジー能力」より言語学習の一面を弱化させ、意思伝達を目的とする言語技能の一面を強化する側面が見られる。また、③Byram（1997）モデルと文（1999）モデルが文化的差異を意識して「異文化間能力」を提唱したのに対して、石井（2001）は、どのように文化的差異を認識し、異文化理解を目指すために行動するかを視野に据えた異文化間能力観というより、対人関係、およびコンテキストとの相互関係から異文化間コミュニケーションを捉える能力観を取っていることが了解できる。このことは、石井モデルにある「性格的構成要素」・「対人関係技能」・「コンテキスト適応技能」という要素の指定から窺える。さらに、④「コンテキスト適応技能」という要素からも見られるように、石井（2001）の異文化間コミュニケーション能力モデルは、他文化に移動するゲストの立場に立つことを前提とする捉え方であると考えられる。

Deardorff（2004：196）は、「異文化間能力（Intercultural Competence）」という言い方を用い、【Figure 2.2】のような、ピラミッド型の異文化間能力モデル（Pyramid Model of Intercultural Competence）を構築した。

Deardorff（2004）のピラミッド型の異文化間能力モデルは、「態度（Requisite Attitude）」・「知識と理解（Knowledge and Comprehension）」・「技能（Skills）」・「内部の効果（Desired Internal Outcome）」・「外部の効果（Desired External Outcome）」からなり、下の要素から上の要素へ段階的に発達していくモデルである。一番下にある「態度」は、尊敬・開放性・

好奇心及び発現する意欲を具体化することができる力であるが、下から二番目は、「知識と理解」・「技能」であり、矢印は、両者が相互作用の関係であることを表している。「知識と理解」・「スキル」の上に「内部の効果」である適応性・柔軟性・文化相對観・共感が現れ、このように個人が内的に受容したものにに基づき、「外部の効果」である効果的、かつ適切なパフォーマンスとコミュニケーションがピラミッドの最終的目標として達成できるのである。

Deardorff (2004) は、「異文化間能力」という用語を用いているが、しかし、ピラミッドの最終的目的が異文化の環境における効果的、かつ適切なパフォーマンスとコミュニケーションであることから、Deardorff (2004) は、「異文化間能力」を「異文化間コミュニケーション能力」と同様に扱っているものと窺われる。また、ピラミッド型の異文化間能力モデルにおいては、一番下の「態度」から最上層の「外部の効果」にあがっていくということが、個人レベルの態度から異文化間コミュニケーションレベルの態度へと変わっていくという意味であることを特筆すべきであると考えられる。



【Figure 2.2】 異文化間能力のピラミッドモデル (Deardorff (2004 : 196) による)

中島・板倉 (2003) は、外国語教育における異文化理解教育という枠組みの中の異文化間コミュニケーション能力問題を取り上げ、香港理工大学言語学およびビジネス学位コー

ス2年生の日本語学習者と、鹿児島大学教育学部2年生の日本人学生の間で展開された「異文化理解電子メールプロジェクトワーク」を分析した。その結果から本研究が得られる示唆を3点列挙する。まず、①異文化理解の形成には、異文化に属する話者が友好的で対等な関係を保持することが重要であること、また、異文化理解は他文化ばかりでなく自文化についても正確な知識を持ち、繊細で柔軟な見方、敏感な気づきの態度や姿勢で接するという異文化間能力が重要だということである。これは、知識やスキルや態度の面から異文化間能力にアプローチする捉え方であると言える。次に、②プロジェクトワークという活動を通して異文化接触を行った結果、日本語学習者と日本語母語話者の間に、「異文化インフォーマントの活用」、「自国の文化についての内省と分析」、「ステレオタイプの崩壊—多元的な見方へ」などという効果が得られたという点である。また、③異文化理解の形成には、自文化や他文化に関して様々なインプットが関与しているという点である。これらのインプットには、学校教育、テレビドラマ・新聞・映画などのマスメディア、他文化の話者との直接交流から得られる情報、プロジェクトなどから得られる統計の資料、自文化の話者との意見の交換などが挙げられるが、これらの異なるインプットは、1つずつ直接的に特定の異文化理解を形成するのではなく、数種のインプットがお互いに相互作用しながら、複雑に、時には矛盾しているように絡み合い、相互に取捨選択しながら異文化理解の形成過程に統合されていくのであるという。

2.1.2 異文化間コミュニケーション能力：知識・スキル・態度と認知・行動

異文化間教育においては、「異文化間コミュニケーション能力」という用語より、「異文化間能力」のほうがより多く用いられ、そして、それは、「多文化共生社会では、多様な文化背景を持つ人々と共生・協働する力(知識・技能・態度)」の総称であるとされている(西岡・八島 2018: 102)。「異文化間教育学会」の2016年度の大会で取り上げられた特定課題研究において、異文化間能力とはどのような能力だと考えるかという話題に関して、異文化間能力を構成する要素と考えられる知識(knowledge)・スキル(skills)・態度(attitudes, disposition, mind-set)に関するキーワードを3つずつ書いてもらうという調査を行った(松尾・森茂 2017: 28 - 29) ことがある。異文化間能力とはどのような能力だと考えるのかについてのこの課題に対しては、「互いに異なる文化をもつ人々が、他文化や自文化をめぐり、興味をもつ、相対化する、かかわる、共感する、受け入れる、折り合いをつける、調整し合う、共存する、権力性を理解する、対処する、問題解決する、協力する、新たな価値観を作り出す」などという能力であるという記述があったと報告されている。「知識」・「スキル」・「態度」に対する記述についての、調査結果の上位3位は、以下の【Table 2.4】の通りである。

異文化間能力			
	知識	スキル	態度
1位	言語 (11件)	コミュニケーション (14件)	寛容 (27件)
2位	異文化 (8件)	傾聴 (5件)	柔軟性 (11件)
3位	自文化 (8件)	調整 (4件) 批判的思考 (4件) 表現 (4件)	興味・関心 (7件)

【Table 2.4】 異文化間能力のキーワード (松尾・森茂 (2017: 28) による)

外国語教育における異文化間コミュニケーション能力モデルにおいては、コミュニケーション能力と異文化間能力が対等的に取り扱われている傾向があり (Byram1997 ; 文 1999 ; 鍾・樊 2013)、かつ、その異文化間能力は知識・態度・スキルの側面から捉えられている (Byram1997 ; 鍾・樊 2013)。このために、石井 (2001) も、コミュニケーション能力 (「言語技能」・「非言語技能」・「方略的技能」) を「技能・行動的能力」と見るようになったものと思われる。一方、異文化間教育においては、上掲の松尾・森茂 (2017) の報告からも見られるように、コミュニケーション能力が「スキル」として捉えられている。つまり、コミュニケーション能力は、外国語教育や異文化間教育においては、スキルの能力として捉えられるようになってきている。ただし、外国語教育は、その学問分野の特徴のため、コミュニケーション能力に対して再分類がなされているが、異文化間教育においては、それを下位分類しておらず、1つのスキルとして見なしている。

また、外国語教育においては、異文化間コミュニケーション能力について、詳しく概念化し、構成要素と要素間の関係モデルを構築しているものが多く、実践研究に欠けているのと対照に、異文化間教育においては、異文化間能力を促進するための教育実践や教育的効果の検証研究がより多く成されているのが特徴的である。

西岡・八島 (2018) は、日本における留学生と日本人学生を対象に、接触仮説の最適条件である制度的支援・対等な地位・相互相悉性・共通目標に基づいて、異文化間協働学習としての科目コースをデザインし、コース前後に異文化間能力を測る質問紙調査を行ったが、その結果、異文化間協働学習という異文化接触を通して学習者の異文化間能力が促進されたことが明らかになった。そのうち、「異文化に対する認識スキル」・「異文化への受容的態度」・「異文化での能動的態度」において、留学生と日本人学生ともに向上の効果が高いことが報告された。「異文化に対する認識スキル」は、異文化理解に必要となる知識を基礎に、他文化、自文化を認識、理解し、かつ両文化間に差異が存在することに気付き、それによって多面的・創造的思考と判断保留をし、異文化を客観的かつ発想豊かに捉えることのできる能力である。また、「異文化への受容的態度」は、気づきや認識より一步踏み込んで、「多様性尊重」・「尊敬表示」・「傾聴」・「共感」などのような受容的態度で行動をとることである。そして、「異文化での能動的態度」は、能動的態度に基づいて「積極的

な行動」・「意見の主張」・「協働」などの行動を実際にとることである。

西岡・八島（2018）の本研究に対する示唆を、以下の①～④の4点にまとめる。まず、①「異文化に対する認識スキル」は、異文化間知識に基づく技能であり、「異文化への受容的態度」と「異文化での能動的態度」が態度要素であるが、そのような態度に基づき、実際の行動をもとめていることから、態度であるとともに技能でもあると捉えられている。西岡・八島（2018：102）は、異文化間能力が「多文化共生社会では、多様な文化背景を持つ人々と共生・協働する力（知識・技能・態度）」の総称であると論じたように、この3効果はまさに異文化間能力の知識・技能・態度という3要素を反映しており、この3要素はまた相互に関係している。次に、②「異文化に対する認識スキル」・「異文化への受容的態度」・「異文化での能動的態度」は、知識・技能・態度を反映していると同時に、異文化間能力が上述のスキルと態度で認知的・行動的に捉えられていることも窺える。第三に、③「異文化に対する認識スキル」がもっとも効果量が多いという研究結果は、異文化接触の中では、知識に基づいた文化理解に対する気づきと認識が先に、かつより多く生じることを意味している。そして、④異文化に対する認識が深まるに従い、他文化（他者）を受容しながら自文化（自身）を発信するという能動的な態度が身に付き、異文化間能力を向上させていくという知見からは、「知識」が異文化間能力においてもっとも基礎的であることが窺われるが、これは Byram(1997)の、「知識」が異文化間能力の中心的な能力であるというものと同じ捉え方である。

青木（2018）は、「海外日本語教師アシスタントプログラム（SENDプログラム）」に参加した大学生が、海外での異文化接触を経験した後、異文化間能力にはどのようなものが見られたか、日本人性にどのような変容があったかを調査したものである。その結果、異文化間能力に関しては、「知識・理解」・「スキル」・「態度」における変化が見られた。日本人性に関しては、参加した学習者たちは、日本人性の認識段階の第2段階「違いの否定・回避」・第3段階「違いへの適応・枠組みの転換」・第4段階「社会構造の再考・特権性の認識」に集中したが、第1段階「違いの不認識・無関心」と第5段階「社会構造・特権性の脱構築のための行動」には現れてこなかった。これは、それぞれの学習者が、海外に派遣され日本文化紹介や日本語指導支援を行うことを前提としてプログラムに参加したことで、海外と日本との違いに対して気付かないことや無関心であるといったことがなかったためだが、しかし、プログラムに参加したことだけでは、社会の不正義や特権性が生み出される社会的構造を脱構築させる段階にまでは至らなかったためであると、青木（2018：40）は論じている。日本人性の認識段階の第1段階は、異文化接触に関する情意的要素と派遣国へのイメージの強化からなるもので、青木（2018）は、そこに異文化間能力の要素が見られなかったとしているが、それに対して、第3段階と第4段階に異文化間能力の要素である「知識・理解」・「スキル」・「態度」に関する項目が多く見られたという。これらの結果は、本研究に次の①～③のような示唆を与える。まず、①外国語を専攻とする学習者は、異文化との違いに不認識・無関心なことが少ない可能性があるということである。

次に、②異文化間能力は、発達するものであり、大学生の段階においては、社会経験の不足や視野の限定などにより、より深いレベルでの異文化間能力の発達があまり見られないということである。さらに、③日本人性の認識は、自文化への認識として異文化間能力の要素として捉えられるが、それはまた、「知識・理解」・「スキル」・「態度」などによって実現できることから、異文化間能力の各構成要素が相互作用の関係にあることをさらに裏付けたと言えることである。

「ソーシャルスキル」は、対人関係の形成・維持・発展に役立つ技能であり、田中（2010：61）は、文化的行動の背景や異文化交流の要領として、異文化圏での人づきあいに役立つ認知や行動を抽出し、社会的行動の学習を試みるのが異文化間ソーシャルスキル学習であると論じているが、その中でも、異文化間ソーシャルスキルは、異文化圏の人との異文化交流に必要なソーシャルスキルであり、ソーシャルスキルは認知的・行動的スキルが組み合わされるものであると述べている（田中 2010：62）。田中・中島（2006）は、異文化間ソーシャルスキルの学習が異文化対応の知識や力をつける教育的営みであるとする異文化間教育観から、【Table 2.5】に示すような「AUC-GS 学習モデル」を提出した。

	文化一般 Culture General	文化特定 Culture Specific
気づき Awareness	AG	AS
理解 Understanding	UG	US
対処 Coping	CG	CS

【Table 2.5】 AUC-GS 学習モデル（田中（2010：67）による）

このモデルでは、2次元×3レベルの6つのセルで教育内容を位置づけているが、異文化接触一般での現象を取り上げ、抽象度が高く一般的な内容を扱う「文化一般」と、特定文化での現象や必要な能力を扱う「文化特定」の次元が想定されている。そして、異文化間ソーシャルスキルを異文化間の違いがあると認識する「気づき」のレベル、異文化接触で何が起こるかを知る「理解」のレベル、異文化接触にどう対応するのかを身に付ける「対処」のレベルに分けている。また、従来の異文化間コミュニケーションのトレーニングは、認知的理解に力点を置きがちで、どうするか教育方策は希薄であったが、ソーシャルスキル学習なら、行動次元の学習を提供し、心得や理解の先に、対処レベルを設定できる。これは、本モデルが心理学の行動論の背景を持つが故であるという（田中 2010：68）。

従来の異文化間コミュニケーション能力に対する論述と比較すると、異文化間ソーシャルスキルに関しては、4つの特筆すべき点があると考えられる。第一に、上述のように、異文化間ソーシャルスキルは、行動次元の学習を前提に、対処レベルのスキルが先に問われるのが特徴であるが、それは、このモデルが異文化間コミュニケーションのトレーニングを視野に入れて、認知的・行動的レベルからアプローチする捉え方だからであると理解できよう。第二に、「AUC-GS 学習モデル」は、スキルを具体化し、分層化している。「具

体化」とは異文化間スキルが「気づき」・「理解」・「対処」に分けられていること、「分層化」とは異文化接触が進むに連れ、スキルが「気づき」から「理解」へ、さらに「対処」へと発達していくことが求められるということである。第三に、従来の異文化間能力に対する「知識」・「スキル」・「態度」という捉え方から考えれば、「AUC-GS 学習モデル」における「気づき」と「理解」は知識に基づいた「態度」であり、「対処」は「スキル」に当たるものと考えられる。しかし、田中・中島（2006）は、「態度」を顕在的なスキルとして捉えている。認知的・行動的視点から異文化接触を捉える点において、田中・中島（2006）は、文（1999）と共通している。以下の【Table 2.6】は、文（1999）の捉えている「異文化間能力」と田中・中島の捉えている「異文化間ソーシャルスキル」を比較する表である。

異文化間能力 (文：1999)	異文化間ソーシャルスキル (田中・中島：2006)
敏感性	気づき
寛容性	理解
柔軟性	対処

【Table 2.6】 「異文化間能力（文：1999）」と「ソーシャルスキル（田中・中島：2006）」の構成要素（筆者の作成による）

このように、両者は、横断的に対応しており、そして縦断的には「敏感性」から「柔軟性」へ、「気づき」から「対処」へと発達していくことが明らかである。第四に、異文化間ソーシャルスキルは、対人関係の形成・維持・発展に役立つという立場を取っており、これは、石井（2001）の、対人関係から異文化間コミュニケーションをアプローチする捉え方と共通していることが明らかである。

2.1.3 まとめ

以上、外国語教育における異文化間コミュニケーション能力、および異文化間教育における異文化間能力と異文化間ソーシャルスキルに関する研究をレビューした。これらの先行研究は、以下の①～③の3点にまとめられる。

①異文化間コミュニケーション能力の呼称に関しては、学問分野やアプローチ、または文脈によって、呼び方が異なる。外国語教育においては、外国語の習得や運用の部分が注目され、それに基づいて異文化間の相互理解を目指しているため、コミュニケーション能力がもっとも基礎的で、かつ重要な能力であることが強調されるため、「異文化間コミュニケーション能力」という呼び方をして、それをコミュニケーション能力と文化的要素に分けているものがほとんどである。一方、異文化間教育では、基本的に文化と文化の狭間で、折り合いをつけて、異文化状況に効果的に対応することが主な目的とされているため、コ

コミュニケーション能力を特に取り立てない。その代わり、「異文化間能力」という呼び方を
用い、知識・スキル・態度、認知的・行動的能力といった広い視点からその構成要素が検
討されている。コミュニケーション能力に関しては、言語知識とコミュニケーション能力
として、知識・スキル・認知の下位要素として取り扱われているものが多い。また、知識・
スキル・態度、認知的・行動的スキルに関しても、準拠枠が一定しておらず、多様な様相
を呈している。まさに、松尾・森茂（2017：22-23）が指摘したように、自分自身の研究や
関心の視点からパーソナルに迫っていくことが必要であると考えられるのである。

②外国語教育においては、異文化間コミュニケーション能力を詳しく概念化し、構成要
素と要素間の関係モデルを構築するものが多いが、構築された異文化間コミュニケーション
能力モデルは、検証されていない概念モデルが多く、異文化間コミュニケーション能力
に関する研究も、実証研究に欠けている。それとは対照に、異文化間教育においては、異
文化間能力を促進するための教育実践、教育的効果の検証研究がより多く成されているこ
とが明らかになった。

③異文化間コミュニケーション能力に対しては、構成要素間の関係と分層が検討されて
いる。例えば、外国語教育においては、従来の異文化間コミュニケーション能力モデルは、
コミュニケーション能力と異文化間能力に分けられ、コミュニケーション能力に対する認
識も、言語至上主義から効果的で適切な言語運用能力のほうに移り、コミュニケーション
の意思疎通を目的とする一面が重要視されるようになった（石井 2001；Deardorff2004）。
それによって、①にも触れたように、コミュニケーション能力が言語知識とコミュニケー
ション能力の形として、知識・スキルや認知的スキルに含まれるようになる傾向が現れて
きた。Byram（1997）で提唱された異文化間能力に属する「批判的文化意識」も、態度や
認知的スキルの形として広い意味で捉えられるようになった。それに従って、外国語教育
における異文化間コミュニケーション能力の構成要素も、異文化間教育で捉えられている
知識・スキル・態度という捉え方に変遷していく可能性があるのではないかと考えられる。
また、知識・スキル・態度3者間の関係については、3者は基本的に相互作用の関係にあ
るが、Byram（1997）や西岡・八島（2018）は、知識が異文化間能力の中心的な能力であ
ると捉えている。また、態度とスキルとの関係であるが、文（1999）と田中・中島（2006）
は態度からスキルへ発達していくという捉え方であり、Deardorff（2004）のモデルは個人
の態度が知識と理解、スキルを通して異文化間コミュニケーションの態度へ発達していく
と捉えている。これはスキルと態度とどちらに焦点をあてるかということと関係すると考
えられる。

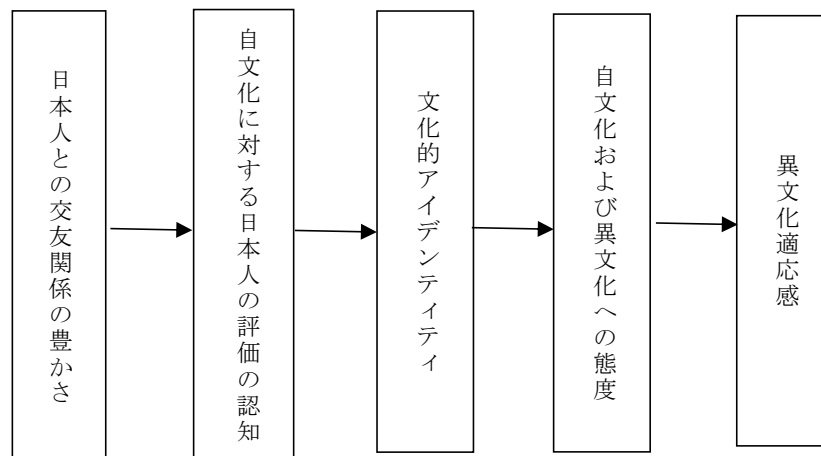
2.2 日中間の異文化間コミュニケーションに関する研究

2.2.1 日本人ホストにおける中国人との異文化間コミュニケーション

日本人ホストにおける日中間の異文化間コミュニケーションに関しては、中国人留学生の異文化適応問題がよく取り上げられ（湯 2004；班 2004；葛 2007；一二三 2008；譚・今野 2012；殷・青木 2017 など）、認知・感情・行動などの面における異文化不適応が論じられた。

湯（2004）は、横浜市立大学の中国人留学生を対象に、対人関係とコミュニケーション行動の異文化適応に対する影響を調査した。ホストとの対人関係形成の困難さが留学生のストレスの上位にあり、その対人関係形成の困難に対応できる現在のソーシャルスキルに最も影響しているのが過去のソーシャルスキルで、その次に日本語能力、対人志向性、異文化理解などがあげられる。また、日本語能力の高さが異文化理解を高めるといふ。これらの結果に対して、湯（2004：312）は、語学力を高め、ホスト国の行動様式への認識を深めるほかに、ホスト国の人々に対する対人志向性をポジティブな方向へ導くことが重要であり、さらに、より幅広い対人ネットワークや多様なコミュニケーション手段を利用することが有効な手立てになると提言した。

一二三（2008）は、日本の大学で勉強する中国人留学生を対象に、文化的アイデンティティと異文化適応との関係を明らかにすることを目的とし、【Figure 2.3】のような、概念間の因果関係を仮定した。



【Figure 2.3】 文化的アイデンティティと異文化適応感の因果モデル（一二三 2008：3）

その結果を 3 点列挙する。まず、①日本人との良好な交友関係により、日本人が中国に対して差別や偏見を持っていないとの認識を深めると同時に、日本人が中国に対して関心

を持っており、理解しようとしているとの認識をも深めることができる。次に、②肯定的評価であれ否定的であれ、中国人学生の自国と自民族に対する日本人の評価を認知することで、文化的アイデンティティが強められる。また、③異文化の中で自分の文化的アイデンティティを探索することは、自国・自文化に固執した閉鎖的態度を培うのではなく、逆に、異文化に対し、寛容な態度を養い、さらには順調な異文化適応を促すことに繋がる。つまり、自文化に気付き、理解することと異文化を理解することとは相互作用の関係にあり、両者は互いに促進し合い、かつ相互に不可欠である。この3点の結果は、仮定した「文化的アイデンティティと異文化適応感の因果モデル」を支持している。

殷・青木（2017）は、中国人留学生の日本という環境における異文化適応の特徴と、それに影響を及ぼす要因を探索することを目的とし、日本に滞在する中国人留学生 101 名を対象に、自由記述式の質問紙調査を実施し、KJ法による分類を行った結果、「日本文化による要因」・「対人関係における困難」・「個人の特性、能力」・「中国文化による要因」・「日本への同一化が期待される現状と日本と同一化することへの抵抗」・「偏見」・「社会背景と関わる要因」・「日中文化に基づく適応しやすさと適応しにくさ」の 8 つのカテゴリーが生成され、それによって、中国人大学生の日本における異文化適応の実態をより全面的に解明した。

殷・青木（2017）が本研究に対して示唆を与えてくれる部分を、以下に 3 点列挙する。まず、①その影響要因に日中両国の文化的差異やアイデンティティ、偏見、動機づけといった情意的要素など、対人関係と纏められる異文化間コミュニケーションに関わるものが広く含まれており、日中両国の異文化接触に生じうる困難点が明示されている。次に、②アイデンティティ、偏見、動機づけといった情意的要素による異文化接触の困難に対して、どのような認知的、行動的方法で対応するかについての有意義な記述がある。また、③対人関係から異文化間コミュニケーションにアプローチしている点が、石井（2001）や田中・中島（2006）の延長線にある。

中国人留学生の、日本での異文化適応問題に友人関係の形成も、よく取り上げられている。このような研究としては、上記の湯（2004）以外に、佐々木・張・鄭（2012）、小松（2013）などが挙げられる。

佐々木・張・鄭（2012）は、中国人留学生がホスト側の日本人との友人関係構築をめぐるどのような体験をしているかについて、「友人関係構築をめぐる体験モデル」を構築した。このモデルは、具体的には、「接触前の認識の存在」、「留学生側の一方向的な友人関係構築のための努力」、「知識としての日本の慣習に基づいた様々な工夫」、「比較される中国人との友人関係」、「留学生側から見た友人関係構築を促す日本人の行動」、「交流が進まない時の自分の日本人への接し方に関する反省」、「友人関係が構築された場合の関係維持への心配」などを提示している。この佐々木・張・鄭（2012）からは、次の 4 点から本論文に対する示唆が得られる。まず、①中国人留学生は、日本人との友人関係を構築する際、以前持っていた日本への認識が影響すること、つまり中国人の大学生が日本に対して偏見

を持ち、その偏見が友人関係の形成に影響するということである。したがって、情意的偏見は、日中間の異文化接触に困難点として影響する。次に、②日本人との友人関係の構築には、中国人の友人との関係を構築する時の「気楽な付き合い」と「自然な成り立ち」が比較されるが、そこに日中両国の差異が働いていることが考えられる。また、③中国人留学生が友達を作るためには、たくさんの努力がなされる。つまり、中国人が日本人と友人関係を構築するという事は、困難を抱えると同時に努力を成すことで困難に立ち向かうという一つのプロセスなのである。さらに、④友人関係の形成は、結果として異文化接触を促進する。

2.2.2 中国人ホストにおける日本人との異文化間コミュニケーション

中国ホストにおける日中間の異文化間コミュニケーションについては、日系企業で発生する異文化間ビジネスコミュニケーションに関する研究が断然トップを占めている（閻 1996；片岡・三島 1997；周 2000、2003、2007；辻 2007、2011；西田 2007；温 2012 など）。それは、日中間の経済関係が密接になるにつれて、中国にある日系企業が日中間コミュニケーションの典型的な場になり、それに伴うビジネス関係の異文化間コミュニケーション研究が盛んになってきたためと考えられる（高 2013：147）。辻（2007、2011）では、日系企業で働いている日本人駐在員を調査協力者に、現地の中国人従業員との異文化間コミュニケーションに対して調査を行い、「注意喚起表現」・「依頼懇願指示表現」・「賞賛表現」・「断り表現」という4つが最も多いミスコミュニケーション場面として取り上げられている。また、日本人駐在員が各場面で使用する表現の形態を調査した結果、曖昧表現がもっとも多くあげられたという。具体的には、「ちょっと」や「～しておいて」といった表現である。閻（1996）は、日中両国民における異文化間コミュニケーション行動の相違は、「言語表現」・「感情表現」・「動作表現」に集中すると論じた。「言語表現」は相互の外国語能力の不足やコミュニケーションスタイルの相違による困難であり、「感情表現」は感情伝達の相違によって生じる困難であり、「動作表現」は非言語コミュニケーションの相違による困難である。

西田（2007：451-452）は、中国に進出した日系企業25社で働く中国人106名に対して、日本人の企業行動について「困難を感じる」問題について調査を行った。その結果、挙げた上位5項目は、第1位が「意思決定に時間がかかる」、第2位が「相手の言葉の問題」、第3位が「年功序列型昇給の問題」、第4位が「仕事のやり方：中国の事情を理解しない」、5位が「情報共有が少ない」および同列で「自分の言葉の問題」であったという。まとめると、中国人の従業員が日本人従業員との異文化接触の困難点と考えていることには、主に、「経営管理・業務遂行行動上の問題（第1位と第3位）」・「言葉の問題（相手と自分）（第2位と第5位）」・「異文化の知識（第4位）」・「情報共有の不足（第5位）」が挙げられていることになる。そのうち、「経営管理・業務遂行行動上の問題」と「情報共有の不足」

は異文化マネジメントと関係し、「言葉の問題（相手と自分）」と「異文化の知識」は異文化間コミュニケーション能力と深く関わる異文化接触の困難点であると言える。

中国人大学生の日本人留学生との異文化接触に関する研究には、奥西・田中（2010）がある。奥西・田中（2010）は、中国北部に位置するS省の国立S大学および省都のT市において、日本人留学生と交流体験のある日本語学科の学部生15名とホストファミリー6名を対象に半構造化インタビューを実施した。問いの主な内容は、「日本人留学生をどんな存在だと捉えているか」・「すれ違いや違和感の経験があるか」・「すれ違いや違和感の原因は何だと思うか」・「(すれ違いや違和感の経験がなければ) どうすればうまく関係性を構築できるのか」であった。書き起こしたデータに対してAUC-GS学習モデル（田中・中島：2006）の枠組みを用いて、文化に対する「気づき（A段階）」、「理解（U段階）」、「対処（C段階）」の3段階に関して分類をし、交流タイプの整理を行った。「A段階」については、異文化の存在について気づきがないタイプと、気づきがある場合に、文化を「洗練された精神文化」として捉えているタイプと文化を「習慣、考え方などの日常生活」として捉えているタイプに分類した。「U段階」については、異文化同士の接触や文化間の差異が葛藤の原因となりうることに對して理解がないタイプと理解があるタイプに分けた。「C段階」については、実際に起こった異文化葛藤に對し、対処ができていないかどうかという視点から分類を行い、対処ができていないタイプと対処ができていないタイプ、また現実場面で異文化葛藤に遭遇していないため、対処の経験がないタイプに分類整理を行った。その結果、奥西・田中（2009）に見られる日本人ホストの対応とは異なる点が見出された。まず、異文化性への対処方略に関しては、日本人学生には、相対化、歩み寄り、意見の調整など相手の存在を意識した双方向的な調整が見られたが、中国人ホストにおける異文化葛藤の対処方略は、相手への歩み寄りや相手の視点を考慮する傾向が比較的少なく、自己を基軸とした対処方法が見られた。中国人ホストの大学生は、異質な行動を単なる「習慣の違い」として丸ごと受け入れて許容したり、留学生の行動には執着せず、結局自分のやり方で物事を決めたり、自己の視点を最優先した対処方法をとることが顕著で、そして寛容や受容によって、葛藤を問題視しないように受け止め、自文化から主体的に組み立てた寛容志向の対応をするという。次に、中国人学生、ホストファミリーの横断的な特徴として、対人交流における情熱や積極的姿勢、誠実な態度などが強調される傾向が強かった。この対人交流に対する熱意は、対人関係形成の推進力となるという。奥西・田中（2010）は、中国人大学生の異文化接触における認知面に示す文化的特徴も示しており、本研究に對しては、次の2点が示唆に富む。まず、①異文化接触の困難に對する日中間の行動スキルに相違が見られ、日本人は相手への歩み寄りや相手の視点を考慮するが、中国人大学生が自文化から主体的に組み立てた寛容志向を持っていることである。次に、②異文化接触において、中国人は情熱や積極的姿勢や誠実な態度で対人関係を推進することで異文化接触に向き合う可能性があると考えられるということである。

2.2.3 まとめ

以上、日本人ホストにおける中国人との異文化間コミュニケーションと中国人ホストにおける日本人との異文化間コミュニケーションに関する先行研究について検討した。検討した結果を、以下の4点にまとめる。

①日本人ホストにおける中国人との異文化間コミュニケーション問題は、中国人留学生の異文化適応を中心に成されていることが明らかになった。そのうち、友人関係の形成がよく取り上げられていることを特筆すべきであると考えられる。これは、本研究に対して、対人関係の形成の面から中国における日中間の異文化接触を捉える必要があるという示唆を与えた。

②異文化不適応の主な困難として、対人関係の構築困難（湯 2004；殷・青木 2017）・文化的アイデンティティや偏見、動機づけなどのような情意的困難（一二三 2008；殷・青木 2017）・文化間の相違（殷・青木 2017）による不適応が報告された。これらの困難に対しては、コミュニケーション能力を高めること、ホスト国の行動様式への認識を深めること、自文化を認識・探索すること、対人志向性をポジティブな方向へ導くことや対人ネットワークを作ることなどの手段を通して良好な対人関係を構築すべきことなどが提言された。これらの提言は上記「2.1」に論じた異文化間コミュニケーション能力と深く関わり、本研究に示唆を与える。

③日本人ホストにおける中国人との異文化間コミュニケーションによく取り上げられている異文化不適応の問題に、コミュニケーション能力が特に取りあげられていないことが判明した。コミュニケーション上の問題点は、日本語能力が対人関係形成に影響する（湯：2004）、日本人のコミュニケーションスタイルが日本文化的要因による困難である（殷・青木：2017）というような形で言及されたのみである。それは、日本に在住しているうちに、言語能力が向上し、そして相手が正しい言葉より、意思疎通のほうを求めると認識するようになったからだと推測できる。

④異文化適応は、学習者自身が日本文化に適応するのみのことではなく、日本の留学生サポートのアクセスの悪さ、必要とされるサービスの不足、中国人同士との関係（殷・青木：2017）のような社会背景要因も関わることから、異文化適応、さらに異文化接触のプロセスを見る時、学習者要因のみならず、社会との相互交渉作用などをも視野に入れる必要があるということが本研究に示唆を与える。

中国人ホストにおける日中間の異文化間コミュニケーションに関する研究については、以下の3点にまとめられる。

①日中間の経済関係が密接になるとともに、ビジネスコミュニケーションに関する研究がもっとも多く行われている。その内容としては、言語コミュニケーションの差異や異文化の知識に関する問題が多く言及され、特に言語コミュニケーションによる困難は細分化

も施されている。これは、中国人ホストにおける日中間コミュニケーションの場合、かれらに日本人とのコミュニケーション経験が少ないため、コミュニケーション能力が十分に鍛えられてはおらず、異文化接触する時に最初に求められる言語能力が足りなかったからであろうと考えられる。

②言語コミュニケーション、異文化間知識に関する研究は、前述のように、知識や認知に偏りがちな一面があり、教育の立場から言えば、さらに行動的視点をも取り入れる必要がある。奥西・田中（2010）は、異文化間ソーシャルスキルの視点から日中間の異文化間コミュニケーションにアプローチし、日中間における異文化間コミュニケーション研究に新しい視点をもたらしたと言える。

③言語コミュニケーション、異文化間知識に関する研究には、量的方法で行われたものが多く、問題点を指摘するのにとどまっているのに対して、奥西・田中（2010）は、質的方法による詳細な記述を通して日中間の異文化性への対処方略の相違を深く掘り下げている。この点は、特筆すべきである。そして、日本人が相手への歩み寄りや相手の視点を考慮するのに対して、中国人大学生が自文化から主体的に組み立てた寛容志向をもっているという、両文化の異文化対処方略における相違性、さらには、異文化接触において、中国人が情熱や積極的姿勢や誠実な態度で対人関係を推進することで異文化接触に向き合うというこの研究の結果などは、本研究に内容的な示唆を与える。

2.3 異文化間コミュニケーションの情意的要素に関する研究

石井（2001：104）は、異文化間コミュニケーションに興味・態度・動機づけなどのような情意（affective）的要素が関わっていると論じている。松尾・森茂（2017：23）では、異文化間能力の構成要素が知識・技能・態度の視点から広く捉えられ、異文化コンピテンシーを捉える際、認知的な側面にのみ限定するのではなく、情意や態度など非認知的な側面をも含むべきであると主張する。八島（2004）は、不安を、外国語コミュニケーションにおける重要な情意的要素として捉えている。異文化間コミュニケーションにおける情意的要素に何が入っているかについては、上掲の石井（2001：104）、松尾・森茂（2017：23）、八島（2004）などの間でも意見が一致していないことが窺える。本研究においては、異文化接触の動機づけや不安や態度を重要な情意的要素と見、それらに関する先行研究をレビューする。

2.3.1 動機づけ

外国語教育を土台とした異文化接触も、それ自身が外国語学習であるため、異文化接触の動機づけは、外国語学習の動機づけと重なる部分があり、相互に深く関わり合うだろうと考えられる。そのため、異文化接触の動機づけに関する先行研究をレビューする時、外

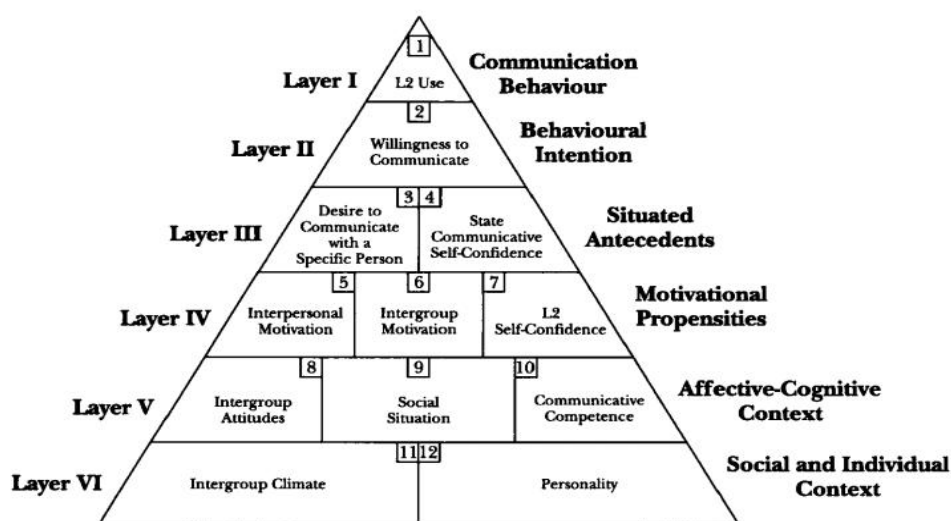
国語学習の動機づけに関する研究をも視野に入れることにする。

1960年代から80年代にかけて、第二言語学習¹¹における動機づけに関する研究は、主に、GardnerやLambertらの研究グループによって導かれた社会心理的アプローチを中心としていた。Gardner & Lambert (1972)は、第二言語学習の動機づけは「統合的志向 (Integrative Orientation)」と「道具的志向 (Instrumental Orientation)」に分けられると論じている。「統合的志向」とは、学習者が目標言語話者の文化・言語・その言語集団をもっと知り、自分もその集団の中に溶け込みたいという動機づけであるのに対して、「道具的志向」とは、ある目的を達するための道具的、実用的なものである。Gardnerの一連の研究 (Gardner & Lambert 1972 ; Gardner 1985) は、言語到達における道具的な志向の有効性を否定するのではないが、統合的な志向を持って学習を行う学習者のほうが、第二言語学習においてより成果を上げるのではないかという仮説を立てた。しかし、Dörnyei (1990) は、目標言語文化とは空間的に隔てられ、日常的に目標言語話者との接触が少ない外国語学習の状況では、むしろ道具的動機づけの方がより重要であると主張した。Crooks & Schmidt (1991) は、第二言語学習が行われる主な場としての教室における動機づけ研究の重要性を強調し、そのために、動機づけ研究の焦点が社会環境の場面から教育場面へと変わっていった。Dörnyei (1994) は、教育場面に注目し、動機づけを、「言語レベル (language level)」・「学習者レベル (learner level)」・「学習状況レベル (learning situation level)」の3次元にまとめた。この研究では、伝統的な「統合的動機づけ」と「道具的動機づけ」のみならず、「不安」、「自覚された第二言語能力」、「原因の帰属」、「自己効力感」などといった認知的要素を取り入れ、さらに、「コース」、「教師」、「グループ」などといった学習状況レベルの要素をも取り入れた。これは、従来の「統合的動機づけ」と「道具的動機づけ」という二分法で見えてきた動機づけ研究に認知的視点導入の重要性を示唆していると考えられる。

「Willingness to Communicate (以下 WTC) モデル」は、MacIntyre et al. (1998) に提唱されているもので、第二言語学習の最終目的を異グループ間のコミュニケーションと捉えるモデルである。このモデルでは、上の第I層「コミュニケーション行動」を達成するために、第II層「行動の意思」・第III層「状況的要因」・第IV層「動機づけ傾向」・第V層「情意的・認知的コンテクスト」・第VI層「社会的・個人的コンテクスト」の要素が必要であるとされる。第I層から第VI層までは、さらに12の要素に分けられている。第I層は「①L2使用」、第II層は「②Willingness to Communicate」、第III層は「③特定の相手とコミュニケーションをする意思」・「④その場でのコミュニケーションの自信」、第IV層は「⑤対人接触動機づけ」・「⑥対グループの接触動機づけ」・「⑦自信」、第V層は「⑧対グループへの態度」・「⑨その場の社会的状況の認知」・「⑩コミュニケーション・コンピテンス」、第VI層

¹¹ 「第二言語学習」は、目標言語が話されている国で外国人が目標言語を学習する場合を指すのに対して、「外国語学習」は目標言語が話されていない国で外国人が目標言語を学習する場合を指す。倉八 (1998) は、「外国語」という用語を第二言語をも含んだ包括した用語として使っている。本研究は、表現上の統一を期するために、それらを包括するものとして「外国語」という用語を使用する。ただし、先行研究の中で使用されている表記については、それに従う。

は「⑪グループ間の関係」・「⑫性格」から、それぞれ構成されている。



【Figure 2.4】 WTC モデル (MacIntyre et al.1998 : 547)

WTC モデルは、上の 2 層が異文化接触の行動という目標とその行動を起こす準備ができた心理状態を指す (八島 2004 : 14) が、第III層は状況に依存して変化しやすい要素である。第III層以下の第IV層から第VI層までは、比較的安定した要因である。この下の 3 層間の関係については、第IV層は第V層に影響され、第V層は第VI層に基づく関係である。つまり、異文化間コミュニケーションの動機づけは、異なるグループ間の感情・認識、その場の社会的状況の認知とコミュニケーション能力のような情意的・認知的要素に影響され、さらにこれらの情意的・認知的要素は、民族間・社会間の関係や個人の性格に基づくのである。WTC モデルは、異文化間のコミュニケーション行動を、動機づけ・態度・自信・性格のような情意的要素とコミュニケーション能力への認知的要素などが個人レベルから、グループ間、社会・文化間へと複雑に関わっているものであると捉え、そのうち、異文化接触の動機づけはまた多くの認知的・情意的要素に影響されながら形成することが判明した。

八島 (2004 : 83-105) の異文化接触の動機づけに対する論述は、コミュニケーションを中心に展開されており、「自己概念とコミュニケーションの動機¹²⁾」と「異文化間コミュニケーションの動機・態度」に分けられている。「自己概念とコミュニケーションの動機」において、八島 (2004) は、「国際的志向性」・「第二言語使用」・「自己効力感」・「アイデンティティ」・「自己概念」を異文化接触の動機づけとして取り上げた。「国際的志向性」

¹² 英文の「motivation」は、日本語では「動機づけ」、「動機」、「学習動機」などと訳されているものが多い。倉八 (1998) は、「motivation」が授業内での学習に向けられた意欲を指している場合に「学習意欲」という用語を用いている。本論は、主に中国における日本語専攻大学生の授業外での異文化接触に焦点をあて、それに向けられた意欲を取り扱うが、「学習」は一般的に学校内での学習と思われがちであるため、このような意欲について「動機づけ」という訳語を用いることにした。ただし、先行研究の中で使用されている表記についてはそれに従う。

は、国際的な仕事への興味、自国以外の世界との関わりを持とうとする態度、異文化や外国人への態度などである。「第二言語使用」は、異文化間コミュニケーションを行う時、言語能力そのものより言語能力の自己評価、つまり言語能力に対する認識が異文化接触に大きく影響するということであり、動機づけの認知的要素と見なされている。「自己効力感」は、第二言語能力に自信を持つことである。「アイデンティティ」について、八島（2004）は、第二言語の習得度が増すほど、第二言語話者との同一化が起こるため、第一言語のアイデンティティが希薄になると述べている。「自己概念」については、第二言語能力の個人差がアイデンティティや組織内での力関係と深く絡むと論じられている（八島 2004 : 95）。「異文化間コミュニケーションの動機づけ・態度」において、八島（2004 : 95-98）は、「接近・回避傾向（approach-avoidance tendency）」・「エスノセントリズム（ethnocentrism）」・「ステレオタイプ」・「開放性（openness）」を動機づけとして取り上げた。そのうち、「接近・回避傾向」は、他者に接近、あるいは他者を回避する志向であるが、多様な他者とのコミュニケーションは自己の拡張につながり、新たな自己の発見が導かれると述べている。「エスノセントリズム」と「ステレオタイプ」は、異文化間に生じる態度である。「開放性」は、異文化接触において新たな情報などに好奇心を持ち、それを抵抗なく受け入れる性格特性を言う。上述から、八島（2004）は、異文化接触の動機づけに、言語能力に対する自己認識、アイデンティティ、自己効力感、態度、エスノセントリズム、ステレオタイプ、開放性といった認知的・情意的要素を取り入れ、動機づけを広義的に捉えていることが明らかになった。

2.3.2 不安

八島（2004）は、WTC の概念モデルに基づき、外国語コミュニケーションにおける情意的・認知的要素を具体的に取り扱った。同書はまた、WTC モデルで明確に提示されなかった「不安」を提唱し、外国語コミュニケーションにおける「不安」を、「特性不安(trait anxiety)」、「状態不安(state anxiety)」、「コミュニケーション不安（communication apprehension）」、「外国語の学習に関わる不安（Language Anxiety）」、「異文化接触の不安」などに分けられるとしている。「特性不安」は、性格としての不安で、個人の特性であると考えられる。「状況不安」は、一時的な緊張状態としての不安である。「コミュニケーション不安」は、「実際の、あるいは想像上の対人コミュニケーションに関連した恐怖や不安」である。「コミュニケーション不安」の原因は、「学習（条件付け）によって形成される」、「ソーシャルスキルの欠如」と「認知過程における誤り」などが取り上げられる。「学習（条件付け）によって形成される」「コミュニケーション不安」はある特定のコミュニケーションの状況と不安感が結びつくことによって形成されるものであり、「ソーシャル・スキルの欠如」による「コミュニケーション不安」は対人関係を円滑に進める能力や技能が不足している場合を言うが、「認知過程における誤り」とは外国語を母語話者のように話さないといけないという間

違った信念をもったり、高すぎる要求水準を自分に対して課すと不安は高くなることである。「外国語の学習に関わる不安」は、主に外国語不安を指すが、話者が最も自由に操れる言語でない言葉、多くの場合習得の途上にある言葉を使う時に感じたり、学習する時に経験したりする不安である。「異文化接触の不安」は、異文化接触場面においては、異質な文化背景をもった人に対して違和感を持ったり、不安を感じたりすることである。

2.3.3 態度

池田他（2010：139）は、Eagly & Chaiken の提出した「対象に関する、好みや評価的な判断に基づいた心理的な傾向」を代表的な「態度」の概念ととらえ、態度は「感情的」・「認知的」・「行動的」という3つの成分を持つとした。また、「好き・嫌い」、「納得できる・できない」といった判断が態度の根幹であり、感情的成分が態度の本質であると指摘している。Kelman（1965）は、イメージを「個人の認知システムにおけるある対象についての組織化された表象」と定義する。二者を比較すると、「イメージ」は認知した「表象」を重んじるのに対して、「態度」は「評価的な判断」、すなわち感情的な成分のほうを強調する。そして、鮑戸（1970：258）は、安定性から言えば、「態度」は「イメージ」よりかなり安定しているという。一方、池田他（2010：116）は、「ステレオタイプ」を、ある社会的集団（人々）に関する知識、信念、期待（予期）などによって構成された知識構造で、集団カテゴリーに対する知識あるいは信念であると定義する。すると、「ステレオタイプ」は、ある集団に対し、多くの人々が共有するイメージと解釈できるだろう。唐沢（2006：19）も、固有のイメージがステレオタイプであると指摘した。よって、「ステレオタイプ」は、「イメージ」の下位概念と考えれば妥当だろう。「態度」は、「感情的」・「認知的」・「行動的」という3つの成分を持つものであるため、「イメージ」と「ステレオタイプ」は、認知的成分として「態度」に属すると考えられる。

「偏見」も、重要な「態度」の要素である。「ステレオタイプ」と「偏見」との相違について、根橋（2003：101）は、まず、「ステレオタイプ」自体は中立的なものであるが、「偏見」は否定的な態度のことを指し、次に、「ステレオタイプ」が認知的側面を持つのに対して、「偏見」はある特定の集団に対して、情緒的に嫌悪感を覚える状態のことであると述べている。また、「ステレオタイプ」が多くの人に共有されているのに対し、「偏見」は、特定の個人がもっていることが多い。八島（2004：97）は、ステレオタイプは自然に誰でも行っている認知的な情報処理の結果であり、相手の行動を予測したり、自分の対人行動を決定したりする際に必要であるが、しかし、いつまでも、その人が属するグループの固定的なステレオタイプを持ち続けることは、コミュニケーションや関係性の進展に支障をきたすと主張している。本研究では、このような、コミュニケーションや関係性に支障をきたす相手グループへの「ステレオタイプ」を「偏見」と見なす。

以上を踏まえ、本研究においては、「イメージ」と「偏見」と「ステレオタイプ」を「態

度」の要素と見、そのうち、「偏見」は「態度」の「感情的」側面、「イメージ」と「ステレオタイプ」は「態度」の「認知的」側面をそれぞれ反映すると見なす。

呉（2008）、河先（2010）、曹（2005）などは、異文化接触が態度の変容を促進すると論じた。呉（2008：61）は、韓国人大学生の日本人との直接接触に関して、直接経験者は日本人に対して「対人関係のあり方に関する認識」を持ちやすく、「国家イメージから派生した認識」を持ちにくいと論じ、そこから直接経験は「コミュニケーションの対象としての認識の形成」と「日本の国民としての認識の弱化」に影響すると予測した。

河先（2010）は、日本留学経験を持つ韓国人日本研究者を対象とし、彼らが自国で日本語学習を始め、日本への留学を経て帰国後、日本の専門家として活躍するに至るまでの日韓両文化に対する態度構築のプロセスを明らかにすることを目的とし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを通して質的調査と考察を行った。日本滞在という異文化接触経験は、日本観の変容をもたらし、この変容からは、さらに、韓国人としての自己の確認、日本理解の可能性の拡張、および、韓国の問題点への気づき、偏らない立場の追求というような認識や態度、スキル上の異文化間能力の伸長などが生じるという結果が得られた。日本観の変容、日本観の変容に促進された異文化間能力、それに日本人との相互作用を通して得た満足できる関係構築、理解しあえる日本人の存在などの要素を通して、民間交流による国家間関係改善への志向を持ち、研究者としての異文化理解を促進する行為などを実行しはじめることが明らかにされた。他方、日本の滞在経験は、また、「日本」の問題点の実感、対話困難な日本人（歪んだ韓国観を持つ日本人、歴史認識の差異に無知・無関心な日本人）との遭遇という問題をももたらしてくるが、それが問題の棚上げ（諦めや日韓関係の諸問題の相対化）に繋がるという。

河先（2010）には、本研究に示唆を与える部分が、次のように4点ある。まず、①異文化接触は肯定的な面ばかりもたらずのではなく、否定的な日本観をさらに増幅させる面もあり得ることである。次に、②個人の内部に生じる日本観の変容と自（他）文化への認識以外に、異文化接触の中で、接触相手の関与姿勢は、異文化接触の効果に重要な役割を果たす。また、③日本観の変容とそれに促進された異文化間能力の伸長、および接触相手との相互作用によって満足な対人関係が構築される。④異文化間態度は異文化間スキルに促進作用を持つという4点は、異文化接触の持続に大きな意義を持っていることが判明したことである。

歴史的・社会的要因の影響で、日中間のコミュニケーションにおいて偏見が大きな影響要素になっていることが多くの研究で報告され、言及されてきた（吉 2001；葛 2007；一二三 2008；小林 2010；李 2007；殷・青木 2017 など）。葛（2007：83-91）は、日本滞在中の中国人留学生に対して異文化適応についてインタビューし、日本人は戦争というものを正しく認識していないというネガティブなイメージを持っていることを明らかにした。一方、吉（2001）は、中国滞在の日本人留学生に対して行ったインタビューで、かれらが日中両国の戦争についての意識の違いに驚き、そのことが対中イメージに影響を与えたという結

果を得た。葛（2007：88-89）の調査した日本人留学生の中にも、「テレビで日中戦争に関する映画やニュースを見た時、嫌な思いをした」と影響を受けていた者がいたという。

日中間の相互認識は、他に様々な情報源に影響を受けながら形成されていると考えられる（李 2007：140）。金（2012）は、中国の福州大学における日本語専攻生の日本人イメージの変化に調査を行ったところ、高学年は低学年より日本人をネガティブに評価することが見られたが、それは低学年の段階は日本文化に好奇心と憧れを持っているが、高学年になって日本文化に対する知識が増えると疑問も多く生じ、異文化を充分理解できず異文化衝突を感じるからであると論じている。日本語専攻大学生が日本語学習を通して日本関連情報をより容易に手に入れていくに伴い、日本文化に受容していくとは限らず、否定的な日本人イメージや感情などが生じることもあり得ることが判明した。このような否定的な態度は、異文化接触に負の影響を与えることが予測できる。張（2013）は、中国人の日本語専攻の大学生と他文系専攻の学生を対象に自由記述による調査を行った結果、日本語専攻の学生は、他専攻の学生より全体的に肯定的で中立的な対日態度をもっているが、学年が上がるにつれ、否定的対日態度と中立的対日態度が上昇することを明らかにした。これは、学年が上がるにつれて、日本の社会文化知識と日本人との直接接触が増え、また日本関連情報の数量と内容が拡大するとともに、学習者が日本人に対して複眼的な視点を持つようになるからだ論じている。また、張（2013）が触れたように、異文化接触自体が日本人イメージに否定的な影響を与えることもあり得る。上述した青木（2018）は、それについて、異文化接触が必ずしも学習者の意識変容や肯定的な経験をもたらすとは限らず、異文化接触がかえって偏見を深める可能性があると言及した。そのため、異文化接触を持続させるために、異文化接触自体のもたらす否定的作用を真摯に受け止め、継続した異文化接触と教室内からの柔軟な指導で、これを修正する必要があると考えられる。

2.3.4 まとめ

以上、異文化接触の、動機づけと不安と態度から異文化間コミュニケーションの情意的要素を検討した。

外国語教育を土台とした異文化接触自体も外国語学習であるため、本研究は、異文化接触の動機づけに関する先行研究をレビューする時、外国語学習の動機づけに関する研究をも視野に入れた。Gardner & Lambert（1972）は、社会心理的アプローチから第二言語学習の動機づけは「統合的志向」と「道具的志向」に分けられると論じ、Gardnerの一連の研究（Gardner & Lambert 1972；Gardner 1985）は、言語到達における道具的な志向の有効性を否定するのではないが、統合的な志向を持って学習を行う学習者のほうが、第二言語学習においてより成果をあげるのではないかという仮説を立てた。しかし、Dörnyei（1990）は、外国語学習の状況では、道具的動機づけの方が重要であると指摘した。また、Dörnyei（1994）は、教育場面に注目し、従来の統合的動機づけと道具的動機づけという二分法で見てきた

動機づけ研究に、「不安」、「自覚された第二言語能力」、「原因の帰属」、「自己効力感」などといった認知的視点を取り入れた。異文化接触の動機づけについて、八島（2004）は、「国際的志向性」、「自覚された第二言語能力」、「自己効力感」、「自己概念」、「接近・回避」、「エスノセントリズム」、「ステレオタイプ」、「開放性」などを取りあげ、異文化接触の動機づけを情意的・認知的視点から広義的に捉えている。

異文化間コミュニケーションにおける不安について、八島（2004）は、特性不安と状態不安・コミュニケーション不安・外国語の学習に関わる不安・異文化接触の不安を取り上げ、異文化接触に個人の特性、対人コミュニケーション、外国語能力と異文化性からくる不安が関わることを示唆している。

異文化間コミュニケーションにおいて、態度が重要な情意的要素として注目されており、感情的、認知的、行動的という3つの成分を持っており、偏見、イメージ、ステレオタイプなどが下位概念と考えられる。WTCモデルは態度を動機づけ、自信などと対等的、別に取り扱っているが、八島（2004）は態度を動機づけの要素として取り上げていると上記で明らかになった。本研究では態度と動機づけを別の情意的要素とみなすこととする。異文化接触が偏見の変容を促進させる一方（呉 2008；河先 2010；曹 2005）、偏見が異文化接触を阻害する面も重要視されるべきであると考えられる（吉 2001；葛 2007；一二三 2008；小林 2010；李 2007；殷・青木 2017 など）。特に日中間において歴史的、社会的要因の影響で、両国間が互いに偏見を持っており、それが両国の異文化間コミュニケーションに大きく影響する。また、中国の日本語専攻大学生の場合に絞ると、日本へのネガティブな態度は歴史的、社会的要因以外、日本の社会文化知識、日本人との直接接触、マスメディアなどのような日本関係の情報源が作用し（李 2007；金 2012；本間 2012）、そのネガティブなイメージがさらに、逆に異文化接触に影響することも考えられる。

2.4 本研究の位置づけ

2018年に中国教育部高等学校教学指导委员会によって『普通高等学校本科專業類教学質量国家標準』が作成され、その中に、外国言語文学類専攻の学習者に対しては、外国語運用力や異文化間能力が重要な能力として求められると明記されている。しかし、中国の日本語教育においては、2000年から日本語専攻大学生に対する異文化間コミュニケーション能力の育成が唱えられて以来、その実施は、「日本語+日本の文化を知っていること」という言語至上・知識偏重のパターンに沿い、教室内での教授と教える側を中心とする施策に基づいて行われてきた。これらは、いずれも、学習者の、教室外での真の異文化接触という視点が欠落している。異文化接触は、実際の異文化間コミュニケーションの場で起こるのであり、そこでは日本語運用力と異文化間能力が鍛えられると考えられるが、それが中国の日本語教育者の間においては十分に認識されていない。学習者は、教室内から有効な支援やサポートを受けずに、多くの困難を抱えながら異文化接触を経験している。そのよ

うな学習者の状況を改善するためには、まずは、中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状はどうか、異文化接触は具体的にどのような過程か、異文化接触を持続させるためにどのようなコミュニケーション能力が求められるか、それを十分に認識しなければならない。その上でこそ、日本語教育の現場と日本語教育者から、異文化接触を持続させるための支援やサポートの実現が期待できるのだろうと考えられる。このような問題に基づいた本研究は、その性格を、外国語教育の視点からアプローチする、日中間の異文化間コミュニケーション研究として位置づけることができる。一方、従来の日中間の異文化間コミュニケーション研究と異なる本研究の特徴としては、次の3点が挙げられる。

(1) 中国ホストの場合の日本語専攻大学生における異文化接触をより全体的に捉える。

日中間の異文化間コミュニケーション研究は、発生地によって日本において行われるものと中国において行われるものと分けられている。日本で行われるものでは、日本在住の中国人留学生の異文化適応問題がもっとも多く取り上げられている。一方、中国で行われる日中間の異文化間コミュニケーションを取り上げている研究はまず量的に少なく、次に、その中で日系企業での駐在員と現地の従業員との間のビジネスコミュニケーション問題が大きな比重を占めており、さらに、そのビジネスコミュニケーション問題の中では、言語能力を中心としたコミュニケーション能力問題がもっとも注目されている。一方、中国ホストの場合の、日本語専攻大学生における異文化接触に焦点を当て、さらにそれを外側から見た現状と一歩踏み込んでみた実態の双方からアプローチし、より全体的に捉える研究は僅少である。

(2) M-GTA を用いて多様な文脈における異文化接触のプロセスに対して具体的な記述を行い、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実態の一般性を求める。

従来の日中間における異文化間コミュニケーションに関する量的研究には、異文化不適應や異文化摩擦の問題点がどこにあるかを提起することにとどまっているものが多い。それに対して、日中間における異文化間コミュニケーションに対する質的研究は、具体的な記述が成されてはいるが、特定の事例に限定されており、その結果が全体像を反映しているとは限らないという問題を抱えている。本研究は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, M-GTA と称する) を用いて、この研究現状の改善に貢献したい (第4、5章)。木下 (2003) によって提唱された M-GTA は、人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究や研究対象とする現象がプロセス的性格を持っている研究に適している (木下 2003 : 11)。本研究の取り扱っている異文化接触は、文化的背景を異にする人々の間でなされる対面的相互作用であり、かつ、「接触前の状況」・「接触中の状況」・「持続中 (断念)」という段階からなる1つのプロセスであるため、研究の枠組みとして M-GTA が適切であると考えられる。また、M-GTA は、データに密着して独自の説明概念を作り、それらを統合的に構成した説明力に優れた理論を生成することが特徴であり、さらに提示された理論にはそうした多様性に対応できる一般性が求められる (木下 2003 : 25-34)。これらの特性を生かし、本研究は多様な文脈にお

ける異文化接触のプロセスについて具体的な記述を行い、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実態の一般性を探究する。中島・板倉（2003）は、中国ホストの場合で、香港と鹿児島の大學生の間で行った「異文化理解電子メールプロジェクトワーク」を記述したが、しかし、それは特定文脈での異文化接触であり、それと異なる文脈における異文化接触への一般化には至っていないという問題を抱えている。

（3）日本語専攻大學生が対日異文化接触を持続させるために必要なコミュニケーション能力を同定する。

外国語教育における異文化間コミュニケーション能力に関する研究は、異文化間コミュニケーション能力を概念化し、構成要素間の関係モデルを構築するものが多いが、それを検証する実証研究が欠如している。異文化間教育においては、異文化間コミュニケーション能力を促進するための教育実践や教育的効果の検証研究が多いが、日中間の異文化間コミュニケーション能力をより全面的に論じ、検証するものが見当たらなかった。本研究では、M-GTAを通して、異文化接触のプロセスの実態を具体的に記述し、そして多様な文脈における異文化接触を比較的に全面的に呈することによって、日中間における異文化間コミュニケーション能力を同定することがより説得力があるかと考え、この理念に基づいて調査と分析を行う。

第3章 中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状

中国の日本語教育においては、これまで、日本語教師を中心に、「日本語＋日本文化に関する知識を教える」という施策に基づいて学習者の異文化間コミュニケーション能力の育成が行われてきたが、この政策下では、学習者の教室外での異文化接触という視点が等閑視されたままであった。本研究は、異文化接触が日本語専攻大学生に大変重要な意義を持っており、異文化接触が学習者の異文化間コミュニケーション能力を鍛え、さらに促進させる手段と方法であると認識している。また、異文化接触には、多くの可能性が潜んでおり、中国の日本語教育に大きな示唆を与えるものと考えている。中国の日本語専攻大学生における異文化接触はどのようなものかを認識できるように記述する必要があるのである。本章において中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状を明らかにする。そのために、研究の対象とする大学生の異文化接触の現状に対して自由記述によるアンケート調査を実施した。

3.1 調査の目的と調査の実施

3.1.1 調査の目的

中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する調査は、2つの状況の把握を目的とする。第一は、接触の対象・接触の場・接触の主な内容を中心とする接触の具体的様子を記述すること、第二は、学生の学年や接触の場などにおいて、異文化接触の様相に特徴があるか否かを明らかにすることである。

3.1.2 調査の実施

2016年9月初旬から月末にかけて、筆者は、大連に位置する「A大学」と「B大学」の日本語専攻大学生を対象に自由記述の形で異文化接触の現状について調査を行った。「A大学」は大連市の中心部から離れた所に位置しているが、周りに日系の企業や工場が多く、また、単身赴任や家族連れで滞在する日本人が生活している地域であるため、日本語専攻大学生にとって異文化接触をするのに便利な場所であると言える。「A大学」の日本語専攻大学生の中には、個人レベルで異文化接触をする者が多い。そのため、本研究では、異文化接触のプロセスに関するインタビュー調査も「A大学」から調査協力者を募集することにした。「B大学」も、大連市の中心部より離れたところに位置しており、周囲に日系の企業や工場があることで「A大学」と共通しているが、「A大学」と比較すると、その所在地は日本人駐在員やその家族が生活している地域ではない。しかし、「B大学」は日本との国際交流に力を入れており、積極的な国際交流政策を推し進めているため、日本人教師

や留学生が比較的によく来ており、さらに、「B 大学」の日本語学部は多くの日本の大学と連携し、学生が多種の形で日本に留学するようになっている。

研究者は、「A 大学」に対しては、縁故を利用して、学長に研究協力依頼を行い、承諾を得た。その後、日本語学部の学部長にも協力を得、「A 大学」において3つのクラスを対象に、それぞれの担任教師3名に説明担当者として依頼して、調査協力者の募集を行った。その説明担当者3名を通して、応募者に『中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自由記述による調査許可願』を送り、承諾を得た後、電子版で『中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自由記述調査票』を送り、その回答は、各クラス長がまとめて研究者の連絡先に送るよう依頼した。「B 大学」に対しても、縁故を用いて、日本語学科長に口頭で依頼した後、研究協力依頼の手紙を送り、承諾を得た。その後、本論の研究者が「B 大学」において調査協力者を募集して、調査を教室で実施し、そしてその場で回答を回収した。調査の所要時間は、1人当たり10分以内であった。

調査は、111名の調査協力者から回答を得た。調査を実施した時期は、各学年の上半期である¹³。そして、二大学の日本語学部は、どちらも日本語がゼロスタートの志願者を募集するため、調査の時点では、1年生が入学して一か月も経っておらず、日本語の学習はまだ五十音図の段階であり、全体的に言えば、教室外での異文化接触はまだ開始できないと判断して、調査協力者から除外することにした。2年・3年・4年に対しては、各学年における異文化接触の特徴を見、かつ異なる大学間での状況を比較するために、二大学においてそれぞれの学年から1クラスを募集対象にした。調査協力者の内訳は、【Table 3.1】のとおりである。

大学	学年	性別		学年別人数	合計
		男性	女性		
「A 大学」	2年	3名	21名	24名	62名
	3年	2名	18名	20名	
	4年	3名	15名	18名	
「B 大学」	2年	3名	20名	23名	49名
	3年	1名	13名	14名	
	4年	—	12名	12名	
合計		12名	99名	111名	111名

【Table 3.1】 調査協力者の内訳

そのうち、男性は12名、女性は99名で、女性の数が圧倒的に多い。また、調査は二大学においてどちらもクラスごとで募集し、そして募集の時点で欠席の学生以外ほぼ全員応

¹³ 中国の新学期は9月からであり、上半期は9月から翌年1月中旬までの学期で、下半期は翌年の3月から7月中旬までである。

募した。しかし、2年生の人数を見ると、二大学がほぼ同じであるが、3年生、4年生において「A大学」が「B大学」より人数が多かった¹⁴。これは「B大学」が積極的に国際交流を推し進めることと密接に関係している。「B大学」の日本語学部は多くの日本の大学と連携し、学生が多種の形で日本に留学できる。本調査が行われた時、「B大学」の3年生、4年生に留学した学生が多くいた。「A大学」も学年ごとに人数が減少する傾向が見られ、それも学生が留学したことと関係するが、「B大学」ほどでないことが明らかになった。

質問調査票は、中国語で作成した。調査協力者には、「名前」・「性別」・「年齢」・「出身地」・「大学」・「学年」・「班」を記入した後で、異文化接触経験の有無を回答してもらった。異文化接触の経験を持っている場合、さらにその異文化接触が持続しているか否かを回答してもらった。そして、異文化接触の経験者には、「接触の対象」・「接触の場」・「接触期間」・「接触頻度」・「接触の主な内容」を記入するように依頼した。そのうち、「接触の対象」・「接触の場」に関しては、「問題2的表格中所涉及的跨文化接触不包含日本人教师的日常授课。(質問2で触れる異文化接触には、日本人教師の授業を含まないこととします：筆者訳)」と調査票に明記しておいた。それは、本研究が日本語専攻大学生の教室外で行われる日本人との異文化接触を取り扱うものだからである。ただし、日本語専攻大学生の日本人教師とのプライベートな付き合いはここに含まれると、調査する際に、口頭で説明した。回答は、中国語と日本語のどちらでもいい形で記入してもらった。中国語の回答に対しては、本論の研究者が日本語に翻訳した。調査の結果とそれに対する考察は、以下のとおりである。

3.2 結果と考察

3.2.1 大学・学年別の異文化接触の経験

上記の調査から、まず二大学における異文化接触の経験者と未経験者の人数と割合が得られた（【Table3.2】）。

異文化接触の経験者		異文化接触の未経験者	
人数/調査協力者総人数	%	人数/調査協力者人数	%
39名/111名	35%	72名/111名	65%

【Table 3.2】 二大学における異文化接触の経験者および未経験者数の内訳

【Table 3.2】から二大学において3割以上の日本語専攻大学生が異文化接触の経験を持っていることが判明した。

¹⁴ 両大学の日本語学部における各クラスの定員が26人~30人である。

以下は、大学別に異文化接触の経験者と未経験者の人数・割合をまとめた表である。

大学	異文化接触の経験者		異文化接触の未経験者	
	人数/「A 大学」調査協力者数	%	人数/「B 大学」調査協力者数	%
「A 大学」	26 名/62 名	42%	36 名/62 名	58%
「B 大学」	13 名/49 名	27%	36 名/49 名	73%

【Table 3.3】 大学別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳

二大学における異文化接触経験者数の各大学協力者数に対する比率を比較すると、「A 大学」は「B 大学」より比率が高いことが分かった。これは、二大学の位置している環境が大きく影響しているからだと考えられる。「A 大学」は周囲に日系の企業や工場が多く、そして、何よりも日本人駐在員やその家族が多く生活している地域に位置しているため、学習者が異文化接触をするのに場所的に便利である。それに対して、「B 大学」も周囲には日系の企業や工場があるが、日本人駐在員やその家族が生活している地域ではないため、大学以外で異文化接触するのに距離的に不便なのである。

学年別異文化接触の経験者と未経験者の人数・割合について、二大学におけるそのそれぞれを見ることにする。以下の【Table 3.4】と【Table 3.5】をご覧ください。

学年	異文化接触の経験者		異文化接触の未経験者	
	人数/各クラス調査協力者数	%	人数/各クラス調査協力者数	%
2 年	8 名/24 名	33%	16 名/24 名	67%
3 年	7 名/20 名	35%	13 名/20 名	65%
4 年	11 名/18 名	61%	7 名/18 名	39%

【Table 3.4】 学年別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳（「A 大学」）

学年	異文化接触の経験者		異文化接触の未経験者	
	人数/各クラス調査協力者数	%	人数/各クラス調査協力者数	%
2 年	5 名/23 名	22%	18 名/23 名	78%
3 年	1 名/14 名	7%	13 名/14 名	93%
4 年	7 名/12 名	58%	5 名/12 名	42%

【Table 3.5】 学年別異文化接触の経験者および未経験者数の内訳（「B 大学」）

「A 大学」においては、異文化接触経験を持っている学習者の人数は学年が上がるとともに上昇し、そして4年生になって、6割の学習者がそのような経験を持つようになったということが明らかになった。「B 大学」においては、3年生の調査協力者14名のうち、経験者は1名しかなかったが、2年から4年にかけて、全体的に経験者の人数が上昇する傾向を見せている。特に、4年生の場合、約6割の学習者が異文化接触経験を持つようになっており、「A 大学」とほぼ同じ割合を占めている。学年が上がるとともに、異文化接触の経験を持っている学習者の人数も上がる。学年とともに日本語能力が向上し、日本語能力に対する不安も軽減すること、異文化接触を通して異文化間コミュニケーション能力を高めることに対する動機づけが強くなること、さらに、日本人と接触できるネットワークが広がることなどがこの傾向に影響する要因であろうと考えられる。

3.2.2 大学・学年別の異文化接触の持続

本調査は、調査協力者に「您与日本人的跨文化接触现在在持续吗？（あなたの異文化接触は今も続いていますか：筆者訳）」という質問に回答してもらうように依頼した。しかし、例えば日本人留学生とサークル活動で知り合って、その接触が始まったばかりのとき、持続できるか、さらにいつまで持続できるかと言えなくても、当分続きそうであると判断した場合は、「はい」と答えることが考えられるが、その接触が1、2回で終わってしまうこともあり、それでは「持続」とは言えなくなってしまう。つまり、「持続」とは何かに対して限定する必要があるということである。本研究では、調査の時点までの2か月以内に開始した異文化接触を「開始」、異文化接触経験があったが、調査の時点まで2か月以上も行っていない接触を「持続していない」と表記することとした。「持続している」については2つの場合が考えられる。一つは2か月以上接触を継続し、そして調査の時点にも行っている場合、もう一つは調査の時点では行っていないが、前回の接触が調査の時点まで2か月以上経っていない場合である。「2か月」と限定したのは、中国の日本語専攻大学生にとっては、年に2回の長い休みである夏休みと冬休みがそれぞれ約1か月あるが、休みに入る前には日本語能力試験と期末試験が相次ぐなどで、その時期、約1か月一時的に異文化接触を放棄することがあり得るためである。本研究では、その約2か月の間の中断は、接触が完全に中止されるのではなく、学業重視による一時的放棄であるため、「持続している」と見なす。そのため、大学・学年別異文化接触の持続に関しては、「あなたの異文化接触は今も続いていますか」という「接触期間」に対する回答を踏まえて、「開始」か「持続している」か「持続していない」かを判断することにした。また、複数の異文化接触対象を持っている調査協力者は、異文化接触の対象によっては持続できなくなってしまう場合もあるが、本研究は協力者の個別接触ではなく、接触という行為が持続しているかによって判

断するため、接触対象によっては持続できなくなった経験があるとしても、異文化接触自体が持続しているなら、「持続している」と見なすことにした。以下の【Table 3.6¹⁵】は、大学・学年別異文化接触の持続状況である。

学年	大学	開始		持続している		持続していない	
		人数/異文化接触経験者総数	%	人数/異文化接触経験者総数	%	人数/異文化接触経験者総数	%
2年	A	5名/39名	13%	2名/39名	5%	1名/39名	3%
	B	—	—	2名/39名	5%	3名/39名	8%
	計	5名/39名	13%	4名/39名	10%	4名/39名	10%
3年	A	—	—	3名/39名	8%	4名/39名	10%
	B	—	—	1名/39名	3%	—	—
	計	—	—	4名/39名	10%	4名/39名	10%
4年	A	—	—	9名/39名	23%	2名/39名	5%
	B	1名/39名	3%	2名/39名	5%	4名/39名	10%
	計	1名/39名	3%	11名/39名	28%	6名/39名	15%
合計		6名/39名	15%	19名/39名	49%	14名/39名	36%

【Table 3.6】 大学・学年別異文化接触の持続状況

【Table 3.6】からは、大学・学年別異文化接触の持続状況に関して3つの特徴が見られる。

まず、二大学における「開始」・「持続している」・「持続していない」3項目それぞれの、異文化接触経験者総数に対する割合を見ると、「持続している」項目が最も多く、経験者の約半数を占めていることが明らかになった。一方、「持続していない」比率も36%あり、決して少なくはないと考えられる。

次に、大学別持続状況を見ると、「A大学」における「持続している」経験者が「B大学」より多いことが判明した。これは「A大学」における日本語専攻大学生の異文化接触がより安定的であるからであろう。そしてまた、「A大学」における、異文化接触を「開始」する学習者の人数も、「B大学」より多い。これは「A大学」においては、安定的に利用できる接触の環境がある程度整っているため、学習者に日本語能力などのような自身の条件が揃うと、ネットワークを利用して接触を「開始」できるためであると推測できる。

また、学年別異文化接触の持続状況を比較すると、2年生になって異文化接触を「開始」する学習者が5名、4年生で異文化接触を「持続している」経験者が11名おり、それぞれ

¹⁵ 「開始」・「持続」・「持続していない」3項目それぞれの、異文化接触経験者総数に対する比率が割り切れない場合は、四捨五入することとした。そのため、3項目の占める比率を合計しても、100%にはならない場合がある。

各学年において最も多いことが注目される。2年生の場合は、日本語能力が向上してきて、それまでに日本語能力などに対して自信のなかったことが軽減され、それと同時に異文化接触を通して日本語をアウトプットする需要が生まれるためだろうと考えられる。また、4年生に接触を持続している経験者が多いことから、この学年の学習者は、接触を持続させる能力をある程度備えていること、そして、接触の持続的利用が自身に意義を持つことを認識し始めていることが伺われる。

3.2.3 大学・学年別の、接触の対象・接触の場・接触期間・接触頻度・接触の主な内容

3.2.3.1 接触の対象と接触の場

大学別の「接触の対象」および「接触の場」は、それぞれ【Table 3.7】と【Table 3.8】にまとめたとおりである¹⁶。

種別 大学	駐在員	主婦	子ども	教師	留学生	客	その他	合計
「A 大学」 人数	16 名/次	4 名/次	2 名/次	1 名/次	6 名/次	4 名/次	1 名/次	34 名/次
「B 大学」 人数	1 名/次	1 名/次	1 名/次	6 名/次	8 名/次	2 名/次	1 名/次	20 名/次
計	17 名/次	5 名/次	3 名/次	7 名/次	14 名/次	6 名/次	2 名/次	54 名/次

【Table 3.7】 大学別「接触の対象」

種別 大学	中国語教室	大学	日本料理店	その他	合計
「A 大学」 人数	14 名/次	6 名/次	10 名/次	4 名/次	34 名/次
「B 大学」 人数	3 名/次	14 名/次	2 名/次	1 名/次	20 名/次
計	17 名/次	20 名/次	12 名/次	5 名/次	54 名/次

【Table 3.8】 大学別「接触の場」

調査票の「接触の対象」欄には「客」という項目を挙げておかなかったが、日本料理店でアルバイトして日本人と接触する場合は、接触の対象がどのような職業なのか判断できないため、「その他」を選んでもらった。ただ、「客」と記入した協力者が何人かいるため、

¹⁶ 1名の学習者が種別的に1種以上の「接触の対象」や「接触の場」を持つことがあるため、【Table 3.7】と【Table 3.8】で統計した人数は、異文化接触経験者数と一致していない。

統計に際しては、記述した「客」のままにした。

「接触の対象」は、日本人の「駐在員」・「主婦」・「子ども」・「教師」・「留学生」・「客」・「その他」に分けられている。二大学を合わせて各項目での総人数をみると、「駐在員」・「留学生」と接触した経験を持っている学習者数が最も多く、それぞれ17名/次、14名/次であり、接触経験者総人数54名/次のうち31名/次をも占めている。一方、「その他」項目に該当する人数は最も少なく、二大学にそれぞれ1名/次いるが、「A大学」の1名/次は日本人料理人の通訳を担当した時の接触であり、「B大学」の1名/次はインターンシップ経験時の国際ホテルでの日本人観光客との接触である。大学別見ると、「A大学」の学習者は日本人の「駐在員」と最も多く接触しているが、「B大学」の学習者は「留学生」および「教師」と多く接触していることが明らかになった。

「接触の場」は「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」・「その他」に分けられており、各項目における人数から言えば、「大学」は20名/次、「中国語教室」は17名/次、「日本料理店」は12名/次、「その他」は5名/次という順になっているが、人数が「大学」・「中国語教室」・「日本料理店」に集中しており、パターン化の様相を見せている。「その他」は後節の「接触の主な内容」を参考に見ると、個別のネットワークでチャンスを獲得し、インターンシップやプライベートの形で行われる接触のことを指しており、主な接触の対象は滞中公務員、企業の駐在員、主婦、観光客などであることが分かった。

大学別から言えば、「A大学」の学習者は「中国語教室」と「日本料理店」での接触が最も多いが、「B大学」の学習者における異文化接触は「大学」内の日本人留学生と日本人教師に頼っている。これは、「A大学」と「B大学」、それぞれの位置している環境や各校の国際交流志向における特徴と密接に関係していると言えよう。上記したように、「A大学」の周りには日系の企業と工場が集中しており、何よりも日本人駐在員やその家族が生活している地域に位置しているため、中国語教室や日本料理店をアルバイトなどの形で利用すれば日本人と異文化接触できる。「B大学」も、日系の企業と工場が集中しているところに位置してはいるが、日本人が生活している地域でないため、地縁の利便さは「A大学」ほどではない。しかし、大学外での接触環境には恵まれていない一方、「B大学」は日本との国際交流に力を入れており、積極的な国際交流政策を推し進めているため、日本人教師や留学生が比較的によく来ており、学習者はその人的リソースを生かして利用している。また、「B大学」の2名の調査協力者は、「接触の場」において「大学とSNS」と記入したことを特筆するが、インターネットの普及とともに、実際の接触の場のみならず、インターネットでの異文化接触も可能になり、異文化接触の手段が多様化しつつある。これは、接触チャンスの獲得に関して新たな可能性を示唆しているものと考えられる。

次に、学年別の「接触の場」(【Table 3.9】)を見る。本調査では、調査時点までの接触経験を「接触対象」別に記入してもらったが、その経験が必ずしも調査時点に行われたものとは限らないため、学年別に「接触の場」を統計する際には、「接触期間(年_月～年_月)」を参考に接触の実際の開始学年を記入することにした。

種別 学年	大学別	中国語教室	大学	日本料理店	その他	合計
1年	「A大学」	3名/次	4名/次	1名/次	—	8名/次
	「B大学」	—	9名/次	1名/次	—	10名/次
	計	3名/次	13名/次	2名/次	—	18名/次
2年	「A大学」	7名/次	—	7名/次	—	14名/次
	「B大学」	—	3名/次	1名/次	—	4名/次
	計	7名/次	3名/次	8名/次	—	18名/次
3年	「A大学」	4名/次	2名/次	2名/次	4名/次	12名/次
	「B大学」	—	1名/次	—	—	1名/次
	計	4名/次	3名/次	2名/次	4名/次	13名/次
4年	「A大学」	—	—	—	—	—
	「B大学」	3名/次	1名/次	—	1名/次	5名/次
	計	3名/次	1名/次	—	1名/次	5名/次
総人数		17名/次	20名/次	12名/次	5名/次	54名/次

【Table 3.9】 学年・大学別「接触の場」

【Table 3.9】を見ると、日本語専攻大学生は、1年生の時からすでに異文化接触を開始し、低学年段階¹⁷で異文化接触を開始する人数が4年間のうちもっとも多く、それぞれ18名/次と18名/次で、接触開始者総人数54名/次の67%を占めている。そして、低学年段階では、接触が「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」に集中しており、特に、1年生では「大学」での接触が最も多く、1年生接触開始者数18名/次のうち13名/次を占めている。これは1年生の時は、日本語能力のレベルが低くて、学校外の社会での異文化接触には実力が及ばないという学習者の判断が働いているからではないかと考えられる。大学別に見ると、「A大学」の学習者は、1年生の時からすでに「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」3項目での接触を開始しているが、「B大学」の学習者は、日本人留学生と日本人教師を相手に大学での接触をよく利用していることが判明した。

2年生になると、「A大学」の学習者は「中国語教室」と「日本料理店」での異文化接触を多く開始しているが、「B大学」の学習者は大学でのリソースを引き続き利用して、日本人教師（2名/次）や日本人留学生（1名/次）との接触を開始した。1年生時の接触を持続する学習者がいることを考慮に入れると、全体的に言えば、2年生は1年生より強い接触の動機づけを持っていることが明らかになった。大学別の状況を見ると、「A大学」は、大学外での接触環境が安定しているため、学習者は、日本語能力の向上や不安の軽減などと

¹⁷ 中国の日本語教育は「低学年段階」と「高学年段階」に分けられる。「低学年段階」は大学1年・2年、「高学年段階」は大学3年・4年を指すことが多い。

ともに接触環境を利用し始めていることが推測できる。

3年生の場合、「A大学」の学習者は、「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」・「その他」という4つの項目で開始者が現れ、「接触の場」が多様化しつつあることが判明した。これは、学習者が、3年生になって日本語能力が一層高くなるにつれて、将来の就職に向けて自己成長のために異文化接触を利用しようとする意志も強くなり、ネットワークを十分に利用し始めたからだとも推測できる。特に、「その他」に4名の接触開始者が現れ、異文化接触のネットワークが個別化しているように考えられる。一方、「B大学」では、接触開始者が1名おり、これは大学での留学生との接触である。

大学4年では、「A大学」には接触開始者が現れなかったが、「B大学」には「中国語教室」での接触を開始する学習者が3名/次も現れた。これは、「B大学」が中国語教室のある日本人の生活地域からは距離的に遠いにもかかわらず、学習者が4年生になって異文化接触の必要性を一層切実に認識するようになったため、それが距離による困難を越えたからだとも推測できる。また、「B大学」にインターンシップで接触を開始した学習者が1名/次現れた。ここから、高学年段階になると、学内での日本語学習では満足せず、学外での異文化接触を通して自身を鍛えたいという欲求が一層強くなっていることが伺える。

学年・大学別の「接触の場」に関する調査の結果をまとめると、次の4点の傾向が浮き彫りになった。

- ①「A大学」の学習者は「中国語教室」と「日本料理店」での接触をよく利用するが、「B大学」の学習者は「大学」で日本人教師や日本人留学生との接触をよく利用している。これは二大学の位置している環境および大学の国際交流政策と関係しており、そこに大学別の特徴が見られる。それは同時に、学習者の異文化接触が環境に強く依存しており、環境に左右されていることでもあると言える。
- ②学習者が1年生の時、すでに学内でのリソースに頼った形で、異文化接触に対する需要が現れている。日本人教師や日本人留学生という身近なリソースを多く利用するのは、日本語のレベルによる不安がそれである程度軽減できるからだとも推測できる。
- ③低学年段階での学習者の異文化接触は「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」に集中しているが、高学年段階になると「その他」の接触の場が現れる。ここから、「接触の場」が多様化しつつあり、学習者におけるネットワークの利用が個別化を見せ始めることが明らかになった。
- ④「A大学」においては、4年生の接触開始者がいないが、それまでの接触を持続していることも考えられ得るため、それが、必ずしも接触に対する需要や接触の意欲が低くなったことを意味しているとは限らない。「B大学」において、4年生になって距離的に遠い異文化接触のチャンスをも利用し始めた学習者やインターンシップのチャンスを個人的に探し、利用した開始者が現れたことを考えると、高学年段階の学習者は、異文化接触を現実的、かつ切実に捉えていることが伺われる。

3.2.3.2 接触期間と接触頻度

以下の【Table 3.10】は、異文化「接触の場」によって「接触期間」をまとめたものである。

接触の場 接触期間	0～2 か月	3～6 か月	7～12 か月	12 か月以上
中国語教室	1名/次	5名/次	9名/次	2名/次
大学	9名/次	4名/次	5名/次	2名/次
日本料理店	7名/次	2名/次	3名/次	—
その他	2名/次	2名/次	1名/次	—
合計	19名/次	13名/次	18名/次	4名/次

【Table 3.10】 接触の場別「接触期間」

「接触の場」ごとに「接触期間」を見ると、「中国語教室」における接触は「0～2 か月」でやめた学習者が1名/次いる以外は、16名/次の学習者が接触を継続しており、「中国語教室」で日本人に中国語を教えるという異文化接触は長く続けられていることが判明した。「大学」での接触は、「0～2 か月」の範囲にある学習者が最も多く、接触を開始したばかりの時期や、開始した直後にやめてしまったというケースが2つある。それ以外は、11名/次の学習者が2か月以上の「大学」での接触経験を持っていることが見られる。「日本料理店」における接触も、「0～2 か月」範囲にある学習者が最も多く、7名/次である。そのうち5名/次は開始段階にあるが、2名/次は「日本料理店」での接触が持続できなかった。そして、「12 か月以上」続けられている学習者がいないことを考えると、「日本料理店」での接触は「中国語教室」や「大学」と比べるとより長く続けられるものではないと推測できよう。「その他」における接触も、「日本料理店」での接触と似ており、「12 か月以上」続けられた学習者はいない。個別のネットワークによってできた接触は、あまり長く続けられないことが伺われる。「接触期間」から「接触の場」を見ると、「中国語教室」と「大学」での接触が安定的で、より長く利用できる一方、「日本料理店」での接触は、開始しやすい一面もありながら、長く続けられるとは限らないということが明らかになった。

「接触頻度」も、「接触の場」別にまとめてみると、【Table 3.11】のようになる。

接触の場 接触頻度	3回以上/週	1-2回/週	1回以下/週	たまに
中国語教室	4名	13名	1名	—
大学	—	14名	3名	3名
日本料理店	8名	3名	—	—

その他	3名	2名	—	—
合計	15名	32名	4名	3名

【Table 3.11】 接触の場別「接触頻度」

「接触頻度」は、学習者によってそれぞれ異なるが、本研究では協力者の記述によって「3回以上/週」・「1-2回/週」・「1回以下/週」・「たまに」に分けて「接触の場」によって「接触頻度」がどのような様相を見せるかを検討する。そのうち、「3回以上/週」に3回/週から7回/週までの接触が含まれ、「1回以下/週」に関しては、「全部で2、3時間」、「1回/月」、「1回/2週」というような回答を含む。「たまに」については、協力者の回答のまま記述することにした。

【Table 3.11】を見ると、まず、「たまに」の欄には「中国語教室」・「日本料理店」・「その他」が当てはまっていないが、これは「接触の場」自身の持っている特徴と関係する。「中国語教室」・「日本料理店」の場合は、学習者がアルバイトの形で接触を行うことがほとんどであり、就業時間が決まっているため、「たまに」の状況があまり現れない。それに対して「大学」での接触は、日本人教師や日本人留学生との間で行われており、時間が一定しておらず、より自由であると同時に回数が少ない側面もある。次に、「大学」での接触は「1回以下/週」や「たまに」の場合も見られるが、「1-2回/週」程度で行われるのがほとんどであることも注目される。「中国語教室」・「日本料理店」と比べて、「大学」での接触は義務付けられていることではないため、一層強い動機づけが求められると考えられる。また、「中国語教室」での接触においては、「1-2回/週」という頻度が最も高く、「3回以上/週」がその次である。「日本料理店」での接触の場合は、「3回以上/週」が8名/次で、その詳細は、「3回/週」3名/次、「3-4回/週」1名/次、「5回/週」2名/次、「7回/週」2名/次となっており、日本人との「接触頻度¹⁸⁾」がより高いことが伺われる。

3.2.3.3 接触の主な内容

調査協力者の「接触の主な内容」に関する記述は、「接触の方法・手段」と「接触の話題内容」に分けられている。以下、この2つの側面について議論する。

第一に、「接触の方法・手段」とは、どのような方法・手段で接触を行うかということであるが、「接触の場」によって「接触の方法・手段」も異なる。「中国語教室」と「日本料理店」での異文化接触は、アルバイトの形で行われるのがほとんどであるため、特定の接触内容が要求されており、学習者は「中国語教室」においては日系企業や工場の日本人駐在員やその家族に中国語を教え、「日本料理店」においては店員として注文を受け、食事を運ぶなどのようなサービスを行う。「その他」は、個別性を見せているが、例えばアルバイ

¹⁸⁾ 日本料理店でアルバイトをして日本人と接触する場合、必ずしも日本人顧客といつも接触できるとは限らないため、日本料理店における接触の場合、「接触可能の頻度」と言うのがより正確であると考えられるが、統計上の一貫性を保つため、日本料理店の場合も「接触頻度」で記述することにした。

トの形で会社や工場の通訳として短期間雇われることや、インターンシップ生としてホテルのフロントで日本人の観光客に対応するなどのような内容が挙げられる。「接触の方法・手段」は「おしゃべり」、「コミュニケーション」のような言語コミュニケーションがもっとも多く用いられ、これが「大学」・「中国語教室」・「日本料理店」・「その他」という4種類の「接触の場」すべてに及んでいる。それ以外では、その場に相応した具体的な行動も見られるが、その記述は「日本料理店」と「大学」に集中している。「日本料理店」においては、日本語専攻大学生が「挨拶語」で客に声をかけることが要求され、「挨拶語」が日本人客と接触する主な手段になっている。「大学」での接触では、日本人教師との外食、日本人留学生とのウインドウショッピングや映画鑑賞、大学が学習者と外国人教師・留学生とのコミュニケーションを支援するために開通したアプリケーションの利用、ウイチャットのようなSNSの利用、サークル活動、交流会、語学学習の交換支援などの手段が挙げられている。このように、日本語専攻大学生は、多様な方法や手段を通して異文化接触を展開していることが明らかになった。そして、外食、ウインドウショッピング、映画鑑賞をするなどのことで日本人教師、留学生と接触することに学習者が対人関係の構築を通して接触を持続しようとする意識が見られる。また、インターネットの普及とともに、アプリケーションやSNSなどの利用が新たな接触の方法や手段を学習者に提供していることが特筆されるべきであると考えられる。また、サークル活動や交流会は大学や日本語学部によって組織されるものがほとんどであり、日本人教師、留学生、大学外の日本人団体などとの国際交流を促進させることを目的としていることが多く、このような日本人グループと連携を取って情報交換や実際の活動を行うことが「接触の方法・手段」として挙げられる。ほかに、「日本語コーナー」も利用され得る。これは大学の日本語学部によって設置されるものが多く、具体的な形や内容は大学によって異なるが、日本人教師や留学生などと接触できるため、低学年段階の学習者によく利用されている。語学学習の交換支援は、互いの言語を教えあうという接触のことであり、主に日本人留学生との間の接触に利用されている。

第二に、「接触の話題内容」に関しては、本研究はカテゴリー化の方法でこれを記述・分類した。協力者へのインタビューによって「接触の話題内容」について46個の記述が得られたが、この46個の記述をグルーピングして10個の小カテゴリーに統合し、さらに5個の大カテゴリーに分類した。詳細は、【Table 3.12】にあるとおりである。

大カテゴリー	小カテゴリー	記述数
日本の文化	日本の文化	8
	日本の風俗習慣	5
日本の社会	日本の家庭や教育	2
	時事ニュース	1

	風俗習慣における相違点	6
日中文化における相違点	言語コミュニケーションにおける相違点	5
	文化における相違点	4
語学の学習	日本語、中国語の学習	6
日常の生活と仕事	互いの日常生活	8
	相手の仕事内容	1

【Table 3.12】 接触の話題内容

協力者における日本人との「接触の話題内容」は、「日本の文化」・「日本の社会」・「日中文化における相違点」・「語学の学習」・「日常の生活と仕事」という5つの方面に及んでいることが明らかになった。大カテゴリー「日本の文化」に小カテゴリー「日本の文化」と「日本の風俗習慣」が含まれている。小カテゴリー「日本の文化」に関しては、「日本の文化についてコミュニケーションする」というように網羅的に記述された回答が多いため、記述のまま小カテゴリー名にした。小カテゴリー「日本の文化」に、日本の文学、アニメ、バラエティなどに関する記述も一部含まれている。本調査においては、小カテゴリー「日本の文化」は精神文化を代表するカルチャー、「日本の風俗習慣」は衣食住に係る日常文化を代表するカルチャーであるとし、そして、大カテゴリー「日本の文化」は両者を統括する広義的な日本の文化とする。「日本の社会」は、「日本の家庭や教育」と「時事ニュース」から構成される。「日中文化における相違点」は、「風俗習慣における相違点」・「言語コミュニケーションにおける相違点」・「文化における相違点」から構成され、記述数が5つの大カテゴリーにおいて最も多いことから、日本語専攻大学生の多くに関心を示され、そして接触の中でよく話題として持ち出されることが判明した。そのうち、「風俗習慣における相違点」と「文化における相違点」との区別は、上記の文化に対する分類に従う。「日本の文化」・「日本の社会」・「日中文化における相違点」という3つの大カテゴリーは、日本に関する知識として纏められ、46個の記述のうち、合わせて31個も占めていることから、日本語専攻大学生が異文化接触を通して日本に関する知識を獲得しようとする意識の強いことが見て取れる。

「語学の学習」は、日本人教師と日本人留学生との接触の中でよく取り上げられる話題であり（【Table 3.13】）、学習者自身の日本語学習と日本人留学生の中国語学習に関する話のことを指している。「日常の生活と仕事」は、「互いの日常生活」と「相手の仕事内容」から構成されており、それらの情報を交換することで対人関係を構築していくのである。

接触の話題内容	大学		中国語教室	日本料理店	その他
	日本人教師	日本人留学生			
日本の文化	○	○	○	○	○

日本の社会				○	○
日中文化における 相違点	○	○	○	○	○
語学の学習	○	○			
日常の生活と仕事	○	○	○		○

【Table 3.13】 接触の場別接触の話題内容

上の【Table 3.13】は、記述によって「接触の場」のそれぞれで扱われる「接触の話題内容」をまとめたものであるが、「日本の文化」と「日中文化における相違点」に関する話題は、すべての「接触の場」で、触れられており、この2種類の話題が異文化接触の中で多く関心を示され、かつ相手に共感を持たれやすいのではないかという協力者の認識が働いているものと考えられる。また、「日常の生活と仕事」は、「日本料理店」においては触れられていないことが見られるが、これは学習者の、料理店の客との接触が短いものが多いためであると考えられる。

3.3 まとめ

本調査は中国大連市に位置している「A大学」と「B大学」における111名の日本語専攻大学生から協力を得、自由記述による調査を行い、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状を接触の経験・接触の持続状況・接触の対象、接触の場、接触期間、接触の主な内容から探究した。その結果を以下の3点に列挙する。

第一に、異文化接触の経験に関して、二大学ともに3割ぐらいの学習者が接触経験を持っており、異文化接触が多く日本語専攻大学生に利用されていることが明らかになった。大学別の接触経験者の比率を比較すると、「A大学」は「B大学」より高く、これは二大学の位置している環境と密接に関係している。学年別接触の経験者数を見ると、学年が上がるとともに接触経験者数も上がり、日本語能力の向上、それに伴う不安の軽減、異文化間コミュニケーション能力を鍛える需要の増大、さらに、日本人と接触できるネットワークの拡大などがそこに影響する要因であろうと考えられる。

第二に、異文化接触の持続に関して、経験者のうち、「開始」と「持続していない」の経験者より「持続している」の経験者のほうが多く、経験者の約半数を占めているが、「持続していない」学習者が33%を占めており、決して少なくはないと考えられる。大学別持続状況を見ると、「A大学」における「持続している」経験者も「開始」段階の経験者も「B大学」より多く、これは「A大学」においては安定的に利用できる接触の環境がある程度整っているからであると言える。学年別接触の持続状況を比較すると、2年生における「開始」する経験者数、4年生における「持続している」経験者数が各学年の経験者において最も多く、2年生の場合は、日本語能力の向上、それに伴う不安の軽減、日本語のアウト

プット欲求と関係するが、4年生の場合は、学習者が接触を持続させる能力をある程度備えており、そして、接触の持続的利用が自身にとって意義を持つことを認識し始めることと関係しているだろうと推測できる。

第三に、まず、日本語専攻大学生における「接触の対象」は、日本人の「駐在員」・「主婦」・「子ども」・「教師」・「留学生」・「客」・「その他」に分けられており、そのうち、「駐在員」・「留学生」と接触した経験を持っている学習者数が最も多く、大学別見ると、「A大学」の学習者は「駐在員」と最も多く接触しているが、「B大学」の学習者は「留学生」および「教師」と多く接触していることが明らかになった。

次に、「接触の場」は「大学」・「中国語教室」・「日本料理店」・「その他」に分けられているが、大学別から言えば、「A大学」の学習者は「中国語教室」と「日本料理店」での接触をよく利用するが、「B大学」の学習者は「大学」で日本人教師や留学生との接触をよく利用している。学年別から言えば、低学年段階での学習者における異文化接触は「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」に集中しているが、高学年段階になると「その他」の「接触の場」が利用され、「接触の場」が多様化しつつあり、学習者におけるネットワークの利用も個別化を見せ始めると考えられよう。

また、「接触期間」に関して、「接触の場」ごとに「接触期間」を見ると、「中国語教室」と「大学」での接触が安定的で、より長く利用できる一方、「日本料理店」での接触は、開始しやすい一面がありながら、長く続けられない面もある。そして、個別のネットワークを使って「その他」で開始された接触も長く続けられないのが判明した。「接触頻度」は、「接触の場」別にまとめてみると、「中国語教室」・「日本料理店」の場合は、学習者がアルバイトの形で接触を行うことがほとんどであり、就業時間が決まっているため、「接触頻度」が一定しているが、「大学」での接触は、日本人教師や留学生との間で行われており、時間が一定しておらず、より自由であると同時に頻度が低い側面もある。

さらに、「接触の主な内容」に「接触の方法・手段」と「接触の話題内容」が内包されている。「接触の方法・手段」は言語コミュニケーションがもっとも多く用いられ、それ以外では、その場に相応する具体的な行動も見られ、「日本料理店」での接触では、「挨拶語」で客に声をかけることが要求され、「大学」での接触では、日本人教師との外食、日本人留学生とのウインドウショッピングや映画鑑賞、大学が学習者と外国人教師・留学生とのコミュニケーションを支援するために開通したアプリケーションの利用、ウイチャットのよようなSNSの利用、サークル活動、交流会、語学学習の交換支援などが利用されている。日本語専攻大学生における日本人との「接触の話題内容」は、「日本の文化」・「日本の社会」・「日中文化における相違点」・「語学の学習」・「日常の生活と仕事」に及んでおり、そのうち、「日中文化における相違点」が最も多く関心を持たれ、学習者が接触を通して日本に関する知識を獲得しようとする意識が強いことが見て取れる。そして、「日本の文化」と「日中文化における相違点」に関する話題は、すべての「接触の場」で触れられており、この2種類の話題が異文化接触の中で多く関心を示され、かつ相手に共感を持たれやすいので

はないかという協力者の認識が働いているものと考えられる。

上記の日本語専攻大学生における異文化接触の現状をまとめた結果から以下の示唆が得られた。

まず、異文化接触に対してさらに踏み込む必要があると見られる。本調査において異文化接触が多く日本語専攻大学生に利用されており、そして、接触経験者のうち、持続している学習者が約半数を占めているが、持続していない学習者も少なくないことが明らかになった。しかし、持続している学習者がどうして持続しているか、持続していない学習者がどうして持続していないか、両者の間に何の差異があるか、それを探究する必要がある。

次に、学習者の異文化接触を支援するには日本語教師によるネットワークの構築手段・方法を提示する必要がある。本調査において日本語専攻大学生における自然な異文化接触¹⁹は大学の位置している環境、各校の国際交流政策に大きく影響されていることが明らかになった。「接触の対象」・「接触の場」が大学の位置している環境や国際交流政策に依存し、さらにその環境や政策に依存した「接触の対象」・「接触の場」によって「接触期間」・「接触頻度」がパターン化を見せており、周囲に日本人駐在員とその家族が生活している地域に位置している「A大学」の日本語専攻大学生が「中国語教室」「日本料理店」での接触を頻度高く利用しているが、そのような環境を有しない「B大学」の日本語専攻大学生が大学内のリソースを利用しかできない。大学の積極的国際交流政策によって「B大学」の日本語専攻大学生が日本人教師や留学生と接触できる。しかし、そのような環境的リソースや政策的リソースを有しない大学の日本語専攻大学生がどのように接触のチャンスが得られるかと考えざるを得ない。本調査ではインターネットの普及によって異文化接触の手段が多様化し、SNSなどの利用が接触チャンスの獲得に新たな可能性を示していることも判明し、これは環境や政策的リソースのない大学において日本語教師のほうからSNSなどの利用を学習者に提示する必要があると示唆している。

また、現在あるリソースが安定的に活用されるべきである。本調査において、日本語専攻大学生による「大学」での日本人教師・留学生との接触は「たまに」の頻度で行われていることが多いことが確認された。これは「大学」での異文化接触が十分に利用されていないと見て取れる。日本人教師・留学生という現在ある人的リソースをいかに安定的に利用するかが日本語教育、日本語教師に考えられるのが望ましい。

¹⁹ 「自然な異文化接触」とは日本語講座や日本語教師による教室内から人為的指導が為されておらず、学習者が自身のネットワークを利用して接触のチャンスを獲得して行う接触のことを指す。

第4章 中国日本語専攻大学生における異文化接触の実態に

対するインタビュー調査

4.1 調査の目的

第3章において中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状を静的に捉えてきた。しかし、それは外側からの視点にとどまっており、異文化接触の内側には踏み込んでいない。しかも、個々の異文化接触は、静止的なものとして捉えられている。しかし、実際の異文化接触は一つのプロセスであり、ダイナミックな存在であると考えなければならない。そのため、異文化接触の中に一步踏み込んで、日本語専攻大学生が一体どのように接触を進めているか、つまりその進行の実態がどうなっているのかを究明する必要がある。実は、これが本調査の目的の一つでもある。外側から見た接触の現状、一步踏み込んで見た接触の実態、その双方を明らかにすることによって、より全体的に中国日本語専攻大学生における異文化接触の様相を捉えられるのではないかと考えられる。

異文化接触の実態のリアリティーを捉えるためには、学習者から質的データを収集するのがもっとも適切であると考え、本章では、幅広いデータ収集に適している半構造化インタビュー法を選択し、これを活用して分析を行う。

4.2 M-GTA 研究方法の選択

異文化接触の実態を明らかにするために、本章の研究手法は、半構造化インタビュー法を利用することにした。しかし、インタビュー法はデータの収集方法であり、得られたデータに対してどのように分析するかということは、それとはまた別に問われる。本研究のこの部分では、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下、「M-GTA」と称する)」を採用することにした。

M-GTAは、木下(2003)で提唱された質的研究の分析方法であるが、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」の名の通り「グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTAと称する)」に修正を加えた技法である。GTAは、1960年代にアメリカの社会学者であるグレイザー(Glaser, Barney)とストラウス(Strauss, A. L.)によって開発された研究方法である。「グラウンデッド」は「grounded」で、「grounded on data(データに密着した)」を意味しており、「グラウンデッド・セオリー」は「grounded theory」で、GTAによって生成される理論のことである。

GTAには、4つに分化した形があり(木下2007:2)、それぞれは：“*The Discovery of Grounded*

Theory (データ対話型理論の発見)” (Glaser and Strauss 1967)の「オリジナル版」、『*Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Technique* (質的研究の基礎)』(Strauss and Corbin 1990)の「ストラウス・コービン版」、グレーザーが対抗出版した『*Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs. Forcing*』(Glaser 1992)とそれ以前に発表していた『*Theoretical Sensitivity*』(Glaser 1978)を合わせた「グレーザー版」、および木下の M-GTA、つまり「修正版」である。

以下、グラウンデッド・セオリーとはどんな理論なのか、GTA はどんな研究に適しているのかについて述べ、さらに M-GTA の主要特性を確認することで、M-GTA が本調査で取り組む異文化接触の実態研究に適した方法である理由を明らかにする。そのうち、グラウンデッド・セオリー、そして GTA に関する説明は、木下 (2003、2007) に従って記すこととする。

4.2.1 グラウンデッド・セオリーとはどんな理論か

グラウンデッド・セオリーとはどんな理論かについて、木下はまず、グラウンデッド・セオリーの理論特性の形で以下の 5 点から論じている (木下 2007 : 1、2003 : 25-30)。

- ①データに密着した分析から独自の概念を作って、それらを統合的に構成した説明力に優れた理論である。
- ②継続的比較分析法による質的研究で生成された理論である。
- ③人間と人間との直接的なやりとり、すなわち社会的相互作用に関係し、人間行動の予測と説明に有効であって、同時に研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力に優れた理論である。
- ④人間の行動、なにかんづく他者との相互作用の変化を説明でき、言わば動的説明理論である。
- ⑤実践的活用を促す理論である。

①に関して言えば、「概念」とはデータを解釈して得られる仮説的なもので、一定程度の現象の多様性を説明できるものであり、「理論」とは説明的な概念によって構成され、それ自体も説明的なものであるとともに、説明できる範囲が個別概念より広くかつ関連的である。概念も理論も、自然科学に範をおく用法とは本質的に異なり限定的なものであるが、限定的であることを積極的前提とする立場を取っている。そのため、GTA は理論が生成できるといっても、その理論とは普遍性を志向し広く一般化できる性質のものではなく、分析に用いたデータに関する限り真であるという限定つきのもとなる。しかし、限られたデータを緻密に分析しただけのチマチマした理論かというところではなく、上記に列挙している⑤と以下に述べる内容特性の 4 項目を介して開放可能性を有する。

②の「継続的比較分析法」とは、分析とデータ収集とを並行させ、理論的サンプリングを行いながら類似と対極の 2 方向でデータを比較検討し、その有無をデータで継続的に確

認していく分析方法である。「理論的サンプリング」とは、分析テーマに合わせて必要かつ十分にデータを集めるために、データ収集の対象を理論的に決めていく方法である。分析結果がまとまってデータとの確認がこれ以上必要なくなるまで分析を続けるが、このデータ確認が必要となくなる段階は「理論的飽和化」と表現される。

③についてまとめれば、グラウンデッド・セオリーが対象とするのは通常思われているよりは限定された狭い範囲であるため、グラウンデッド・セオリーは、限定性を明確に設定した上で、その範囲内に関しては人間の行動の説明と予測が十分に行える。そして、木下は、研究が取り上げた問い（何を明らかにしようとしたのか？）とそれに対する結果（何が分かったのか？）を評価に含めて総合的に判断すべきだという立場をとり、問いと結果によって社会的現実とつながり、それがあってはじめて研究は社会的活動として成り立つのであると主張する。

④は、グラウンデッド・セオリーでは、現実の人間の行動は決して静止しているわけではなく、常に多様な影響下で変化しているため、類似した社会状況における主要な変化を、関連付けて理解できるような理論の生成を重視する立場をとっていることを意味する。

⑤は、③と④に基づき、グラウンデッド・セオリーが人間行動の説明だけでなく予測にも有効であり、人間の行動の変化と多様性を一定程度説明でき、さらにその知識に基づいてこれからの社会的相互作用についても方向性が論じられるということである。さらに、グラウンデッド・セオリーは、理論内容のどの部分に働きかければ相手の行動がどう変化するかを予想できるので、実践的な活用に耐えうるということでもある。GTAは、研究する人間とは別に【応用者】を意識し、発表されたグラウンデッド・セオリーが応用されて、応用自体が理論の検証になると同時に、応用者が必要な修正を行うことで目的に適った活用ができることを重視する。

次に、グラウンデッド・セオリーの内容特性として4つの項目が挙げられている。すなわち、「現実との適合性 (fitness)」・「理解しやすさ (understanding)」・「一般性 (generality)」・「コントロール (control)」である (木下 2007 : 2)。この4項目に対する詳しい説明は、以下の通りである (木下 2003 : 30-34)。

- ①現実との適合性：研究対象とする具体的な領域や場面における日常的な現実には可能な限り当てはまらなくてはならない。
- ②理解しやすさ：研究対象の領域に関心を持ったり（ママ）、その領域や場面に日常的にいる人々にとって、提示された理論（ママ）は理解しやすいものでなくてはならない。
- ③一般性：グラウンデッド・セオリーは、テーマと対象に関して範囲を限定しているが、研究対象とされたところの日常的な状況は常に変化しているので、提示された理論にはそうした多様性に対応できるだけの一般性が求められる。応用者は、この特性があることで自分の状況において理論を応用することができることになる。
- ④コントロール：応用者が具体的な領域において自ら主体的に変化に対応したり、必要な変化を引き起こしているように、社会的相互作用やその状況をコントロールできなく

てはならない。すなわち、応用者の主体的な関与の余地が組み込まれた理論でなければならぬ。

4.2.2 GTA はどんな研究に適しているのか

GTA がどんな研究に適しているのかについては、まず、看護学やソーシャルワーク、教育などのヒューマンサービスの領域が挙げられる。この領域では、人間の社会的相互作用としてサービスが提供されるとともに、現実の問題となっていることが何であるかということが分かりやすく、実践的に研究結果を実践現場に戻していくということが可能である。もう一つは、研究対象としている現象がプロセス的な特性を持っている場合である。そして、木下（2007：3）は、人間と人間が一定の社会的状況下や条件下でやりとりをするヒューマンサービスにおいては、サービスを提供する側とそのサービスを受ける側という相互的關係が、何等かの形で始まって展開していき、その過程では所定の目的が達成されていたり、いかなかったりというように、現象そのものがプロセス的な性格をもっていると強調している。

以上のことから、GTA は、以下の二つの理由から本研究に適した研究方法であると言える。まず、本研究の取り扱っている異文化接触が文化的背景を異にする人々の間で対面的相互作用としてサービスが提供され、接触の両側が互いに影響し合っているということである。次に、本研究の研究対象である異文化接触は、接触の開始・継続の様相・効果と（不）持続からなる、動的でプロセス的な特性を持っているということである。

4.2.3 M-GTA の主要特性

木下は、グレーザーやストラウスらの GTA が、実際のデータの分析の仕方において独創的な考え方を示していることは評価しながらも、それらが研究方法として複雑になりすぎており、とくに肝心のコーディング技法の詳細が明確に示されてこなかったとして（2003：11）、GTA を実践しやすいように、かつ応用者が理解しやすいように改良できないかと考え、M-GTA を提唱した。ストラウス・コービン版、グレーザー版と比べて、木下の提唱した M-GTA は、以下の 7 項目の主要特性を持っている（木下 2003：44-45）。

- ① グラウンデッド・セオリーの理論特性 5 項目と内容特性 4 項目を満たすこと。
- ② データの切片化をしない。
- ③ データの範囲、分析テーマの設定、理論的飽和化の判断において方法論的限定を行うことで、分析過程を制御する。
- ④ データに密着した分析をするためのコーディング法を独自に開発した。概念を分析の最小単位とし、厳密なコーディングと深い解釈を同時成立させるために、分析ワークシートを作成して分析を進める。

⑤【研究する人間】の視点を重視する。

⑥面接型調査に有効に活用できる。

⑦解釈の多重的同時並行性を特徴とする。分析作業を段階分けせずに、例えば、データの解釈から概念を生成するときに、類似例や対極例を検討するだけでなく、同時に、その概念と関係するであろう未生成の他の概念をも検討する。推測的、包括的思考の同時並行により理論的サンプリングと継続的比較分析を実施しやすくしている。

このうち、②は修正版がそれまでの GTA と技法においてもっとも異なるところとして挙げられている。それについて、木下は、以下の議論をしている（木下 2003 :154-158）。GTA におけるデータの切片化は、グレーザーが質的データを使いながらも数量的な方法と同じ厳密さで分析し、それによってデータに基づいた理論を構築していくという問題意識を具体化する技法である。しかし、「切片化」は、データを一文ずつ、あるいはより厳密には一語、一文節といった形で細分化してその意味を検討する作業で解釈が拡散してしまううえに、切片化という相当に大変な作業を継続して行わざるを得ず、また、切片化したコードがどのように浮上し、飽和化していくのかという肝心なところが具体的に示されていない。さらに、データ重視の厳密な分析が重要であるが、そもそも何のためにその研究をしているのかという問題意識が棚上げにされている。M-GTA は、grounded on data の原則や分析の厳密さは重視するが、そのために切片化は行わず、分析をする研究者（【研究する人間】）を全面に出してその問題意識に忠実に、データを解釈していく。データを切片化するのではなく、データの中に表現されているコンテキストを重視し、そこに反映されている人間の認識、行為、感情、それらに関係している要因や条件などをデータに即して丁寧に検討し、概念を生成していくことを強調する。

③における「データの範囲」に関する限定について、片桐（2015 : 92）は、研究目的に合わせて現実的にデータ収集が可能である範囲を明確にし、その範囲内のデータであることを示すことが大切であると解釈している。「分析テーマの設定」に関して、木下（2007 : 5）は、研究テーマが比較的大きく、意義の点が強調され、そのままデータ分析のテーマになりにくい場合があるため、データに即して解釈が進められるためにテーマを絞りこみ、分析テーマを設定する重要性が出てくると論じる。また、データ分析の終了を象徴する、GTA の「理論的飽和化」、すなわち、継続的比較分析により分析を進めていった時に、データから新たに重要な概念が生成されなくなり、かつ、理論的サンプリングからも新たなデータを収集して確認したうえで、すべて問題点がなくなったと認定される時点の判断基準に関して、木下（2003 : 220-224）は、飽和化の判断は分析者が行うしかないのだが、確信をもってその判断を下すことは難しいし、データとの確認にしても完璧に行き届くことは無理であると論じる。それに対して、M-GTA は、2つの独自の方法で理論的飽和化を限定する。ひとつは、ワークシートの作成作業に基づき、個々の概念生成においてすでに小さな理論的飽和が成されているので、それによってやりやすくなった大きな判断をもって限定することである。もうひとつは、分析結果全体に対して二つの方向から理論的飽和化

を判断することである。一方は、データの範囲を限定するということであり、その限定は研究テーマから分析テーマへの絞り込みによる研究の目的や意義に基づいていなければならない。もう一方は、分析結果の完成度という立場から、結果のまとまりが論理的密度を持って成立し得るデータの範囲の調整を行うということである。これは、分析テーマとデータの範囲に関する限定とのセットで行う。

④については、後節「4.2.4」において詳しく説明する。⑤の【研究する人間】の視点を重視することに関しては、他の GTA と異なる点として、M-GTA は切片化をしないということが挙げられるが、それは分析する人間の持つ問題意識と文脈を重視するからである。また、M-GTA では、概念生成をするときに、データと概念の間に【研究する人間】が挟まっており、【研究する人間】が、データのある箇所を解釈してそれを説明できる概念を生成するが、これによって、オリジナル版やストラウス・コービン版に共通した課題、すなわち、データ本体を基底においてその上にコードを層化させながらまとめていくことによってデータからの分離があいまいになる点を避けることができる(木下 2003 :151-152)。

「4.2.2」において、本研究が社会的相互作用の研究であるという面を持つことと、研究対象自身がプロセス的特性を持っていることとで、その研究方法として GTA が適している理由を述べたが、本節においては、M-GTA がデータ処理の手順が明晰であり、操作しやすいという特徴があるということも確認された。特に、理論的飽和化に対する判断が明確であると同時に、判断に柔軟性を持つことができるというのは方法論としての特長があり、これが、本研究で M-GTA を採用することにした理由の一つである。

4.2.4 M-GTA の分析手順

M-GTA による分析の主なプロセスは、データ収集と概念生成を繰り返し、カテゴリーを生成し、概念とカテゴリーを洗練する手続きを進める中で、理論的飽和に達したら、そこで概念、カテゴリーの洗練を終了し、得られた概念とカテゴリーの関連から理論・モデルを立ち上げるというものである。M-GTA の詳しい分析全体の流れに関しては、木下 (2003) に従って記すこととする。

M-GTA は、オープン・コーディングと選択的コーディングの 2 種類のコーディングで分析を進める。それに入る前に、研究テーマによって分析焦点者を決める。そして、理論的サンプリングを通して分析焦点者から実際にインタビューする対象者を決めてインタビューを行う。そして、データ収集が終わってからデータ分析に入るのではなく、データ収集とデータ分析が並行して行われる。「分析焦点者」とは、インタビューの対象者を抽象化した集団のことである (片桐 2015 : 95)。

データ分析に関しては、まず、オープン・コーディングで、概念の生成を行う。M-GTA においてデータを解釈した結果は、すべて「概念」と呼び、これが分析の最小単位である。データと概念の距離はすべて一定であり、解釈によって生成されたすべての概念が常にデ

ータと直接対応関係の確認ができるようになっている。これにより coding & retrieval と grounded on data がもっとも徹底した形でとれる（木下 2003：150）。概念を生成する時、分析テーマに関連がありそうな箇所に着目し、そしてその箇所を分析焦点者の行為や認識に照らし合わせて解釈し、定義を行ったうえで概念を生成する。概念ごとにワークシートを作成し、ワークシートは、「概念名」・その「定義」・「具体例（バリエーション）」・「理論的メモ」の4つの欄からなる。概念生成を行う時、類似例だけでなく、対極例がないかどうかも見えていき、それらを比較検討での具体例としてワークシートに記入する。概念が生成されたら、抽象された「概念名」を付け、「定義」を行う。新たな概念が生成されるたびに「概念名」、「定義」、「具体例」の継続的比較分析を行う。このように、継続的比較分析によってデータがシステムティックに収集され、概念が生成される。また、データの解釈を試みた時のアイデアや疑問などは「理論的メモ」に記入する。

次に、選択的コーディングを行い、カテゴリーを生成する。M-GTA では、ひとつの概念を基点にそれと関係のあるもうひとつの概念を見出していく作業を繰り返す。2概念が関係づけられたら、それに関係している概念を考える。その時、カテゴリーは複数の概念の関係から浮上して、生成されるわけである。カテゴリーでは、検討した結果を、その都度理論的メモ・ノートに記入していく。

最終的に、概念が生成される時にそれぞれのワークシートに記入された理論的メモ欄と理論的メモ・ノートに基づいて、概念とカテゴリーをさらに精緻化し、理論的飽和に達したら、概念とカテゴリーの洗練を終了し、最終的に得られた概念とカテゴリーの関係を結果図およびストーリーラインで表す。

4.3 調査の実施

本調査は、異文化接触経験を持っている中国の日本語専攻大学生を分析焦点者とする。異文化接触経験を持っているといっても、一般的に接触を持続している場合と中断ないしは解消して持続していない場合とに分けられると考えられるが、本研究は、第3章において、実際の異文化接触においては、「持続している」と「持続していない」という2種の状況以外に、開始したばかりで、接触の経験が時間的に短く、持続していると言いにくい「開始」の段階もあると論じた。そして、この3種の状況に対して時間的限定を行い、調査の時点の2か月以内に開始した接触を「開始」、接触の経験はあったが、調査の時点まで2か月以上も行っていないケースを「持続していない」と表記するが、「持続している」は2つの場合に分けられ、一つは時間上2か月以上接触が継続し、そして調査の時点にも行なわれているケース、もう一つは調査の時点では行なわれていないが、前回の接触の終了が調査の時点まで2か月经っていないケースとした。本調査は、中国日本語専攻大学生における異文化接触の実態をより深く掘り下げるために、異文化接触自体が「開始」の段階に

ある大学生を調査協力者としなかった²⁰。本調査は、第3章に取り扱われている3種4ケースのうち、「開始」以外の2種3ケースの場合を取り扱うとする。つまり、分析焦点者の異文化接触経験者は、「持続している」学習者と「持続していない」学習者が含まれているということである。

調査の協力校としては、①日本語専攻大学生が日本人と異文化接触できる環境を持ち、できれば異文化接触の機会が多い学校で、②異文化接触の場と対象が種別的に多く、③筆者がアクセスできる、という3つの基準から、中国遼寧省大連市にある4校（「A大学」、「C大学」、「D大学」、「E大学」）を選択した。また、この4校に関して、本研究は、第3章において「A大学」、「B大学」における日本語専攻大学生の日本人との異文化接触の現状に関して自由記述による調査を行ったが、第4章において行われるインタビュー調査に関して、「A大学」、「B大学」と場所が異なる大学の学習者の状況を把握する意図もあって、2校のうち接触の場と対象が種別的により多い「A大学」を残し、「B大学」においてはインタビュー調査向けの協力者を募集しなかった。

「A大学」、「C大学」、「D大学」、「E大学」4校については、それぞれ以下のように紹介する。

「A大学」は、大連市の中心部から離れた所に位置しているが、周りに日系の企業や工場が多く、また、単身赴任や家族連れで滞在する日本人が生活している地域であるため、日本語専攻大学生にとって異文化接触をするのに便利な場所にあると言える。また、「A大学」の日本語学部には、日本人教師が常時2、3名おり、国際交流プログラムで日本人留学生も来ている。ようするに、「A大学」における日本語専攻大学生は、多種多様な接触機会が得られると言える。

「C大学」は、大連市のより中心的なところに位置し、短期や長期で来ている日本人の留学生がより多い。「C大学」における日本語専攻大学生は、日本語コーナーや部活の形で留学生と交流する。

「D大学」も、大連市の中心部に位置している。同大学は、国家レベルの重点大学²¹であり、日本人の留学生も来ているが、日本語専攻大学生は、留学生との接触をあまり利用していない。一方、「D大学」の日本語専攻大学生は、大学高学年段階で、日系企業でインターンシップのチャンスが得られる²²。

「E大学」も、大連市の中心部に位置しており、国家レベルの重点大学である。この大学は国際交流に力を入れているため、日本語学部が積極的に大学の国際交流政策を利用して、日本の大学と多くの連携を取っている。そのため、長期留学や短期留学の形で来てい

²⁰ ただし、接触対象によっては「開始」の段階にあるが、異文化接触自体が「持続している」状況は取り扱う。

²¹ 中国（香港・マカオ地区を除く）の大学のうち、権威ある大学であると政府が認定し、予算の優先配分などの支援を行うものとして選定された大学のことである。

²² D大学において、日本語学部が日系企業と連携し、学生が4年生時、一定期間日系企業でインターンシップすることができるとなっている。

る日本人の留学生が多い。とくに、短期的交換交流で来ている日本人の留学生が中国に滞在している間は、「E 大学」の日本語専攻大学生と集団の形で交流活動が盛んに行われている。また、E 大学には、日本人教師が常時 5 名から 10 名ほどいるため、日本語専攻大学生が日本人教師と接触するチャンスも多いと考えられる。

調査の際、「A 大学」に対しては、縁故を利用して、学長に研究協力依頼を行い、承諾を得た。その後、日本語学部の学部長にも協力を得、筆者の選定基準によって調査協力者を推薦してもらった。その後、個々の調査協力者に依頼を行った。調査協力依頼は、まず口頭で依頼し、その後書面にて承諾を得た上で、インタビューを実施した。

C 大学、D 大学、E 大学には、3 校ともに筆者の大学と大学院時代の先輩や元のクラスメートが勤務している。その縁故を利用して、各大学に協力依頼を行い、承諾を得た。次に、筆者の先輩や元クラスメートに依頼して、筆者の選定基準によって調査協力者を推薦してもらった。調査協力者には、書面にてそれぞれに承諾を得た上で、インタビューを実施した。「インタビュー調査協力者一覧表」は、【Table 4.1】の通りである。

番号	性別	大学	学年	接触の場・対象	接触期間 ²³	接触の状態
1	女	A 校	4 年生	中国語教室・駐在員	1 年半	持続
2	女	A 校	4 年生	中国語教室・駐在員	半年	持続
				大学・留学生	1 年半	
				大学・教師	1 年半	
3	女	A 校	4 年生	中国語教室・ 駐在員、主婦、子ども	2 年	持続
4	女	A 校	3 年生	日本料理店・客	2 か月	持続
				中国語教室・駐在員	1 年半	
5	男	A 校	4 年生	日本料理店・駐在員	2 か月	持続
				大学・教師	たまに	
				中国語教室・駐在員	1 年半	
6	女	A 校	4 年生	中国語教室・駐在員	1 年半	持続
7	女	A 校	3 年生	日本料理店・客	1 か月	持続していない

²³ 「接触期間」に関して、接触の場や対象によって協力者が具体的な接触期間をはっきり覚えていない場合、開始した学年の「上半期」か「下半期」か、あるいは、合わせて「何年間」か「何年半」かというように回答したことがある。筆者は協力者が「開始」「持続している」「持続していない」においてどの段階にいるかを確認した後に、具体的接触期間をはっきり覚えていない協力者に対して、その言い方を尊重し、大体の「接触期間」を記録することにした。また、接触の場と接触の対象が種別的に同じ場合、接触の場において時間的に最も長い接触経験の接触期間を記録することにした。例えば大学で異なる日本人留学生と接触した経験がある場合、「インタビュー調査協力者一覧表」に統計する時、最も長く付き合った留学生との「接触期間」を記すことにした。

8	女	A校	2年生	日本料理店・客	3か月	持続していない
9	女	A校	3年生	中国語教室・駐在員、主婦	1年半	持続
				大学・教師	1年	
10	男	A校	2年生	大学・教師	1年	持続
				中国語教室・駐在員	1年半	
				SNS・駐在員	たまに	
11	男	A校	2年生	大学・教師	1年半	持続
				大学・留学生	1年半	
12	男	C校	2年生	大学・教師	少し	持続していない
				大学・留学生	少し	
13	女	C校	2年生	大学・教師	半年	持続していない
				大学・留学生	たまに	
14	女	A校	3年生	大学・教師	2か月集中 その後少し	持続していない
15	女	A校	3年生	SNS・日本にいる日本人	1年半	持続
16	男	D校	4年生	インターンシップ・駐在員	少し	持続していない
				大学・留学生	少し	
17	女	E校	4年生	中国語教室・駐在員	2年間	持続
18	女	A校	4年生	中国語教室・駐在員	2年間	持続
19	女	A校	4年生	中国語教室・駐在員	2年間	持続
20	女	A校	1年生	SNS・日本にいる日本人	少し	持続していない

【Table 4.1】 インタビュー調査協力者一覧表

インタビュー調査は、2017年9～10月の間に行った。調査する時は、4校の協力を得て、それぞれの大学の教室を利用することができた。筆者は、上記の協力者に対し、1人あたり45分～1時間半程度のインタビューを実施した。なお、インタビュー協力者は、インタビュアーである筆者が日本語専攻の教師であることを理解している。

インタビューにあたっては、研究の目的、中途辞退の自由、データは研究目的でしか使用しないこと、引用にあたっては協力者個人が特定できないように配慮すること、個人情報やデータが記された資料は厳重に保管することなどを丁寧に説明した。その上で予め用意したインタビューの概要に答えてもらった。主な質問項目は、以下の5点である。

①日本人との異文化接触を持続しているか。持続しているのなら、なぜ持続しているか。

持続していないのなら、原因は何か。

②今までの日本人との異文化接触はどのように行ったか。

③異文化接触の中で、困難があったか。あればどのような困難か、さらに解決したか。

解決した場合はどのように解決したか/解決しなかった場合、どうしてか。

④日本人と異文化接触する前後、自分に何の変化があったか。

⑤日本人と異文化接触する時、何か足りないところがあると思うか。

インタビューの中では、回答の内容を深めるために、必要に応じて詳細な説明を求めることがあった。また、協力者自身はその項目について多く話したい時は、できれば中断しないで語ってもらうようにした。インタビューを行う場所は、周囲の人に内容を聞かれることなく落ち着いて話せる場所を、協力者との合意によって選定した。インタビューの内容は、協力者の承諾を得て携帯電話の録音機能を利用して録音した。インタビューは中国語で行い、得られたデータに対する文字化や日本語訳は、すべて筆者が行った。

第5章 中国日本語専攻大学生における異文化接触の

プロセス

第4章では、本研究において中国日本語専攻大学生における異文化接触の実態を分析するにあたり、M-GTA という質的研究方法を選択する理由を述べた上で、4大学における20名の日本語専攻大学生を調査協力者として、半構造化インタビュー調査を行い、M-GTAによるデータの収集を実施したことを示した。本章においては、調査から得たインタビューデータに対して、分析のテーマを「中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス」とし、その分析結果を報告し、それをもって中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに対する記述とする。

5.1 分析結果の概要

本調査は、中国における日本語専攻大学生の異文化接触のプロセスに関して、M-GTAによってデータの分析を行った結果、35の概念（〈 〉で表示する）を生成し、そしてこれらの概念を5つのカテゴリー（【 】で表示する）および5つのサブカテゴリー（[]で表示する）にまとめることができた。【Table 5.1】は、「本調査で生成された概念とその定義一覧表」である。

カテゴリー	
サブカテゴリー	
概念	定義
動機づけ	
ツールとしての日本語のアウトプット欲求	異文化接触で日本語をツールとして利用して日本語能力を向上させようとする欲求のこと。
ツールとしての日本語の活用による目的達成	日本語を、目的を達成するためのツールとして利用すること。目的の主な内容は、視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などである。
他者による接触意欲への刺激	同級生の異文化接触の開始や効果に接触意欲を刺激、触発されること。
日本人の友人獲得の欲求	異文化接触を通して、日本人の友人を作って交流したいとい

う欲求。

チャンスの獲得

人的リソースの利用

教師や友人から接触の機会を紹介してもらうことや、日本人教師・日本人留学生・偶然遭遇した日本人などとの接触チャンスを利用すること。

情報的リソースの利用

大学の国際交流活動、部活、日本語コーナー、インターンシップなどのような学校や学部レベルで行われる日本人との接触活動の情報、および、インターネット、日本人向けの雑誌（ホテルやレストランに無料で配布され、日本人に中国での生活情報を提供するもの）などから得た情報を利用すること。

困難

コミュニケーションの困難

言語技能の話す能力、聞く能力の未発達による伝達不全に陥る困難のことであり、日本語能力に自信のないことや正しい日本語への固執による不安など教室内の日本語学習からの影響で困難を感じるものの他に、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇して伝達不全に陥る問題も含まれる。

対人関係の困難

異文化接触の対人関係の不安

異なる文化背景を持つ相手との対人関係に不安や緊張を覚えること。

接触場面における話題の選択・継続に難航

接触において、どのような話題が適切か、どのように話題を継続させるかに困難を感じること。

対等性の欠如による接触の困難

接触の場の性質・状況や相手が異性であること、および、相手との間で年齢・社会履歴・力関係において違いが大きいことなどから、相手と対等性を感じることができず、対人関係の構築に困難を感じること。

価値づけによる消極的な接触姿勢

異文化接触と比べて、他にもっと価値を認めることがあるため、異文化接触に対する態度が消極的になること。

異文化による摩擦

接触上の文化的差異

日中両国における価値観の相違や習慣の文化差によって困難や葛藤を覚えること。

固定観念による文化摩擦

相手の、中国に対する固定観念による言動に苛立ちを感じることに、または自身の日本に対する固定観念によって異文化接触が阻害されること。

安定的な場の喪失

接触条件の不備

接触の相手がいなくなったり、接触の場がなくなったりしたため、安定的に接触できる条件が整わなくなり、異文化接触の維持が難しくなること。

日本語の活用についての期待と実際とのギャップ

日本語の活用を期待していたのに対して、接触の場では日本語が期待ほど活用できず、かつそのわりに時間などのコストが高いなどのことも生起するため、期待と実際の間ギャップが生じること。

学業重視による接触の一時的放棄

教室内での日本語学習、将来に備えての日本語以外の知識の習得などを意識し、時間的バランスが取れないと感じたとき、学業や知識の習得を優先的に考え、異文化接触を一時的に放棄すること。

努力と工夫

意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫

意思疎通をはかるために、言語・非言語に関わる戦略者を利用するなどして、鋭意努力すること。

対人関係の工夫

対人関係の構築への努力

接触相手とよりよい対人関係を構築するために、責任感・誠意・共感・積極的、柔軟、寛容な態度の認知面、および、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇の行動面の双方から努力すること。

話題の選択・継続に関する工夫

適切な話題を探索すること、および、話題をどのように継続するかを工夫すること。

異文化間摩擦への対応

異文化間知識の活用

教室内外で学んだ日本の社会通念などの知識を活用し、日中間の文化的差異を理解し、これに対応すること。

異文化接触の摩擦への回避

日中間の歴史や政治などのようなデリケートな話題、相手の固定観念による中国・中国人に対する認識、日中両国の文化的差異に、回避や判断保留で摩擦を避けること。

文化的差異についての積極的な意見交換

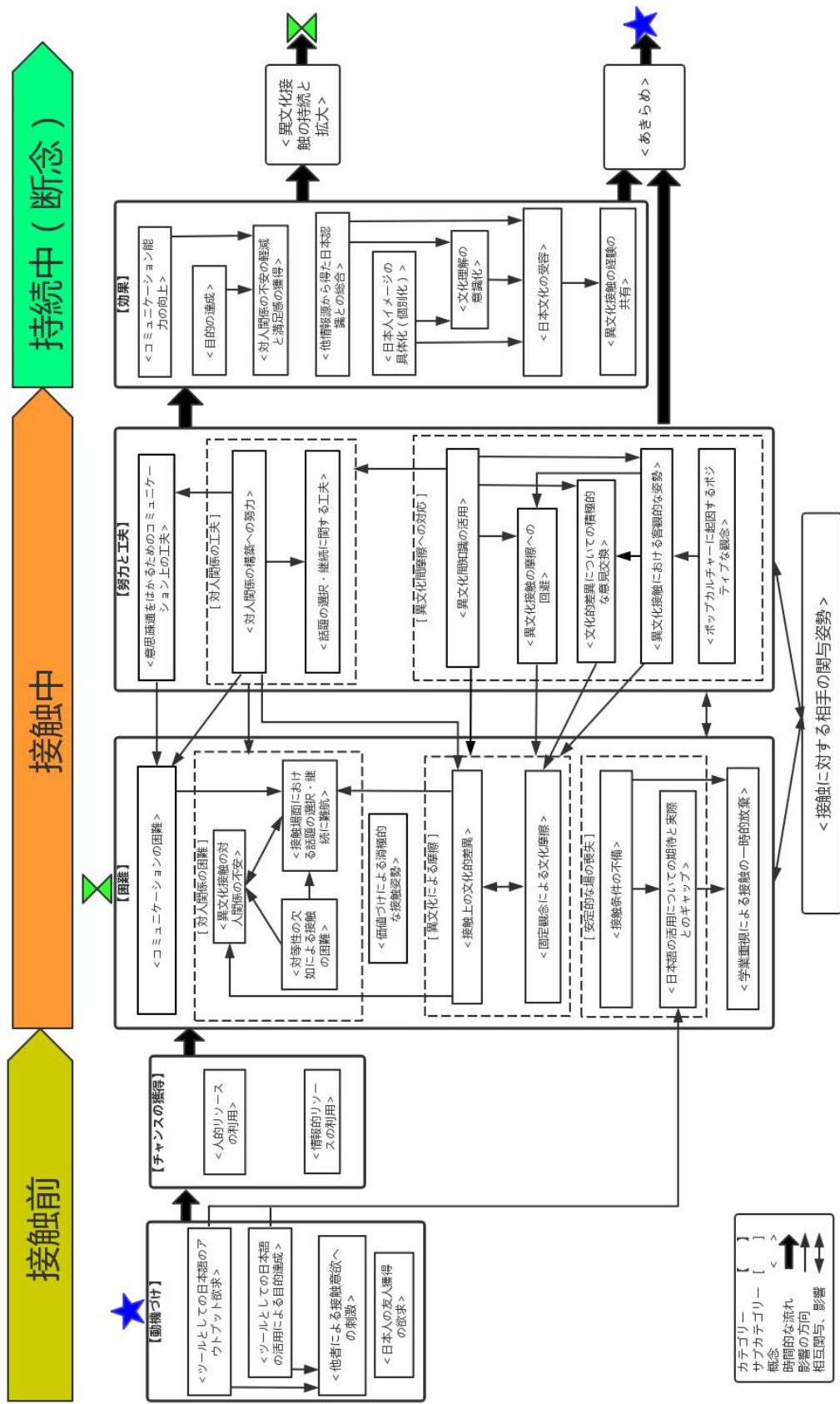
誤解を解消し、自分の文化を理解してもらうために、文化についての説明を行って、相手と積極的な意見交換をすること。

異文化接触における客観的な姿勢

接触中、日本・日本文化に対して寛容で尊重的な態度・知的な好奇心を持って、客観的に認識し、理解すること、また、中国・中国文化に対して、批判的な意識を持って客観的に認識し、理解することを内包する。

ポップカルチャーに起因するポジティブな観念	日本のポップカルチャーに興味を持ち、ポップカルチャーの利用によって日本・日本人に対してポジティブな観念を持つこと。
接触に対する相手の関与姿勢	接触に対して相手の取っている積極的な、あるいは消極的な態度のこと。
効果	
コミュニケーション能力の向上	異文化接触を通して、日本語による話す能力・聞く能力・コミュニケーションストラテジー能力などが向上すること、及びそれによって日本語能力に自信のないことからくる不安が緩和されること。
目的の達成	視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などの目的が達成すること。
対人関係の不安の軽減と満足感の獲得	接触経験や日本人との対人関係構築によって発話不安や対人関係不安を軽減し、達成感や楽しい思いなどのような情意的満足感を獲得すること。
他情報源から得た日本認識との総合	異文化接触から得た日本認識が、日本語教師・日本語学習・マスメディア（日本と中国双方のマスメディア）・ポップカルチャーなどの情報源から得たものと総合し、日本や日本人への認識が深化すること。
日本人イメージの具体化（個別化）	日本人に対するイメージが全体的・抽象的から具体的・個別になること。
文化理解の意識化	他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識・異文化理解一般に対する認識などを意識化すること。
日本文化の受容	日本文化が好きになることや、日本の社会通念を受け入れることのように、日本文化に受容的な態度をとること。
異文化接触の経験の共有	肯定的な接触経験を家族や友人と共有することで、家族や友人の日本観によい影響を与えること。
異文化接触の持続と拡大	対人関係の形成、ツールとしての日本語の活用による目的の達成、接触チャンスの再獲得などの形で、異文化接触を持続し、拡大すること。
あきらめ	異文化接触を断念すること。

【Table 5.1】 本調査で生成された概念とその定義一覧表



【Figure 5.1】 中国日本語専攻大学生における異文化接触プロセスの結果図

そして、【Figure 5.1】は、中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスを示した結果図である。この図によって、日本語専攻大学生における異文化接触は、接触前・接触中・持続中（断念）の時系列に沿って展開されていくプロセスであることが判明した。以下に、そのプロセスのストーリーラインを述べる。

まずは、異文化接触の【動機づけ】であるが、これには、＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞・＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞・＜他者による接触意欲への刺激＞・＜日本人の友人獲得の欲求＞が挙げられる。【動機づけ】られた専攻大学生は、ネットワークを利用して【チャンスの獲得】をしてはじめて実際の接触が開始する。接触のチャンスを獲得する方法には、＜人的リソースの利用＞と＜情報的リソースの利用＞があげられる。接触中は、日本語専攻大学生は、【困難】に遭遇しつつも、【努力と工夫】を通してそれらに対応している。異文化接触には【困難】が多かれ少なかれ伴うため、日本語専攻大学生が接触を持続させようとするれば、【困難】を乗り越えるための【努力と工夫】が必要なのである。【困難】には、＜コミュニケーションの困難＞・＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞・＜価値づけによる消極的な接触姿勢＞・＜接触上の文化的差異＞・＜固定観念による文化摩擦＞・＜接触条件の不備＞・＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞・＜学業重視による接触の一時的放棄＞が内包されている。そのうち、＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞はサブカテゴリー「対人関係の困難」に、＜接触上の文化的差異＞・＜固定観念による文化摩擦＞はサブカテゴリー「異文化による摩擦」に、＜接触条件の不備＞・＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞はサブカテゴリー「安定的な場の喪失」にまとめられる。一方、【努力と工夫】には、＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞・＜対人関係の構築への努力＞・＜話題の選択・継続に関する工夫＞・＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞・＜異文化接触における客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞が内包される。そのうち＜対人関係の構築への努力＞・＜話題の選択・継続に関する工夫＞は、サブカテゴリー「対人関係の工夫」に、＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞・＜異文化接触における客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞はサブカテゴリー「異文化間摩擦への対応」にまとめられる。しかし、異文化接触は接触両側の相互作用によって成り立つものであるため、接触中は、＜接触に対する相手の関与姿勢＞も関わり、学習者の直面している【困難】を増幅/低減させるか、また【努力と工夫】を促進させるか否かなどのように作用する。ようするに、日本語専攻大学生が【困難】と【努力と工夫】を経験している一方で、そこに＜接触に対する相手の関与姿勢＞も関わってくるため、この3者が、接触中には相互に作用するのである。その結果、異文化接触の【効果】が現れる。これらの「効果」として、＜コミュニケーション能力の向上＞・＜

目的の達成>・<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>・<他情報源から得た日本認識との総合>・<日本人イメージの具体化（個別化）>・<文化理解の意識化>・<日本文化の受容>・<異文化接触の経験の共有>が挙げられる。しかし、【効果】が顕在化されていないときは、【困難】に挫折して<あきらめ>に陥ることもあり、また、【効果】が徐々に現れた後で、【努力と工夫】をしていても【困難】が解決できず、<あきらめ>てしまうこともある。<あきらめ>に陥った後、異文化接触を回復する場合、【動機づけ】から始まるプロセスが再度経過すると推測できる。他方、接触の【効果】が現れ、その【効果】の促進作用で、<異文化接触の持続と拡大>を果たしていく例も見られる。しかし、異文化接触のプロセスは、<異文化接触の持続と拡大>をもって終結するのではなく、接触の持続中、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>・【効果】からなる過程がまた繰り返される。しかし、接触の経験が蓄積されていくとともに、持続中の接触の質も高くなると予測されるため、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>の3つと【効果】がスパイラルな形で高まっていくと見られる。

以下、カテゴリごとに概念に対して具体例をあげながら分析を行っていく。インタビューは中国語で行ったため、具体例を本論に引用する時には、中国語のまま使用するが、その下に筆者の日本語訳を（ ）に入れて付けることにした。具体例内の〔 〕は筆者の補足、[I:]は筆者の発言を意味する。分析の内容を端的に反映できると思われるデータに下線を引いて示す。また、協力者の中国語による語りの中に日本語を交えた場合があるが、本論に引用する時はそのまま残すこととした。なお、匿名化のため、個人を特定できるような表現や用語がある場合、発言者は「No.0」とした。

5.2 接触前の状況

異文化接触に対して、日本語専攻大学生はまず【動機づけ】られ、次に【チャンスの獲得】を経て、接触を開始する。

5.2.1 動機づけ

日本語専攻大学生による接触前の語りを分析した結果、4つの概念<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>・<ツールとしての日本語の活用による目的達成>・<他者による接触意欲への刺激>・<日本人の友人獲得の欲求>を生成し、これらを1つのカテゴリ【動機づけ】にまとめた。

5.2.1.1 ツールとしての日本語のアウトプット欲求

【動機づけ】において、<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>がもっとも豊富

に語られ、その【動機づけ】が日本語専攻大学生の多くに持たれていることが判明した。そもそも、<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>とは、異文化接触で日本語をツールとして利用して日本語能力を向上させようとする欲求のことである。

后来还是觉得，嗯，既然想把这个语言作为一个以后长时间学的那种技能学下去，就是考试是一方面吧，还是应该其他的嗯，像是口语呀，交流呀，日常会话这种的，如何就是地道地表达日语，这些都挺重要的。毕竟可能你考得高，书本上的内容都会了，说不出来还是挺觉得挺不好意思的！那种困有的时候也挺多的。(No.1-2)

(外国語を技能としてこれから長く学んでいこうと思っているものだから、試験はその一側面でしかなくて、アウトプットや、コミュニケーション、日常会話などのような日本語らしい日本語を使うことがやはり重要ですね。試験の点数が高くても、教科書の内容ができて、話せなければちょっと恥ずかしいですね。そういう困ったことが多いです。)

この語りから、日本語専攻大学生には、異文化接触を通して、コミュニケーションや、日本語らしい日本語を話したいという意欲のあることが見受けられる。

因为我觉得就是比如说咱们大三下学期没有课了，就大家肯定不能像老师看着你那个时候，每天都读课文啊，然后每天都说日语啊，每天都听日语，就是没有那个氛围了。然后还有就是我自制能力可能也不是太强，所以说我就是通过这个兼职，让我有机会每天可以说每天可以听，所以我觉得也是给我创造了一个学习的环境。(No.2-6)

(私たちは三年生の後半で授業がなくなって、みんなは先生がいる時と同じように教科書を読んだり、毎日日本語を話したり、聞いたりすることができなくなって、つまりそういう雰囲気がなくなっちゃうんですよ。そうすると、私、あまり自律的な人ではないので、このアルバイトを通して、毎日話したり、聞いたりすることならできると思うんです。だから、私にとってはこのアルバイトで学習環境がまた作られたんだと思います。)

高学年段階に入ると、日本語授業の数が少なくなり、教室内での学習を中心にやってきた日本語専攻大学生は、学習の雰囲気がなくなることによって不安を感じ、新しい学習環境を作るために、異文化接触を考えつくのである。これは、高学年段階の日本語専攻大学生によく見られる傾向であるが、そこに日本語能力を高めるというもっとも基本的な目的が働いていることが伺われる。その目的のもとで、教室内での日本語学習と教室外での異文化接触が手段として利用される。そのため、教室内での学習環境が不備となった場合、教室外での異文化接触が選択肢として考えられるようになる。

然后还有一点就是如果你不去交流不去说，就像我，你看谁平时都知道在早上说“おはよう”，中午说“こんにちは”，晚上说“こんばんは”。我和日本人见面明明是早上却说“こん

ばんは”！你就发现如果你不去实践的话还是不行。 (No.2-6)

(もう一つ、もしコミュニケーションやアウトプットをしなければ、例えば、私の場合、だれでも朝は「おはよう」、昼は「こんにちは」、夜は「こんばんは」と言うのと分かっていても、日本人に会った時に、朝なのに、「こんばんは」と言っちゃいました！やはり実践しなければだめだっていうことですよね。)

教室内における日本語の学習ができて、実際の異文化接触となると緊張や不安で間違えてしまうことになりかねないため、日本語をアウトプットし、実践する必要があることが語られている。また、アウトプットの経験を積み重ねれば、緊張や不安を軽減させることができるという認識がなされていることも判明した。

因为平时说的话没有人就是跟谁说，就感觉如果跟同学说，也是说那些基本的。嗯，跟老师说？也没有吧。[I:就是为什么不愿意跟老师讲呢？]跟老师讲有点害羞吧。[I:跟同学讲呢？]没什么可讲的。[I:哦，但是用中国话讲的话，还有好多话题的吧？]对对对，但是可能大家就是用日语聊天感觉好做作啊。因为没有人就是说我们直接拿日语聊天啊，不过我觉得其实用日语聊也挺好的，但是大家的日语水平都那样，聊的就是也都是没戏。 (No.3-3)

(普段誰と喋れますか。クラスメートと日本語で喋れば、基本的なことしか話せません。で、先生と話しますか。それも、ないでしょうね。[I:どうして先生とは話したくないんですか。]先生と話すのは、ちょっと恥ずかしいかな。[I:クラスメートと話したら？]話す内容がないですよ。[I:でも、中国語で話したら、話題が多いでしょう。]そうそうそう。でも、クラスメートと日本語で喋るのっておかしいじゃないですか。誰からも日本語で話しましょうって言わないんですよ。私は日本語で実用的な会話をするのもいいと思います。ただ、みんな日本語のレベルが大体同じですから、話しても何にもなりません。)

話す相手がいないことで困っていることが語られている類似例であるが、そこから日本語をアウトプットすることへの欲求が見られる。日本語教師とでは恥ずかしく、クラスメートとではレベルが同じであるため、能力が上がらないし、わざわざ日本語で話し合うのもおかしい。話すチャンスを作ろうと思っても、なかなかそれができずに悩んでいる日本語専攻大学生の姿が見られる。話すチャンスを積極的に作ろうとすることから日本語をアウトプットする意欲が伺える。

学外语嘛，就是我们最后是要跟外国人说话的，然后你不只是要学语言吧，你要学他的各个方面，他是怎么想的，他是怎么认为的，就这方面，跟在说话过程中，我觉得都能得到体现，然后我们，嗯，学日语嘛，怎么说最后不是进日企啊，要不然可能会去日本。现在我觉得就是应该做好这些准备。然后跨文化交流吧，就这也是外语学习者一个必备的能力吧。我觉得这是。如果你不知道交流，都不知道怎么去交流，怎么去跟外国人打交道的話，那这个

就算你那个外语学得有多好，你也是不行的呀，所以现在找日本人说话呀，也不算刻意，就是去找打工啊，那样也是想现在就开始锻炼这种能力吧。(No.9-9,10)

(外国語学習だから、結局外国人と話さなければなりませんよね。それから、言語だけじゃありません。その多くの側面を学ばなければなりません。相手がどう考えているとか、どう認識しているとか、そういうことって、コミュニケーションの中に反映されます。そして、私たち、うん、日本語を学習しているんだから、なんて言うか、最後は日系企業に入るか、そうでなかったら、日本に行くとか。今からこういうことの準備をすべきだと思います。また、異文化間コミュニケーションも外国語学習者の持つべき能力です。私はそう思っています。もしコミュニケーションが分からず、どのようにコミュニケーションすればいいかがわからず、そしてどのように外国人と付き合えばいいかを知らなければ、外国語の学習がいくらできてもやはりだめでしょう。だから、今、日本人とコミュニケーションをしようとしているんです。別に無理ではないですよ。アルバイトをしに行けばいいんです。そうやって、今からそのコミュニケーション能力を鍛え始めたいですからですね。)

このように、日本語専攻大学生においては、日本語学習者として日本人とコミュニケーションしなければならぬという意識を持っていることが分かる。それは、将来日系の企業に入ったり、日本に行ったりする場合、日本人と接触することは避けられず、その準備として大学の段階において日本語をアウトプットして、コミュニケーション能力を鍛える必要があると認識していることとして現れる。

大二的时候就觉着自己是这个专业，然后，但是如果说不出去，就觉着跟别人交流，就是说我是日语专业，我会语法，但是我不会说就感觉好丢人，然后就觉着，嗯，还是去练。(No.13-2)

(二年生の時、すでにこの専攻は話せなければだめだと思うようになりました。人とコミュニケーションする時、自分が日本語専攻で、文法はできるが、話せなければ恥ずかしいと思います。うん、やっぱり練習するしかないと思います。)

我觉得就是一直都是为了自己，就是真的是能，就是不说出去自己是这个专业的，不让别人就是觉得很害羞的那种，就是能特别堂堂正正，说我就是一个专业的学生，说出来就是和别人不一样。(No.13-4)

(私はずっとこう思っているんです。つまり自分がこの専攻の者だって、こう言っても恥ずかしくないようにと。専攻大学生だから、他の人とは違うと自分で正々堂々と言えるようにしたいです。)

さらに、上記の語りから、日本語専攻大学生は、「専攻大学生」に相応の日本語能力に関する評価基準を自分の中に持っており、それが日本語をよく話せるということであること

が分かった。よく話せれば、正々堂々と「専攻大学生」と自己評価できるが、良く話せなければ恥ずかしいというように、話す能力で「専攻大学生」を評価する認識が日本語専攻大学生にあることが判明した。それが原因となって、異文化接触を通して日本語を話す能力を鍛えることが考えられているのではないかと推測できる。

このように、日本語専攻大学生における日本語をアウトプットする欲求は、日本語能力の向上を目的とした多様な考えに基づいており、そして、その結果、基本的に日本語をそのためのツールとして捉えていることが明らかになった。

5.2.1.2 ツールとしての日本語の活用による目的達成

<ツールとしての日本語の活用による目的達成>とは、日本語を、目的を達成するためのツールとして利用することを指しているが、目的の主な内容は、視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などである。

因为我觉得作为一个大学生的话，嗯，不应该只在学校里，它是一个过渡期，然后，嗯，还是应该多接触一些别的東西。(No.4-8)

(大学生をしているんだったら、ずっと大学の中にいるわけには行きません。大学は過渡期に過ぎず、これから、うん、やはり多くの別のことに触れなければなりません。)

上記の語りから、日本語専攻大学生は、大学生として学校内の学習にのみ満足してはならず、視野を拡大しなければならないと認識していることが明らかになる。その認識のもとで、日本人との接触も考えられるようになったものと見られる。

觉得自己既然学了这个东西，然后又想接触社会，那么不如利用自己的专业去找相关的东西。嗯，然后就这样一点一点积累起来，然后你能得到的机会也越来越多。(No.4-8)

(これ[日本語]を学習している以上[使わなければなりません]。そして社会とも接触したいので、自分の専攻を生かして何かをしたほうがいいと思います。うん、それで少しずつ積み重ねていけば、チャンスもどんどん増えてくるだろうと思います。)

日本語専攻大学生は、学校内での学習の一方で、社会経験を積み重ねたいという欲求があり、そして、日本語を学習している以上、社会と接触する時に、それを生かして役立つようにしたいと考えていることが、上記の具体例から見られる。

我要丰富自己的生活，我觉得要天天呆在一个地方，我觉得很无聊，我要把自己的生活弄得很有意思一点。(No.4-15)

(私は自分の生活を豊かにさせたいです。毎日ずっと同じところにいれば、つまらない

と思います。私は自分の生活をもう少し面白くしたいです。)

中国の大学生は、大学に入って寮生活を送ることがほとんどであり、大学内ですべての生活を営むことができる。しかし、同じ場所での生活がつまらないため、日本語を媒介として活動のエリアを拡大し、生活を豊かにしようと考えている日本語専攻大学生の存在が確認できる。

然后当时去的时候，就是单纯地说弄点零花钱。然后想着要是能跟日本人交流就更好了。(略)。(No.7-2)

(そして、当時行った時はただ小遣いを稼いだかっただけです。でも、もしついでに日本人とコミュニケーションできればいいなと思いました。(略)。)

上記の例から、日本語専攻大学生が資産形成の欲求を日本語の活用と結びつけていることが明らかになった。これは、中国語教室や日本料理店でアルバイトする場合を指しているが、ただし、その場合、資産形成が単一の目的で働くのではなく、社会経験を積み重ねるなどのことと一緒に作用することがほとんどである。このような状況は、例えば次の二つのような発言例からも見られる。

就是说有这么个机会可以锻炼口语，又可以就是挣钱嘛，做兼职。(No.3-1)

(こういうチャンスがあれば、話す能力も鍛えられるし、お金も稼げるんだから、アルバイトって。)

[I:你为什么跟日本人接触?]我觉得首先是我想往接触社会上动,其次呢,是我想锻炼自己的专业。嗯,然后是钱。(No.4-15)

([I:どうして日本人と接触したのですか。]まず、私は社会に接触したいと思いました。次に自分の専門を鍛えたいです。ええと、それから、お金です。)

料理店の話、我比较喜欢他们的美食，我觉得比教日本人说汉语更丰富一点，我可以接触不一样的人，很多很多日本人。如果我口语水平够的话，我有时候会跟他们搭两句话。(No.8-5)

(料理店なら、私は日本料理が好きなんです。日本人に中国語を教えるより豊かです。異なる人と接触できるからです。多くの日本人と。もし話す能力が十分なら、ときどき彼らに声をかけます。)

一方、上記の例から、日本語専攻大学生においては、日本語を利用して日本や日本文化と関係のある趣味を楽しむために異文化接触を開始した者の存在が確認できる。日本語を活用して好きな日本料理、日本のポップカルチャーなどのような日本文化に近づけるなど

の具体例が挙げられる。ただし、その趣味を楽しむ目的に、日本語をアウトプットすることや、小遣いを稼ぐなどのような目的がいつも伴い、ただ日本文化が好きで、それを楽しむためだけに日本語をツールとして利用するという発言例が見られなかったことは特筆される。Gardner & Lambert (1972) は、第二言語学習の動機づけは「統合的志向」と「道具的志向」に分けられ、「統合的志向」とは、学習者が目標言語話者の文化、言語、その言語集団をもっと知り、自分もその集団の中に溶け込みたいという動機づけであるのに対して、「道具的志向」とは、ある目的を達するための道具的、実用的なものであると論じ、第二言語学習の場合、社会文化的「統合的志向」のほうが「道具的志向」より学習効果により大きく貢献すると論じている。一方、Dörnyei (1990) は、目標言語文化とは空間的に隔てられ、日常的に目標言語話者との接触が少ない外国語学習の状況では、むしろ道具的動機づけの方がより重要であると主張した。本調査では、中国における日本語専攻大学生の場合、日本語をツールとして日本文化に近づくという志向を持っているが、それが日本語を鍛えるなどの道具的動機づけといつも並行していることを確認した。これは Dörnyei (1990) の研究成果をある程度支持していると言えよう。

首先可以接触到日本人，我想多锻炼锻炼日语。在与他们接触交流过程中可以感知不同文化的差异，会很有意思。(No.3-14)

(まず日本人と接触できます。私は日本語をもっと鍛えたいです。彼らと接触している間に異なる文化との差異を知ることができ、それは面白いと思います。)

上記の例からは、日本語専攻大学生において、日本語を利用して異なる文化における相違点を知るという目的で、異文化接触を開始した者がいることが確認できる。日本語がツールとなっていることから、「異なる文化」とは、日中間における相互に異なる文化を指していると考えられる。日本語専攻大学生は、日本語を活用して日中間における文化の相違点を知り、日本に関する知識を獲得しようとする【動機づけ】を持っていることが伺える。

このように、中国の日本語専攻大学生が異文化接触を開始するのは、日本語を利用して視野の拡大、社会経験の蓄積、生活の充実、資産形成、趣味の楽しみ、日本に関する知識の獲得などを叶えようとする目的を抱えているためであることが判明した。このような【動機づけ】は、<ツールとしての日本語の活用による目的達成>と名付けられる。

この概念には、また、次の3つの傾向が見られる。

- ①これらの目的はそれぞれ単独で作用するというより、いくつかは複合して異文化接触を動機付けることが多い。
- ②なにかなく、日本料理などの趣味を楽しむ志向は、常に日本語をアウトプットするという目的が伴うため、中国の日本語専攻大学生は、異文化接触に対して統合的動機づけというより道具的動機づけのほうが強いと言える。

③中国の日本語専攻大学生は、大学生活の中で、視野の拡大、社会経験の積み重ね、生活の充実、資産形成などに対する欲求を持っている。これらの欲求は、人間の発達として自然なものである。これは、日本語教師が、学習者の日本語教育に当たり、学習にのみ注目するのでは不十分で、人間の発達という視点を取り入れて人材の育成を考える必要があるということを示唆している。

5.2.1.3 他者による接触意欲への刺激

<他者による接触意欲への刺激>は、同級生の異文化接触の開始や効果に接触意欲を刺激され、触発されることである。「他者」は、クラスメートや他クラスの同期生などを指していることが多い。中国の大学における日本語専攻は、低学年段階ではクラスに分けて授業がなされることがほとんどであり、そして1学年はいくつかのクラスから構成されている。大学によってクラスの定員は一定していないが、1クラスは20人～30人程度の少人数で授業を受けることが多い。その上、学生たちのほとんどが寮生活を送るため、大学生は同じ生活圏を持っており、互いの影響が大きい。そのため、日本語専攻大学生の異文化接触に関しては、クラスメート・他クラスの同期生などからなる人的環境によって刺激や影響を受ける例が多く見られた。

像我同学她大一下学期好像就出去教课,所以后来她的水平到大三的时候明显提高了好多。包括说也噯里啪啦,她就一个劲儿地说,特别厉害呀,听也是特别厉害。然后我觉得跟她做这个兼职有很大的关系。(No.2-6)

(私のクラスメートは、大学一年生後半の時からすでに中国語教室でのアルバイトを始めていたみたいで、それで三年生の時、彼女の日本語レベルは明らかに向上しました。ぺらぺらとしきりに話していました。すごい。聞く能力もすごいです。これは彼女のアルバイトと大きく関係していると思います。)

このように、異文化接触をしたクラスメートの日本語能力が上達したことを見て、それが異文化接触と関係していると判断し、それに接触意欲を触発され、自分も接触をしようと決定している例があることが分かる。また、日本語の話す能力と聞く能力は、異文化接触を通してもっとも鍛えられ、そして顕在化しやすい側面があるため、このような他者の成功例は、日本語をアウトプットしたいという欲求を持っている学習者に刺激を与えやすいと考えられる。こういう面から、<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>は、<他者による接触意欲への刺激>に影響を与えることが判明した。

〇〇老师就是推荐我们班上同学去了△△ [汉语教室]。[I:你看到他们去当时你是怎么想的?] 因为他们的学习比较好嘛, 他们去我们也能去啊, 为什么我们不能去呢? 因为学习成绩只是一个书面的一种测评, 我觉得口语方面大家都是也差不多, 我感觉。 (No.3-3,4)

(〇〇先生は、クラスメートを△△ [中国語教室] に推薦しました。[I:彼らが行くのを見てどう思いましたか。] 彼らは、ちょっと勉強がよくできたからです。しかし、彼らが行けるなら私たちだって行けるのに、私たちはどうして行けないんですか。学習の成績は書くほうの評価だけなので、話す能力ではみんなは差がないじゃないかと思います、私。)

日本人教師が日本語能力の高いクラスメートに中国語教室でアルバイトするチャンスを推薦したのを見て刺激され、負けず嫌いの気持ちで、自分もそうなりたいという心理が見られる語りであるが、ライバル意識から、他人に刺激されることによって異文化接触を動機づけられるという例である。そして、<他者による接触意欲への刺激>は、<ツールとしての日本語の活用による目的達成>に影響されることも見られる。日本語専攻大学生は1種類の動機づけのみではなく、いくつかの動機づけが複合して異文化接触を開始させることが多いと上述したが、もともと<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>や<ツールとしての日本語の活用による目的達成>という動機づけを持っている日本語専攻大学生は、<他者による接触意欲への刺激>によって異文化接触を開始する動機づけがさらに強くなることは十分考えられる。例えば、協力者 [No.3] は、「No.3-14」の発言例 (本論の p.75 に掲載) から分かるように、もともと日本語をアウトプットし、日本語をツールとして日中間における文化的相違点を知るという目的をもっており、それが [No.3-3,4] (本論の p.77 に掲載) に示したとおり、クラスメートに接触意欲をさらに刺激された結果、異文化接触を開始する動機づけが一層強くなっていったのである。

最开始大家都去做兼职了, 我就觉得要不然我也去做吧。 (No.19-8)

(最初は、みんながアルバイトしに行きました。じゃ、私も行こうと思いました。)

また、上記のように、周りにアルバイトなどの形で異文化接触を開始した者がいるため、自分もその人的環境に触発され、異文化接触を開始した例もある。ただし、「じゃ、私も行こうと思いました。(我就觉得要不然我也去做吧)」(No.19-8) と言っているように、それは他人にならって始めたことであるため、異文化接触自体に対してそれほど積極的な態度ではないと見受けられる。

このように、中国の日本語専攻大学生における<他者による接触意欲への刺激>という動機づけは、他者における接触の開始や効果を見て、ライバル意識や環境への順応などによって生じるものであり、また、<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>や<ツールとしての日本語の活用による目的達成>に影響されるということが明らかになった。

5.2.1.4 日本人の友人獲得の欲求

<日本人の友人獲得の欲求>は、異文化接触を通して、日本人の友人を作って交流したいという欲求である。

因为〇〇老师是刚来大连嘛，对大连也不熟悉，她也想逛一逛大连，然后我们说也和老师认识认识就一块出去了。(No.5-6)

(〇〇先生 [女] は、大連に来たばかりだから、大連にまだ詳しくないんで、大連を遊んで回りたいんじゃないかと思いました。それで、私たちも先生を知りたいから、いっしょに遊びに行きました。)

就是刚才说那个非要带外教去看我们舞蹈演出的，那个她就很积极地喜欢和日本人交流。(No.17-11)

(日本人の先生をどうしても私たちの踊りショーに連れてきたかった、今話したその女の子なんですが、彼女は、日本人とコミュニケーションすることが好きで、とても積極的です。)

上記の2例のように、<日本人の友人獲得の欲求>は、興味や関心や態度の類似に基づいた友人関係を求めることであり、<ツールとしての日本語の活用による目的達成>と比べてみると、異文化接触を、日本語をツールとして目的を達成するための手段と捉えるのではなく、異文化接触を通して日本人の友人を作るという統合的側面、そして友人が作れることが楽しいという情意的側面が強調されている。

5.2.2 チャンスの獲得

日本語専攻大学生は、異文化接触の【動機づけ】を持ってすぐに異文化接触が開始できるとは限らない。第二言語学習の場合と異なり、外国語学習の場合は、目標言語話者と接触するチャンスが少ないためである。瀬尾(2011:31-32)は、香港の上級の日本語生涯学習者11名を対象にインタビュー調査を行った結果、日本語学習の初級から上級にかけての困難さの中で、日本語学習全般に「接触場面の少なさ」があると論じている。

しかし、外務省最新の『海外在留邦人数調査統計(平成30年版)²⁴』(2017年10月1日時点)によると、中国在留日本人総数は12万4,162人で、そのうち、長期滞在者数は12万1,095人であり、在留日本人総数も長期滞在者数もアメリカに次いで世界第2位であり、中国にある日系企業総数は、海外日系企業数全体の約43%に当たる3万2,349社あり、世

²⁴ https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html を参照。

界1であるという。中国在留日本人総数、長期滞在者数、日系企業総数は、すべて他の国と比べて多いことが明らかである。

また、本調査の行われた大連、「都市別在留邦人数上位 50 位推移（同書：38-39）」において、在留日本人数が 4,840 人で世界第 39 位であり、「都市別長期滞在者数上位 50 位推移（同書：42-43）」において、長期滞在者数が 4,796 人で同 31 位、在留日本人数も長期滞在者数も中国では 8 位である。それに対して、中国における他都市の状況を見ると、上海は、在留日本人数が 43,455 人、長期滞在者数が 43,116 人であり、在留日本人数も長期滞在者数も中国において最も多い。一方、天津における日本人長期滞在者数は 2,665 人で²⁵、「都市別長期滞在者数上位 50 位推移（同書：42-43）」のうち、中国の都市において最も少ない（同書：42-43）。ここから中国在留日本人数は、都市間で大きな差が見られることが分かる。

さらに、「長期滞在者の地域別職業構成（同書：31）」によると、アジアにおいては、日本人長期滞在者の職業のうち、「民間企業従業員」が圧倒的に多いということであるため、中国の場合、在留日本人数は日系企業数によって決定されている可能性が大きいと考えられる。日系企業は一部の都市に集中しているため、在留日本人数もそれに従って都市間で偏りが生じるだろうと推測できる。

上述から、大連に長期滞在する日本人約 4800 人は、少人数とは言えず、さらに、それが日系の企業が多いことと密接に関係していることがわかる。しかし、日本語専攻大学生における異文化接触となると、決して、接触をしたければすぐにチャンスが見つかるとは限らない。また、人によってネットワークの構築と利用の状況が異なるため、接触のチャンスが容易に獲得できるとも言えない。本調査は、インタビューデータから日本語専攻大学生が「人的リソースの利用」と「情報的リソースの利用」を通して【チャンスの獲得】を行っていることを確認した。

5.2.2.1 人的リソースの利用

＜人的リソースの利用＞とは、教師や友人から接触の機会を紹介してもらうことや、日本人教師・日本人留学生・偶然遭遇した日本人などとの接触チャンスを利用することである。

当时我之前因为她们已经开始做这个兼职了，我也就说如果有机会的话，嗯，你们要是告诉我，我也想去，所以她就留意了就告诉我了。(No.1-2)

(彼女たちは、すでにアルバイトを始めていましたが、もしチャンスがあったら、えっと、紹介してね、私も行きたいからとお願いしました。それで彼女がそれを覚えていて、チャンスを教えてくれました。)

²⁵ 「地域別在留邦人数上位 50 位推移」において、中国の都市において大連が最も少なく、天津が 50 位内に上がっていない。

我参加了△△社团。是通过○○○ [同学名] 接触到的。就是一个负责和外国留学生交流的社团。(No.2-2)

(私は△△サークルに参加しました。○○○ [クラスメートの名前] を通して入りました。このサークルは、外国人留学生との交流を意図して開設されたものです。)

通过就是有一个社交软件，但是就是那个社交软件里面有很多就是日本人，然后可以就是和他们聊天。[I:你是怎么知道这个软件的呢?] 是沈阳的哪个学校的朋友，他有一次就发个朋友圈，然后我就问他这是什么东西，然后他就告诉我了啊。(No.20-3)

(ある SNS を利用して、日本人とチャットしています。その SNS が多くの日本人に利用されています。[I:この SNS はどうやって知りましたか。] 瀋陽のどこかの大学の友達のブログを見て、何ですかって聞いたら、教えてくれました。)

このように、日本語専攻大学生は、すでに異文化接触をしている友人に依頼して、同じ種類の接触のチャンスを紹介してもらうことでチャンスを獲得している。そして、友人の紹介によって SNS で接触チャンスが得られるということが本研究にとって意味のあることである。

友人のみならず、日本語専攻大学生が日本語教師にチャンスを紹介してもらう、以下のような例が見られる。

然后两个月前，○○老师 [日本老师] 给我介绍了个兼职，是教日本人汉语。再就是在微信上，有和日本人聊天，好像是老师的朋友，是他加我的，有时候就聊一下。(No.10-1)

(2 か月前、○○先生 [日本人教師] から日本人に中国語を教えるアルバイトを紹介していただきました。もう一つは「ウイチャット」で日本人とチャットしているのですが、先生の友達らしいです。向こうから友達に追加してくれたんです。時間がある時にチャットをします。)

但是我们学校日本留学生的数量不是很多，大概每年有那么几个人，可能也就十个八个那样，就尝试跟他们联系一下。有的时候会通过我们这边的外教，或者是通过我们专业的老师去联系外教。主要还是从老师这边来，不一定是外教，是老师都可以。(No.16-7)

(うちの大学、日本人留学生が多くないです。毎年何人かぐらいで、8人、10人ぐらいかな。彼らと接触することを試みました。時にうちの日本人の先生に、または日本語学科の先生を通して日本人の先生につないでいただくとかやっています。やはり、主に先生にお願いしますね。日本人の先生だけでなく、先生ならどなたでもいいです。)

このように、日本人のネットワークおよび日本人に関する情報を持っている日本人教師、

中国人の日本語教師に異文化接触のチャンスを紹介してもらっているのである。

また、以下のように、日本人教師、留学生との出会いを生かして、これを積極的に利用することも見られる。

大一的时候进了〇〇老师的日语强化班，每周都要参加老师的课，强化班结束之后由于和老师建立了很好的关系，就经常和老师沟通，老师也愿意和我们接触，而且老师还经常带我们参加一些活动，介绍日本人给我们认识。(No.11-2)

(大学一年生の時〇〇先生の「日本語強化班」に入りました。毎週先生の授業を受けて、そして「強化班」が終わった時、先生ととてもいい人間関係ができたので、よく先生と連絡します。先生も私たちと接触することが好きです。さらに、先生は、よく私たちを連れてイベントに参加したり、日本人を紹介したりしてくださいました。)

[I:你说的那个留学生，你们是怎么建立联系的呢?] 也没有，其实也没有联系，就是偶尔能在晨读的时候碰到，然后简单的交流。(No.12-6,7)

([I:その留学生とどうやっと連絡を始めたのですか。] まあ、そうじゃなくて、実は連絡したわけじゃないんです。朝の朗読練習の時に偶然出会って、ただ軽くコミュニケーションしただけなんです。)

〇〇[同学名] 他好像是在便利店打过工，他说他在便利店，然后那个日本人来过来买东西，然后他看了一眼就说：“あなたは日本人ですか”，然后他俩就认识了，然后接着介绍我认识。(No.15-4)

(〇〇[クラスメート名] は、コンビニでアルバイトをしたことがあるみたいです。彼がコンビニでアルバイトしている時、日本人が買い物に来て、その人に「あなたは日本人ですか」と聞いて、それで2人が知り合って、あとで私に紹介してくれたんです。)

協力者 [No.11] は1年生の時から「日本語強化班²⁶」に選抜され、そこで週1回日本人教師の授業を受けているうちに教師と良好な人間関係を形成し、授業の授受関係からプライベートな関係に移行して、異文化接触を開始した。協力者 [No.12] は、大学で日本人留学生と出会った時に、積極的に声をかけて挨拶することで接触のチャンスを獲得した。協力者 [No.15] は、遭遇した日本人に積極的に声をかけて接触のチャンスを獲得した。これらの具体例から、中国の日本語専攻大学生の、周囲にある日本人と接触できるチャンスを積極的に利用しようとする態度が伺われた。

²⁶ 協力者 [No.11] の参加した「日本語強化班」は日本人教師によって行われるものであり、学生がより早めに日本語能力試験を受け、そして合格できることを目的とするが、それに入るために選抜試験が必要である。

「5.2.2.1」で検討した発言例から、中国の日本語専攻大学生は、異文化接触をしている友人や、日本人のネットワークおよび日本人に関する情報を持っている教師に接触の機会を紹介してもらうという間接的な【チャンスの獲得】法を利用する一方、日本人教師、留学生、遭遇した日本人との接触チャンスを積極的に利用するという直接的な【チャンスの獲得】法をも利用していること、そしてその両者は<人的リソース>を利用することで共通していることが明らかになった。また、本節から【チャンスの獲得】において日本語教師が重要な役割を果たすことが判明した。ここから、日本語教師は、学習者に情報を与えたり、ネットワークの作り方を提示したりすることなどを通して、日本語専攻大学生の異文化接触を支援することができるという示唆も得られる。

5.2.2.2 情報的リソースの利用

<情報的リソースの利用>とは大学の国際交流活動・部活・日本語コーナー・インターンシップなどのような学校や学部レベルで行われる日本人との接触活動の情報、および、インターネット、日本人向けの雑誌（ホテルやレストランに無料で配布され、日本人に中国での生活情報を提供するもの）などから得た情報を利用することである。<人的リソースの利用>と異なるところは、人と人との間のネットワークを利用してきっかけを作るのではなく、情報収集によって【チャンスの獲得】を行い、接触を開始することである。

まず、日本語専攻大学生は、大学において、学校や学部から国際交流活動、部活、インターンシップなどについての情報を得、それを利用して接触することがある。

我从大二下学期开始，有一个像学伴似的这种。因为我们学校也有那种国际交流学院，各个国家学生过来学汉语那种的。然后呢就几乎是同龄的一个日本的小姑娘，这样的学伴。 [I: 你是怎么找到她的?] 就是自己去国际交流学院然后去问留学生。(No.17-1)

(大学二年生後半の時、勉強相手みたいな友だちを作りました。うちの大学に国際交流学院があって、各国から中国語学習に留学生が来ています。それでほぼ同じ年齢の日本人の女の子と勉強相手になりました。 [I: どのように彼女を見つけたのですか。] 自分で国際交流学院に行って留学生に聞いたんです。)

在大二的2、3月份，那应该是下学期马上就要开学的时候，就学了一年半的时候，然后就是那个交换访问团「访华团」，就一周。然后我们中国的学生和日本学生一起交流。嗯，然后是我们学校在我们大二的时候，来了一拨日本学生，好像是〇〇大学的，我不太确定，有点忘了，嗯，但他们也就呆了一周，他们就回去了，他们也是一个访问团。可能有10来个20来个学生这样的。 [I: 你是怎么获取这些信息的?] 就是学校说来了访问团，让我们日语专业的学生去交流、接待一下。(No.17-1)

(大学二年の2、3月頃、下半期が間もなく始まる時でした。その時交換訪問団「訪中団」が来たんです。でも、一週間だけでした。それで、私たち中国人の大学生が日本人の大学生と交流しました。うん、また、大学二年生の時、日本人の大学生が来て、それ、〇〇大学の学生みたいでしたけど、あまり確かじゃなくて、なんかちょっと忘れちゃいました。それで、一週間ただけで、すぐ帰りました。彼らも訪問団でした。10人、20人とか、そんな感じでした。[I:このような情報はどうやって得ましたか。]大学のほうから、訪問団が来るので、日本語専攻大学生が交流して、対応するように求められたのです。)

このように日本語専攻大学生は、大学から国際交流に関する情報を得、それを利用して日本人の「勉強相手²⁷⁾」を作ったり、日本人留学生短期訪中団と交流したりして【チャンスの獲得】をする。また、日本語専攻大学生は、学部によって開催される日本語コーナーに参加して日本人教師や留学生²⁸⁾などと接触するチャンスを作ることもある。例えば、協力者[No.13]は、東北三省²⁹⁾や大連市によって開催される弁論大会に向けて学部内で開設された「スピーチ強化班」に選抜され、そこで日本人教師の日本語による作文やスピーチの特訓を受けたのみならず、日本人教師とプライベートな接触をも多く行った。この学生は、次のような接触例を語ったが、ここから、日本語コーナーで接触のチャンスが得られることが伺われる。日本語コーナーや日本語によるインターンシップなどのような接触チャンスは、大学や学部から情報を得ることが多い。

我觉得如果没有的话，我可能就会去日韩角之类的地方。(No.13-5)

(これ「日本語強化班を通して日本人教師と接触したこと」がなければ、日本語・韓国語コーナーに行ったはずです。)

大学、学部から情報を得る一方、日本語専攻大学生は、自ら情報を収集することもある。インターネットでのSNSが広く利用されることから、中国の日本語専攻大学生は、ウィチャットやQQをはじめとしたSNSをよく利用して情報を得ている。例えば、大学生向けのアルバイト情報は、SNSを通して配布されているものを利用することができる。次の例では、ウィチャットやQQを利用して日本料理店でのアルバイトを見つけている。

就是在一个学校有那种兼职群，QQ群，它会发，就是哪个哪个店招兼职，然后让我们自己去联系，有电话。(No.7-3)

²⁷⁾ 日本語専攻大学生は日本人留学生と語学学習の交換支援を目的に作られた関係である。

²⁸⁾ 大学によって、「日本語コーナー」は日本語教師がリーダー役をして組織する場合もあれば、学生が自治管理する場合もある。参加する学生に日本語を使わせるために、日本人を要請することが多い。その場合、日本人教師や留学生が周囲にある安定的リソースとして利用されるのが多い。

²⁹⁾ 「東北三省」は中国の東北地方に位置している黒竜江省、吉林省、遼寧省を統括して称する言い方である。

(大学にはアルバイトグループ、QQ グループがあって、そこに情報が発表されます³⁰。どこどこの店がアルバイトを募集しているのかなどです。それで、私たちが自分で連絡します。電話番号が書いてありますから。)

また、次の例のように、日本のポップカルチャーを楽しむために、日本のツイッターや YouTube などの情報源を利用してインターネットで日本人と接触することもある。

我还有在网上用推特之类的跟那个日本人聊天。(中略)。我喜欢的做音乐的人，还有就是那个在网上 YouTube，我不知道中文怎么说，他们都用推特。我也就跟过去了。(No.15-4,5)

(私はまたインターネットでツイッターみたいなのを通して日本人とチャットしています。(中略)。私の好きなアーティストたちが、あの、中国語で何ていうか知らないんですけど、あのインターネットの YouTube に出てるし、彼らはみんなツイッターを使っています。それで、私もフォローしていきます。)

中国では、特に日本人がよく利用するホテルやレストランに日本人向けの雑誌(日本人に中国での生活情報を提供するもの)が無料で配布され、日本語専攻大学生が日本に関する情報を得ようとする時それを利用することがある。例えば：

最近我还找到那个大连市剑委会，决定 10 月份开始跟他们联系。[I:你是怎么获得剑委会的信息的呢?] 剑委会我是在那个饭店门口放的那种免费资料上看到的，就是那种提供一些日本人在中国生活时需要的信息的那种。(No.11-3)

(最近、私は大連市の「剣委会」を見つけて、そして 10 月ごろ向こうと連絡を取ろうと思いました。[I:どうやって剣委会の情報を手に入れましたか。]「剣委会」は、あのレストランの入り口においてある無料の資料で見つけたんです。日本人が中国で生活する時に必要な情報を提供するような資料です。)

「剣委会」は「剣道委員会」の略語で、協力者 [No.11] はその雑誌からこの「剣委会」についての情報を得、そこと連携を取って、大学において「剣道部」を立ち上げた。さらに日本語学部において剣道愛好者を募集し、週に 1 回 A 大学で日本人の剣道練習者が日本語専攻大学生に剣道を教えるようになった。これは、協力者 [No.11] にとって接触のチャンスが多く得られたばかりでなく、他の日本語専攻大学生にも接触のチャンスを与えたと考えられる例である。実は、大連には、日本人が比較的多く滞在しているため、彼らによって趣味を中心とした作られた団体が活動していることが多くあり、各大学の日本語専攻

³⁰ 「ウイチャット」と「QQ」は中国の SNS の 2 種であり、多くの大学生に利用されている。「アルバイトグループ」は「ウイチャット」や「QQ」の「チャットグループ」機能が利用され、アルバイトの募集情報を発表するために作られたものである。この語りにおいて「アルバイトグループ」は「QQ グループ」と並べられているため、「ウイチャット」の場合を指していると見られる。

大学生が人的・情動的ネットワークを利用して、それに参加して接触のきっかけを作る例が一部存在している。

このように、中国の日本語専攻大学生は、＜情動的リソースの利用＞を通して【チャンネルの獲得】をし、そして大学や学部から情報を得るのみならず、自らも情報収集を行い、ネットワークを作ることで接触のきっかけを作っていることが明らかになった。

5.3 接触中の状況

日本語専攻大学生へのインタビューデータから、接触中の状況について質問したことに対する語りを分析した結果、19の概念が生成され、そのうち、18の概念がカテゴリー【困難】(10)と【努力と工夫】(8)にまとめられ、残りの1つが概念＜接触に対する相手の関与姿勢＞として現れる。これは、接触中は、日本語専攻大学生が【困難】に遭遇しながら【努力と工夫】でそれに対応し、それと同時に＜接触に対する相手の関与姿勢＞も関わってきて、この3つが相互作用することで異文化接触が展開されていくことを意味している。

5.3.1 困難

接触中は、遭遇する【困難】に＜コミュニケーションの困難＞・＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞・＜価値づけによる消極的な接触姿勢＞・＜接触上の文化的差異＞・＜固定観念による文化摩擦＞・＜接触条件の不備＞・＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞・＜学業重視による接触の一時的放棄＞という10の概念が内包されている。そのうち、＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞はサブカテゴリー[対人関係の困難]に、＜接触上の文化的差異＞・＜固定観念による文化摩擦＞はサブカテゴリー[異文化による摩擦]に、＜接触条件の不備＞・＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞はサブカテゴリー[安定的な場の喪失]に、それぞれまとめられる。

5.3.1.1 コミュニケーションの困難

＜コミュニケーションの困難＞とは言語技能の話す能力、聞く能力の未発達により伝達不全に陥る困難のことであり、日本語能力に自信のないこと、正しい日本語への固執による不安など、教室内の日本語学習からの影響で困難を感じることも含む。また、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇して、伝達不全に陥る問題も、この概念に入る。

日本語専攻大学生が日本人と接触する時のコミュニケーションにおいては、話す能力に

よる伝達不全をもっとも困難と感じているようだ。

就感觉自己的日语水平还是不够，嗯，有很多时候想表达的可能是没有表达得很好。 (No. 4-13)

(自分の日本語のレベルがまだ足りないと思います。あの、時々伝えたいことがあまりうまく伝えられなかったです。)

就是有的时候可能嗯，因为和日本人交流，就是他和我们关系很融洽，就有的时候想表达一些东西还是表达不出来，就是我和中国人交往，我们开玩笑啊，或者说点什么我都能说得出来，但是和他们的话嗯，脑袋里面想的很多，然后想说很多，但是有时候表达不出来，这样的。 (No.5-10)

(ときどきあることなんですけど、日本人とコミュニケーションする時、お互いに仲は良かったんですが、時に伝えたいことが伝えきれなかったです。 中国人と接触する時は、例えば冗談を言ったりとかあるいは何かを話したりする時とか、すぐ話せますが、しかし彼ら [日本人] が相手だと、頭の中でいろいろ考えていて、それでいろいろと伝えたくても、うまく伝えられないことがあったと、まあ、そういうことです。)

上記は話す能力の不足による困難を漠然と語っている具体例であるが、その困難の主な問題点は「伝えたくても伝えられない」ことであり、その原因は多くの面から考えられる。Canal (1983) は、コミュニケーション能力を理論化する試みの中で、「文法能力 (grammatical competence)」・「社会言語能力 (sociolinguistic competence)」・「談話能力 (discourse competence)」・「ストラテジー能力 (strategic competence)」の4つの要素を提示した。「文法能力」は文法語彙知識、文法的に正しく言語を使う能力、「社会言語能力」は場面に即した適切な言語使用を可能にする知識・能力、「談話能力」は談話を組み立てるのに必要な知識・能力、「ストラテジー能力」はもっている知識を駆使して欠損した知識を補うための方略的知識・能力であるという。「伝えたくても伝えられない」という話す能力に関する困難は、「文法能力」・「社会言語能力」・「談話能力」・「ストラテジー能力」の不足に起因するものが多いと考えられる。

例えば、次の2例は、最初のもは使える語彙の量が足りず、次のものは文法的に正しく伝えられないことによる困難であり、この2例とも、上述の「文法能力」が足りないため、話す時に困難を感じる例である。

就是有过双方不太理解的时候，我得好好想想怎么表达，因为我词汇量不够。 (No.10-5)

(双方がお互いに理解できなかった時、どう伝えたらいいのか良く考えなければなりません。語彙の量が足りないからです。)

[I:在跨文化接触中你有什么困难?] 嗯,我感觉我的日语其实基础还是不太好。嗯,就是好多之前我大一大二吧,就是书本上记得不是特别准确啊,就是可能多数还是靠感觉,觉得这个不太好。我去日本还是应该就是学一下,就是好好的,就是不能说我这个意思懂就行,还是应该按照那个正确的语法呀,那种地道那种。(No.1-4)

([I:異文化接触の中で何か困難がありましたか。] あの、実は、日本語の基礎があまり良くないと思います。うん、例えば一年生、二年生の時、教科書の内容が正確に覚えられなくて、多くは感覚で覚えてきました。これはあまり良くないと思います。ですから、日本に行って学んだほうが良いと思います。というのは、やはり意味が分かれば良いのじゃなくて、正確な文法に基づいていなければなりません。その、日本語らしい日本語っていうやつですね。)

話す能力による<コミュニケーションの困難>には、次の例のように「談話能力」に起因するものもある。

需要改善の方面,我觉得应该是语言的组织能力,我一着急就只能蹦出单词。(No.15-12)

(改善すべきところはやはり言葉を組み立てる能力ですね。緊張すると、単語しか出てきませんでしたから。)

一方、「社会言語能力」に起因する話す困難に関する具体例は、次の一例しか見つからなかった。これは、日本語専攻大学生においては、接触の場が限られており、また、まだ学生なので、接触の相手に社会言語能力を厳しく要求されないこともあるため、あまり意識されていないのではないかと考えられる。

口語的话可以交流,但要是想再上一层的话还是需要更加努力的。可以交流,但是在一些场合说日语啊,比如敬语什么的,还是需要更加努力。(No.18-1)

(話し言葉でのコミュニケーションならできますが、もうちょっと高めたければ、さらなる努力が必要です。コミュニケーションはできますが、ある場合には、例えば敬語などは、やはりもっと頑張らなければなりません。)

「ストラテジー能力」による話す困難は、語られなかったが、これは、そもそも教室内においてあまり提示されなかったため、日本語専攻大学生もそれについて意識しなかった可能性があるためと考えられる。

話す能力のほか、聞く能力による<コミュニケーションの困難>も確認された。

就是感觉他们说话挺快的,有点跟不上,然后感觉就是……(中略)。嗯,他俩[2名日本老师]说话挺清晰的,外教说话还是挺清晰的,但是正常跟别的日本人说就[不行]。就是外

教自己也说了，他说你很少能看到像我们一样讲日语这么清晰的人，就是你们遇到别的日本人对话，你就会发现他说话你有点听不懂，就有点含糊那种。 (No.7-9)

(彼らの話すスピードがすごく速いんですよね。ちょっとついていけない感じ、そして… (中略)。うん、先生たち [2名の日本人教師] の日本語はとてもはっきりしているから。でも、普通に他の日本人と話す時はやはり [だめです]。日本人の先生自身が言いましたが、私たちのような日本語をはっきりと話す人にはめったに会えないって。他の日本人と話す時、その日本語がちょっと聞き取れなくて、なんかモヤモヤしてよく分かんないって感じることがあります。)

我刚去的时候真的是说不出来，只会说欢迎光临。在客人点单的时候，可能他说的话是会话课学过的内容，但是他一说我瞬间懵了，完全反应不过来。再加上日本人本身语速也快，在学校外教跟我们说日语的时候语速是尽量放慢，而且发音、吐字特别清晰。但是在日料店的日本人，尤其在点单的时候，本来菜的名字是专有名词，我当时还没有完全记下来，在点菜的时候，虽然很少让我点菜，但是我有在旁边听，不是很能听懂。(No.8-1)

(行ったばかりの時は本当に話せなかったですよ。いらっしゃいませとしか話せなかったです。お客さんが注文する時、その言葉は会話の授業で勉強したことがあったとしても、言われた瞬間わからなくなっちゃって、全然反応できません。それに日本人の話すスピードはもともと速いです。学校では日本人教師が私たちに日本語を話す時、できるだけスピードを落としますし、発音もとてもはっきりしています。でも、日本料理店の日本人は、特に注文する時、料理の名前はもともと専門用語ですから、その時、全然頭に入らなかったです。注文にあまり出ないようにしてくれましたが、注文する時、そばで聞いていても、あまり聞き取れないですね。)

このように、聞く能力による<コミュニケーションの困難>は、語彙が足りないことや、相手の話すスピードが速く、発音がはっきりしていないことに起因することが見られた。そのうち、相手の話すスピードが速い、発音がはっきりしていないということは、教室内的の日本語学習とも関係していることが、上掲2例の教師の話し方についての語りから見られる。つまり、日本人教師が学習者に分からせるために、はっきりした発音や遅いスピードのティーチャートークを使用したということである。第二言語学習と異なり、外国語学習の場合、ネイティブスピーカーの言葉がいつも聞ける環境ではないため、日本語専攻大学生がそのようなティーチャートークに慣れてしまうと、一般の日本人の話が分かりにくいものになると考えられる。

また、日本語専攻大学生は、コミュニケーションの中で日本語能力に自信がないこと、正しい日本語への固執などによる不安をも抱えている。

一开始刚学的时候我也没有那个日语基础，啊，然后就对自己发音可能有不自信的情况，

就是不管什么条件不太敢说就是那样。(No.1-3)

(勉強を始めたころは、日本語の基礎がないので、あの、自分の発音にあまり自信がない時があって、そしてどんな状況でもあまり話せないっていう感じです。)

[I:啊，那你原来的时候觉得紧张拘束主要是怕什么呢？] 主要怕自己可能日语说不好啊，或者哪一个表达有错误啊听不懂啊，或者造成尴尬呀。(No.5-7,8)

([I:最初のころ、緊張してこわばっちゃったというのは何が心配だったんですか。] 且本語がうまく話せなかったり、あるいは表現が間違っていたり、聞き取れなかったり、または気まづくなったりするんじゃないかと心配でした。)

コミュニケーションする時、日本語能力に自信がないためとか、正しい表現で伝えられたかと心配し、不安を抱えるという困難が確認された。正しい日本語への執着は、日本語能力の向上に有意義な一面もあるが、しかし、固執すると不安を引き起こし、コミュニケーションに支障をきたすことになりがちだと考えられる。田中(2010:71)は、在日留学生を対象としたソーシャルスキル学習のセッションを行う時、異文化接触と日本語学習との接点について、「意志を伝えること、意図を読み取ることに集中するように伝え、語彙の獲得や文法の正確さは指導していない」とし、これは「現実のコミュニケーションでは、間違いの有無よりも、何が伝わったかが問われる」ためだと論じている。「どんな人と友達になりたいか。言葉は正確だけどノリの悪い人より、ことばが多少違っても、一緒にいて楽しい人ではないか。人としての好感が大事」で、さらに、「日本語教育とは乖離する部分かもしれない。意思疎通の成功に注意を向けて、語学的な間違いを許容してよいかどうかは、意見が分かれるところだろう」と論じた。中国の日本語専攻大学生においては、日本語をアウトプットし、日本語能力を高める動機づけが強いため、その意識に基づいて接触する中では、意味の伝達より正しい発音、文法を求める一面があるだろうと考えられる。

さらに、日本語専攻大学生は、次の2例のように、接触の中で学習経験のない方言や幼児言語に遭遇することもある。

嗯，还有的就是比如说关西那边京都和大阪这块人说话我有点听不懂。(No.3-2)

(それに、例えば関西の京都や大阪辺りの人の言葉がちょっと分からないですね。)

还有一个就是给小孩上课，有的时候就是他们说的是小孩式的语言，有的时候感觉和我们说的学的不太一样，有一点点差别，就是和他们说话的时候他们不太明白。这时候他妈妈过来帮忙解答一下。(No.3-11)

(もう一つは日本人の子どもに授業をするのがあります。子どもの言葉を使っているから、時に私たちの話しているのとか学んだのとかと同じじゃなくて、ちょっと違いがあるなと思いました。子どもたちと話すときあまり分かってくれなかったですよ。その時お母さ

んに助けていただきました。)

このように、日本語専攻大学生は接触の中で話す能力や聞く能力の不足、日本語能力に自信がないことや正しい日本語への固執による不安、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに【困難】を感じるようになった。これらの【困難】は、言語コミュニケーションによるという点で共通しているため、＜コミュニケーションの困難＞と名付けたのである。また、上記の記述から、教室内での日本語学習が異文化接触に影響を及ぼすということが見られ、ティーチャートークに起因する「聞く困難」や正しい日本語への固執から生じる「話す困難」は、教室内での日本語学習と深く関わることも判明した。日本人教師が教室内で自然な日本語を使い、学習者に日本語らしい日本語の発音に慣れるように工夫する必要がある。また、学習者が正しい日本語に固執することに関しては、日本語教師が、コミュニケーションする時は、表現の正しさより「何が伝わったか」が重要であり、そして「ことばが多少違っても、一緒にいて楽しい人であることが目標。人としての好感が大事」であるという意識の重要性を明示することが必要であると考えられよう。

5.3.1.2 対人関係の困難

サブカテゴリー [対人関係の困難] には、＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞という3つの概念が内包されている。この3つの概念には、文化背景が異なるために引き起こされるものもあれば、同文化の下でも生じやすいものもある。しかし、いずれも対人関係を構築する時に遭遇する困難であるという共通性を持っているため、サブカテゴリー [対人関係の困難] に内包することとした。

5.3.1.2.1 異文化接触の対人関係の不安

＜異文化接触の対人関係の不安＞とは、異なる文化背景を持つ相手との対人関係に不安や緊張を覚えることである。同国人との接触と異なり、相手が異なる文化背景を持っている場合、間違えたら相手に嫌われるかもしれないと予測して相手との対人関係に不安を抱えることがある。

非常担心，就是说话特别小心，一句话说错了就会被讨厌了。(No.15-9)

(とても心配で、話す時は特に気を付けます。一言間違えても嫌われるかもしれません。)

一方、以下のような対極例も確認された。

就是后辈们也是，要走出去跟日本人去接触，就是你只有接触了以后，了解他了，相处了以后你才觉得他没有那么吓人，甚至你还觉得其实他们还挺好，挺友好的。(No.2-6)

(後輩たちも外に出て日本人と実際に接触することを勧めたいです。接触すれば、理解でき、付き合ってみれば、向こうはそんなに怖くない。実は、いい人で、友好的な人だとさえ感じますよ。)

上記の例は、協力者 [No.2] が後輩の学習者たちに送ったアドバイスの言葉であるが、協力者 [No.2] が異文化接触の対人関係に不安を覚えなくなっていることが伺われる。そこには、次の3点が読み取れる。第一に、相手が自分に好意を持ってくれるかどうか確定できないことが不安の一因だということである。第二に、「接触すれば、理解でき、付き合ってみれば、そんなに怖くない」と述べたように、接触経験が不安の軽減に役立つということである。第三に、これらは一般の対人関係にも生じやすいものであるが、相手が同じ文化を共有していない場合、相手の考えや気持ちを推し量ることはより難しく、これを困難に感じることは容易に理解できる。〈異文化接触の対人関係の不安〉は「5.3.1.4.1」に論じる〈接触上の文化的差異〉に大いに影響されることが十分考えられる。

また、もともと対人関係に自信がない上に、相手が外国人であるため、なおさら不安を感じるようになると語る例もあった。

就是觉得自己不是那么健谈，就是不知道跟人家说啥，本来自己也不是特别健谈，然后更何況又是一个外国人，我就说有时候就觉得……你说我跟人家说啥呀？(No.7-10)

(自分は話上手な人ではありません。相手と何を話せばいいかわかりませんよ。もともと話上手な人ではなく、それがまた外国人ならなおさら、相手と何を話せて言うんだらうとか思うこともありますよ。)

上掲の「何を話せばよいのか」と嘆く例のように、〈異文化接触の対人関係の不安〉は、相手との話題の選択に影響していることが判明した。つまり、〈異文化接触の対人関係の不安〉は、〈接触の場面における話題の選択・継続に難航〉を生じさせるものなのである。

5.3.1.2.2 接触場面における話題の選択・継続に難航

〈接触場面における話題の選択・継続に難航〉とは、接触において、どのような話題が適切か、どのように話題を継続させるかに困難を感じることである。インタビューデータにおいては、〈接触場面における話題の選択・継続に難航〉に関する内容が豊富に語られ、日本語専攻大学生が接触の中で話題に関して多くの困難を覚えているということが推察できる。

我其实挺愿意，就是抓这种机会，有这种机会其实挺宝贵的，就是有一点会担心就是，唉呀，和人家说啥好啊？（中略）。然后会不会太无趣了，然后能不能一直持续下去？有点担心，有点没有信心，能不能一直长期持续下去。（No.19-8,9）

（私は、本当にこんなチャンスをつかみたくて、こんなチャンスが本当に大切ですよね。ただ一つ心配があるんだけど、それは、ああ、相手と何を話したらいいのかってこと。（中略）。それから、あまりにもつまらないことなんじゃないかとか、ずっと続けていけるのかとかですね。ちょっと心配だし、ちょっと自信もないし、ずっと長く続けられるのかと思います。）

上記の具体例で語られているように、話題の選択に関する困難は、まず、相手がその話題に興味や関心を持つかどうか起因することが確認される。異文化接触の場合、相手はその話題に興味や関心を持つかどうか見極めることに困難を覚えるのは、基本的に相手と文化背景が異なるからであろうと考えられる。以下の2例で語られているように、相手が日本人である場合、中国人との付き合いと比べて、話題の選択に困難を感じるのである。

其实中国人也是这样，但是日本人勾画得更加明显，我感觉中国人更加随和吧，也是我和中国人了解比较多，找话题的方面就会比较广泛。但是和日本人的话，政治、经济或者他工作的方面我都不太了解。（No.19-8）

（実は、中国人だってそうなんですけど、日本人のほうがもっとはっきりしていますね。中国人のほうがもっと付き合いやすいと思います。まあ、それは中国人とのほうが分かり合えることが比較的多く、話題のほうもそれだけ広いせいかもしれませんね。でも日本人との場合は、政治や経済、また、他の仕事上のことなんかよく分からないですね。）

有些时候我会刻意找一些共同话题，就是在这个共同话题上面我觉得还是欠缺一些，怎么说，因为还是不了解人家的文化，所以不知道你想聊什么。（No.9-8）

（無理やりに共通の話題を探すこともあったんだけど、その共通の話題にはやはり何か欠けているように思います。なんというか、やっぱり相手の文化をよく知らないのので、何を話したらいいのかわかりませんね。）

こういう面から言えば、＜接触の場面における話題の選択・継続に難航＞は、＜異文化接触の対人関係の不安＞に影響されていると理解されよう。一方、話題がつまらなくて、このまま続けて話ができるのかと心配している [No.19-8,9]（本論の p.92 に掲載）の例のように、話題の持続が相手との対人関係の持続にも影響すると認識し、そして、それによって不安を覚えるということも見られた。ここから、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞が逆に＜異文化接触の対人関係の不安＞を増幅させる可能性もあると考えられ

る。

話題の選択に関する困難はまた、自分より社会履歴が長いや、力関係に対等的でない相手である場合に生じる。

还有就是可能自己见识方面吧，就是也有一些不足。就是不知道要和一些成年的人，就是那些年长的人和他們嘮什麼。(No.5-11)

(また自分の見識のほうにも、まだ不足があります。大人の人たち、年長の人たちと何を話せばいいかよく分からないですね。)

上記のような例は中国語教室で日本人に中国語を教える接触の場合によく見られる。相手が日系企業の駐在員であり、社会履歴の長い、会社の管理層のような人もいる。

他们都是在公司当部长啊什么级别的，像我教的有△△A 公司的技术部部长和△△B 公司的技术部部长，在咱们这大连的日企吧，反正他们给我名片，我就觉得天呀，好荣幸啊。看到名片就是什么部长啊什么的，还级别挺高的。(No.6-12)

(みんな会社で部長などのクラスにいる人たちで、例えば、私が教えた中に、△△A 社の技術部の部長や△△B 社の技術部の部長がいて、ここ大連の日系企業ですけど、とにかく名刺を出された時、すごい、光栄だと思いました。名刺を見たら、部長とかなんかで、とても高いクラスです。)

そのような相手と接触する場合は、相手との対等性が欠如しているため、話題の選択に自信がないという、次のような発言例が見られる。

感觉自己这个能力还不是很高，因为毕竟人家都是比较有社会经验的人，可能人家和你接触只是他接触当中的一部分，然后我的接触面很窄嘛，因为我没有办法，我的那个交际能力没有跟他在一个水平线上，还是会有这种不安吧，就是我们只能有一个简单的维系，就是嘮一些普通的嗑，不会有特别深的接触吧。(No.5-13)

(自分の能力がまだ高くないと思います。相手がなにしろ社会経験を持っている人だから、私との接触が多くの中の一つに過ぎません。それに、私は人との接触が狭いと思います。でも、どうしようもないです。自分のコミュニケーション能力が相手とは同じレベルではありません。そういう不安があります。だから、簡単な交流の維持しかできなくて、普通のおしゃべりはいいですが、より深い接触はできないと思います。)

このような例から＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は、＜対等性の欠如による接触の困難＞に影響を受けることが明らかになった。

さらに、「接触到的大部分都是日企高管，他们在认识到我还是一个学生这样的身份，加上我当时日语其实还不好，交谈上的话题其实很浅。(No.10-7) (接触の相手がほとんど日系企業の管理層の人で、彼らと知り合った時、私はまだ学生で、その上、当時の日本語が下手で、コミュニケーションする時の話題は実は浅いです。)」というように、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は＜コミュニケーションの困難＞にも左右される。

一方、話題の継続に関する困難は、以下の3つの場合に見られる。

まず、話題に関する知識が少ないことがあげられる。

她就说那如果要是这样的话，那你怎么办呢？你被问到这样的问题，你怎么回答呢？我就先用笑掩饰一下尴尬，然后我就努力想怎么回答，但是真的是自己想脑子里没有想法也想的很少也说不出来，就特别……[难为情的样子]。(No.1-12)

(もしそうだったらあなたはどうしますか、そんな質問をされたら、どう答えますかと先生に聞かれました。私はその時まずいと思って、笑ってごまかしてしまいました。それから、どう答えればいいのかと一生懸命考えましたが、でも、頭の中で考えられることが、本当に何もなくて、考えが話せなくても、とても…[恥ずかしい表情]。)

協力者 [No.1] は、卒業後日本への留学が決まり、留学する前、SNS のテレビ電話機能を利用して留学先の大学院の先生にこれからの研究課題（福祉学）の相談に乗ってもらった。その時、先生に多く質問されたが、その面での知識があまりなく、上掲の発言に見るように話の継続がしにくくなった。これは、ある特定の分野に限らず、次の例のように、日本の社会、文化などに関する知識が少ないため、話題の継続が難しくなる場合も当てはまる。

但是如果谈到日本政治、经济、历史等等，因为我自己本身对这方面的兴趣很少，本身也没有太多的了解，如果谈到这方面可能就会不太顺利。(No.14-4)

(日本の政治、経済、歴史などの話になったら、私自身がそっちの面に興味が薄いので、私自身あまり理解していることが多くなく、もしそういう話になったら、話がうまく運ばないんです。)

以上のようなことは、基本的に両国に文化的差異が存在することに起因しているものだと言えよう。ここから＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は、＜接触上の文化的差異＞に影響されると言えよう。上の例からは、話題の継続に関する困難には、話題に関心がないことがあるということも確認できる。

さらに、話題の継続は、＜接触に対する相手の関与姿勢＞にも影響される。次の例のように、相手が話題に積極的に関与しなければ、一方だけでは話題が持続できない。

有的日本人特别开朗，你和他说什么都会很开心。但是有的日本人不太愿意和你交流，他就想学习，就是朝着学习来的，也没有什么话题能够吸引他的，我主动往外拽话题都拽不出去，日本人和日本人性格都不一样。(No.19-8)

(とても明るい日本人もいて、そんな人とは何を話しても楽しいですが、あまりコミュニケーションしようとしなない人もいて、勉強しかしたくないようです。勉強のために来たので、彼を引き付ける話題があまりなくて、私がどう引っ張ってもやはりだめです。日本人でも性格はみんな違いますね。)

このように、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞に関して、話題の選択に関する困難は、相手が話題に関心を持ってくれるかどうかへの不安、相手との間で社会履歴や力関係において対等性が欠如していると感じることなどに起因し、話題の継続は、話題に関する知識が少ないこと、話題に関心がないこと、さらに相手の関与姿勢の如何が関わることが明らかになった。そこから、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は、＜コミュニケーションの困難＞・＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞・＜接触上の文化的差異＞・＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響され、そして、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は、逆に＜異文化接触の対人関係の不安＞に影響するという概念間の関係も確認された。

5.3.1.2.3 対等性の欠如による接触の困難

＜対等性の欠如による接触の困難＞は、接触の場の性質・状況や相手が異性であること、および、相手との間で年齢・社会履歴・力関係において違いが大きいことなどから、相手と対等性を感じることができず、対人関係の構築に困難を感じることである。

日本語専攻大学生は、接触の場・状況によっては緊張や不安を覚えることがある。

次の例は、日常的場とは異なる、改まった場における異文化接触に緊張を覚えるという発言である。

看是什么场合，如果就是普通的日常的情况还是可以的，但是如果稍微正式一点的就有点怯场了。(No.5-10)

(どんな場かによってやはり違いますね。普通の日常的な場合はまだいいですが、すこし正式の場合となるとやはり緊張します。)

次のような例は、日本人に中国語を教える接触場面において多く言及された。住宅で教えるように求められた上に、相手が異性である場合、不安を募らせるというものである。接触の場が公共的でない上、相手が異性であるという対等性の欠如によって、接触の過程において不安を覚えていることが了解できる。

又要去他们家里教，然后教的又是四、五十岁的一个男的。奥さん很少。都是男的，就还是那种印象的こわい，所以我就不想接触，就害怕。[I:你说的こわい指的是就是单身男性，来自于这种的こわい吗？] 对对对，就觉得危险，危险的感觉。(No.2-6)

(彼らの家に教えに行かなければならなかったんです。そして、教える相手は、4、50代の男の人でした。主婦は少なく、男の人ばかりで、やはり「怖い」というイメージがあります。ですから、接触をしたくなくなつて。とにかく、怖いです。[こわいっていうのは、男の人一人だからこわいんですよね。] はい、はい。危険だと思うんです。危険だつていう感じで。)

一方、このような、場が改まっていたり、相手が異性であったりすることによる対等性の欠如に困難を覚えない対極例も確認された。

其实有就是像我们传统观念会想啊，去人家上课，而且是个男的，是日本人，可能有点想法。但是我就没有想那么多。我是说想那么多干嘛，多累啊，也不会那样的。人家都是正经上班的人。然后我就劝她们，她们也就是有点打怵。(No.3-7)

(一般的な、古くからの考え方の人は、確かにそう考えるかもしれませんね。相手の家に教えに行つて、しかも向こうが男で、日本人ですので、そんなふうにするかもしれないね。でも、私はそんなふうにあれこれ考えないんです。そんなふうにいると考えると疲れますよ。そうじゃないかもしれませんしね。みんな、ちゃんと仕事を持っている人たちなんです。それで、彼女たちに怖がらないように勧めましたが、やはり怖がっちゃうんですよね。)

「相手はちゃんとした仕事を持っている人である」という認識に基づいて判断された結果であると考えられる。接触の場・状況や相手が異性であることをもともと気にしないというのではなく、その対等性の欠如を意識し、考慮した上で、相手がちゃんとした職業を持っている人であるため、危険でないという判断に到達したのだと考えられる。ここに対等性の欠如を最初は意識したことがあると出てきていないが、「一般的な、古くからの考え方の人は、確かにそう考えるかもしれませんね。相手の家に教えに行つて、しかも向こうが男で、日本人ですので、そんなふうにするかもしれないね。(其实有就是像我们传统观念会想啊，去人家上课，而且是个男的，是日本人，可能有点想法。)」(No.3-7) と言っていることから、この対極例も、実は<対等性の欠如による接触の困難>の存在を裏付けていると考えられよう。

相手との間で年齢・社会履歴・力関係において違いが大きいことなどから、相手と対等性が感じられず、対人関係の構築に困難を感じる、次のような具体例も確認された。

当時社団活动时日本留学生因为都是年纪大的，而且以前是上班族，所以没邀请。[I:那这个社団活动中为什么韩国人多呢？] 因为韩国留学生都跟我们年纪差不多啊。(No.15-14)

(部活していたとき、日本人の留学生が皆年上で、その上、前はサラリーマンだったので、部活に誘わなかったです。[I:この部活にどうして韩国人が多いですか。] 韩国人留学生は、私たちと年が近いからです。)

国際交流活動に年齢が近く、社会履歴も似ている韩国人留学生には参加を要請したが、年齢、社会履歴が異なる日本人には要請しなかったのは、年齢や社会履歴が対等的でないため、接触に困難があると予測したからであることが分かった。

次のように、接触の相手が会社における地位の高い者であったため、日本語専攻大学生は、その会社の人間でないとは言え、力関係を考えると、対等に議論ができないことに困難を覚えていたという例もある。

我得看这个人是什么样的人。他的话不会说，人家是个总经理，我有什么资格说人哪。(No.4-14)

(その人がどんな人かを見なければいけません。彼には[反対の意見を]言わないです。彼は総経理³¹だから、彼にそう言う資格がないんですよ。)

次の例では、協力者は、接触の相手が社会人であり、そして豊富な社会経験を持っているため、自分の力がそれに及ばず、対等的でないと認識して、不安を覚え、さらに、このような対等性の欠如によって、接触の中で相手と簡単な話題でしか交わることができず、それが原因で話が深まらないと語った。

接触到的大部分都是日企高管，他们在认识到我还是一个学生这样的身份，加上我当时日语其实还不好，交谈上的话题其实很浅。(No.10-7)

(接触できたのがほとんど日系企業の管理層の人で、彼らと知り合った時、私はまだ学生的身分で、その上、当時は日本語が下手で、コミュニケーションする時の話題も、実は浅いです。)

このように、＜対等性の欠如による接触の困難＞が＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞にも影響を与えることが支持される。

前述の「No.5-13」(本論の p.93 に掲載)の具体例から、年齢が上で、社会履歴が長い相手とは対等とは言えないため、現在の対人関係が浅いレベルに止まり、それ以上深くはならないだろうと不安を覚えていることが見られた。接触の中で、相手と年齢・社会履歴・

³¹ 中国語の言い方で、会社の事務を統轄管理する責任者のことである。

力関係において対等性が欠如している場合、相手との対人関係が持続できるか、さらにもどのようなレベルで持続するかに不安を覚えていることが確認される。〈対等性の欠如による接触の困難〉は、〈異文化接触の対人関係の不安〉を増幅させることが見て取れる。

このように、〈対等性の欠如による接触の困難〉は、接触の場の性質・状況が普段と異なること、相手が異性であること、また相手との間で年齢・社会履歴・力関係において対等性が欠如していると感じることなどが原因で、対人関係の構築に困難を覚えることであることが明らかになった。また、〈対等性の欠如による接触の困難〉は、〈異文化接触の対人関係の不安〉・〈接触場面における話題の選択・継続に難航〉に影響を及ぼすことも確認された。

5.3.1.3 価値づけによる消極的な接触姿勢

〈価値づけによる消極的な接触姿勢〉とは、異文化接触と比べて、他にもっと価値を認めることがあるため、異文化接触に対する態度が消極的になることである。ここでいう「消極的」態度は、接触頻度が低いこと、異文化接触自体、または特定の場での接触を持続していないこと、接触の価値に対して否定的な認識を持っていることなどによって判断した。

[I:为什么没有持续和外教的交流呢?] 我认为可能我并不是百分之百地把我的精力全投入到日语上, 我虽然很喜欢日语, 觉得学习日语对我而言是一个很大的助力, 但是我觉得光靠日语的话没办法在社会上立足。像大连这个环境, 日语专业是非常棒的, 但会日语的人才也非常多。如果只是日语水平高的话并不是一个非常大的竞争力, 所以我还是会想去学一些其他的東西。比如日语的簿記, 现在也拿到了 N2 证书, 也考过了 N1, 过一阵子还想去学一下商务日语和英语、俄语。所以我觉得有得必有失吧, 这种感觉。(No.14-1)

([I:日本人教師との交流はどうして続かなかったのですか。] 私は、自分の全精力を日本語に投入したわけではないんじゃないかと思います。日本語は、好きなのは好きで、それに日本語の学習は大きく役に立ちました。でも、日本語に頼るだけだと、社会でしっかり立ってはいられないです。例えば、大連みたいな環境では、日本語専攻はとってもいいですけど、日本語ができる人材も多いです。日本語のレベルだけが高いとしても、大きな競争力にはならなくて、その他のものも学ばなければなりません。例えば、日本語の簿記などです。今、N2 の資格を持っていて、N1 にも合格しました³²。しばらくしたら、ビジネス日本語や英語やロシア語なども学びたいです。つまり、得るものがあれば、失うものあるって、そんな感じです。)

協力者 [No.14] は、学部によって、市レベルの弁論大会向けに開設された「日本語スピ

³² 「N1」や「N2」は、日本語能力試験 (JLPT) の能力基準を指している。この能力試験は、「N1～N5」の段階に分かれており、N1 がもっともレベルが高い。

一チクラブ」に選抜され、日本人教師による個別指導を2か月ほど受けていた。その間、日本人教師と多く接触したが、スピーチクラブ活動の終了とともに教師との接触をも諦めた。その原因は上記の語りのとおりであるが、そこから異文化接触より、将来に繋がる各種の資格や技能を学習するほうがもっと重要であるという認識が見受けられる。中国の日本語専攻大学生においては、教室内での日本語学習とその成績結果、日本語能力試験、英語の資格試験、その他の資格試験などへの合格を意識するような学習志向、成績志向、資格志向が強く、また、将来の就職のために、専攻の日本語以外にも、他の知識や技能の学習に時間を多く投入する傾向がある。そのため、たとえ異文化接触を開始したとしても、接触中は、消極的姿勢で臨んでおり、特に異文化接触と学習で時間が衝突する場合、接触のほうを諦めがちである。一方、上記の志向と反対の、次のような対極例もある。

然后还可以就是学习很忙，那时候就白天课很多，嗯，白天上课之后，嗯，下午可能7点到10点，我在那我没有把它当做是兼职，我是把它当做我自己去放松自己了。[I:那学校里的复习怎么办?] 10点回来再复习呗，不是一天都有课，下午有课[汉语教室的课程]的话我上午去图书馆。(No.4-16)

(それから、勉強が忙しいです。その時は昼間の授業が多くて、うーん、授業が終わった後は、午後7時から10時までアルバイトをした。でも、私はそれをアルバイトと見てはおらず、自分をリラックスさせることと見ているんですよ。[I:学校の復習はどうしますか。] 10時に帰ってからすればいいですよ。また、一日中ずっと授業[中国語教室での授業]があるわけでもなくて、午後もし授業があれば、午前は図書館に行きます。)

上の例からは、時間を調整することで異文化接触と教室内での日本語学習を両立させようとする認識が伺える。上記の2つの語りから、接触の中で消極的な接触姿勢をとっているのは、異文化接触に価値を認めないからであることが分かる。

部活、学生会³³の活動、自分の趣味などに価値を認め、多くの時間をかけているが、すでに開始した異文化接触に対しては消極的な態度で臨む具体例も見られる。協力者[No.12]は、日本人教師と留学生と接触を行ったが、接触頻度が「少し」で、そして接触が「持続していない」状態である。その原因に関しては、今参加している部活のほうがもっと重要であり、異文化接触に対しては興味がないと語ったが、それは基本的に異文化接触に価値を認めないということであると考えられよう。

[对跨文化接触] 就是没有那种，你让我一心一意投入其中的这种兴趣的推动，没有兴趣我觉得就是会差一些。(中略)。就是像我这种，就是我从小就属于那种兴趣不到就不愿意学这样的。(No.12-6)

³³ 中国の大学には学部を単位に作られる「学生会」という、学生の自治管理組織がある。

〔異文化接触〕に対してやはり興味がないですね。全身全霊でやりたいという興味がないければちょっとね。（中略）。私は小さい時から興味がないければ学びたくないんです。）

Eccles (1995: 215-225) は、「価値」を4種類に分けて論じているが、そのそれぞれは、「獲得価値 (attainment value)」・「内部価値 (intrinsic value)」・「外部実用価値 (extrinsic utility value)」・「代価 (cost)」である。「獲得価値」は、あるタスクに従事し、その成功が自分に望ましい場合、そのタスクに「獲得価値」があると認識される。「内部価値」とは、タスクに従事することによって楽しさが得られること、あるいはタスク自体に興味がある場合のことを指す。タスクに従事することが将来の職業的な目標の達成に寄与する場合、そのタスクには「外部実用価値」がある。「代価 (cost)」は、タスク自体や失敗に不安を持ち、また、選択に伴ってコストを払わざるを得ない側面のことである。本調査で言えば、教室内での日本語学習とその成績、将来の就職に繋がるための資格試験や他の知識・技能の学習は「外部実用価値」であり、部活、学生会活動、自分の趣味などは「内部価値」であると考えられる。それらの「外部実用価値」、「内部価値」のほうに価値を認め、反対に、異文化接触に時間をかけ、持続しようとするを、「代価」を払うことと見て、これに消極的な態度を取る日本語専攻大学生の存在が本調査でも確認された。

このように、接触に対する価値づけによっては、日本語専攻大学生が異文化接触の中で、消極的な態度を取り、接触が持続できなくなることもあることが確認された。

5.3.1.4 異文化による摩擦

サブカテゴリー〔異文化による摩擦〕には、概念<接触上の文化的差異>と<固定観念による文化摩擦>が内包されている。

5.3.1.4.1 接触上の文化的差異

<接触上の文化的差異>とは、日中両国における価値観の相違や習慣の文化差によって困難や葛藤を覚えることであるが、それに関する語りが豊富に現れた。

就问了你好多好多。然后我就感觉她有点为难我。后来我那个学姐告诉我，其实不是，她就是想知道你的想法怎么想。觉得她还是挺看重你的思考能力的。(No.1-11)

(あれやこれやと聞かれたんですよ。その時ちょっと困らされた感じがしました。後でその先輩から聞いたんですが、実は、先生はわざと私を困らせているのではなく、ただ私がどう考えるかを聞いたかっただけです。先生は、ずいぶん思考能力を重要に考えているんだなと思いました。)

教室内で教師に知識を教えられる教授法に慣れていた協力者 [No.1] が留学先の大学院の教師にインターネットで多く質問され、その思弁式質問の仕方に不慣れで、困らされたと感じたという語りであるが、そこに日中間の教育観の差異が見られる。

日中間におけるコミュニケーションスタイルの相違によって困難を覚えることがあることも確認された。これには、以下の3点が挙げられる。

まず、感情や意見の表し方によるものである。

絶対不一样，嗯，肯定不一样。就是我觉得比如说咱中国人哈，要是不喜欢的话就很容易表现出来，但他们不喜欢的话可能也不会表现的。(No.2-14)

(絶対違います。うん、確かに違います。例えば、私たち中国人は、ですね、もし好きでなければあっさりことばに表すのではないのでしょうか。でも、彼らは、好きでなくてもそうは言わないことがあるんですよ。)

この語りから、接触の中で、中国人が感情や意見を素直に表すとは反対に、日本人が感情や意見をむき出しにしないことに対して、日本語専攻大学生が強い違和感を覚えていることが分かる。日中間の感情や意見の表し方において差異の存在が判明したために、次のように、日本人が本心を出さないという誤解に陥ったケースもあった。

我觉得他们吧，就表面上都会看起来跟你很好，真的心里怎么想，不太知道。(No.2-14)

(彼らは、表面上ではみんな仲がよさそうにしますが、心で何を考えているか、本当によくわからないですね。)

次は、話題作りの態度によるものである。

但是基本我感觉日本人对他们来说，主要是以老师 [汉语教室的中文老师] 引导话题为主，他们不会主动提出一些话题。也有，但是很少。(No.3-10)

(でも、日本人について言えば、基本的には、やはり教師 [中国語教室の中国語教師] が話題をリードするようにするのが大事だという感じがします。日本人は、積極的に話題を出してこないですね。そうする人は、いるにはいるんですけど、とても少ないです。)

これは接触の中で、相手の日本人が話題を作るのにあまり積極的でないと学習者が認識し、違和感を覚えたという発言であるが、それは同時に、接触の中では、日本語専攻大学生のほうが積極的に話題を作ると、逆に言っているのではないかと読み取れる。日本語専攻大学生が接触する時、どのような話題が適切かと悩まされたことが、＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞の議論の中で言及されたが、そこに日本語専攻大学生の話題作りに対する積極的態度が一部伺われる。そこから、話題作りの態度に対して両者の間に

ギャップが存在するため、日本語専攻大学生が違和感を覚えたとも見てとれる。

最後に、日本語専攻大学生が日本人の言語コミュニケーションスタイルに違和感・困難を覚えていたという、次のような語りも確認された。

[I:你觉得会哪个方面有困难?]我觉得……我觉得就是很简单的说话方式就很难，就是你把所有的事情都要绕一个弯，再跟他说。(No.7-12)

([I:どの面に困難があると思いますか。]例えば、簡単な話の仕方でも難しいですよ。というのはすべてのことを遠回しにしてから、相手に話すことです。)

上の語りのように、日本語専攻大学生は、相手の日本人の遠回しな言語コミュニケーションスタイルに困難を覚える。そして、また、次のような曖昧で婉曲的な話し方に戸惑いを感じたという例も、多く確認された。

整体的话应该是很顺利。不过中间也有我以前不知道的东西，就是稍微有点不同。算不上摩擦，就是有一点点違和感。[I:什么地方有違和感呢?]比如说一个是交流方式上，他们都比较暧昧、比较委婉说的。(No.18-4)

(全体的に順調だと思います。でも、その間、私が前は知らなかったこともあって、そこはちょっと違ってましたね。摩擦というほどではないですが、ちょっと違和感があります。[I:どこに違和感を感じますか。]例えば、コミュニケーションスタイルにおいて、日本人は、どっちかって言うと曖昧に、婉曲に言いますね。)

<接触上の文化的差異>において最も葛藤・困難を感じたのは、日本人が「冷たい」、「温情がない」という認識によるものである。以下、2つの具体例を見る。

说实话，我觉得日本人的话就是还是生性比较冷淡，是比较冷漠的，就是没有中国人的那种温情，温情比较少。(No.5-2)

(実を言うと、日本人は、やはり性格が、どちらかと言うと、冷淡ですね。ちょっと冷たいです。中国人ほど温情がない、なんとなく温情が少ないです。)

和中国人交往的时候，就是嗯你交往的时间长了，你可能就是关系越来越好了，就是感觉这个温情的感觉更多一些，啊，就是可能交往时间越长，我们礼貌少了，但是温情多了就是互相呀，心更近一点，然后就不拘小节了，但是日本人呢，虽然交往的时间长，但是这个礼节还是要注意。就是他们，而且就是感觉现在心的距离也没有那么近，就是我们虽然认识、熟悉，交往时间也很长，但是你还是你我还是我，咱俩关系就是师生关系，然后就是普通的朋友关系，就不会走得特别近。(中略)。就不太好，他们也可能比较就是除了那些课上的东西，他也不会啊不会给你唠其他的，也不愿意跟你唠，就是嗯这样，就感觉有点冷たい。

(No.5-9)

(中国人と付き合う時は、付き合う時間が長くなれば、仲が良くなり、温情も増してきます。長くなれば、礼儀やマナーが要らなくなり、でも、お互いに温情が強くなるため、心が近づき、細かいことにこだわらなくなります。しかし、日本人の場合、付き合いが長くても、礼儀やマナーなどに気を付けなければなりません。また今心の距離もさほど近くないと感じます。互いに顔見知りによく知っていて、付き合っている時間も長いのに、あなたはあなた、私は私です。[中国語教室の]教師と学生の関係です。あるいは、いわば普通の友達関係です。深く近づかないのです。(中略)。これは良くないと思います。授業以外のことについてあまりしゃべってくれないことがあります。うん、ちょっと冷たいと感じます。)

上の語りから日本語専攻大学生が日本人を「冷たい」、「温情がない」と見、そしてそれに対する葛藤の原因は、2つの方面に集中しているものと見られる。

第一に、対人関係を構築する時、「公」と「私」に対する両国間の認識が異なることが了解できる。中国語教室での異文化接触の場合、日本語専攻大学生は「中国語教師と中国語学習者」という「公」的關係が、「ただの友達」ではない「私」的關係になるだろうと期待したが、しかしそれはできず、葛藤を覚えた。中国人同士の場合、長く付き合えば、「公」的關係が「私」的關係に変わることが期待されうるが、日本人との場合、「公」と「私」を区別する姿勢を取られると、ギャップが生じ、「冷たい」とか「温情がない」とかいう認識に陥るといふ心理経路が、ここに伺われる。陳(2004)は、中国人は、対人関係に強い親縁性と人情性を持っており(陳2004:126)、「感情交流³⁴」を求める傾向が強い(陳2004:162)と論じている。人と接触することは、ただの意味の交渉や情報の交換だけでなく、感情を交流することのほうがもっと重要で、接触しているうちに互いに近づき、距離を縮め、感情的共鳴を得ることが求められる。そのため、中国人の場合は、「公」と「私」の間の境界線が明確でない。しかし、日本人の場合は、「公」と「私」の間の境界線が一般によりはっきりしていると見られる。日本語専攻大学生は、日本人の生徒と「私」的關係になることを期待していたが、「公」的關係のままにされて、葛藤を覚えていたのである。

第二に、中国人においては、長く付き合えば、礼儀やマナーにこだわる必要がなくなり、それらが少なくなることによって心理的距離が近くなり、温情が生まれると認識されている。日本人の場合、長く付き合っても、礼儀やマナーが依然として細かく注意されているため、協力者[No.5]の日本語専攻大学生は、接触の中で、相手と心理的距離が遠く、「冷たい」、「温情がない」と悩まされていたのである。そこに両国の対人関係構築の仕方において、礼儀やマナーに対する認識の差異が存在していることが明らかになった。陳(2004:205)は、中国人は人と接触する時、「間」のない心理的距離が望まれると指摘している。

³⁴ 陳(2004:162)は、「情感交流」という中国語を用いているが、本研究において筆者はそれを「感情交流」と和訳した。

一方「親しき仲にも礼儀あり」というように、日本人はむしろ「間」のある心理的距離のほうが安心する。その「間」は、まさに礼儀やマナーで作られるものであると考えられる。一方は、心理的距離を置かない人間関係を求める中国人、他方は「親しき仲にも礼儀あり」という認識の強い日本人、両方が接触する時にギャップが生じることは十分に考えられる。

以上の2点から、対人関係構築の仕方において両国に認識のギャップが存在し、それによって日本語専攻大学生が困難や葛藤を覚えていることが明らかになった。

日中両国間の習慣が異なるため、接触中、困難や葛藤を覚えたという例も見られる。

就是可能我遇到过一个人，那个人40岁吧，差不多，嗯，我那时给他代了一次课。嗯，上课期间就是说我大，就是说我大きい。然后在上课期间就说起了这个吃东西，他说他喜欢在楼下超市里买香蕉啊、柿子啊什么的，我说我也喜欢吃香蕉，他说噢怪不得你这么大。然后上课之间一直在说我大。但是我就是嗯没有就是不开心怎么样，我就觉得啊可能就是你是开玩笑或者怎么样，但是没有多心。但是我觉得这样对于初次见面的人来说那样说不太好。

(No.3-2)

(ある日本人に出会ったことがあります。40代かそこらで、私、友達の代わりに一度教えました。で、授業の時、私が大いと言われました。私が大いと言うんです。それから、授業の時、食事の話に触れましたが、住宅の一階にあるスーパーでバナナや柿などを買うことが好きですって。私もバナナが好きですって言ったら、相手に道理で大きいよねと言われました。それで、授業の間、ずっと私が大いと言っていました。私は、別に怒ってはいなかったんですが、向こうは冗談か何かかもしれないんですが、私は気にしないことにしました。でも、初めての人に対してそういうふうに言うのは良くないと思います。)

協力者が戸惑いを感じていたのは、中国語では「体が大きい」という言い方は女性に対して失礼であるが、日本語ではそのようなニュアンスがないということである。特に、初めて会った相手にそう言われたため、一層の違和感を覚えたものと思われ、日中間における言語習慣の文化差によって戸惑いを感じていたことが読み取れる。

言語習慣のみならず、日本語専攻大学生が日本の風俗習慣に関する知識が欠如しているため、接触中は挫折しなかったとしても、後で気付くと悔しさを感じたり、当時の対応の仕方が適切かと迷ったり、さらには異文化接触に不安を覚えたりするなどのことが生じることもある。

和日本人之间可能就是礼节上还是就是知道的有点少。嗯，我记得我不知道，之前不知道那个礼节之前，好像嗯引导别人的时候，真的是就走在人家后面之类的。(No.19-10)

(日本人との間礼儀については、やはり知っていることが少ないですね。うん、知らないですね。そういう礼儀を知る前に、例えば、人を案内する時、その人の後ろを歩いたなんていうことがあったんです。)

日本の風俗習慣、特に礼儀・マナーが中国と異なるという差異による困難は、SNSでの接触でも発生する。

在网上用推特之类的跟那个日本人聊天的时候就觉得他们真的超级麻烦。就是礼仪特别麻烦，就是推特因为像咱们微博似的，但是他们特别麻烦。我去关注人家，我要先说失礼了我要关注你，然后人家说谢谢，这才能关注，要不然就会生气。特别麻烦，就哪怕没有设置，你也要先说一声すみません。然后别人要是回了，你也得说すみません。他们那个套话就是日本礼仪中的一部分，那种感觉我觉得也算是相当麻烦。你像中国人的微博关注就关注了，那就完事了，想关注就关注不想关注就取消，在日本就不行！[I:为什么不行啊？]这不人家会觉得你没有礼貌嘛。他会在他自己的里边[推特]说：“那个人不说一声就来关注我，很生气。”(No.15-4,5)

(インターネットでツイッターなどを通して日本人とコミュニケーションする時、チョーウザいと思いました。礼儀がととてもウザいです。ツイッターは、中国の「微博」と似ているものですが、日本のほうがずっと面倒くさいです。相手をフォローする時、まず「失礼します。フォローさせていただきます」って言って、「ありがとう」という返事が入って始めてフォローできますが、そうじゃなければ怒られてしまいます。とても面倒くさくて、例えば向こうはその設定がなくても、やはりまず「すみません」と声をかけて、返事が入ったらまた「すみません」と言わなければなりません。それらの常套句は、日本の礼儀の一部分で、本当にウザいと感じました。中国の「微博」みたいにフォローしたければフォローすれば、それで終わり、フォローしたけりゃするし、したくなきゃキャンセルすればいいんですよ。日本ではそれじゃだめです。[I:どうしてだめですか。]向こうに失礼なやつだと思われちゃうかもしれないですよ。その人、自分のところ[ツイッターの中]で「あいつ、声もかけずにフォローしてきて、腹が立った」って書いちゃいますよ。)

日本の価値観や習慣が中国と異なるため困難を覚えるのみならず、日本語専攻大学生は、相手の、中国の価値観や習慣に関する知識の欠如にも違和感を覚えるということが判明した。

就是他们对中国的一些东西，就感觉很不理解，他们对中国不了解、不理解啊，就是有一些现象。具体的想不起来了。(No.12-7)

(日本人は、中国のものごとをあまり理解していないと感じます。彼らは、中国を分かっていますよ。理解してません。それは、いろんな現象から見られます。具体的には思い出せませんが。)

<接触上の文化的差異>は、価値観や習慣における両国間の差異に基づいたものである

が、そこで、価値観や習慣が異なるために悩む者もいれば、日本の価値観や習慣に関する知識が欠如しているため、戸惑いや不安を感じる者もいる。また、中国の価値観や習慣への相手の不理解に対して困難を覚える者もいる。＜接触上の文化的差異＞という問題の解決に向けて、日本語専攻大学生は、接触中、日本の価値観や習慣に対する感受性を高めて、日本の価値観や習慣に関する知識を蓄積する必要があると考えられる。また、中国と異なる価値観や習慣に会った時、その面での知識が不足でも、寛容な態度で差異の存在を受け止め、その上で柔軟に対応することが求められる。さらに、相手の中国文化に対する不理解に対しても、客観的で寛容な態度で接し、対応するとよいと考えられる。

5.3.1.4.2 固定観念による文化摩擦

＜固定観念による文化摩擦＞とは、相手の、中国に対する固定観念による言語・非言語上の行動に苛立ちを感じることであり、または自身の日本に対する固定観念によって異文化接触が阻害されることを指す。第2章においては、「態度」の要素に、「イメージ」と「偏見」と「ステレオタイプ」が挙げられ、そのうち、「偏見」は「態度」の「感情的」側面、「イメージ」と「ステレオタイプ」は「態度」の「認知的」側面をそれぞれ反映すると確認した。本研究は本節に提出した「固定観念」は「ステレオタイプ」と「偏見」を包括するものとする。それは中国の日本語専攻大学生における日本文化に対する「態度」に感情的偏見・認知的ステレオタイプの両方があるが、それらを区分せずに包括的に「固定観念」と提示したからである。

定義の通り、＜固定観念による文化摩擦＞は、相手の中国に対する固定観念によるものと自身の日本に対する固定観念によるものに分けられる。前者は、日本語専攻大学生が、接触の中で、相手から中国を否定する話題やデリケートな話題を出された時に生じることが確認された。

这样的事情遇到了两次，因为[汉语教室]上课的时候确实是比较吵，然后[爆竹]放了很长时间，说话听不清楚，我感觉就是有一点是文化的差异嘛，但是我觉得就不应该用那种那样的眼神来看我们的文化，就是表现出了一种特别讨厌的眼神，我觉得这个不太好。

(No.3-2)

(こんなことに二度出くわしました。[中国語教室の]授業の時、確かにけっこううるさかったんです。[爆竹を]長く鳴らして、声ははっきり聞こえなかったですから。私は、それはちょっとした文化の差異だと思いますが、あんな目つきで私たちの文化を見るのは良くないと思います。それはもう、とても嫌な目つきをしていました。そういうのは良くないと思います。)

中国の風俗習慣を否定的に見られ、それに戸惑ったという語りである。両国における風

俗習慣の差異による問題であるが、それを否定的に捉えられ、中国に嫌悪の念を抱き、偏見を持っているのではないかと協力者が認識し、心痛を覚えていることが伺われる。風俗習慣以外にも、日本語専攻大学生は、中国人の行動様式を否定する話題をされた時に困難を覚えることがある。

他说现在日本的企业，因为随着中国的什么就是工资就是那叫什么劳动力的实惠的那个时代，他说已经慢慢要过去了，所以他们现在把工厂转到什么泰国呀、越南那些地方。然后他就说什么中国人如果不改不讲理的这个毛病，他说以后就是什么，日本的这些企业呀，就会慢慢地，还有别的国家企业也不会在中国再呆多久的，说就会挪到那个泰国呀、马来西亚那些国家。（中略）。觉得他可能也有点个人的情绪在里面。但是我问了一下就在美国留学的那个（日本）人，他说根本不是这个原因，他就是因为现在越南和泰国比中国劳动力便宜所以才走的，并不是说因为中国人不讲理呀、做东西不认真的原因。（No.0-A2）

彼は今、中国の人件費が安い時代がもうすぐ終わってしまうので、それで日本の企業は工場をタイやベトナムなどの国に移すことにしたって言いました。そして彼は中国人がいい加減な欠点を変えなければ、日本の企業だけでなく、他の国の企業もだんだん中国から離れて、タイやマレーシアなどの国に移るかもしれないよと言いました。（中略）。彼は個人の感情を中に入れているのではないかと思います。でも、私はアメリカに留学してきた日本人に聞いたら、それが原因ではなくて、ベトナムやタイが中国より人件費が安いから移っていったので、中国人がいい加減だからとか、仕事に不真面目だからとかが原因ではないって教えてくれました。

上の語りから、この協力者は、日系企業が中国から撤退することを、中国人の「いい加減であること」に帰結した相手の主張は、中国人の行動様式に偏見を持っているからだと認識し、そしてそれに戸惑い、困難を覚えていることが分かる。日本語専攻大学生の、いくつかの語りから、中国人の行動様式において固定観念を持たれがちな問題に、上述の「いい加減であること」のほかに、「不真面目であること」や「間違っても謝らないこと」などがあることも見られた。

このように、相手国やその文化に固定観念を持っていると、自文化と異なる面を否定的に捉えることとなり、それが顕在化すると、相手を戸惑わせ、異文化接触に支障をきたすことが考えられる。ここから、＜固定観念による文化摩擦＞は、＜接触上の文化的差異＞を複雑にさせることが伺える。

一个△△△公司的总经理，嗯，不是很顺畅。也顺畅，也可以称为顺畅，但是就感觉不一样。嗯，就是他也挺照顾我的，但是就总感觉很中间隔了一座大山。〔I:这个大山是什么呢？〕嗯，就是我感觉他对中国的认知，嗯，他就觉得中国不好，嗯，真是无法跨越的鸿沟。（中略）。他会给我讲很多中国从日本学的东西。嗯，然后，嗯，中国人那个很多不好的方面。（中略）。

他总说中国存在的各种问题，说中国这不行那不好。我就有时候有点生气。但是后来想想他说的也没错。[I:然后他说了什么中国什么让你受不了呢？]他说中国假的东西太多了，什么都是假的，全部都是假的。(No.0-B1)

(△△△社の総経理とは、うん、あまりうまく行かなかったです。まあ、順調だったとも言えますが、やはり違和感がありますね。彼は私には優しいですが、いつも二人の間が山で隔てられているようです。[I:この山というのは何ですか。]うん、彼の中国に対する認知です。彼はいつも中国が良くないと思っているらしいです。それは、ほんとうに埋めることのできないギャップです。(中略)。彼は、私に、中国が日本から学んだことをあれやこれやと言ってきます。それから、中国人の、たくさんの良くないところの話。(中略)彼はいつも中国にある各種の問題を言ってきて、中国のここが良くないとか、そこがダメだとか。私は時にちょっと腹が立ちますけど、考えてみたら、彼が言っているのも間違っ

てはいないと思います。[I:彼のどんな話が受け入れがたかったのですか。]彼は、中国には偽物が多くて、なんでもかんでも偽物で、全部が偽物だって言うんです。)

固定観念による相手の中国認知に対して、日本語専攻大学生は、自分とこの日本人との間は「山で隔てられているよう」であり、「埋めることのできないギャップ」が存在すると例えている。さらにそれによって相手との接触を断念しようとしたケースもあった。〈固定観念による文化摩擦〉は、カテゴリー【困難】のうち、もっとも感情的に難しいと捉えられているものであると了解できる。そのような感情になった心理を探究するには、次の語りを見るとよいだろう。

我觉得他们说，就是好像他们站在高的地方看，这个不好的。(No.2-16)

(彼らがいつも高いところに立って見下ろしているようで、それが良くないです。)

このように相手に見下ろされているような心理が働いていることが伺える。この「見下ろされている」という気持ちは、日本語専攻大学生である「私」個人ではなく、中国に向けられているように見受けられる。ここに「国家アイデンティティ」の自覚と「愛国心」の生起が伴っていると考えられる。「国家アイデンティティ」は、他国や他文化と比較する時の、自国や自文化の一員としての自己認識であるが、「愛国心」は「国家アイデンティティ」と比べると、情意的側面が見受けられる。

后来还有一次，其实在后半期的时候，我们在讲课的时候，我给他讲课我有一点排斥了，就不太想给他上课了。因为什么呢？外面又放鞭炮了，每次一放鞭炮他就可不乐意了。他的脸就特别不乐意的样子，然后每次一这样的时候，我得跟他说一句“すみません”。虽然我不说也可以哈，但是我感觉打扰到他了，就给他道个歉呗是吧？然后他就说那不是你的错什么的，然后说了好多，最后来了一句“不思議な国”。他说的“不思議”就是我感觉好像就我就

觉得我们不就是放鞭炮了，咋就能“不思議”了？我觉得带有讽刺的意味，所以说我心里挺难受的。(No.0-A7)

(あとで、もう一回、実は後期に[中国語教室の]授業をした時、彼への授業に抵抗感を持つようになって、教えたくなくなりました。なぜかという、外ではまた爆竹を鳴らしていましたが、彼は爆竹の音がするたびにいつも暗い顔をしていました。彼は、すごく暗い顔をするんです。それで、そうなるたびに、私は必ず彼に「すみません」と言います。言わなくてもいいんですが、彼に迷惑だと思って、お詫びをすればいいと思ったのです。彼は君が悪いのではないとかなんとか言って、それからなんやかんや言って、最後に一言「不思議な国」だと言うんです。彼の言う「不思議な国」って、ただ爆竹を鳴らしてただけじゃないですか、何が「不思議」なの？皮肉が混じっている感じがして、とてもつらかったです。)

他就问我中国怎么样，我说中国高中之前是不允许谈恋爱的，如果要是谈恋爱了学校会有一些的就是惩罚。然后他就说了一句话，他说呢，恋爱这种东西怎么能阻止得了呢，与其把这个精力放在阻止早恋上，不如管一管中国的这些孩子们。他们成天拿着那个手机，拿着 iPad 打游戏，“ばか、あほう”。他用“ばか、あほう”这样的语言形容我们的孩子。我其实当时心里听了挺难受的。就是说这句话，因为我觉得为什么我们中国人要被这么说成是傻瓜呢？我就很难受。(No.0-A6)

(彼は、中国はどうですかと聞いてくれたんですが、私は中国では高校まで恋愛が禁止されていて、恋愛したら間違いなく学校に罰せられると答えました。そしたら、彼は、恋愛みたいなものをどうやって止められるんだと言って、恋愛を止めるのに精力を使うより、中国の子どもを厳しく監督しなければならないって言いました。中国の子どもたちは一日中スマホやアイパッドを出してゲームしているから、「馬鹿、あほう」だと言いました。「馬鹿、あほう」みたいな言葉で我々の子どもを形容したんです。それを聞いて、本当につらいです。どうして、私たち中国人は馬鹿だと言われなきゃならないんですか。耐えられないですよ。)

この2例から、この協力者[No.0-A]は、相手に中国を否定するような話をされた時、国家アイデンティティを自覚し、さらに、自分を国と一つにし、国の立場に立って相手の発言を捉え、あるときは教室外の爆竹音について日本人に詫び(No.0-A7)、またあるときは同国民の子供たちをバカ呼ばわりされて、耐えがたい辛さを感じていた(No.0-A6)のである。ここに、協力者の「愛国心」の発露を感じる。

「愛国心」とは自分の国家に対し、愛着や忠誠を抱く心情であり、それが、また「民族自尊心」と表裏一体の関係である。「民族自尊心」の「民族」は「中国」を指しており、「中国」をまとまった一つの「民族」と見る捉え方であるが、「民族自尊心」は中国人が「自分」を「国」とを一つにする意識であり(陳 2004 : 272)、「国家アイデンティティ」と比べて、

自分が国と一体となって、国の立場を守るといった情意的側面が強調されていると解釈される。それをさらに掘り下げると、「日本に見下ろされているような感じで、耐えがたい」(No.0-A6) から見られた「国家アイデンティティ」および「愛国心」・「民族自尊心」に日中間の歴史問題が深く関わっているのではないかと考えられる。

このように、接触の中で日本語専攻大学生が相手の固定観念によって中国を否定するような話をされた時、これを「見下ろされている」ように感じたのは、「国家アイデンティティ」と「愛国心」・「民族自尊心」に根差しているためであるということが明らかになった。

嗯，然后就是只要不谈一些敏感的话题之外他人还是挺好的。对，他就跟我谈过一次，就是南京大屠杀的那个。然后他就问我相不相信有这个事儿，然后我说我当然相信了。然后他就说这个可能是假的，怎么怎么样，然后说因为那个什么录像啊什么的，又不是真实经历，可以伪造。然后我当时就觉得，唉呀，不知道怎么说。(No.0-A1)

(デリケートな話題に触れなければこの人は、いい人ですよ。うん、一度だけですが、彼は南京大虐殺の話題に触れました。それを信じますかと聞かれました。もちろんって答えたら、向こうからそれは嘘かもしれないよとかなんとか話しました。映像などは本当の経験でもないとか、偽造できるとかって。その時はどうしよう、どう答えたらいいかわからなかったです。)

また、上記のように日本語専攻大学生が接触の中で相手にデリケートな話題を出されたことに戸惑い、困難を覚えていたことも確認された。「デリケートな話題」とは、ここで日中間の歴史問題、それと関係のある政治問題を指すこととする。相手にこのような問題を出され、なかならずそれまでの認識とは異なる理解を示されたら、日本語専攻大学生は「どうしよう、どう答えたらいいかわからなかった(然后我当时就觉得，唉呀，不知道怎么说)」というように戸惑い、反応に困った。

话题方面的摩擦，就是可能像战争啊那种就比较敏感的话题，我一般会避开，就是不谈就是不说。或者说是最近中日关系，有的时候会说唉中日关系不好，他说啊是，他就也不深聊，我就不愿意再深聊。[I:那为什么你不想就深聊呢？] 还是因为我也怕就是产生，就是他是这么想的，我不知道我是不是会很生气，我说的话会让他生不生气，这样的话对双方都不太好。(No.5-8)

(話題に関する摩擦ですね、例えば戦争などのようなデリケートな話題に対して、私は一般的に避けて、話さないですね。あるいは最近の日中関係について、時に日中関係が良くないですねって言ったら、相手もそうだねと言ってくれました。向こうは深く話さないし、こっちも深く話したくないです。[I:どうして深く話したくないんですか。] 向こうの理解に私が腹を立てるかもしれません。また、こっちの言った言葉が相手を怒らせるかもしれません。そうならば、双方に良くないと思いますから。)

上記の対極例から日本語専攻大学生が接触の中でデリケートな話題にならないように工夫したことが理解できる。デリケートな話を持ち出されたら、相手の異なる認識に苛立ちかねず、意見交換をすると、相手を怒らせるのかもしれないため、葛藤する気持ちが伺える。そこに「国家アイデンティティ」および「愛国心」・「民族自尊心」が働いているのではないかと考えられる。

上記のように、日本語専攻大学生は、中国を否定する話題、またはデリケートな話題を持ち出された時、戸惑い、感情的に難しいと感じていることが明らかになった。さらに、それらのような感情は「国家アイデンティティ」と「愛国心」・「民族自尊心」に根差していることも推察できる。一方、中国を否定する話題、デリケートな話題を持ち出されることはどちらの場合も相手の中国に対する固定観念に基づいているが、この2種の場合とは反対に、日本語専攻大学生側の日本に対する固定観念によって接触が阻害されることも見られる。

然后吧，就发现她们好像比如说不用东西就是，比如说我要回国了，我就把我这东西留给你你来用吧，她可能觉得中国人是不是可能没发展，还穷，所以说我把这个东西给你？
(No.0-A3)

(それから、例えば、なんか自分に要らない物について、「私は帰国するんで、これ置いていくから、使ってみたら」って言ってきました。中国は発展途上で、まだ貧しいから、これあげるって思ってるかもしれませんよね。)

相手の日本人が帰国する前に、おさがりをくれたことに対して協力者 [No.0-A] は、相手が中国を貧しい国だと見ているからかもしれないと認識していることが分かる。そこに、「日本は中国を見下している」という日本人への固定観念が持たれていることが伺われる。そのような固定観念に左右され、風俗習慣の差異による問題を両国間の関係問題として捉えているのである。さらに、日本人が中国を見下しているという認識の底流には、「国家アイデンティティ」と「愛国心」・「民族自尊心」があり、さらにそれが歴史問題とも深く関わっているものと見られる。

日本に対する固定観念によって中国と異なる日本の風俗習慣や考え方を否定的に捉えることが上のような事例で確認された。異なる風俗習慣や考え方という要因以外、日本人のコミュニケーションスタイルに固定観念を持って、異文化接触に支障をきたすケースもある。

还有一种比较负面的一些感觉，我就觉得日本人相比于中国人来讲，不是说非常的阳光的那种。有的时候不阳光，它和单纯的性格其实不是一个事情，我是觉得他们有可能受到了比如说文化的影响，或者是工作压力这种，不是说人存在什么性格缺陷，而是整个人给人的感觉不是非常的阳光，是比较郁闷那种，有好多的人会有这样感觉，特别是职场上的人。

(No.16-8)

(もう一つちょっと良くない印象があります。中国人と比べて、日本人はあまり明るく
と言えないですね。暗いことがときどきあります。それは、ただの性格とは別のことです。
文化からの影響か、または仕事のストレスみたいなものからの影響かもしれませんね。性
格的に何か欠けているんじゃないかと、人に与える感覚が明るくない、ちょっと陰鬱な感
じですね。多くの人にこういう感じがします。特にサラリーマンです。)

このように、日本語専攻大学生で日本人が明るくないというステレオタイプを持っている
人がいることが確認される。これは、日本人が言葉数が少なく、沈黙志向だというコミ
ュニケーションスタイルに起因しているのではないかと考えられる。そのようなステレオ
タイプを持っているため、接触の中で「ちょっと良くない印象があります（比較負面的一
些感覚）」と感じていたのである。

固定観念によって日本の風俗習慣や考え方を否定的に捉える可能性のあることから、
固定観念による文化摩擦は、接触上の文化的差異を複雑化させることが伺える。一
方、日本人のコミュニケーションスタイルへの理解不足によって固定観念を抱き、さらに
それが異文化接触を阻害することもあることから、接触上の文化的差異は固定観念
による文化摩擦を引き起こしやすいことも判明した。接触上の文化的差異と固定
観念による文化摩擦は、相互作用の関係にあることが浮き彫りになった。

「5.3.1.4.2」をまとめると、以下の5点が挙げられる。

- ①異文化接触の中で、中国に対する固定観念によって相手に中国を否定する話題やデリ
ケートな話題を持ち出された時、日本語専攻大学生は戸惑い、感情的に難しいと感じ
ており、異文化接触が阻害される。一方、日本語専攻大学生自身の日本に対する固定
観念も異文化接触に支障をきたす。そのため、固定観念の存在が日中両国の異文化接
触に対する大きな阻害要因であることが明らかになった。
- ②日本語専攻大学生が相手に中国を否定する話題やデリケートな話題を持ち出された時、
戸惑い、感情的に難しいと感じていたのは、「国家アイデンティティ」と「愛国心」・
「民族自尊心」が働いているからであり、さらに日本語専攻大学生側の日本に対する
固定観念の底流にも「国家アイデンティティ」と「愛国心」・「民族自尊心」が存在し
ていることが推察される。そのうち「愛国心」と「民族自尊心」は、日中両国の歴史
問題から大きく影響されていることが否定できないと筆者は考える。
- ③相手の中国に対する固定観念と日本語専攻大学生自身の日本に対する固定観念は、相
互に影響し、その結果は、異文化接触を悪化させるしかないものと考えられる。
- ④固定観念による文化摩擦は接触上の文化的差異を複雑化させ、接触上の文
化的差異は固定観念による文化摩擦を引き起こしやすいため、両者は相互作用
の関係にある。
- ⑤日本語専攻大学生は、相手の「いやな目つき」などから相手の中国に対する態度を察

していることから、異文化接触の中で、非言語コミュニケーションも接触に影響を与えることが判明した。

5.3.1.5 安定的な場の喪失

サブカテゴリー [安定的な場の喪失] には、概念<接触条件の不備>と<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>が内包されている。

5.3.1.5.1 接触条件の不備

<接触条件の不備>とは、接触の相手がいなくなったり、接触の場がなくなったりしたため、安定的に接触できる条件が整わなくなり、異文化接触の維持が難しくなることである。

異文化接触が成り立つ基本的に必要な条件に、接触の相手および接触の場があるが、どちらかが不備になれば、当該の接触はできなくなる。第3章において、日本語専攻大学生にとっての「接触の場」に「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」・「その他」が挙げられることが明らかになった。「中国語教室」における接触の場合、「相手が韓国に転勤しました（他工作调到韩国去了）」(No.4-10) や「向こうはちょっと忙しくて、合わせて3, 4回ぐらいだけで、その後はもうないです（因为他比较忙，总计也就三四回，之后就没有了）」(No.10-7) というように、相手がいなくなれば、接触の条件が整わなくなる。また、「日本料理店」での接触の場合、「でも、その間は連続じゃなくて、2つの店でアルバイトしましたが、その中の1つが閉店しちゃったんです。（但是中间不是连续的，包括了两家店，有一家中间闭店了）」(No.4-17) というように店が経営難などの原因で閉店した場合、接触の場がなくなり、その場での接触が続けられなくなる。

嗯，〇〇老师 [日本老师] 也是前几次来后来就不来了。(No.15-14)

(うん、〇〇先生 [日本人教師] は最初何回か来ましたが、後は来なくなってしまいました。)

不是说非常的常态性，因为日本留学生首先数量不是说很多，另外一个就是，他们那边会有自己的事情，并不是说特别的常态，相对来讲比较常态的可能是学院的一些社团活动。社团活动我在大二之前参加过，然后大三之后就再也没有过了。(No.16-6)

(常時とは言えないですね。日本人留学生は、そんなに多くないんです。もう1つ、向こうも自分のことがあるので、いつもいつもとは言えないです。比較的常態として行われているのが、学院のサークル活動ですね。サークル活動は、二年生の前までは参加したことがありますが、三年生になってからもう行かなくなりました。)

挺愉快的，但说实话没有什么印象，主要就是介绍学校里这是什么，今天吃什么，这是什么东西，然后吃完了他们去上课，我们去上课，就这种感觉，也没有什么深厚的友情，就是完成任务的感觉，回来也没……。之后也没有什么联系。(No.17-2)

(とても楽しかったです。でも、実を言うとあまり印象が残らなかったです。学校の中を案内して、ここはどこか、今日何を食べるか、これは何かなどでした。それから食事の後で彼らは授業に行って、私たちも授業に行くとか、そんな感じです。深い友情があまりないですね。ただ、タスクが完成したって感じで、帰国後も連絡がなかったです。)

第3章において、「大学」での接触には、日本人教師や留学生の参与による部活、交流会、語学学習の交換支援などが利用されていることが判明した。上掲の3つの語りから、「大学」での接触の場合、日本人教師が交流会を協力できなくなることや、日本人留学生が忙しいため、接触が常に保障できるとは限らなかったり、さらに部活や交流会が中止になったりするなどのことが生じることが明らかとなった。第3章において「接触頻度」を「たまに」と回答したケースが「大学」に限られているという調査の結果も得られたが、上掲の語りから、その原因が接触の相手や接触の場が不安定であるからだとということが、判明した。交流会や部活は、大学の国際交流政策や日本語学科の教育指針と密接に関わっているが、日本語専攻大学生がそれらを機に接触を開始した後では、その活動の内容や日本人教師・留学生という人的リソースの持続利用に関する後続の支援が必要なのではないかと考えられる。

このように、日本語専攻大学生は、接触の中で、接触の相手がいなくなることや接触の場がなくなるなどのような、条件の不備による困難に遭遇することがあるということが判明した。そのうち、「大学」での接触の場合、接触の内容に大学の国際交流政策や日本語学科の教育指針が関わるため、学習者のその場での異文化接触に対する支援が求められるだろうと言える。

5.3.1.5.2 日本語の活用についての期待と実際とのギャップ

<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>は、日本語の活用を期待していたのに対して、接触の場では日本語が期待ほど活用できず、かつ、そのわりに時間などのコストが高いなどのことも生起するため、期待と実際の間ギャップが生じることを指す。

后来○○○ [同学名] 给我介绍一个日本女留学生，汉语说得老好了，和她在一起也用不上日语。(No.2-20)

(あとで○○○ [クラスメートの名前] は、日本人の女の子の留学生を紹介してくれました。中国語がとても上手でした。彼女いっしょにいる場合、日本語があまり使えなかつ

たです。)

上の例から「大学」で留学生と接触する場合、日本語をアウトプットする期待を持っていても、実際相手とは日本語があまり使用できずに、その間にギャップが生じてしまうことがあるということが分かる。このギャップは、「大学」で留学生と接触する場合のみならず、「日本料理店」の場合にも生じやすい。

没有什么就是深的接触，就是无非就是打一个招呼，然后送走客人，然后点个菜，很简单地就是普通的交流，没有深层次地讲。(No.5-4)

(深いレベルの接触があまりないですね。挨拶するに過ぎなかったです。お客さんを送るとか、注文するとか、簡単で普通な交流だけで、深い話はできなかったです。)

この例では、客とのコミュニケーションは、簡単な挨拶にとどまり、日本語が活用できなかった。対極例として、次のように、日本語が活用できるため満足していたケースも見られる。

下了课一起回来的路上会用日语聊天。和[汉语教师的]学生们也一起去吃过饭，过程中也会用日语。挺锻炼人的。(No.1-17)

(授業から一緒に帰る時、よく日本語で喋りました。[中国語教室の]学生たちと一緒に食事にも行きますが、その途中でも日本語を使うことがあります。鍛えられましたね。)

これらの語りから、〈ツールとしての日本語のアウトプット欲求〉を持っているからこそ、日本語が活用できないとなると期待が外れ、満足できなかったのだと了解できる。そこから、〈ツールとしての日本語のアウトプット欲求〉は、〈日本語の活用についての期待と実際とのギャップ〉に影響を与えることが明らかになった。

还是来参加的人太少了，经常不知道干嘛。办了几次人太少了，就开不起来了。所以也没什么参考性质。前半学期新大一还没来的时候有几个每次都来，大一来了之后大二的就不来了。大一的又有几个每次都来然后到大二就不来了。[I:你觉得为什么对大二的没有吸引力了呢?] 因为是面向大一讲一些大二早就知道的东西吧。日本事情课上差不多都学过的。另外就是我们这届途中退出的特别多，到大三就全都退了。(No.15-13)

(参加する人が少なすぎるから、よく何をすればいいのかと困っていました。何回かやりましたが、人が少なすぎるから、続けられなくなっちゃいました。ですからあまり参考になるような話じゃないですね。前期の時、一年生がまだ入っていない時、何人かが毎回来てくれましたが、一年生が入ってから二年生が来なくなりました。新しい一年生で毎回来る者もいましたが、二年生になったらまた来なくなりました。[I:どうして二年生に魅力

がないでしょうか。]新しい一年生に二年生がすでに知っていることを話すからでしょうね。日本事情の授業で学んだこともあるし。私たちの学級では途中でやめた人も多かったです。三年生になったら、全員やめました。)

上掲の類似例は、「大学」の日本語コーナーでの接触に関する語りであるが、日本人教師や留学生の協力が得られなくなったことによって、日本語コーナーは、学生が自力で日本事情の紹介などの方法で何とか維持せざるを得なくなったことが分かる。しかし、それに参加する日本語専攻大学生にとって、日本語の活用への期待と日本語コーナーで行われている内容との間にギャップが生じた。ここから<接触条件の不備>は、<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>に影響を及ぼすことが明らかになった。

接触の場で日本語が活用できない上に、時間的コストが高いため、接触の場に対して価値が低いと判断してその接触を放棄した、次のようなケースもある。

三個人在一个日料店 [打工], 然后另外一个人在别的日子料店。就都在日料店兼职, 后来就都不干了。[I: 为什么?] 怎么说呢? 就是它不像那种, 就是有的人去做那种给日本人讲课的那种家教, 挣得会多一点。像我每天晚上去三个小时, 就是 6 点到 9 点, 然后每个小时挣十块钱, 就觉得太辛苦了, 然后就算了吧, 也没有时间学习了, 感觉就有点累, 然后就都不干了。没赚很多钱, 然后也觉得没有什么收获。根本没有时间去让你去学跟日本人交流什么的, 因为活特别多, 就新来的嘛, 肯定就都让你干活。然后就, 就三个小时连轴转, 就也没干啥, 其实就只干活了, 然后就放弃了。(No.7-1, 2)

(3 人は同じ日本料理店で [アルバイトをしていて]、もう 1 人は別の日本料理店です。みな日本料理店でのアルバイトをしますが、あとでみんなやめちゃいました。[I: どうして?] 何と言ったらいいですかね。日本人に中国語を教えるアルバイトほど儲からないですね。例えば、私の場合、毎晩 3 時間働いて、6 時から 9 時までですが、時給は 10 何元³⁵だけで、大変です。それで、もういいやって思いました。勉強の時間もなくなるし、疲れるし、すっぱりやめました。あまり儲からなかったし、別に得るものもないって感じでした。そもそも、日本人とコミュニケーションして学べるなんて時間は全然なかったですよ。作業が多いから。新人だとなんでもさせられちゃうんですよ。3 時間働きまくって、他に何もできなかったです。作業だけだったので、諦めちゃいました。)

これは「日本料理店」での接触のケースであるが、日本語専攻大学生が接触を放棄した原因に、作業が多いため日本人とコミュニケーションする時間が少なく、その上、アルバイトの時間が長いため、学業に使用する時間がとられ、さらに待遇がよくないということが挙げられる。「5.3.1.3」において Eccles (1995: 215-225) は、「価値」を「獲得価値」・

³⁵ 中国の人民元「10 何元」は、日本円の 200 円～300 円ぐらいに当たる。

「内部価値」・「外部実用価値」・「代価」という4種類に分けており、そのうち、「外部実用価値」はタスクに従事することが将来の職業的な目標の達成に寄与することであり、「代価」は選択に伴ってコストを払わざるを得ないことであると述べた。日本語専攻大学生は、「日本料理店」での接触に対して、「外部実用価値」が得られないうえに、「代価」が高いと判断すれば、その接触を放棄しかねないと考えられる。さらに、この例から、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞は、＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞や＜学業重視による接触の一時的放棄＞と関係することが分かる。上の例でも、「別に得るものもないって感じでした（然后也觉得没有什么收获）」(No.7-1,2)というように、日本語を活用して視野の拡大・社会経験の蓄積・資産形成・日本に関する知識の獲得のいずれかを実現する目的を持っていれば、それが達成できなかつたら、そこにはギャップが感じられるのである。つまり、＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞は、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞に影響すると言える。次に、「日本料理店」での接触は、目的達成できないうえに、「勉強の時間もなくなるし（也没有时间学习了）」(No.7-1,2)というように、価値の低いアルバイトに時間を多く使用すれば、学業への時間投入が脅かされるため、そう感じれば、接触は一時的に放棄されかねないと考えられる。そういう意味で＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞は、＜学業重視による接触の一時的放棄＞に影響を与えよう。

「5.3.1.5.2」をまとめた結果を、以下の3点にまとめる。

- ①日本語専攻大学生は、接触・接触の場に対して日本語の活用を期待している場合、接触の場で日本語が期待ほど使えなかつたり、それに伴って目標が達成できなかつたりし、さらに時間などの代価が高いと認識すると、接触を放棄しやすいことが明らかになった。
- ②＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞は、＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞や＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞という【動機づけ】を持っている場合に生起し、その2種の【動機づけ】から影響を受けるということが判明した。そして、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞は、＜接触条件の不備＞からも影響され、＜学業重視による一時的接触の放棄＞に影響を与えるという概念間の関係も明らかになった。
- ③さらに、具体的接触の場における接触の様子を見ると、「日本料理店」での接触は日本語が期待ほど使えず、その上、時間がかかり、待遇が良くないなどの不利な面があるため、放棄されやすいことが明らかになったが、これは第3章において「日本料理店」での接触は開始しやすい一面もあるが、長く続けられるとは限らないという調査の結果をサポートするものである。

5.3.1.6 学業重視による接触の一時的放棄

<学業重視による接触の一時的放棄>とは、教室内での日本語学習、将来に備えての日本語以外の知識の習得などを意識し、時間的バランスが取れないと感じたとき、学業や知識の習得を優先的に考え、異文化接触を一時的に放棄することである。

后来寻思寻思，想好好学习。所以后来就没去「日本料理店」了。这学期我想去来着，都马上要去了，但是后来我想了一下我报了四个考试，我觉得分不开那个时间，怕两头都弄不好，我觉得我就先学习为主，毕竟还在上学。如果我这学期能把所有日语的考试，专四、N1、还有英语都考完的话，我大三轻松一点能再找兼职。(No.8-5)

(後でよく考えたら、やはり勉強したいですね。ですから、それから「日本料理店に」行かないことにしました。今学期は行きたくて、もうちょっとで行くところでしたけど、4つの試験を控えているので、時間はやはり取れないと思います。両方ともやろうとしてもうまく行かないと思うのです。まず学業を優先にすべきです。なんだって、学生ですから。もし、今学期で日本語の試験、日本語専攻試験4級、N1、それと英語の試験をすべて終わらせることができれば、三年生で楽になってまたアルバイトできます。)

協力者 [No.8] は期末試験に集中したいため日本料理店でのアルバイトを一時的中断し、そして再開するつもりはあったが、控えている資格試験が多かったため、学業を優先して、接触を中断したままにした。日本語専攻大学生は、【動機づけ】られ、異文化接触を開始した後でも、学業重視で異文化接触を一時的放棄することがあることが分かる。また、以下の語りから、<接触条件の不備>は<学業重視による一時的放棄>に影響作用を持つと伺える。

就是对方也很忙，然后因为我也是课很多，又有各种考试，所以后来就不联系了。(No.20-2)
(相手はとても忙しいし、それから、こっちも授業がたくさんあるし、それに、いろいろな試験もあって、だから連絡取らなくなっちゃいました。)

5.3.2 努力と工夫

カテゴリー【努力と工夫】に<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>・<対人関係の構築への努力>・<話題の選択・継続に関する工夫>・<異文化間知識の活用>・<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>・<異文化接触による客観的な姿勢>・<ポップカルチャーに起因するポジティブな観念>という8つの概念が内包されている。そのうち、<対人関係の構築への努力>・<話題の選

扱・継続に関する工夫>はサブカテゴリー [対人関係の工夫] に、<異文化間知識の活用>・<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>・<異文化接触による客観的な姿勢>・<ポップカルチャーに起因するポジティブな観念>はサブカテゴリー [異文化間摩擦への対応] に内包されている。

5.3.2.1 意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫

<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>とは意思疎通をはかるために、言語・非言語に関わるストラテジーを利用するなどして、鋭意努力することである。

日本語専攻大学生はコミュニケーションの中で、まず言語の選択に対して工夫をする。

[汉语教室] 講课时日语汉语都有用，解释的部分用日语较多。[I: 嗯，你说是为了对方听得更方便是吗?] 他们的汉语水平没有很高，几乎是日语解释。(No.1-17)

([中国語教室の] 授業の時、日本語、中国語を両方とも使いますが、説明する時は日本語を多く使います。[I: それは相手によくわからせるためですか。] 彼らの中国語のレベルがそんなに高くないので、ほとんど日本語で説明するのです。)

このように、中国語教室での接触の場合、日本語専攻大学生は日本語と中国語を両方とも利用するが、相手の中国語がコミュニケーションできるレベルに達していない時、日本語を多く用いる。これは類似例「中文好一些的我就中文说的多一些，程度不太好的学生我就中文说的少一些。(No.4-1) (相手の中国語が上手なら中国語を多く話しますが、それほど良くなければ中国語を少な目にします。)」からも見られる。しかし、中国語教室での接触はアルバイトを前提として行われるものであるため、接触の中で、相手の中国語レベルによっては中国語を優先的に使用することも見られる。そこには、接触の場における力関係が働いており、その場での対人関係を維持するために言語の選択を行うという側面が伺われるのである。そういう面から<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>は次節に述べる<対人関係の構築への努力>に影響されると言えよう。また、「然后，〇〇老师因为她属于在中国待了很长时间，所以有的时候跟她实在说不明白了，加两个汉语也是可以，她也能听明白，她其实都能听明白。(No.13-7) (また、〇〇先生は中国に長いので、時に明確伝えられない時、中国語を交えることもできます。先生は分かるのです。実は先生は全部わかります。)」というように日本人教師との場合、中国語でも意味伝達ができることがある。しかし、それでも日本語でアウトプットしようとするところに日本語能力を高めようとする意識が見られる。

次に、「5.3.1.1」<コミュニケーションの困難>において、日本語専攻大学生は接触の中で言語技能の話す能力・聞く能力に困難を覚えることを明らかにしたが、<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>においては、話す能力・聞く能力による困難に

対応する【努力と工夫】が確認された。「你只要慢慢地给他讲，然后啊，这次你发现说得不对，回去好好准备一下，下次就一下能说出来了。(No.1-3) (ゆっくりと話してあげればわかってくれます。もしどこか間違ったと気づいたら、あとでよく準備すれば今度は話せるようになります。)」はコミュニケーションの中で、話すスピードを落とすことであり、「然后慢慢就觉得一些就是表达，比如特别日本語らしい的那种说不出来，但是用简单的单词啊什么的，一说他就明白了，就是慢慢地就敢说了。(No.2-1) (とても日本語らしい日本語は話せないですが、簡単な単語などで話せば相手がすぐわかってくれると気がつきました。それでだんだん話せるようになりました。))」や「一开始的时候 [日语] 什么都不会，就张不开嘴，迈不开腿 [笑]。就是我表达的意思他听不懂，现在也有这种情况，但是比以前好的多，现在就是他不懂的话我就会换一个简单点的方式说。(No.18-6) (最初の時、日本語は何もわからず、口が開かないし、足も動かない感じ [笑]。私の伝えたい意味は相手が分からなかったり、今もこんな時があります。でも、前よりずっと良くなりました。今は相手がわかってくれなければ別の簡単な言い方に変えます。))」などは簡単な言葉で代用することや別の言い方に変換することで意味伝達をはかることである。そして、言語では十分伝えられない時、「嗯，和外国人交流都差不多吧，都需要有肢体，其实主要就在肢体语言和的表现动作上。(No.12-7) (外国人とのコミュニケーションはみんな同じでしょう。身振りが必要で、主に身振り、手振りなどで表しますね。)」のように非言語コミュニケーションを利用して意味を伝えることも見られる。

聞く能力による困難に対しては、「含混带过，这样的哈完了，通过下一句话来判断刚才那个什么意思，这样的。(No.20-9) (ごまかして済ませて、そして次の文で前の意味を推測するという感じ。))」というように相手の意味がわからなかった時、ごまかしながら文脈で意味を推測するという戦略を取る。「5.3.1.1」<コミュニケーションの困難>において、日本語専攻大学生は方言のような学習経験のない言葉遣いに遭遇して、困難を覚えることを明らかにしたが、その場合、「嗯，但我没有说请你说普通话。他真的说话特别快，我说你能说慢一点吗？我说我的日语也不是特别好，慢一点吧？然后但他还是很快，那我也没办法，我不能说是你强烈要求人家。后来我就说“もう一度お願いします”，那他就再说一遍了。(No.3-10) (標準語を使ってくださいと言わなかったです。彼の話は本当に速いので、ゆっくり話していただけますかって言ったんです。私の日本語があまり良くないので、ゆっくりお願いできますかって。でも、それでも相手がまだ速かったら、しょうがないです。相手に無理強いはできないので。その後で「もう一度お願いします」とお願いしたら、相手はもう一度話してくれました。))」というように相手に協力を求める戦略が取られる。

また、話す能力による困難、聞く能力による困難を問わず、ツールを利用することや相手に確認することなどの努力が成されている。

就虽然也有一些词听不懂，后来我说什么，然后就一边查手机，但是我基本感觉会话都挺

好的。(No.3-3)

(聞き取れない言葉がまだありますが、話す時、携帯で調べながら話しました。でも、基本的には、会話はうまく行っていると思いますよ。)

この例では、コミュニケーションの中で辞書³⁶のようなツールを利用して聞き取れなかった言葉や自分の伝えようとする言葉を調べている。

次の例のように恥ずかしがらずに相手に確認することで聞き取れなかった言葉やよく伝達できなかった言葉を明確にする努力をすることもある。

嗯，这种担心肯定是会有的呀，怕说错呀，也怕怎么样，但是你还是得说呀，就是你虽然听不懂也是，就是，你就问吧，不耻下问了，你不问怎么进步啊，就算现在也是跟他们日本人说话的时候，也是我自己能感觉到。唉呀这个，我说这个话说出来肯定不是地道的，就有那种感觉，但是就是问完了之后，他们会犹豫一会儿，然后之后我再给他们解释一下我想问的是什么意思，然后他们再说，然后最后问一遍，就是不要不要害羞吧。(No.9-6)

(そんな心配はやっぱりありますよ。間違ったらどうしようとか。でもやっぱり話さなきゃだめですね。だから、聞き取れなくてもなんでも、やはり聞くんですね。恥ずかしがらずに聞きます。聞かなければ進歩しないじゃないですか。今でも日本人と話す時、自分の話が日本語らしくないと思っていますが、その時、相手に聞きます。聞いたら、彼らは少し躊躇いました。それで自分の伝えたい意味をもう一度説明したら、相手が答えてくれて、それで再度聞きます。やはり恥ずかしがっているとだめですね。)

これは、前掲の「含混带过，这样的哈完了，通过下一句话来判断刚才那个什么意思，这样的。(No.20-9) (ごまかして済ませて、そして次の文で前の意味を推測するという感じ。)」が示した工夫とは反対であるが、接触の相手との対人関係や具体的接触状況などと密接に関係しており、併用することも考えられ得る。

さらに、<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>はその場でのコミュニケーションに限らず、「说完话以后我可能我自己会琢磨，事后我会琢磨，反正就是想我想我这个话到底说的有没有问题，后来恍恍惚惚，然后觉得啊，应该是说错了这样的，然后以后再去改。(No.13-8) (話した後で自分でよく考えますよ。後で私は考えます。自分の話に間違いがあるのかなどです。それで、ちょっとモヤモヤしますが、うん、やっぱり間違っただけあって思うとか。それで直します。)」というように、コミュニケーション後も内省をし、コミュニケーション能力を高めようとするという語りに現れている。

「5.3.2.1」をまとめると、以下の4点が挙げられる。

①日本語専攻大学生は<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>を凝ら

³⁶ 携帯電話にダウンロードしたアプリケーションの「辞書」機能を利用する。

して＜コミュニケーションの困難＞に対応する。

- ②コミュニケーションの中で、意思疎通をはかるために日本語専攻大学生は言語の選択を行う。そこに、＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞があるが、接触の場の力関係によって中国語を多く使用する必要のある側面も見られる。対人関係を維持するために相手の役に立つ言語を選択する態度であると考えられる。このように、＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞は＜対人関係の構築への努力＞に要求される面があると判明した。
- ③コミュニケーションの中の話す能力による困難に対して、日本語専攻大学生は話すスピードを落とすこと・簡単な言葉で代用すること・別の表現に変換すること・非言語コミュニケーションなどで対応する。聞く能力による困難に対しては、日本語専攻大学生はごまかしながら文脈で意味を推測したり、相手に協力を求めたりして乗り越えようとする。また、話す能力による困難か、聞く能力による困難かを問わず、ツールの利用・相手への確認などの努力もなされる。
- ④日本語専攻大学生はコミュニケーションの場にとどまらず、コミュニケーション後、内省することでコミュニケーション能力を高める努力もする。

5.3.2.2 対人関係の工夫

サブカテゴリー [対人関係の工夫] には、＜対人関係の構築への努力＞と＜話題の選択・継続に関する工夫＞という 2 つの概念が内包されている。

5.3.2.2.1 対人関係の構築への努力

＜対人関係の構築への努力＞とは、接触相手とよりよい対人関係を構築するために、責任感・誠意・共感・積極的、柔軟、寛容な態度の認知面、および、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇の行動面の双方から努力することである。

第 3 章において、日本語専攻大学生は「中国語教室」「日本料理店」「大学」「その他」などの場を利用して異文化接触を行うことを明らかにした。そのうち、「中国語教室」「日本料理店」での接触はアルバイトを前提としているため、接触の持続はアルバイトの持続に大きく依存している。そのため、アルバイトを維持するのに必要な責任感が接触に大きな意義を持っている。「就是跟他们见面、给他们讲课、每天备课啥的都挺认真的。(No.2-5) (彼らに会って授業したり、下準備をしたりする時いつも真面目にします。)」や「然后拼音啊告诉怎么发，告诉他发音的技巧，就是教的时间长了我也有技巧了，就是怎么讲怎么讲怎么告诉他，他可能一下就懂了。(No.1-4) (ピンイン³⁷でどのように発音するか、発音のコ

³⁷ 中国語の発音表記法である。

ツを教えていました。時間が長くなったら教える方法が分かるようになって、そのような教え方で教えたらすぐわかってくれました。)」というように中国語教室での接触の場合、(中国語の) 授業を真面目に準備したり、教授法を模索したりすることでアルバイトを維持する。そこに責任感を持って相手との対人関係を維持しようとする努力が見られる。

一方、アルバイトを通して行われる接触を含み、日本語専攻大学生は接触の中で一般的対人関係スキルを多く応用することが確認された。まず、第一に、日本語専攻大学生は、対人関係を構築するために、他の認知面における【努力と工夫】を実践している。

一つは、以下の具体例のように、日本語専攻大学生は、接触において、誠意を示して相手との対人関係を構築する。

在决定去日本留学以后，给她上完最后一节课[汉语]后，我把以前的合照打印出来给她，告诉她虽然我不教她汉语了，但有什么不懂的随时都能来问我。(No.1-18)

(日本への留学が決まった後のことでした。最後の授業[中国語]が終わった時に、前に一緒に取った写真を現像して彼女に渡して、これから中国語を教えなくなりましたが、何かわからないことがあったらいつでも聞いてくださいと言いました。)

続いて、以下の2例のように、相手の利益になるように工夫したりもする。

我可能会有意识地，我觉得如果是说交往过程中的话，比如说中国人也一样，比如说我是一个北方人，我要认识这这样一个朋友，他是南方人，我觉得交往过程中去多考虑那个他的一些东西也是很重要的。就是交往的时候，就都大家都是互相考虑吧，对，如果就各说各话，那就不叫交流了。(No.4-11)

(私はこんな意識があるかもしれませんが。接触する時、中国人の間でも同じだと思いますが、例えば私は北方の人で、南方出身の人と知り合ったら、接触の中で相手のことを多く配慮することも重要です。付き合う時、お互いに配慮することですね。それぞれ自分のことしか話さないのはコミュニケーションではないです。)

[I:用汉语交流是因为觉得对方是学汉语的所以他考虑是吗?] 是的。而且他们也想多用汉语交流，锻炼口语。就像我想锻炼日语一样[笑]。(No.3-14)

([I:中国語でコミュニケーションすることは相手の中国語学習のためですか。] そうです。そして彼らも多く中国語でコミュニケーションしたいでしょう。話す能力が鍛えられるのです。私が日本語を鍛えたいことと同じでしょう[笑]。)

ここでは、相手の立場に立ち、共感を得るという対人関係スキルが用いられている。

また、接触において、日本語専攻大学生は相手とよりよい対人関係を構築するために、積極性や、柔軟な態度を取ることも確認された。以下のような具体例である。

就是在对日本人交往这方面，我感觉我比较开朗一些、主动一些。就像平时 [汉语] 上课的时候，聊天呀，都能够聊得比较开心，有一些话题。(No.3-1)

(日本人とのコミュニケーションにおいて、私はやっぱりオープンで、積極的だと思います。例えば普段の [中国語の] 授業の時、おしゃべりは楽しかったし、話題もありました。)

我这个人可能性格比较好吧，他们如果对一件事的看法和我有冲突的话我不会立即去反驳他们，会比较温和的处理问题，所以如果有冲突的话，我不会以特别激烈的形式表现出来，虽然我不擅于言谈，但做事的话会比较踏实吧，所以和他们相处起来弥补了表达这方面的不足。(No.18-7)

(私は性格がいいからかもしれません。もしあることに対して彼らの意見と衝突しそうでしたら、すぐ彼らに反駁するなどはしません。穏やかに対処しますね。ですから、もし衝突があっても、とても激しい形で表すことはしません。コミュニケーションはあまり上手ではないですが、物事の処理はわりときちんとしていると思います。日本人と接触する時、これがコミュニケーション能力の不足を補えると思います。)

さらに、「就是不要表现得太自我吧，就是你就算有什么想法，你不要说出来，就顺着他的意思来呗。(No.9-8) (あまりにもわがままではいけませんね。自分の考えがあつたとしても、言わないで、相手に従えばいいですよ。)」というように日本語専攻大学生は寛容や受容によって対人関係の葛藤に対処する。奥西・田中 (2010) は日本人留学生と異文化接触する際、中国人大学生が自文化から主体的に組み立てた寛容志向を持っていると論じているが、本節においても同じ傾向が確認できた。

第二に、日本語専攻大学生は接触相手と対人関係を構築するために、行動面における【努力と工夫】も行っている。

これには、まず、接触相手と共行動をすることが挙げられる。

几乎都认识，时不时的都在一起。有一起写作业的同学，就是单独学习，然后一起运动的，还有一个想当老师，是教日本留学生汉语。他在辅导别人，他自己来的时间比较长，汉语也还不错，就辅导着别人。那个时候我也会去帮忙。(中略)。反正自己也跟他们在一起学到不少，我觉得能帮的就尽量帮助，会比较安心。他们毕竟来这还是学汉语为主的。我跟他们玩太多的话，就觉得有点捣乱的性质，能多帮助他们一点我会比较安心。也是从这个学期，这两个比较年轻的开始。之前那些认识的都 30 多岁，上学期就跟他们吃吃饭聊聊天之类的，其实要叫他们一起玩他们也挺高兴的，上学期都没发现。这学期通过新来这两个人才发现的。之前比较钝感。我现在在改变。(No.11-7)

(ほぼ全員が知り合いです。時々一緒に行動します。一緒に宿題をする人もいれば、別々

に勉強した後、一緒に運動する人もいます。もう1人は教師になりたくて、日本人留学生に中国語を教えています。この留学生は、中国にいる時間が長いので、中国語が上手です。それで他の留学生も教えているのです。その時私はよく手伝ってあげます。(中略)。彼らと一緒にいると多く勉強になることも多いので、できるだけ助けてあげて、それで安心できると思います。彼らが中国に来たのは中国語を学習する為です。多く遊んだら、彼らの勉強の邪魔になっちゃうので、少しでも助けになればと思います。今学期から、若い2人との接触が始まりました。その前知り合った人は皆30歳ぐらいで、前学期は彼らとご飯食べたり、おしゃべりしたりしていました。こちらから誘ったら向こうも喜ぶと思います。前学期はそれに気が付きませんでした。今学期はこの新しい2人と付き合っただけ気がつきました。その前は鈍感でしたが、今は自分を変えています。)

このように、接触相手と一緒に勉強・運動・食事などの共行動をすることで互いの関係を構築する。第3章において日本語専攻大学生が大学では、外食やウインドウショッピングや映画鑑賞などを行うことで日本人教師・留学生と接触することを明らかにした。本節の結果はそれとの一致を見せている。また、このような共行動は大学での接触に限らず、中国語教室での接触にも見られる。

次に、支援行動をすることが多く見られた。

一个月左右、我当时记得是她用银行卡，然后转账，她买了一个那个就是有机的蔬菜，给那个人转账。(中略)。然后我跟她去银行，然后之后我们两个去吃饭的，然后还聊了挺多天的。(No.1-10)

(一か月ぐらいになった時、彼女は銀行のカードを使って振り込みをしたかったです。有機野菜を買ったので向こうの人に振り込みをします。(中略)。それで彼女と銀行に行きました。その後で二人で食事に行って、たくさんおしゃべりしました。)

上の例は中国語教室での接触に関する語りであるが、雇用関係においても日本語専攻大学生は相手にプライベートな支援行動をすることが分かった。そこに相手と対人関係を構築し、接触を持続しようとする意識が伺える。他の接触の場においても日本語専攻大学生が支援行動をとることで対人関係を構築し、維持することが多く見られた。

また、「嗯，然后就是相处还是就是按自己平常跟中国人那种相处，也进行得挺顺利的。(No.1-10) (普段中国人との付き合っているのと同じように接触をしています、うまく行っています。)」とか「我觉得主要还是人与人之间嘛，不管是日本人啥的就是人与人之间。(No.20-10) (やっぱり人と人の中ですね。日本人とでもやっぱり人と人の中です。)」というように日本語専攻大学生は接触の中で国籍で差別しない接遇をすることで対人関係を構築することが確認された。そこには、中国人と接触する時の対人関係スタイルを日本人との接触に当てはめる傾向が見られる。

奥西・田中（2010）は、日本人学生の、相対化、歩み寄り、意見の調整など相手の存在を意識した双方向的な調整による異文化性への対処方略を捉えたが、中国の日本語専攻大学生のほうは、自己を基軸とした対処方法と自文化から主体的に組み立てた寛容志向を持っており、さらに、対人交流において情熱や積極的姿勢や誠実な態度などが強調される傾向が強かったと論じている。本研究においては、中国の日本語専攻大学生が異文化接触の中で寛容志向・情熱や積極的姿勢・誠実な態度を取ることが確認された。これは奥西・田中（2010）と一致するものであると見て取れるが、共感を重視すること・相手との共行動をすること・そして相手から持ち出された話に合わせたり、傾聴したりすることも確認されたため、中国の日本語専攻大学生には、接触の中で相手を意識しながら自身の行動を調整するという対人関係構築の面もあることが窺える。

第三に、「虽然我不擅于言谈，但做事的话会比较踏实吧，所以和他们相处起来弥补了表达这方面的不足。(No.18-7)（コミュニケーションはあまり上手ではないですが、物事の処理はわりときちんとしていると思います。日本人と接触する時、これがコミュニケーション能力の不足を補えると思います。）」という語りから見られるように、対人関係の構築は接触の中でコミュニケーションによる困難を緩和させ、接触の持続を後押しする。そこから＜対人関係の構築への努力＞は＜コミュニケーションの困難＞に影響することが判明した。そして、次のように、日本語専攻大学生は、接触の中で話題を探すことで相手との接触関係を維持しようとする。

因为我们当时上课〔汉语教室〕的时候是一对一的上，一个半小时左右，也不能说两个人没有话可以说，必须要找一些话题来说。然后找这些话题的过程中，也是成长了。(No.19-5)

（授業〔中国語教室〕は一对一で行って、1人30分ぐらいです。2人で話すことがなければまずいと思います。それで話題を探さなければなりません。こういう話題を探している間に成長したと思います。）

「5.3.1.2.2」＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞において、接触の中で日本語専攻大学生は相手が話題に積極的に関与しないことに困難を覚えることを明らかにしたが、上記の具体例からそのような困難に対して、相手との対人関係を維持することから出発し、こちらから積極的に話題を探し、継続する努力をすることが十分考えられる。こういう面を考えると、＜対人関係の構築への努力＞は＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞の解決に一助となると言える。

また、次の語りからは、自分と社会履歴が対等でない相手と接触する時、冗談をいうことで積極的に相手との距離を縮めようとする努力が窺われる。

有时候一开始没意识到，因为有时候会把日语用错，然后他们〔日本人中国語学习者〕就那个就会笑，后来我觉得自己欸，这玩意也挺有意思。嗯，他们有时候也会给我讲笑话，就

是反正讲课也挺无聊的，就讲笑话呗。(No.4-12)

(最初の時注意せずに日本語を間違えた時がありますが、そんな時彼ら〔日本人の中国語学習者〕が笑いました。自分もおもしろいなって思いました。逆に彼らも時に笑い話を言ってくれましたが、授業がつまらないから笑い話をしてもいいねって思いました。)

このような例から、＜対人関係の構築への努力＞が＜対等性の欠如による接触の困難＞に影響を及ぼすことが見られた。それによって＜異文化接触の対人関係の不安＞がある程度緩和させられると推測できる。このように＜対人関係の構築への努力＞は＜異文化接触の対人関係の不安＞・＜対等性の欠如による接触の困難＞・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞にすべて関わることが判明した。

但是我就是嗯没有就是不开心怎么样，我就觉得啊可能就是你是开玩笑或者怎么样，但是没有多心。但是我觉得这样对于初次见面的人来说那样说不太好。(中略)。要不然如果想的话，感觉对自己的心情也不好。所以我觉得还是想得开一点。(No.3-2)

(でも、私、別にムツとしたわけじゃないです。向こうは冗談か何かだったのかもしれないので、私は気にしないことにしました。でも、初めての人に対してそういうことを言うのは、あまりよくないと思います。(中略)。それが悪いとずっと思っていたら、自分の気持ちにもよくないから、気にしないことにしました。)

接触相手に体が大きいと言われ、＜接触上の文化的差異＞に遭遇した協力者〔No.3〕はそれを「初めての人にあまりよくない」ことだと思ったが、相手の冗談であるというように対人関係の問題として認識し、許容することで対応した。＜対人関係の構築への努力＞が＜接触上の文化的差異＞の対応にも役に立った例だと考えられる。

「5.3.2.2.1」の要点を、以下の3点に纏める。

①日本語専攻大学生は異文化接触の中で、雇用関係を前提とする接触を含み、多様な対人関係スキルを用い、対人関係の構築に努力する。

②＜対人関係の構築への努力＞は認知面と行動面に分けられるが、両者は結合して利用される。認知面における努力には、責任感・誠意・共感・積極的で柔軟で寛容な態度が内包されている。そのうち、責任感はアルバイトでの接触の場合に見られるものである。行動面における努力は共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇から構成されている。日本語専攻大学生は接触の中で中国人と接触する時に用いられる対人関係スキルで日本人との接触に当てはめる側面が見られる。

③＜対人関係の構築への努力＞はサブカテゴリー〔対人関係の困難〕に内包されている3つの概念とともに影響を与え、そして＜コミュニケーションの困難＞・＜接触上の文化的差異＞という【困難】の対応に役に立つ。

5.3.2.2.2 話題の選択・継続に関する工夫

＜話題の選択・継続に関する工夫＞とは適切な話題を探索すること、および、話題をどのように継続するかを工夫することである。「話題の選択」自身が話題をどのように継続するかという要因に含まれるが、それに関する語りが豊富にあるため、「話題の継続」と並列することとした。

「話題の選択」に関して、日本語専攻大学生は接触相手との接点を探索しながら、話題を選択する。例えば、「跟他教课教久了以后，我可能发现了他有些感兴趣的地方，我也会问一些问题，就是课下 [汉语课] 的时候，找到那个共同的话题。(No.6-1) (教授の時間が長くなったら、向こうの興味を持つところを意識するようになって、私も時にそれについて質問します。放課後 [中国語の授業]、共通の話題を見つけて話します。)」というように相手と共通点、接点のある話題をしようとしている。その場合、日本事情・中国事情・趣味、家族、日常生活などのように、勉強・生活関連の身近な出来事に関する話題がよく取り上げられる。以下の3例で、その具体的な現れを見てみよう。

跨越语言这个障碍之后，需要的东西就是话题。我现在对日本了解的还不太多。接触的除了日剧也就没什么了，比如说日本流行的话题什么的，虽然可以把手机主页设置成日本雅虎主页，打开手机就可以看几条什么的，但是有时候也做不到。对日本流行的话题，对更深层的思维方式什么的了解的还不是很够。(No.10-6)

(言葉という障壁を乗り越えたら、次に問われるのが話題です。私は今日本についてまだそれほど知らないです。それを知る方法は日本のドラマのほかにはありません。例えば日本で流行っている話題なんかは、携帯のホームページを日本のヤフーのにして携帯を開ければいくつかのニュースが見られます。でも、見そこなうこともあります。日本で流行っている話題、深いレベルでの日本人の発想なんかについては、まだ分かっていることは十分じゃありません。)

ここでは、接触の中で相手と接点のある話題を作るために、日本語専攻大学生が普段から心がけている様子が見て取れる。

我们就说一些可能是我说我的学校呀，然后会唠我的感情啊，女朋友啊，他也会比较愿意问唉你有女朋友吗？就聊一些比较私人的问题。然后他也会跟我讲他儿子他会说他儿子，他说他儿子跟我差不多大呀，然后说他儿子喜欢足球啊，然后问我喜欢什么，就是这些一些比较私人的问题啊，家庭啊、生活啊、感情啊，这些。(No.5-12)

(私たちは、例えば私の大学や、私の恋愛、彼女などのことを話しました。向こうも、君、彼女いる？みたいなちょっとプライベートな質問をしたがりますね。それから、彼も、

私に自分の息子のことを話してくれました。例えば、息子が私とほぼ同じ年だとか、サッカーが好きだとかなどでした。他に、何が好きかも聞いてくれました。こんなようなちょっとプライベートな話題ですね、家族とか、生活とか、恋愛とかみたいな。)

上の例では、日本語専攻大学生が接触相手と勉強・生活のような身近な出来事に関する話題をよく話し合っているが、これは一方、相手と年齢や社会履歴などで対等性が欠如しているような場合、勉強・生活に関する話題が接点を得やすいことと関係する。

この例では、接触相手の積極的な関与姿勢も見られるため、＜話題の選択・継続に関する工夫＞は、＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響されるということも窺える。

他方、次の例のように、プライベートな話題が取り上げられるのは、接触の時間が長くなって、相手との対人関係が近くなったことと関係する。

嗯，但是嗯就是如果是上了挺长时间课了，相处的比较久了的话，就聊些别的东西。比如说那天上课就会聊起来，问她和她丈夫是初恋吗？她说不是。就了解了她的初恋，聊起来就有些眼眶湿润的感觉。(No.3-9,10)

(うん、でも授業や接触が長くなったら、他のこともしゃべります。例えば、ある日の授業に、旦那さんとは初恋だったかって聞きましたが、違いますって。それで初恋の話になって、彼女はしゃべっているうちに目が涙で潤っていました。)

さらに、[No.5-12] の例から接触相手の積極的な関与姿勢が見られ、＜話題の選択・継続に関する工夫＞は＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響されることが伺える。

「話題の継続」に関しては、まず、上掲の例で見たように、「話題の選択」自身が話題をどのように継続するかという要因に内包される性質のものであるため、日本語専攻大学生は、接触相手と接点のある話題を探索しながら、話題を継続していく。

次の2例は、はじめのものが、接触相手によって話題を選択したり、相手の話題に合わせてすることで、そして、次のものは、前に挙げた例と同じであるが、接触の中で相手から持ち出された話に傾聴することで、それぞれ話題を継続させていく例である。

和他说的确实涉及了很多家庭上面的话题。还有的就是问他们一些日本的这个事儿，那个事儿啊的。就根据人吧，像有的人他就是喜欢学习，他就是看书，然后也不跟你聊别的，就是你说一句他就答一句。但是有的是跟你谈人生。(No.2-14)

(彼とは確かに家族についての話題に多く触れました。ほかに、彼らには、日本についてあれこれと聞きました。)やはり人によって違いますね。例えば、勉強好きな人がいて、教科書の話だけは話しますが、ほかのことはしゃべってくれません。こちらの質問にしか答えない感じでした。でも、よく人生について話している人もいます。)

然后他也会跟我讲他儿子他会说他儿子，他说他儿子跟我差不多大呀，然后说他儿子喜欢足球啊，然后问我喜欢什么，就是这些一些比较私人的问题啊，家庭啊、生活啊、感情啊，这些。(No.5-12)

それから彼も私に自分の息子のことを話してくれました。例えば息子が私とほぼ同じ年だとか、サッカーが好きだとかなどでした。他に、何が好きかなども聞いてくれました。こんなのようなちょっとプライベートな話題ですね、家族とか、生活とか、恋愛とかみたいな。)

<話題の選択・継続に関する工夫>は、日本語専攻大学生が接触相手とよりよい対人関係を構築しようとする意識と密接に関係している。そのため、<話題の選択・継続に関する工夫>は、<対人関係の構築への努力>に求められるものであると言えよう。また、日本語専攻大学生は、<話題の選択・継続に関する工夫>で<接触場面における話題の選択・継続に難航>に対応する。例えば、「我心里寻思啊，他这个课讲完了聊点别的吧，缓解一下这个紧张的氛围。我就问我问你家里有几个孩子呀，他说有两个孩子，(中略)。然后聊聊他的家庭啊，聊到家庭以后，他给我一说他的家人以后我可能稍微有一点安心的感觉了。

(No.0-A11) (心の中で考えて、授業が終わったら何か別のことをしゃべって緊張の雰囲気を和らげようと思いました。それで、私はお子さんが何人かって聞いたんです。向こうは2人いるって。(中略)。後で彼の家族の話になりました。彼は、自分の家族について話し出したら、少し安心した感じになりました。)」というように、<話題の選択・継続に関する工夫>を行えば、それは<異文化接触の対人関係の不安>の軽減につながり、また、「話題上来讲应该是能继续下去的，因为我比较能说，但是对方感不感兴趣来说，有的时候是真的不感兴趣。因为年龄不一样、时代不一样，有的时候还是会找对方感兴趣的话题来说，(略)。

(No.19-8) (話題なら続けられると思います。私はおしゃべりなんです。でも、相手が興味を持ってくれるかどうか問題ですね。本当に興味がないときもありますよ。年が違うし、世代も違うんですから。時には、相手が興味を持つ話題を探し出して話します。(略)。)」の例に見るように、<対等性の欠如による接触の困難>の解決にも役立つ。このように、<話題の選択・継続に関する工夫>は、サブカテゴリー[対人関係の困難]に内包されている3つの【困難】にともに対応することが判明した。

「5.3.2.2.2」を纏めると、以下の3点になる。

- ①日本語専攻大学生は、異文化接触の中で相手と接点のある話題を選択して、話題を継続していく。話題は勉強・生活のような身近な出来事が中心であり、日本事情・中国事情・趣味・具体的生活などが挙げられる。これらの話題を選択するのは、日本語専攻大学生がまだ社会履歴が少なく、接触相手との間では、そのような話題が接点を得やすいからである。また、日本語専攻大学生は、接触中のみならず、普段から相手と接点のある話題を作るように心がけている。
- ②話題を選択する他、日本語専攻大学生は、接触の中で相手から持ち出された話に傾聴

することで話題を継続させていくこともある。

- ③<話題の選択・継続に関する工夫>は、サブカテゴリー[対人関係の困難]に内包されている3つの概念とともに影響する。そして、<話題の選択・継続に関する工夫>は、<対人関係の構築への努力>と<接触に対する相手の関与姿勢>に影響される。

「5.3.2.2.1」と「5.3.2.2.2」において、サブカテゴリー[対人関係の工夫]に内包されている2つの概念である<対人関係の構築への努力>と<話題の選択・継続に関する工夫>がともに[対人関係の困難]に内包されている3つの概念に影響することが明らかになったため、日本語専攻大学生が[対人関係の工夫]で[対人関係の困難]に対応することも明らかになった。

5.3.2.3 異文化間摩擦への対応

[異文化間摩擦への対応]には<異文化間知識の活用>・<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>・<異文化接触における客観的な姿勢>・<ポップカルチャーに起因するポジティブな観念>が内包されている。

5.3.2.3.1 異文化間知識の活用

日本語専攻大学生は、「就是就是还是平常多注重礼节吧，多注重礼节这方面。(No.1-13) (やはり、普段から礼儀やマナーなどによく気を付けますね。)」や「包括我在与他们约定时间的时候，也会注意不会迟到。(No.14-3) (私は彼らと約束のあった時、遅れないように気を付けます。)」の2例にあるように、接触の中で日本人の行動様式に関する知識を活用する。

そして、次の具体例からも分かるように、日本語専攻大学生は、教室内外から日本の風俗習慣に関する知識を得、さらにそれらを活用して接触相手の行為を理解し、対応している。すなわち、彼らは、<異文化間知識の活用>で<接触上の文化的差異>に対応するのである。

他们就喜欢送礼物，就是比如说回日本啦，或者是去哪旅游了，都会带礼物回来，就是小点心啊，或者巧克力啊，或者是那种小钱包啊什么的。我觉得虽然不是什么贵重礼物，但是让我感觉挺开心的。而且我们在课上[日语课]也知道了这种日本人愿意送小礼物的习惯，所以后来我就也是回赠他们，比如说我寒假回来我就送他们那个奶酪啊什么的。(No.3-7)

(彼らは、よくプレゼントをくれますね。例えば、日本に帰国したり、どこかへ旅行に行ったりすると、いつもお土産を持って来ます。お菓子やチョコレートや小銭入れなんかですね。それほど高価なものではないですが、とてもうれしかったです。授業[教室内の日本語の授業]で日本人が好んで贈り物をするという習慣を知りましたが、後で私もお返

しをするようにしました。例えば、冬休みに家から戻ったとき、チーズをお土産としてあげたりとかですね。)

という具体例から日本語専攻大学生は教室内外から日本の風俗習慣に関する知識を得、さらにそれらを活用して接触相手の行為を理解、対応すると判明した。日本語専攻大学生が<異文化間知識の活用>で<接触上の文化的差異>に対応するのである。このように、<異文化間知識の活用>とは教室内外で学んだ日本の社会通念などの知識を活用し、日中間の文化的差異を理解し、そして対応することであると理解できよう。

また、「5.3.2.2.2」<話題の選択・継続に関する工夫>において、日本語専攻大学生は接触の中で、自ら日本事情・中国事情に関する話題を選択し、話題を継続することを明らかにしたが、<異文化間知識の活用>がそのような話題の選択・継続に役に立ち、そして、<話題の選択・継続に関する工夫>を通して、<対人関係の構築への努力>に影響を及ぼすと考えられる。<異文化間知識の活用>はサブカテゴリー「対人関係の工夫」に関係するのである。

さらに、以下の対極例があるが、

就是我的学生〔学汉语的日本人学生〕在说一些否定中国的话的时候，我就是感到挺无力的，就是觉得哎呀自己就是知识太贫乏了，就是不知道该怎么解释。(No.4-5)

(私の学生〔日本人の中国語学習者〕に中国を否定する話を持ち出された時、いつも無力感を感じます。やっぱり知識に欠けているねって感じです。どう説明すればいいか困りますね。)

接触中、中国を否定する話を持ち出された時、どう対応すればいいかわからず、自文化を説明するにもできない無力感を感じ、語り手はその原因を「知識に欠けている」ことに帰着させているため、ここでの「知識」は中国または両国の文化的差異に関するものであることが推察できる。中国または両国の文化的差異に関する知識が欠乏すると、<文化的差異についての積極的な意見交換>が有効にできないと伺える。それは反対に<異文化間知識の活用>は<文化的差異についての積極的な意見交換>を促進し、そして、<固定観念による文化摩擦>への対応にも役に立つと言えよう。<異文化間知識の活用>はサブカテゴリー「異文化による摩擦」に関係することが判明した。

5.3.2.3.2 異文化接触の摩擦への回避

<異文化接触の摩擦への回避>とは、日中間の歴史や政治などのようなデリケートな話題、相手の固定観念による中国・中国人に対する認識、日中両国の文化的差異に、回避や判断保留で摩擦を避けることである。

まず、日中間の歴史の関係で、両国の歴史・政治などに関するデリケートな話題は、摩擦を引き起こしやすい。そのような話題になると日本語専攻大学生はどのように対応すればよいのか葛藤する。そのため、次の例のように回避することが多い。

而且我们交流的时候会避开一些两个国家之间不同的地方，真的是有意避开，比如说政治问题，我有一次就谈到了政治问题，他会有意避开，我也会有意避开，我俩都不说。 (No.18-7)

(私たちがコミュニケーションするときは、両国間の異なるところは、本当に意識的に避けましたね。例えば、政治問題ですが、一度政治問題の話になりましたが、相手は、それを意図的に避けました。私も、意識的に避けて、両方とも話さなかったです。)

上掲の具体例から、日中間の歴史・政治などに関するデリケートな話題に対しては、日本語専攻大学生のみならず、接触相手も同様に回避する姿勢を取ることが見られる。＜接触に対する相手の関与姿勢＞と＜異文化接触の摩擦への回避＞とは、互いに影響すると考えられる。デリケートな話題を互いに回避することが異文化理解に繋がり、それが異文化接触の持続に重要な意義を持つ。

また、以下の2例のように、日本語専攻大学生は相手国・相手文化に対する固定観念が容易に変えられないと認識し、接触の中で衝突にならないように注意深く対応することが多く見られた。本節においては、そこに判断保留の態度が取られていると見なす。

[I:那你就也会因此而产生一定的想法，对他会有一些的想法吗？] 那倒没有，因为怎么说国家看国家的看法那都是早就形成了，那我们也改变不了啊，只要不直接冲突就行了。 (No.9-7)

([I:それで彼の考え方が気になりましたか。] それはいいんですが、何というか、国が他の国を見る、その見方は、全部ずっと前からできているものですからね。私たちは、それを変えられません。直接的な衝突さえなければ、それでいいんです。)

我觉得就是中国人的思维就是根深蒂固，他们的思维也是根深蒂固，只能说你注意着去说，尽量少，不能说完全没有。(No.13-7)

(中国人の考え方は根深くて、向こうの考え方も根深いと思います。注意しながら話せば、その衝突を少なく済ませるんですが、完全にないとは言えないですね。)

上掲の3つの例（[No.18-7]・[No.9-7]・[No.13-7]）から＜異文化接触の摩擦への回避＞は＜固定観念による文化摩擦＞を防ぎ、その【困難】への対応に役に立つと伺える。

さらに、接触中、日本文化に関する知識が不足であるため、日中両国の文化的差異に違和感を感じ、良く対応しないと摩擦になる恐れがあるが、その際、[No.3-2]（本論の p.127

に掲載) の具体例が示したように、そのような摩擦を避けるために、回避する行動が取られることもある。そこから<異文化接触の摩擦への回避>は<接触上の文化的差異>への対応になると見られるが、2概念の関係に関する語りが多く見られなかった。これは<固定観念による文化摩擦>と比較すると、日本語専攻大学生にとって、<接触上の文化的差異>は許容できる範囲にあるため、インタビューに対してその【困難】に対する認識や感情を語っただけだったと考えられる。本研究ではそれは接触中回避する行動をとったと見て取れる。

このように、日本語専攻大学生は、異文化接触の中で日中間の歴史・政治に関するデリケートな話題及び相手の固定観念による中国・中国文化に対する認識、日中両国の文化的差異というような摩擦を引き起こしやすい困難に対して、回避や判断保留という姿勢をとることが明らかになった。日本語専攻大学生は<異文化接触の摩擦への回避>で「異文化による摩擦」に対応するのである。また、接触相手によっては回避する姿勢を取ることも見られるが、このように互いに回避する姿勢を取るとは異文化理解に繋がり、そして、それは、異文化接触の持続に重要な意義を持つと十分考えられる。

5.3.2.3.3 文化的差異についての積極的な意見交換

<文化的差異についての積極的な意見交換>とは、誤解を解消し、自分の文化を理解してもらうために、文化についての説明を行って、相手と積極的な意見交換をすることである。

然后接触好多日本人，他就问我为什么不想留在△△[城市]？有时候我就觉得△△[城市]人脾气不好，说啥都跟干仗似的。然后那个他们说不是所有的中国人都是这样？我说不是所有的中国人都是这样的，我说南方人挺好的，他们可客气了，有可能是△△(城市)人的性格。我说他说话那个方式也不一定他是坏人，跟他说话的方式就感觉给人一种压力。然后他说原来是这样的。然后就得把这个事啊和每个日本人都说一遍。中国人不是所有人都是这个样子，就不想让他们对我们有不好的印象。(No.2-18)

(それから多くの日本人と接触して、どうして△△[都市名]に残りたくないかって聞かれましたが、私は△△[都市名]人の気立てがあまりよくなくて、しゃべるとどうも喧嘩みたいだからって答えました。それで、彼らは、中国人はみんなそんなですかって。私はすべての中国人がそんなだというわけではなくて、例えば、南方の人はいいし、丁寧ですって答えました。そして、それは△△[都市名]人の気立てかもしれないって言いました。それは、コミュニケーションスタイルの問題で、別にその人が悪いわけではない、そんな人と話し合ったらプレッシャーを感じるかもしれないとも言いました。向こうは、そんなですかって、そして、そのことを他の日本人にも言ったらしいです。中国人がみなこんなわけではないので、われわれについてそんな良くないイメージを持ってもらいた

くないですね。)

上掲の例のように、相手が日中間の文化的差異を固定観念で見ているとき、日本語専攻大学生は、積極的に中国文化について説明を行い、相手に中国文化を理解してもらおうとする。それは、「中国人不是所有人都是这个样子，就不想让他们对我们有不好的印象。（中国人がみなこんなわけではないので、われわれについてそんな良くないイメージを持ってもらいたくないですね。）」という部分に見るように、自文化について相手に良くないイメージを与えたくないという意識が働いているためだと考えられる。このように、相手の中国文化への固定観念を意識したとき、日本語専攻大学生において、国家アイデンティティに気づいたり、愛国心が発生したりすることが見られる。

<文化的差異についての積極的な意見交換>は、接触相手に日中間の文化的差異を固定観念で見られているときに成されることである。その底流には、国家アイデンティティ・愛国心が流れている。日本語専攻大学生において<固定観念による文化摩擦>に対して上述した<異文化接触の摩擦への回避>という姿勢を取る者もいれば、<文化的差異についての積極的な意見交換>を通して対応する者もいることが明らかになった。

5.3.2.3.4 異文化接触における客観的な姿勢

<異文化接触における客観的な姿勢>とは接触中、日本・日本文化に対して寛容で尊重的な態度・知的な好奇心を持って、客観的に認識し、理解すること、また、中国・中国文化に対して、批判的な意識を持って客観的に認識し、理解することを内包する。

本節においては、日本語専攻大学生において相手の中国の文化現象に対する認識に客観的な姿勢を取るのみならず、日本・日本文化に対しても客観的な姿勢を取るという2つの視点の存在を明らかにした。以下は、この2つの視点に従い、<異文化接触における客観的な姿勢>を論じる。

このような姿勢の第一は、相手の中国の文化現象に関する認識に対して、批判的な意識を持って、客観的に認識し、理解することである。

也有这样，他们有说就是可能中国人比较吵，然后会说中国交通比较乱，说这些问题。[I:那你当时怎么说的呢?]我说这没办法，我说这些方面交通方面是确实是这些治安方面没有办法和日本相比。但是他们也会说中国的好，就是说这个的人他也会说噢中国现在发展真的很快，然后怎么样，也不会生气的，他其实说的确实是事实。(No.5-12)

(中国人が煩いとか、中国の交通が乱れているとかいう話をよく聞かされました。[I:そのとき、どう言いましたか。]私は、それはしょうがない、交通や治安などの面では日本とは比べられないって言いました。でも、彼らはまた中国の良さも話してくれましたよ。先の話をした日本人は、中国の発展が速いねとかも言ってくれました。で、その後どうかつ

て言ったら、別に怒らないですよ。彼の言ったことは事実ですから。)

「5.3.1.4.2」の〈固定観念による文化摩擦〉において、相手に中国の文化現象を否定する話題を持ち出されたとき、日本語専攻大学生は、戸惑い、困難を覚えるということを明らかにした。しかし、中国の文化現象を否定する認識は相手の固定観念によるものもあれば、そうでないものもあるため、中国の文化現象を否定されたから、それを一概に相手が中国・中国文化に偏見を持っていると認識してしまえば、自身に固定観念が生じてしまう。一方、上記の具体例のように、相手が中国・中国文化を客観的に見ていると意識することや、自国・自国文化を批判的に認識するというような客観的な姿勢をとる日本語専攻大学生がいる。この客観的な姿勢が〈固定観念による文化摩擦〉への対応に重要な意義を持つ。

その第二は、日本・日本文化に対して客観的な姿勢をとることである。まず、日中間の歴史によって生じがちな日本・日本文化への固定観念に対しては、以下の2例のように、歴史・現在、政治・国民レベルのコミュニケーション、一部の日本人/中国人・全体の日本人/中国人を切り分け、批判的な意識を持って対応している。

我觉得我是属于对这种事情看得还哪怕是从政治角度讨论这个问题，我也算比较看得客观公正的那伙人，我觉得，就能客观。(中略)。所以我觉得历史问题是历史问题，就是不管日本的政府是怎样的一个什么，我们是接触的每一个人每一个人每一个人对不对？所以不能把对于这个国家或者对于这个国家的这个政治方面的偏见带到这个人身上。(No.17-14)

(こんなことに対してたとえ政治の角度から見るとしても、私は客観的で、公正的に見られる人だと思いますよ。客観的にね。(中略)。歴史問題は歴史問題で、日本の政府がどうかに関わらず、私たちが接触しているのは1人1人の日本人でしょう。ですから、私たちは、ある国の、あるいはある国への政治的な偏見を個人に持ってきてはだめだと思います。)

其实并没有什么影响，网上的一些言论也是一些个别人的言论，就好比中国的网络喷子一样，其实这些人也不能代表所有日本国民的想法，所以我不会把“反中情绪”标签套用在所有日本人身上。而且很幸运，我碰到的日本人对待中国和中国人的态度都比较亲切友善，也不排除有一些是因为在中国工作，身边都是中国人，被迫装友善，实则反感中国人的。不管是哪种，在现实交往中，可能是日本人磨练出来的人际交往礼仪比较好，并没有对交往产生什么影响。(No.0-C1)

(実際、そんなに影響はないですよ。インターネット上の言論は、一部の人の言論だけで、例えば、中国のネットスラングのような人もいないですか。それらの人は、すべての日本の国民を代表できないと思います。だから、「反中情緒」のラベルをすべての日本人に当てはめてはならないです。そして、幸いなことに、私の出会った日本人は、中国や中国人に対して親切で友好的です。もちろん、中国で働いていて、周りはみな中国人で

すから、仕方なく友好的には見せていますが、実は中国人に抵抗感を持っている人もいるかもしれません。だとしても、実際のコミュニケーションの中では、日本人の礼儀やマナーなどがよくて、それでコミュニケーションにあまり影響がないんですね。)

次に、以下の2例のように、日中間において文化的差異が存在するときに、その差異を寛容で、尊重的な態度で客観的に見ることも確認できた。これは<異文化接触における客観的な姿勢>は<接触上の文化的差異>への対応に促進作用を持つと言えます。

我觉得很正常，因为每个国家情况都不一样，因为我们对他们也不理解，就觉得嗯，比如说他们那个啊，有时候就是比如说就拿过马路这个事情，嗯，我们可能就比较随意，中国式过马路，他们就是特别遵守那个规范。(No.12-8)

(それが当然だと思います。国によって状況が違うのです。私たちはやはり彼らをよく知らないです。例えば、道を渡ることはよく例にされているのですが、私たちはそれをあまり気にせず、中国式の渡り方をしますが、彼らは交通ルールに特に従います。)

如果除掉语言障碍的话，其实就是一个性格的问题，一个是性格，然后再一个，就是对他们文化尊重一下，彼此尊重一下文化就好了，我们各个文化就不一样。(No.12-8)

(言葉の障壁を除けば、実際それは性格の問題で、1つが性格で、もう1つが彼らの文化を尊重することです。お互いの文化を尊重すればいいんですよ。それぞれの文化が違うんですから。)

また、以下の2例が示しているように、日本語専攻大学生は、中国人との対人関係経験から示唆を獲得し、その示唆を異文化接触に当てはめている。それが客観的な姿勢の形成を促進すると考えられる。

而且我觉得这不单单只限于日本人，毕竟有的时候与中国人一言不合可能还会吵起来呢。就是大家互相理解的一个程度吧。(No.14-4)

(それから、私はそれが日本人に限らず、中国人との接触の場合であっても、1つの言葉がかみ合わなくて喧嘩になっちゃうこともあるので、やはりお互いに一定程度理解し合うことですね。)

其实我觉得，假如需要我和别人相处得特别好的话这个过程也是十分漫长的，短期内的话大家并不是互相知根知底互相了解的情况下，不仅是日本人，我们一样的中国人想要敞开心扉的交流也是一件很困难的事。(No.14-5)

(実は、人とうまく付き合えるまでその過程がとても長いと思います。時間が短い間は、みんなはお互いによく知らないなので、日本人だけでなく、私たち中国人の間でも心を開い

てコミュニケーションするのは難しいです。)

また、「我觉得文化不同肯定都有不一样的地方，当时也是觉得很新鲜，看一看他们是这样的。(No.8-3) (文化が異なれば、きっと違うところがあります。当時は、やはりみな新鮮で、彼らがどうなのかって見たかったです。)」という具体例から見られるように、知的な好奇心を持つことも日本・日本文化を客観的に認識することに役立つ。

以上の記述から、日本語専攻大学生は、<異文化接触における客観的な姿勢>を取ることによって[異文化による摩擦](<接触上の文化的差異><固定観念による文化摩擦>が内包されている)に対応することが浮き彫りになった。また、[No.12-8] (本論の p.137 に掲載) のような例が示したように、日中両国の文化的差異に関する知識を持つことが<異文化接触における客観的な姿勢>の形成に大きく寄与する。<異文化間知識の活用>は<異文化接触における客観的な姿勢>の形成に促進作用を持つと言える。

さらに、「而且很幸运，我碰到的日本人对待中国和中国人的态度都比较亲切友善，也不排除有一些是因为在中国工作，身边都是中国人，被迫装友善，实则反感中国人的。不管是哪种，在现实交往中，可能是日本人磨练出来的人际交往礼仪比较好，并没有对交往产生什么影响。(No.0-C1) (そして、幸いなことに、私の出会った日本人は、中国や中国人に対して親切で友好的です。もちろん、中国で働いていて、周りはみな中国人ですから、仕方なく友好的には見せていますが、実は中国人に抵抗感を持っている人もいるかもしれません。だとしても、実際のコミュニケーションの中では、日本人の礼儀やマナーなどがよくて、それでコミュニケーションにあまり影響がないんですね。)」と語られたように、接触相手の友好的な態度が、日本語専攻大学生における客観的な姿勢の形成を促進していると見られよう。<接触に対する相手の関与姿勢>が<異文化接触における客観的な姿勢>に影響するというわけである。

最後に、インタビューデータに<異文化接触における客観的な姿勢>は<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>に与える影響に関する語りが直接的に見られなかったが、河先(2010)は態度がスキル上の異文化間能力の伸長に繋がると示唆しているように、客観的な態度を持っているからこそ、回避や判断保留、そして冷静な文化説明ができるのであろうと考えられるため、<異文化接触における客観的な姿勢>は<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>に影響を与えよう。

「5.3.2.3.4」は、以下の3点のように纏められる。

- ①<異文化接触における客観的な姿勢>は、接触相手の中国の文化現象に対する認識に取られる客観的な姿勢と、自身の日本・日本文化に対して取られる客観的な姿勢に分けられる。前者は接触相手の中国の文化現象に対する認識に批判的な意識を持って客観的に認識し、理解することを指す。一方、後者は、日本・日本文化に対して、批判的な意識・寛容で尊重的な態度・知的な好奇心を持って客観的に認識し、理解するこ

とを指す。

- ②日本語専攻大学生が中国人との対人関係経験を異文化接触に当てはめる側面がある。
- ③本節では、＜異文化接触における客観的な姿勢＞の形成は＜異文化間知識の活用＞によるところがあり、＜異文化接触における客観的な姿勢＞は〔異文化による摩擦〕への対応に役立ち、そして、＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響され、さらに＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞を促進するという概念間の関係が明らかになった。

5.3.2.3.5 ポップカルチャーに起因するポジティブな観念

＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞とは、日本のポップカルチャーに興味を持ち、ポップカルチャーの利用によって日本・日本人に対してポジティブな観念を持つことである。

就是一开始大家有时候看了很多日剧什么的，就挺喜欢日本这个国家的，然后在日剧里看他们就是人跟人相处那种感觉，我也挺喜欢的。(No.1-2)

(最初みんなは、多くの日本のドラマを見ました。それで、日本という国がとても好きになりました。そして、ドラマの中の彼らの互いの付き合い方を見て、それもとても好きになりました。)

初二的时候，跟我哥看了一集日本动画片，我觉得挺不错的，然后就一直看着看着，就迷上了。自己又找了好多别的动画，慢慢的就迷上了日语，觉得动画里他们说的话挺帅的。(中略)。有喜欢日语的这个原因，然后也有是自己除了日语，好像没有什么特别喜欢的了。(中略)。跟日语有关的这个动画片，还有日剧啥的总有好看的、吸引我的东西。实在无聊的时候，就把以前的动画片再看看有啥吸引我的。我大部分都看过。(No.11-1)

(中学校2年の時、兄と日本のアニメを1編見て、おもしろいと思いました。見ているうちにハマってしまいました。自分で別の多くのアニメを探したら、だんだん日本語にハマっちゃいました。アニメの中の主人公の話はかっこいいと思ったからです。(中略)。日本語が好きという原因もあって、日本語以外に特別に好きなものはもうないような感じです。(中略)。日本語と関係のあるアニメ、そしてドラマなどは、とにかくおもしろくて、私を引き付けるものがあります。とても退屈なときは、前のアニメをもう一度見て、他に私を引き付けるものがあるかって感じです。私、アニメはほとんど、見たことがあります。)

中国の日本語専攻大学生においては、協力者〔No.11〕のように、大学に入る前から日本のポップカルチャーに興味を持ち、それを利用し続ける者もいれば、協力者〔No.1〕のように大学に入って、日本語能力を高めるためや日本文化を知るためにポップカルチャーを

利用し始める者もいる。ポップカルチャーを利用しているうちに、日本・日本人に好印象を持つようになり、それによって異文化接触を開始し、そうしているうちに、接触の中で<接触上の文化的差異>や<固定観念による文化摩擦>というような【困難】をある程度避けられるようになるかと推測できる。これらはポップカルチャーを利用した後現れた効果であると考えられるが、一方、以下のような例もある。

就是可能以前吧，小时候我们比较就是，大概就是这个因素比较大吧，就是可能有点反日心理那种的，反正就是因为受些影响，（中略）。然后本身的话，我不像他们其他人，其他人就是他们，可能小时候看日漫的，我也不看日漫。嗯，我也不看日剧什么，就是对日语方面接触的比较少。（No.12-2）

（私たちが小さい時、この原因が大きかったのでしょうか、すこし反日心理を持っていました。とにかくすこし影響を受けました。（中略）。それから、私自身は他の人たちと違って、彼らは小さい時アニメなどを見てきたんですが、私はアニメを見ていなかったです。ドラマもあまり見なかったです。それで日本語との接触が少なかったです。）」

上掲の語りから接触上の対日態度を改善するためにポップカルチャーを意識的に利用する工夫が伺われる。ポップカルチャーが日本に対するポジティブな観念の形成に有意義であると意識し、そしてそれを積極的に利用する語りが多く見つからなかったが、異文化接触経験者にポップカルチャーの利用者が多く、ポップカルチャーの利用が日本に対するポジティブな観念の形成に役に立つと意識的に利用する者もいるのではないかと考えられる。<ポップカルチャーに起因するポジティブな観念>は<異文化接触における客観的な姿勢>の形成に促進作用を持つと考えられ、そして<固定観念による文化摩擦>・<接触上の文化的差異>という困難への対応に肯定的な影響を与えることが推測できる。

しかし、ポップカルチャーを利用すればポジティブな観念しか生まれないとは必ずしも限らず、以下の語りのように、ポップカルチャーの利用がかえって日本・日本人に対する偏見を生じさせる側面もあることは注意する必要がある。

[I: 你之前想象当中的是什么样的呢?] 工作狂啊。然后可能做什么都比较认真，也不太会和你比较好的交流或沟通那种，最开始真的是这种感觉。[I: 最初是什么影响你有这种感觉的呢?] 就是看日剧的时候，比如说《半泽直树》啊这种，这种社会压力。我还看过《First Class》全都是这种社会压力，特别变态，一整就下跪啊，平时不苟言笑的，平时拿着公文包匆匆忙忙的那种，对自己的妻子也是那种眼神不太对劲那种的，最开始的时候我觉得这种特别吓人。（No.19-3,4）

（[I: その前に想像した日本人はどうでしたか。] ワーカホリックでしたよ。それから何をしても真面目で、交流やコミュニケーションがあまりよくできなくて、最初は本当にそんな感じでした。[I: 最初は何の影響でそう思っていたのですか。] ドラマを見ているとき、

例えば『半沢直樹』などから社会的ストレスをすごく感じました。他に『First Class』も見たことがあります。社会的ストレスばかりで、非常に変だと思いました。とかく跪いたり、普段は何も言わず、めったに笑わず、かばんを持っていていつもあわただしくしていたりして、自分の奥さんを見る目も変で、最初のうちはとても怖い感じでした。)

5.3.3 接触に対する相手の関与姿勢

<接触に対する相手の関与姿勢>とは、接触に対して相手の取っている積極的な、あるいは消極的な態度のことである。

異文化接触は、接触両側のやり取りによって成り立つものであるため、<接触に対する相手の関与姿勢>は、接触に大きな影響を持つ。次の2例のように、相手の積極的な関与姿勢が日本語専攻大学生による【努力と工夫】を有効なものにする。

一般就是你说中国式的日语啊，他意思能听懂他也不会太计较。(No.2-5)

(こちらが中国式の日本語を話しても、相手は意味が分かればあまり気にしないようですね。)

因为要适应在中国的生活，还要照顾在中国上学的孩子们，感觉她生活中需要用到汉语的地方有很多。除了上课内容以外，她更多的是问我一些生活当中的问题，比如如何用淘宝买东西，如何用微信，这个东西的说明书是什么意思。她会把我当成在中国的朋友一样，从日本回国也会带礼物给我，邀请我一起去看画展，当时还拍照留念了。上完课在她家做大阪烧和她们一家人一起吃，这些都让我感觉〇〇太太性格开朗热情，想跟她做朋友。(No.1-18)

(中国の生活になれるために、そして中国で入学した子供たちの面倒を見るために、彼女は生活の中で中国語を多く使っています。授業の内容以外、彼女は生活の中の問題をよく聞いてくるんです。例えば、淘宝³⁸でどのように買い物するか、どのようにウイチャットを使うか、品物の説明書はどんな意味かなどのような問題でした。彼女は、私を中国での友達のように見てくれて、日本から帰ったときはいつもお土産を持って来てくれて、一緒にギャラリーを見に行くことを誘ってくれました。記念写真もとりました。授業の後、彼女が家でお好み焼きを作ってくれて、家族の人たちと一緒に食べました。これらで〇〇さんの明るさ、やさしさを感じて、彼女と友達になりたくなりました。)

相手の積極的な関与姿勢と同時に、日本語専攻大学生による【努力と工夫】も、<接触に対する相手の関与姿勢>を促進するだろうと推測できる。両者は、相互関与の関係にあると考えられる。

³⁸ 「淘宝网 (タオバオワン)」のことで、中国のショッピングの Web サイトである。

一方、「就根据人吧，像有的人他就是喜欢学习，他就是看书，然后也不跟你聊别的，就是你说一句他就答一句说一句他就答一句。(No.2-14) (やはり人によって違いますね。例えば、勉強好きな人がいて、教科書の話だけは話しますが、ほかのことはしゃべってくれません。こちらの質問にしか答えられない感じでした。)」のように相手が接触において消極的な姿勢を取ることは、日本語専攻大学生における異文化接触の【困難】を増大させ、接触をある程度阻害するものであることが窺われる。それと同時に、日本語専攻大学生が接触において抱える【困難】も、＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響を及ぼすと考えられる。両者は、相互関与の関係にあると言える。

接触中、日本語専攻大学生は、【困難】を抱え、【努力と工夫】でそれに対応すると同時に、＜接触に対する相手の関与姿勢＞も関わり、接触が阻害されたり、促進されたりする。日本語専攻大学生における【困難】・【努力と工夫】、および＜接触に対する相手の関与姿勢＞、この3者が相互関与しながら接触が展開されていく。

5.4 持続中（断念）

5.4.1 効果

異文化接触を続けていくうちに、日本語専攻大学生において、その【効果】が顕在化するようになる。この【効果】には、＜コミュニケーション能力の向上＞・＜目的の達成＞・＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞・＜他情報源から得た日本認識との総合＞・＜日本人イメージの具体化（個別化）＞・＜文化理解の意識化＞・＜日本文化の受容＞・＜異文化接触の経験の共有＞が挙げられる。

5.4.1.1 コミュニケーション能力の向上

日本語専攻大学生は、異文化接触をすることで、＜コミュニケーション能力の向上＞が果たせる。＜コミュニケーション能力の向上＞とは、異文化接触を通して、日本語による話す能力・聞く能力・コミュニケーションストラテジー能力などが向上すること、及びそれによって日本語能力に自信のないことからくる不安が緩和されることである。

＜コミュニケーション能力の向上＞に関しては、「我就听、说方面还是有很大的进步。(No.2-6)」(やはり、聞くのと話すのに大きな進歩がありました。)というように、まず、話す能力・聞く能力の向上がもっとも実感される。

我觉得做这份兼职，提高最多的就是口语。多了用日语的机会，在备课的时候也会想这个怎么用日语说对方能懂。听他们说的日语，也能让我学会更贴近生活的口语，会模仿他们的

语音和表达。(No.1-17)

(このアルバイトをして一番高められたのが話す能力です。日本語をアウトプットするチャンスが多くなったからです。いつも授業の下準備をしながらどのように日本語で話せば相手にわかってもらえるかと考えます。彼らの日本語を聞くことで、生活に近い言葉が学べるし、そして彼らの発音や表現などを真似することもできます。)

上掲の具体例から、コミュニケーションするとき、相手にわからせるように言葉遣いを工夫すること自体が、そして、相手の日本語の発音・言葉・表現を真似するなどの具体策が話す能力の向上につながるということが分かる。

そして、次の具体例が示すように、日本語専攻大学生は、コミュニケーションをしているうちに、聞く能力も向上する。

现在比如说我听那个2级啊、1级啊这样的听力，我以前的时候完全凭运气，现在就觉得大概我能听懂那种感觉。然后有的时候那个听力里边说的啥，这个好像以前有日本人也是这样说的，就是还是有帮助的。(No.2-6)

(前は、N1、N2のような「聴解問題」は、全部運で聞いていましたが、今は大体聞き取れるようになった感じです。それから、「聴解問題」の中の内容は、前に日本人がこう言ったと思い出すことがあります。やっぱり役に立ちましたよ。)

次に、以下のような語りから接触の中でコミュニケーションストラテジー能力も鍛えられることが判明した。

就是当我和日本人说日语的时候，我不打怵。嗯嗯，不紧张。就是跟日本人讲话了，不害怕。就即便有时候我知道这个东西，我不知道用日语怎么说，那我也不害怕，我就知道反正我拐弯抹角地连比带画的这个事能说，反正要实在说不明白呢就拉倒。就是实在说不明白了就不说了，就换一个话题，或者说拿手机或者拿什么东西出来查，就总而言之我没有那种恐惧的心理。“啊我要是说不明白怎么办呀我要是不会了怎么办呀我张不开嘴”，我就没有这个心理压力。(No.17-6)

(私は、日本人と日本語を話すとき、緊張しません。うん、緊張しないですね。日本人と話すとき、怖くないってことです。たとえ、日本語で何て言うのか分からないものでも、怖くないです。別の表現や、身振り手振りなどで何とかなると分かっているからです。どうしても言い表せなければ、もうしょうがないです。ちゃんと伝えられなければ、言うのはやめて別の話題に切り替えたり、携帯や他のもので調べたりしますから、とにかく怖いという気持ちがないんです。「ちゃんと伝えられなければどうしようとか、できなかつたらどうしようとか、口が開けられないとか」、そんなプレッシャーがありません。)

コミュニケーションストラテジー能力の向上に関する語りは、それほど多く見つからなかったが、それは、その利用が教室内ではあまり提示されておらず、学習者に自覚されていなかったからではないかと推測できる。

さらに、上の具体例からコミュニケーションストラテジーの使用によって日本語能力の不足からくる不安を避けられるということも、観察できた。そして、「我感觉通过一年多的就是给日本人上课，我的口语锻炼很多，以前就是不太敢说，现在就是上课的时候就随便聊天啊。(No.3-3) (日本人に中国語を教えて1年間あまり、話す能力が多く鍛えられたと思います。その前はあまり話せなかったですが、今は、授業の時に自由にしゃべれるようになりました。)」というように、聞く能力・話す能力の向上に従い、日本語能力に自信がないことによる不安も、緩和されてくるのである。

5.4.1.2 目的の達成

<目的の達成>とは、視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などの目的が達成することである。

就是上课一方面挣钱嘛，另一方面就是感觉上课挺开心的，就感觉生活挺丰富的，也长很多见识。尤其他们很多上班的就是年龄就都在30岁以上，感觉和他们交流也学到了很多，反正每次上完课出来我都很开心，感觉。(No.3-1)

(授業をしながら稼ぎますね。また、授業は楽しかったですよ。生活が豊かですし、視野も拡大しました。特に彼らにサラリーマンが多くて、年も30歳以上で、彼らとコミュニケーションしているうちに、大いに勉強になりました。とにかく授業が終わった時にいつも楽しくて、そう感じました。)

というように日本語専攻大学生は接触中、視野の拡大、社会経験の蓄積、生活の充実、資産形成などの目的が達成される。

5.4.1.3 対人関係の不安の軽減と満足感の獲得

<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>とは、接触経験や日本人との対人関係構築によって発話不安や対人関係不安を軽減し、達成感や楽しさなどのような情意的満足感を獲得することである。

まず、以下の2例のように、接触経験の積み重ねによって、異なる文化背景を持っている人と接触することからくる発話不安や対人関係不安が軽減される。

但后来慢慢的就是每个星期就是一天当中后来就没什么课[大学里的日语课]了吗，学校，

就说就一天当中有个几乎每天都有课[汉语教室的汉语课]，所以说每天都能见到日本人，然后就习惯了。(No.2-1)

(でも毎日の授業[大学での日本語の授業]がだんだん少なくなりました。大学での。それでほぼ毎日授業[中国語教室での中国語の授業]がありました。毎日のように日本人と会うので、慣れてきました。)

然后以后就是可能嗯，外面突然碰到日本人啊什么的，你也能，他问你，你也是敢说一下的，就是敢说了。(No.1-3)

(それで、後で例えばどこかで日本人にでも会ったら、聞かれたら、やっぱり話せますよ。話せるようになってるんです。)

次に、下の2例のように、対人関係が構築されるに従い、互いの関係が近くなり、それによって発話不安や対人関係不安が緩和される。

嗯，但是跟日本人接触教课，我觉得它是一个还挺放松的一个状态，你跟他熟了以后，就你们两个嘛，有的时候你说错什么也没有关系，他能听懂。(No.1-3)

(日本人と接触して、中国語を教えることは、とてもリラックスできることで、相手との関係が長くなったら、2人だけですから、間違っても大丈夫です。相手が分かってくれますから。)

〇〇老师现在四十多岁吧，当时觉得挺严厉的，当然现在也挺严厉的，但是慢慢熟悉了之后，也能够经常聊一些话题，挺幽默的。(No.10-5)

(〇〇先生は40代ぐらいで、当時は厳しかったです。今も、厳しいんですが、だんだん慣れてきたら、よくいろいろな話題についてしゃべるし、けっこうユーモアがあるんですよ。)

接触経験や対人関係の構築によって発話不安や対人関係不安が軽減されるメカニズムは、次のような例からも、その一部が窺われる。

但是慢慢地地发现啊他们也是普通人，也就是说的话呀、干的事啊、唠的嗑啊，他们在日常生活中还是很随和很平易近人的，也就不会那么紧张了，也不会说和他接触就得板板整整的，就是该干嘛干嘛。(No.5-14)

(でも、だんだん彼らも普通の人だとわかりました。話したことや、やったこと、しゃべったことなど[も普通の人と同じです]。そして、彼らが日常生活では付き合いがよくて親しみやすいということがわかった後は、そんなに緊張しなくなりました。彼らと接触するとき、必ずしもきちんきちんとしななければならないとは言えないと思います。自由にす

ればいいんです。)

相手が異なる文化背景を持っているため、日本語専攻大学生は、その「異なる」部分を過大に予測し、それによって不安を募らせる。しかし、接触経験の積み重ね、対人関係の構築とともに、相手が同国人とはそれほど異なっていないと認識することになり、それに従い、不安も緩和されるようになる。

また、異文化接触からは、達成感のような情意的満足感を獲得することもできる。

之前我发朋友圈她也给我评论了一下，我觉得天呀，这么久都没有联系……我一直觉得日本人的性格是不太想跟人有过多的、深的交往，或者是太频繁的接触。但是她给我评论我还挺惊喜的，毕竟都好久没联系了。(No.6-4)

(その前、モーメンツに投稿したら彼女からコメントが入りました。びっくりしました。本当に久しぶりの連絡だったからです。…日本人は、人とあまり多く、深く、あるいは頻繁に付き合いはしない性格だとずっと思っていました。でも、彼女からコメントをもらって本当にうれしかったです。それほど、久しぶりの連絡だったんです。)

この例のように、日本語専攻大学生は、異文化接触の経験から達成感をも得られる。そして、そういう達成感は、この例のように、外部からの評価によって感じるものもあれば、自身の進歩や異文化接触が順調であるなどの自己認識を通して判断するものもある。

さらに、異文化接触を通して楽しい思いのような満足感も得られる。

有时候上课挺开心的，还有上课就是挺高兴。比如说比如说他说一些东西说错啊或者怎么样就挺好玩的，挺搞笑的。嗯嗯就挺总的来说，上课就挺愉快。(中略)。有的时候异文化真的有不同的文化、不同的认识。这样导致上课的时候，反正说话包括语言的问题特别好玩啊，有的时候我们同学都几个都上课的我们有时候坐在一起聊天，就说起来更多的学生好玩的事情，就是大家一起笑。(No.3-12)

(授業の時は、けっこうノれますね。授業は、楽しかったと思います。例えば、学生の間違いとか、何かとてもおもしろくて、笑えます。授業は、全体的に言えば、とても楽しいです。(中略)。異文化は、本当に異なる文化で、違う認識を持っていますね。それで授業の時、とにかく「言葉」の話となったらおもしろいですよ。時に同じく中国語を教えているクラスメートとしゃべって、学生のおもしろい話をすると、みんな笑います。)

上掲のような語りから、異文化接触から得られる楽しさは、異文化接触の内容、相手との対人接触、および異なる文化に対する知的新鮮感などからくることが分かった。また、「尤其他们很多上班的就是年龄就 30，都在 30 岁以上，感觉和他们交流也学到了很多东西，反正每次上完课出来我都很开心，感觉。(No.3-1) (ことに彼らの多くはサラリーマンで、

年齢が皆 30 歳以上です。彼らとコミュニケーションして、いろいろと勉強になりました。毎回授業の後はとても楽しかったです。）」というような語りから、満足感、他に社会履歴が豊富な相手との接触経験による視野の拡大という＜目的の達成＞から来ることも分かった。

また、「开始的时候其实很紧张，心扑通扑通的跳，怕自己教不好。后来慢慢慢慢的，也是对这个人有所了解了，还有就是自己语言水平可能也提高一些了，就会自由一点，想说什么就说什么吧，也会有拘谨，但是还是比以前放的开。（No.18-7）（最初の時はとても緊張で、ドキドキして、うまく教えられないんじゃないかと心配していました。でも、だんだん相手のことがわかるようになって、そして、自分の日本語のレベルも少しは上がったのか、ちょっと自由になって、話したいことが話せるようになりました。堅苦しい時もありますが、前より自由になりました。）」という例から分かるように、＜コミュニケーション能力の向上＞は、＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞を促進する作用を持つと考えられる。

Bandura (1977)は、「自己効力感理論」を提唱しているが、その中で「自己効力感」とは自分があるタスクを遂行するための能力に対してどのように判断するかということであり、その判断は、遂行行動の達成（以前に同じようなタスクが完成できたか否か）・代理的体験（他人の経験を通して自分にできるかどうかを判断する）・言語による説得（他者の「君ならできるよ」というような励ましの言葉）・情動的喚起（生理的な反応の変化の体験）に影響されると論じている。本研究においては、日本語専攻大学生が異文化接触を通して成功経験から達成感を感じ、不安の軽減や楽しい思いを獲得し、それが一貫性を持った要因となって自己効力感が得られ、それがさらに異文化接触の持続に繋がると考えている。この図式は、上述の「自己効力理論」から理論的サポートを得られるものと思われる。

「5.4.1.3」をまとめると、以下の2点なる。

- ①＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は、異文化接触の情意的【効果】であり、そこには、接触経験や日本人との対人関係構築による発話不安や対人関係不安の軽減、達成感、および楽しい思いという内容が内包されている。これらの内容は、自己効力感が得られる要因であることで一貫性を持っており、このような自己効力感の生成は異文化接触の持続に繋がる。
- ②＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は、＜コミュニケーション能力の向上＞や＜目的の達成＞から影響を受ける。

5.4.1.4 他情報源から得た日本認識との総合

＜他情報源から得た日本認識との総合＞とは、異文化接触から得た日本認識が、日本語教師・日本語学習・マスメディア（日本と中国双方のマスメディア）・ポップカルチャーなどの情報源から得たものと総合し、日本や日本人への認識が深化することである。

日本・日本人を知る情報源としては、異文化接触・日本語教師・日本語学習・マスメデ

ィア（日本と中国双方のマスメディア）・ポップカルチャーが日本語専攻大学生によって利用されている。

随着这个学的东西多了以后，然后大二就是去面试，接触就是教日本人，刚开始学生少，然后教的多了以后发现很多和我们不同的地方。而且学校老师也会讲一些就是有关文化的一些东西，自己看日剧什么的也能发现日本文化的一些传统啊什么的，我就对日本这个国家也产生了兴趣，就是想更多地了解一下 [日本] 到底怎么回事。(No.6-3)

(学ぶものが多くなってきたので、大学2年生の時に面接に行きました。接触のチャンスは、日本人に中国語を教えることでした。最初は学生が少なかったですが、教えることが多くなるにつれて学生と私たちとは違うところが多いことに気付きました。大学では、先生は文化についてのことを話しますし、自分も日本のドラマを見るから、日本の伝統などを一部知りました。それで、日本という国に興味を持つようになって、[日本] が一体何かをもっと知りたくなりました。)

然后我的学生还挺能送我礼物的，我倒也不是说我觉得 [送礼物] 怎么样，送礼物也体现了他们的一份心意，他们也可以不送。然后还有看日剧吧，对有些 [日本人] 积极的一面，对生活的有些态度，比如说，很多很多方面，比如说家居风格，或者是为人处事，然后还有他们日剧里面总是有很多经典的那个台词什么的，就比较印象深刻。然后就慢慢的，我就会跟我父母唠叨这些。(No.6-6)

(私の学生がよくプレゼントをくれましたが、別に [プレゼントをくれることが] どうこうじゃなくて、くれなくてもいいんですが、それが彼らの気持ちの現れなんだと思いました。それから、日本のドラマを見ましたが、[日本人の] 積極的な一面、生活態度など、いろいろなこと、例えば、インテリア、人との付き合い、またドラマの中のセリフなども、とても印象的でした。だんだんそれらを親にしゃべるようになりました。)

この例のように、日本語専攻大学生は、異文化接触から得た日本認識を、日本語学習や日本語教師やポップカルチャーのような情報源から得たそれと総合して日本・日本人への認識を深め、その深化した日本認識がさらに日本・日本人への興味をそそる。そこから、異文化接触の<他情報源から得た日本認識との総合>が日本文化に対する受容的な態度の形成に役立つということが見て取れる。<他情報源から得た日本認識との総合>が<日本文化の受容>に影響するのである。上掲のような具体例から、異文化接触の<他情報源から得た日本認識との総合>が日本・日本人に対する認識を深めるため、それがまた、<文化理解の意識化>にも促進作用を持つことが窺われる。

一方、次の例のように、異文化接触からポジティブな日本認識を得た一方で、他情報源からネガティブなものを受け、それによってギャップが生じ、さらにそのネガティブな日本認識に戸惑いを覚えるというケースも確認された。

其实日本人之间，尤其是我最近看了很多报道嘛。就是他们心里想的东西不会太表现到外部上，而是在背地里面来弄一些东西，我特别害怕这种，尤其前两天听有的日本人说“line”[一种聊天工具]上，他们[日本人]就是互相建一个群组，又会建另外一个群组里面没有其中一个成员，然后专门骂这个成员这样。(中略)。这是日本的一个社会现象，然后我不太喜欢这种，正好这些人就是日本的中学生或者大学生，然后正好我去日本的时候大概就会是这些人是我的同事，我就会感觉挺恐怖的，尤其还是外国人。(No.19-4)

(特に最近多くの報道を見ましたが、日本人は心で考えることをあまりむき出しにしないで、その代わり裏で何かをするらしいです。こういうのは、怖いです。特に、この間日本人から聞いた話ですが、日本人が「ライン」でグループを作った後、また誰かを外すために別のグループを作ってその人の悪口をいうって。(中略)。これは日本の社会現象ですが、こういうのは好きではありません。ちょうどこれらの人たちが日本の中学生や大学生ですから、私が日本に行ったら、こういう人たちが私の同僚になるかもしれません。それを思うと怖いです。特に、外国人にとっては。)

中島・板倉(2003)は、異文化理解の形成には異なるインプットが関与し、そしてそれらのインプットは1つずつ直接的に特定の異文化理解を形成するのではなく、数種のもものが相互作用しながら、複雑に、時には矛盾しているように絡み合い、取捨選択されながら異文化理解の形成過程に統合されていくと論じている。上掲の具体例が示したように、中国の日本語専攻大学生は、異文化接触の<他情報源から得た日本認識との総合>で日本・日本人への認識を深めるが、その認識が固定観念になり、その後の異文化接触、さらに異文化理解を阻害する可能性もあるということは特筆されるべきである。これは、接触が持続している場合でも、【困難】が伴っていることを意味しているからである。

このように、日本語専攻大学生は、接触を継続しているうちに、異文化接触の<他情報源から得た日本認識との総合>をし、それが<文化理解の意識化>や<日本文化の受容>を促す。その一方、異文化接触の<他情報源から得た日本認識との総合>は、必ずしもポジティブな働きしか持たないとは限らず、ネガティブな認識が生じ、これからの異文化接触、さらに異文化理解を阻害する可能性もある。これは接触が持続している場合でも、【困難】が伴っていることを意味している。

5.4.1.5 日本人イメージの具体化(個別化)

<日本人イメージの具体化(個別化)>とは、日本人に対するイメージが全体的・抽象的なものから具体的・個別的なものになることである。

其实我对日本人没什么感觉，就是来上大学以后就感觉就怎么说呢，看〇〇A老师和〇〇

B 老师就真的感觉他们活的就是特别累，但是就每一件事都做得非常井井有条的那种感觉。这件事做完了那件事，我该做这个事的时候，我就不做别的事，就这点，我真的特别佩服。嗯，就是怎么说呢，就是勤奋吗，这是。还有，以前也经常听说日本人就是挺注重时间的，但是来这[大学]以后，真的是亲身体会到了。特别就是〇〇A老师的话，可能就更是时间段安排得非常有效率，非常注重时间。(No.9-6)

(実は、私は、日本人にあまり興味がなかったです。大学に入学したら、何というか、〇〇A先生と〇〇B先生を見て、お二人とも本当に仕事が大変だなあって思いました。でも、先生方は、どんなことでもきちんとしているって感じで、一つ終わったら別のことに移って、そして何かをする時集中してやるから、そこに本当に感心します。うん、何というか、これが勤勉なのか。また、前に日本人が時間に厳しいとよく聞きましたが、ここ[大学]に来たら、身に染みて感じました。特に、〇〇A先生は、時間をとても効率的に利用していて、時間を非常に大事にしているんです。)

イメージの具体化の第一は、上掲の例のように、日本語専攻大学生においてそれまでに抱いていた日本人に対する全体的・抽象的イメージが異文化接触を通して具体化されるようになるということである。そして、その具体的イメージが日本人に好感を持つこと、＜日本文化の受容＞を導くということが見られた。

还有就是他们都说日本人不太喜欢和别人交流吧，但是我觉得也分人，有的会像那种比较健谈的，就尤其的健谈，然后不爱说话的，就会经常一个人去吃饭，默默的吃饭，然后也不和人打招呼的那种，就分两种，好像是挺极端的，我感觉。(No.7-8)

(もう1つ、日本人が人とコミュニケーションするのがあまり好きでないとよく聞いていますが、私は、それもやっぱり人によって違うと思います。話し好きな人はよく話しますが、話が好きでない人は時々1人で食事に行って、黙ってご飯を食べて、人にも挨拶しないみたいな。2種類に分かれていますね、極端っぽいですね。)

我觉得就是日本干净，嗯，然后比较利索，日本人的印象就比较利索。但是，嗯，偶尔看到那个留学生可能会也会比较邋遢一点。(No.12-7)

(私は、日本はきれいだと思います。それから、けっこうきちんとしてさっぱりしてますね。日本人のイメージは、きちんとしていることです。でも、たまに留学生にはだらしない人もいます。)

具体化の第二は、上掲の2例から見られるように、接触をしているうちに、日本人に対する全体的イメージが個別的になることである。そして、このような個別的イメージは、ステレオタイプを崩す作用を持つと見られる。

日本語専攻大学生が異文化接触を始める前に日本人にステレオタイプを持っているとし

ても、実際の接触をすると、そのイメージが個別化するようになり、それによってステレオタイプが崩壊するのである。中島・板倉（2003）は、異文化接触がステレオタイプを崩し、多元的な見方につながる効果があると論じた。本節において得た結果は、それと一致している。

具体化の第三は、次の例のように異文化接触から得た具体的、個別的イメージが偏見という固定観念を修正する作用を持つことである。これは、異文化接触が両国間で互いに持っている偏見の減少に繋がり、異文化理解に役立つことを示唆している。

以前因为对日本人不了解,所以对他们的印象都是基于自己的猜测或者家庭环境的影响吧,觉得他们可能非常刻板、严肃。但是通过之后对之前运动会遇到的老师或者通过与日本外教交流,对他们的印象更加鲜活了,觉得他们其实也很活泼。虽然我们语言不同,但是他们有的也很活泼,并不像我之前想象中的千篇一律,大家都非常严肃的那种。像我的爷爷奶奶之前给我讲的关于日本和我国的历史之类的。包括我家是在东北这一带,家里以前有人当过兵,所以他们对日本的评价都不是那么中肯吧。我觉得他们的评价给我对日本的想象都有一定的影响,但是果然还是需要自己亲自去接触和交往才能认识到日本人到底是什么样的。

(No.14-4)

(以前日本人のことをあまり知らなくて、彼らへのイメージは自分の推測や家族からの影響によるものがほとんどでした。彼らは、大変堅苦しくて、厳粛だと思っていました。でも、この間運動会に会った日本人教師や、ほかの日本人教師とのコミュニケーションなどを通して、彼らへのイメージが生き生きとしてきました。実は、彼らも活発ですよ。私たちは、言語は違いますが、でも活発な人もいて、私が前に想像していた千篇一律な感じやみんな厳粛だみたいなイメージとは違います。前に、祖父と祖母が、日本と中国の歴史について教えてくれたことみたいな。私の家は東北地方の辺で、家族に前に軍人をした人がいたので、彼ら〔祖父と祖母〕の日本への評価があまり客観的でなかったのだと思います。彼らの認識は私の日本へのイメージに影響があると思います。でも、やっぱり必要なのは、自分で実際に接触し、そして、付き合ってみることで、それで初めて日本人っていったいどんなふうなのかが分かるんです。)

「5.4.1.5」は、以下の2点のように結論づける。

- ①異文化接触をしているうちに、日本語専攻大学生における日本人イメージが具体化、個別化するようになる。
- ②具体的になった日本人イメージは、日本人への好感を持たせ、＜日本文化の受容＞を促進するところがある。また、個別的になった日本人イメージは、日本人に対するステレオタイプを崩す作用を持つ。さらに、日本人イメージの具体化、個別化は、日本・日本人に対する偏見を修正することがあり得る。

5.4.1.6 文化理解の意識化

<文化理解の意識化>とは、他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識・異文化理解一般に対する認識などを意識化することである。

日本語専攻大学生は接触をしているうちに、文化に対する理解を意識化するようになる。第一に、他文化に対して一層の認識や理解をするようになる。

但是看他们就是也会发现他们身上一些优点，就是看到了就觉得日本人素质很好，吃饭的时候声音很小，就哪怕唠嗑的话也不会吵到旁边的人，吃完饭之后桌子上特别干净，感觉很惊讶的感觉。(No.5-4)

(彼らを見るだけでも、そのいいところがわかります。日本人は、躄が良くて、食事のとき、あまり音を立てず、おしゃべりでも隣の人に迷惑をかけないようにします。食事の後、机の上がとてもきれいで、びっくりしました。)

还有，就是嗯，但是他们很有礼貌很谦虚，这点也很值得学习。(No.5-7)

(また、彼らは、礼儀正しくて謙虚です。これは、学ぶべきだと思います。)

上の2例のように、接触しているうちに、日本語専攻大学生は、相手の風俗習慣や行動様式を観察するようになり、それによって日本文化への認識と理解を深める。そして、上掲の2例が示したように、この「日本文化」は、衣食住に関する風俗習慣という「表層文化」のみならず、行動様式・価値観のような「深層文化」も内包しているということが窺える。

第二に、日本語専攻大学生は、異文化接触の中で、日本文化を認識・理解するとともに、自文化に気づき、またはそれに批判的な意識を持つようになる。

有件事感触比较深的。他问我老家是哪，我说是河北邯郸，他说邯郸是秦始皇的老家，我想秦朝是在山西那边吧，老家怎么在邯郸。就怀疑了一下，不自信就在百度上查了一下，确实是，秦始皇是在邯郸出生的。当时我就说对不起，我错了。他说你为什么要道歉。我觉得作为一个中国人很惭愧。我问他你好像对三国很了解，他说是看日本的漫画，就是把三国改编成漫画了。感觉自己如果出糗，感觉特别丢人，自己对本国的文化不了解。这个学期以来，还不怎么忙的时候，我下了一本《颜氏家训》，有纸可以倒过来竖着写，每天晚上写一张，一天写一张。算是练字，也算是了解一下中国古代的文化。(中略)。反正当时算是对自己冲击挺大，感觉特别惭愧。(No.10-6)

(あることがとても印象的でした。相手にどこの出身かと聞かれて、河北省の邯郸だと

答えたら、邯鄲は秦の始皇帝の実家だって言われました。秦は山西省のほうで、なんで邯鄲なんだと思ったので、ちょっと疑っちゃいました。でも、自信がなかったので、「百度³⁹⁾」で調べてみたら、確かに、秦の始皇帝は邯鄲の生まれでした。それで、その時は、すみません、間違えましたって言いました。彼は、どうして詫びるのかと聞きましたが、私は中国人としてとても恥ずかしいと思いました。相手に三国史に詳しいみたいですけど聞いていたら、日本の漫画を読んだからだって言いました。三国史を漫画にしたやつですって。落ち込んで、ひどく面目ないと感じました。自国の文化を知らなかったんですから。今学期忙しくないとき、『顔氏家訓』⁴⁰⁾という本をダウンロードしました。紙を縦にして書くようにしています。毎晩一枚で、一日一枚ずつ書いています。言えば、習字なんですけど、中国の古代文化の学習にもなります。(中略)。いずれにしても、その時の衝撃が大きかったということです。とても恥ずかしかったです。)

上の例のように、自文化に対する知識の不足に気づき、そして、それによって恥ずかしさや相手と対等的にコミュニケーションできていないことを自覚するようになる。この例からも、日本語専攻大学生が異文化接触を通してそれまでに気づいていなかった自国文化を自覚するようになるということが判明する。

您看像中国不好的地方我就看那个车，你看车现在哈，如果我要是没学日语，没接触日本人，我总觉得是正常，车就不应该让人，那我现在学了，你接触的日本人，我就寻思怎么就不能跟人家国家学习？(No.0-A17)

(中国の良くないところと言えば、車のことですが、もし日本語を学んだことがなくて、日本人と接触したことがなければ、それが当たり前で、車は人に道を譲らないのが当然だと思いかもしれません。でも、今、日本語を学んで、日本人と接触したら、それでどうして[いいところを]日本に学ばないかと、とても思います。)

就觉得特别是日本人，如果他说中国不好的话，有的地方我也能接受，像现在我过马路，我说那车不让人我心里可火了。(No.2-18)

(日本人に中国が良くないと言われたら、受け入れられるところもあります。例えば、今私が道を渡るとき、車が人に道を譲らないのを見たらすごく怒っちゃいます。)

上掲の2例から見られるように、接触が継続しているうちに、日本語専攻大学生は、自文化を批判的に見るようになり、さらにそれによって他文化への固定観念を修正し、<日本文化の受容>を促す。

³⁹⁾ 「百度」は、中国で最大の検索エンジンを提供する企業である。

⁴⁰⁾ 『顔氏家訓(がんしかくん)』とは、中国北齊の顔之推が著した家訓、つまり子々孫々に遺す訓戒の書である。

第三に、次の例のように、接触が継続している間に、日本語専攻大学生における、両文化の共通点と相違点への認識が深化する。これは、第一に論述した他文化への認識・理解、および第二に論述した自文化への気づき・批判的な意識の芽生えと緊密に関係していると言える。

比如说就是端午节。我给他们介绍端午节的时候他们也有端午节，我以前听说过日本、韩国有，但是具体不太明白，那日本说是子供の日，然后我说那我们吃粽子，他说他们也吃粽子，与咱们的材料是相同的，也是糯米做的。我说呀，原来是这样啊。嗯，包括这种各种文化方面的东西，感觉噢，原来是这样，日本也有相同以及不同的地方。(No.3-2)

(例えば端午の節句です。彼らに端午の節句の紹介をしていたら、あちらにも端午の節句があります。前に日本や韓国にも端午の節句があると聞いたことがあります、しかし、詳しいことは知りません。日本では、それが子供の日だそうです。それから、私たちは粽を食べると言ったら、彼らも粽を食べるんだそうです。それに、私たちの材料と同じで、うるち米で作るそうです。あ、そういうことなのかって。このように、いろいろな文化についてのことを知りました。そうなんです。日本には私たちと同じものもあれば違うものあるんです。)

最後に、異文化接触が異文化理解一般への認識を意識化させるという例を挙げる。

跟日本人交流，确实是感觉学到了很多東西。嗯，就是刚才说到就是他们日本人的生活方式啊，什么各种各种态度啊，包括我们看什么，他们看就是不一样的。嗯，就是这种，换个角度看，我觉得挺有意思的，就是中国人是这么想的，你们认为是这么想的，这个，这个不是说什么课本上的知识，这个我觉得就是了解这方面，我觉得对跨文化那个交流是挺有帮助的。(No.9-10)

(日本人とコミュニケーションして、本当に大いに勉強になりました。[例えば] さっき言った日本人の生活スタイルや、各種の態度などです。私たちが見ることと彼らが見ることと違います。このように別の角度から見るとおもしろいです。というのは、中国人はこう思いますが、彼らは別のことを思います。これは、教科書の中の知識じゃなくて、これを知ることは異文化間コミュニケーションにとっても役に立つと思います。)

上掲の具体例のように、日本語専攻大学生は、異文化接触に際して、文化間に存在する差異を認めるといった、異文化理解の重要性を認識するようになる。

还有就很重要的一点原因是我跟日本人有了接触，就是讲课，我觉得普通民众[日本]，根本就没有政治层面想的那么复杂，就是很单纯的，你对我好，我也对你好，没有说是有那么深的民族仇恨。然后我的学生还挺能送我礼物的，我倒也不是说我觉得[送礼物]怎么样，

送礼物也体现了他们的一份心意，他们也可以不送。(No.6-6)

(もう1点重要な原因は、日本人と接触して、授業をすると、一般の国民〔日本人〕は政治の面から思われるように複雑ではなくて、とても単純で、やさしくしてくれれば、こちらも優しくしてあげるといのように、深い民族間⁴¹の恨みがないのです。私の学生がよくプレゼントをくれましたが、別に〔プレゼントをくれることが〕どうこうじゃなくて、くれなくてもいいんですが、それが彼らの気持ちの現れなんだと思いました。)

上の語りからも、実際の異文化接触において、日本語専攻大学生は、日本人に具体的なイメージを形成し、それによってそれまでに抱いていた偏見が減少し、異文化理解に対する認識ができたのだと理解できる。このように、〈日本人イメージの具体化(個別化)〉は、〈文化理解の意識化〉に影響することが明らかである。

「5.4.1.6」のまとめは、以下の3点のようになる。

- ①日本語専攻大学生は、異文化接触を通して、他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識・異文化理解一般に対する認識が芽生え、それを意識化する。そのうち、他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識という3つの要因が緊密に繋がり、3者に基づいて異文化理解一般に対する認識が意識化され、客観的な態度が形成される。
- ②「自文化への気づき」には、それまでに気づいていなかった自文化への自覚・自文化に対する知識の不足から来る恥ずかしさや相手と対等的にコミュニケーションできていないことへの自覚・他文化への認識を通して、自文化に対する批判的な意識が内包されることを特筆したい。
- ③〈文化理解の意識化〉は、〈日本人イメージの具体化(個別化)〉に影響される。

5.4.1.7 日本文化の受容

〈日本文化の受容〉とは、日本文化が好きになることや、日本の社会通念を受け入れることのように、日本文化に受容的な態度をとることである。

〔I: 为什么想去日本留学?〕跟日本人接触也有关系吧。嗯，就是想去看一看，切身去日本体会一下那种。(No.1-1)

〔I: どうして日本へ留学したいですか。〕日本人との接触とも関係しているんでしょうね。うん、行ってみたいです。日本に行って体験したいです。〕

通过和日本人的接触我觉得日本人不是我想象的那样，对他们改变了印象。我的家乡在东

⁴¹ この「民族間」は、「日中間」と理解される。

北、家里的长辈有很多对日本有一些偏见，这也是我尽可能想让他们改变他们自己的观念的地方。(No.14-2)

(日本人との接触を通して、日本人は私が想像していたのとは違うことが分かりました。イメージが変わりました。私は東北の出身で、家族に日本に偏見をもっている年配の人たちが多くいますが、できるだけ彼らの観念を変えたいんです。)

上掲の2例が示すように、異文化接触は、日本への留学、家族の日本への固定観念の払拭などの行動に繋がる。それらはみな、日本への受容的な態度と見て取れる。

就是第二次再上课的时候就顺手[把礼物]带过去了这样，以后我也就养成这样的习惯了。(No.18-6)

(今度の授業の時に、ありあわせのものを[プレゼントに]持って行きました。あれから、こんな習慣を身に付けたんです。)

后面也就我会反过来问他们“你们喜欢吃什么”或者“你们有什么想吃的吗？”，一般我都是送吃的，用的非常少。用的话就可能是小本子啊，做笔记的时候用这样的，送一些小礼物。

(No.18-6)

(後でこちらから逆に「好きな食べ物は？」とか「何か食べたいものがあるか」とか、彼らに聞きます。私は、普通食べ物をあげますが、日用品をあげることは少ないです。日用品なら、ノートでしょうね。ちょっと物を書くときに使うようなものですね。そういうようなちょっとしたプレゼントです。)

上の2件の語りのように、日本の風俗習慣などのような社会通念を受け入れ、接触している間、日本人の相手と同様な行動をとるということも、接触を通して日本に受容的な態度が生成することによるものであると言えよう。

また、上述の「5.4.1.4」、「5.4.1.5」、「5.4.1.6」において<他情報源から得た日本認識との総合>・<日本人イメージの具体化(個別化)>・<文化理解の意識化>がみなく日本文化の受容>に繋がると明らかになったが、そのことから異文化接触が日本文化への受容的な態度の形成に大きな意義を持っていることが十分考えられる。

5.4.1.8 異文化接触の経験の共有

<異文化接触の経験の共有>とは、肯定的な接触経験を家族や友人と共有することで、家族や友人の日本観によい影響を与えることである。

異文化接触を継続しているうちに、<他情報源から得た日本認識との総合>・<日本人イメージの具体化(個別化)>・<文化理解の意識化>によって日本語専攻大学生におけ

る日本人への固定観念が修正され、日本文化への受容的な態度が生じるということが、「5.4.1.4」、「5.4.1.5」、「5.4.1.6」において明らかになったが、次の2例のように、日本語専攻大学生は、その異文化接触の経験を家族や友人と共有し、家族や友人の日本に対する固定観念などに影響を与えていることも窺える。そこから異文化接触が日本語専攻大学生自身の〈日本文化の受容〉な態度を生じさせるのみならず、それを他人にも輻射するようにしている。そこから異文化接触が異文化理解に対して重要な意義を有することが十分伺える。

基本被我灌输的现在已经他们就能很正面地看待这个事情。我觉得我爸妈讨厌日本很大的一部分原因就是战争，虽然好像他们没经历过，但是他们因为中国人那种民族感，反正就很讨厌日本。就是可能不好听一点吧，就是有的时候电视报道，因为中国跟日本的电视总会报道对方的一些不好，就是政治层面，我也不知道为啥，但是总是有一些地方，报道对方的不好。之前日本地震什么的，我妈妈就，可能说的不好听了点，就是我说：我的天呀怎么死了这么多人。我妈就说他们〔日本军队〕当时杀了这么多人那么多人。她是无心那么一句话，也没有多想。但是现在如果还遇到那样事情，我妈肯定不会说这样的话。就觉得现在跟过去那些没有关系。(No.6-5)

(今、私が吹き込んだ影響で、彼らは、正面からそのことが見られるようになりました。親が日本のことが嫌いな最も大きな原因は戦争で、彼らは、戦争を経験したことはないんですけど、中国人の民族感を持って、日本のことをとにかく嫌います。あんまりいい言い方じゃないですが、テレビの報道が、中国も日本も、よく互いの良くないところを報道します。政治の面においては、どうしてか私もよく分からないですが、だいたい、あちこち、相手の良くないところを報道します。この前日本に地震があつて、不愉快な話かもしれませんが、私は多くの死者が出たって言ったら、母が〔日本の軍隊〕が昔多くの人を殺したって言いました。彼女は、何の気もない一言で、深く考えているわけじゃありません。でも、今は、そういう事態に出会ったら、母はきっとそんなことは言わないと思います。私は、今は昔とは関係がないと思います。)

通过和日本人的接触我觉得日本人不是我想象的那样，对他们改变了印象。我的家乡在东北，家里的长辈有很多对日本有一些偏见，这也是我尽可能想让他们改变他们自己的观念的地方。(No.14-2)

(日本人との接触を通して、日本人は私が想像していたのとは違うことが分かりました。イメージが変わりました。私は東北の出身で、家族に日本に偏見をもっている年配の人たちが多くいますが、できるだけ彼らの観念を変えたいんです。)

5.4.2 異文化接触の持続と拡大

<異文化接触の持続と拡大>とは、対人関係の形成、ツールとしての日本語の活用による目的の達成、接触チャンスの再獲得などの形で、異文化接触を持続し、拡大することである。

她会把我当成在中国的朋友一样，从日本回国也会带礼物给我，邀请我一起去看画展，当时还拍照留念了。上完课在她家做大阪烧和她们一家人一起吃，这些都让我感觉〇〇太太性格开朗热情，想跟她做朋友。在决定去日本留学以后，给她上完最后一节课[汉语]后，我把以前的合照打印出来给她，告诉她虽然我不教她汉语了，但有什么不懂的随时都能来问我。恰巧她老家在△△[日本の县名]，她同样也说在△△[日本の县名]遇到问题可以问她……这些都是我们能够一直到现在保持联系的原因吧。(No.1-17)

(彼女は私を中国での友達のように見てくれて、日本から帰った時いつもお土産を持ってきて、一緒にギャラリーを見に行くことを誘ってくれました。記念写真も取りました。授業の後、彼女は家でお好み焼きを作って家族たちと一緒に食べました。これらで〇〇さんのやさしさを感じて、彼女と友達を作りたくなりました。日本への留学が決まった後のことでした。最後の授業[中国語]が終わった時に、前に一緒に取った写真を現像して彼女に渡して、これから中国語を教えなくなりますが、何かわからないことがあったらいつでも聞いてくださいと言いました。ちょうど彼女の実家が△△[県名]で、彼女は△△[県名]で困難があったら自分に聞いてくれればいって…。これが、私たちが今までずっと関係を保ってこられたことの原因でしょう。)

先开始还不熟的时候，我跟他们说话，他们虽然非常礼仪都非常周到，但是他们开始是有一个对我比较反感的。那时候就感觉有一段距离。有一段时间挺难交流的。不过后来慢慢地就好了。[I: 为什么好了呢?] 先开始一看我这个人比较老实，也没啥意思。后来一起玩一起学习什么的，慢慢就成为朋友了。(No.11-6)

(最初はまだ慣れていなかったため、話し合う時、彼らはいつも礼儀正しくて、行き届いていました。でも、その中に私のことがあまり好きでない人がいて、そのときは、少し距離を感じて、コミュニケーションが良くできなかった時もありました。でも、その後だんだん良くなりました。[I: どうしてよくなったのですか。] 最初たぶん私があまりにもおとなしくて、つまらないと思ったかもしれません。でも、後で一緒に遊んだり、勉強したりしているうちに、だんだん友達になりました。)

上掲の語りから窺えるように、接触の中で、対人関係の構築を通して、相手と友人関係を形成していけば、それによって異文化接触を持続することができる。

毕竟挑朋友的时候就从兴趣爱好开始筛了,所以之后就没什么聊不来的就一直坚持下来了。

(No.15-10)

(そもそも、友達を作るときは、趣味から選ぶため、その後いつも話すことがなくならないからここまでやってこれたんです。)

工资挺好,虽然说能教汉语,这也是一个原因,但是你看我现在扪心自问,我觉得工资可能是更主要的原因,也没有很好,但是作为一个本科学生来讲,稳定的持续的,人家一个月还跟家长要零花钱的,我自己就能赚,我家长还给我,就觉得自己是富婆,想买什么都能买什么啊,然后干的这个工种呢工作内容我还挺喜欢的,所以我就觉得能继续下去。(No.17-11)

(給料もよかったです。中国語を教えられるというのも一つの原因ですが、でも、今自分で考えたら、給料がやっぱりもっとも重要な原因だと思います。それほど良くはないですが、学部生にとっては安定的に続けられるからいいじゃないかと思っています。毎月親に小遣いをもらう人と比べると、私は自分も稼げるし、親からももらうから、自分が金持ちだと思っています。何か買いたければ買えるし、それから、こういう仕事は、仕事の内容も好きですから、続けていけると 생각합니다。)

そしてまた、上の2例のように、趣味の楽しみ、資産の形成などのような目的が達成されることで、異文化接触の価値を認め、接触を持続する例も少なくない。

然后两个月前,〇〇老师[日本老师]给我介绍了个兼职,是教日本人汉语。再就是在微信上,有和日本人聊天,好像是老师的朋友,是他加我的,有时候就聊一下。(No.10-1)

(2か月前、〇〇先生[日本人教師]から日本人に中国語を教えるアルバイトを紹介していただきました。もう一つは、「ウイチャット」で日本人とチャットしているんですが、この人、先生の友達らしくて、向こうから「友達」にしてくれて、時間があればチャットをしています。)

さらに、上の語りのように、異文化接触の相手に他の接触チャンスを紹介され、接触チャンスを再獲得することで、異文化接触を持続し、さらに拡大するという場合もある。

5.4.3 あきらめ

<あきらめ>とは、異文化接触を断念することである。

<あきらめ>は、接触の【効果】がそれほど顕在化されていないときに生じることもあるが、【効果】が顕在化された後で生じることもあると見られる。本研究の調査協力者20人のうち7人における異文化接触が「持続していない」状況にあり、そのうち、協力者[No.8]

と協力者 [No.13] は、＜学業重視による接触の一時的放棄＞であるが、残りの 5 人は＜あきらめ＞の状態である。＜あきらめ＞の原因は、接触中における【努力と工夫】・【困難】・＜接触に対する相手の関与姿勢＞という 3 者の相互作用によるものと考えられる。そのうち、＜接触に対する相手の関与姿勢＞は、接触中でも作用する影響力を持っているが、接触の持続を決定するのは【困難】を乗り越えられるかどうかということである。【努力と工夫】をしても、乗り越えられないような【困難】があれば、接触は断念せざるを得ないと考えられる。

三個人在一个日料店 [打工]，然后另外一个人在别的日料店。就都在日料店兼职，后来就都不干了。[I: 为什么?] 怎么说呢? 就是它不像那种，就是有的人去做那种给日本人讲课的那种家教，挣得会多一点。像我每天晚上去三个小时，就是 6 点到 9 点，然后每小时挣十块钱，就觉得太辛苦了，然后就算了吧，也没有时间学习了，感觉就有点累，然后就都不干了。没赚很多钱，然后也觉得没有什么收获。根本没有时间去让你去学跟日本人交流什么的，因为活特别多，就新来的嘛，肯定就都让你干活。然后就，就三个小时连轴转，也就没干啥，其实就只干活了，然后就放弃了。(No.7-1,2)

(3 人は同じ料理店で [アルバイトをする]、もう 1 人は別の日本料理店です。みな日本料理店でのアルバイトをしますが、あとでみんなやめちゃいました。[I: どうして?] 何て言ったらいいかな。日本人に中国語を教えるアルバイト、家庭教師みたいなもの、あれほど儲からないですからね。例えば、私の場合、每晚 3 時間働いて、6 時から 9 時までですが、時給は 10 何元⁴²で、大変です。それで、もういいやって思いました。勉強の時間もなくなって、疲れてもいたし、やめました。あまり儲からなかったし、他に得るものもありませんでした。日本人とコミュニケーションする時間なんか全然なかったですよ。作業が多いから。新参者だからなんでもさせられちゃうんですよ。3 時間働きまくって、他に何もできなかったです。実際、作業ばかりだったので、辞めちゃいました。)

上掲のものは、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞が埋められず、接触を断念した例である。一方、「我可能就是交流特别累，嗯，比较困难啊，所以就干脆我就回避掉了。(No.12-7) (私は、コミュニケーションするのがとても疲れて、うん、とても困難だと思います。だから思いきってそれを諦めちゃいました。)」は、＜コミュニケーションの困難＞に対応しきれない場合の例である。

[I: 为什么没有持续和外教的交流呢?] 我认为可能我并不是百分之百地把我的精力全投入到日语上，我虽然很喜欢日语，觉得学习日语对我而言是一个很大的助力，但是我觉得光靠日语的话没办法在社会上立足。像大连这个环境，日语专业是非常棒的，但会日语的人才

⁴² 中国人民元の「10 何元」は、2019 年 2 月現在で、日本円にして 200 円~300 円ぐらいに相当する。

也非常多。如果只是日语水平高的话并不是一个非常大的竞争力，所以我还是会想去学一些其他的東西。比如日语的簿記，现在也拿到了 N2 证书，也考过了 N1，过一阵子还想去学一下商务日语和英语、俄语。所以我觉得有得必有失吧，这种感觉。(No.14-1)

〔I:日本人教師との交流はどうして続かなかったのですか。〕力を 100%日本語に使ったわけではないと思います。好きは好きで、そして日本語の学習が大きく役に立ちました。でも、日本語だけでは社会ではやはり足りないです。例えば大連では、日本語専攻がとてもいいが、日本語ができる人も多いです。日本語のレベルだけが高くても大きな競争力にはならず、その他のものも学ばなければなりません。例えば、日本語の簿記などです。今、N2 の資格を持っていて、N1 にも合格しました⁴³。これからはビジネス日本語や英語やロシア語なども学びたいです。でも得があれば損もありますね。こんな感じです。)

上の<あきらめ>の例は、<価値づけによる消極的な接触姿勢>を取ったためである。また、〔No.20-2〕(本論の p.118 に掲載)は、<接触条件の不備>に<学業重視による接触の一時的放棄>が複合的に作用しているため、【努力と工夫】をしてもその【困難】に立ち向かえなくなったものだと見られる。

さらに、下の類似例のように、相手に中国を否定する話題を持ち出され、相手の<固定観念による文化摩擦>をどう解決すればいいかと戸惑うことで、<あきらめ>の寸前まで行った具体例もある。これは、特定の接触相手との接触の<あきらめ>であるが、その接触経験に衝撃を受け、異文化接触自体を断念しないとも限らないと考えられる。

他会给我讲很多中国从日本学的东西。嗯，然后，嗯，中国人那个很多不好的方面。〔I:他跟你讲的时候你是怎么反应的呢?〕我很惊讶。我停顿这么一两秒，但是就是但是还是要正常交流下去。然后我说我能不能不教他了?语言学校那个老师他觉得麻烦，我如果辞了，他又得再带 6 个人开着车去他〔日本人汉语学习者的〕公司面试。(No.0-B3)

(彼は中国が日本から学んだことを多く話しました。そして、中国人の良くないところを多く話しました。〔I:そのような話をされたとき、どう反応しましたか。〕私は、とてもびっくりしました。1、2 秒ぐらい固まっちゃいましたが、でも、やっぱりちゃんとコミュニケーションを続けなければなりませんね。それから、私は、もうあの人を教えなくてもいいかと言いました。中国語教室の先生から、もし私が辞めたら、彼はまた 6 人を連れて、車で日本人の中国語学習者の社員がいる会社に面接につれていかなければならないって言われました。)

上掲のすべての例で見ると、日本語専攻大学生は、接触中の特定の【困難】を乗り越えられないため、接触を<あきらめ>るのではなく、どの種の【困難】も<あきらめ>

⁴³ 「N1」や「N2」は、日本語能力試験(JLPT)の能力基準を指している。この能力試験は、「N1~N5」の段階に分かれており、N1 がもっとも高い。

を引き起こす可能性があるのである。また、異文化接触を断念する原因は、一種の【困難】によるとは限らず、数種の【困難】が複合的に作用することもある。

5.5 まとめ

第5章のまとめとして、以下の5点に列挙する。

第一に、中国の日本語専攻大学生は<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>・<ツールとしての日本語の活用による目的達成>・<他者による接触意欲への刺激>・<日本人の友人獲得の欲求>という4つの要因のうちのどれか、あるいは複数のいくつかによって【動機づけ】られ、異文化接触を開始する。そのうち、<他者による接触意欲への刺激>は、もともと<ツールとしての日本語のアウトプット欲求>や<ツールとしての日本語の活用による目的達成>という動機づけを持っている日本語専攻大学生に生じやすいものである。この3つは道具的【動機づけ】であるが、<日本人の友人獲得の欲求>は統合的【動機づけ】である。道具的【動機づけ】は、統合的【動機づけ】より種類が多く、語りも豊富であるため、中国の日本語専攻大学生は、異文化接触を、日本語能力を高め、目的を達成するための道具として捉え、さらに、異文化間コミュニケーションを日本語コミュニケーションと見ている傾向が強いと伺える。

第二に、中国の日本語専攻大学生は、<人的リソースの利用>と<情動的リソースの利用>によって異文化接触の【チャンスの獲得】をする。<人的リソースの利用>は、異文化接触をしている友人や、日本人のネットワークおよび日本人に関する情報を持っている教師に接触の機会を紹介してもらうという間接的な方法と、日本人教師、留学生、遭遇した日本人などとの接触チャンスを積極的に利用する直接的な方法を内包する。<情動的リソースの利用>とは、大学の国際交流活動、部活、日本語コーナー、インターンシップなどのような学校や学部レベルで行われる日本人との接触活動の情報、および、インターネット、日本人向けの雑誌（ホテルやレストランに無料で配布され、日本人に中国での生活情報を提供するもの）などから得た情報を利用することである。<人的リソースの利用>と<情動的リソースの利用>に関する語りから、日本語専攻大学生は周囲にある多様な人的・情動的リソースを積極的に利用すること、【チャンスの獲得】において大学・学部・日本語教師が重要な役割を果たすこと、さらに【チャンスの獲得】に際してSNSが広く利用されることが分かった。

第三に、日本語専攻大学生が接触中に遭遇する【困難】についてであるが、これには、<コミュニケーションの困難>・<異文化接触の対人関係の不安>・<接触場面における話題の選択・継続に難航>・<対等性の欠如による接触の困難>・<価値づけによる消極的な接触姿勢>・<接触上の文化的差異>・<固定観念による文化摩擦>・<接触条件の不備>・<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>・<学業重視による接触の一時的放棄>が内包されている。

<コミュニケーションの困難>は、言語技能の話す能力、聞く能力の未発達による伝達不全に陥る困難のことであり、日本語能力に自信のないことや正しい日本語への固執による不安など教室内の日本語学習からの影響で困難を感じるものの他に、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇して伝達不全に陥る問題も含まれる。<コミュニケーションの困難>に関しては、次の3点が特筆されるべきである。①話す能力に関する<コミュニケーションの困難>については、「文法能力」・「社会言語能力」・「談話能力」の不足に起因する語りは確認されたが、「ストラテジー能力」による話す困難は語られなかった。これは教室内において「ストラテジー能力」があまり提示されなかったため、日本語専攻大学生もそれについて意識しなかった可能性があるためと考えられる。②聞く能力における<コミュニケーションの困難>は、教室内でのティーチャートークによってもたらされるものが多い。第二言語学習と異なり、外国語学習の場合、ネイティブスピーカーの日本語がいつでも聞ける環境ではないため、日本語専攻大学生がはっきりした発音や遅いスピードのティーチャートークに慣れてしまうと、一般の日本人の話が分かりにくいものになるのである。③中国の日本語専攻大学生においては、日本語をアウトプットし、日本語能力を高めるといった道具的動機づけが強いため、正しい日本語に固執する傾向がある。それが不安を引き起こし、コミュニケーションに支障をきたすことになりがちである。

日本語専攻大学生は、接触の中で〔対人関係の困難〕を抱えるが、これには<異文化接触の対人関係の不安>・<接触場面における話題の選択・継続に難航>・<対等性の欠如による接触の困難>が挙げられる。<異文化接触の対人関係の不安>は、異なる文化背景を持つ日本人との対人関係に不安や緊張を覚えることであり、<接触上の文化的差異>に影響される。<接触場面における話題の選択・継続に難航>は、接触において、どのような話題が適切か、どのように話題を継続させるかに困難を感じることであり、どのような話題が適切かという話題選択の困難は、<異文化接触の対人関係の不安>からくるものもあれば、<対等性の欠如による接触の困難>によるものもあり、そして<コミュニケーションの困難>にも影響される。話題の継続に関する困難は、話題に関する知識が少ないこと、話題に関心がないこと、相手の消極的な関与姿勢、<コミュニケーションの困難>に起因するものが多い。このように、<接触場面における話題の選択・継続に難航>は、<コミュニケーションの困難>・<異文化接触の対人関係の不安>・<対等性の欠如による接触の困難>・<接触上の文化的差異>・<接触に対する相手の関与姿勢>という5つの概念に関わるため、接触中、話題の選択・継続に関する問題を十分注目することが望ましい。<対等性の欠如による接触の困難>は、接触の場の性質・状況や相手が異性であること、また相手との間で年齢・社会履歴・力関係において対等性が欠如していると感じ、対人関係の構築に困難を覚えることであり、<異文化接触の対人関係の不安>・<接触場面における話題の選択・継続に難航>に影響作用を持つ。

また、日本語専攻大学生の中には、異文化接触について、教室内での日本語学習とその成績、将来の就職に繋がる資格試験や他の知識・技能の学習というような外部実用価値や、

または部活・学生会活動・自分の趣味というような内部価値があることを認めはするものの、一方で、時間的な代価を払うこととも見ることから、既に開始した接触の中で、＜価値づけによる消極的な接触姿勢＞を取る者が一部存在する。

日本語専攻大学生は、接触中＜接触上の文化的差異＞と＜固定観念による文化摩擦＞から構成されている〔異文化による摩擦〕に直面する。＜接触上の文化的差異＞は、価値観や習慣における両国間の差異に基づいたものであるが、そこで、価値観や習慣が異なるために悩む者もいれば、日本の価値観や習慣に関する知識が欠如しているため、戸惑いや不安を感じる者もいる。また、中国の価値観や習慣への相手の不理解に対して困難を覚える者もいる。日本語専攻大学生が違和感や困難を感じる両国間の文化的差異は、日中間の教育観、コミュニケーションスタイル、対人関係構築の仕方、言語習慣と風俗習慣のような多くの方面に及んでいる。

＜固定観念による文化摩擦＞は、相手の中国に対する固定観念によるものと自身の固定観念によるものに分けられている。異文化接触の中で、日本語専攻大学生は、相手から、中国・中国文化に対する固定観念によって中国・中国文化を否定する話題やデリケートな話題を持ち出された時、戸惑い、感情的に受け入れ難いと感じており、そしてまた、自身の日本・日本文化に対する固定観念によって日中間の文化的差異を中国が見下ろされているものと捉えてしまう。このように、固定観念の存在は、日中両国の異文化接触に対する大きな阻害要因であることが明らかになった。＜固定観念による文化摩擦＞が生じた場合、日本語専攻大学生は、「国家アイデンティティ」を自覚し、「愛国心」・「民族自尊心」を生じさせることがある。「愛国心」と「民族自尊心」は、日中両国の歴史問題から大きく影響を受けると考えられる。中国・中国文化に対する相手の固定観念と日本語専攻大学生自身の日本・日本文化に対する固定観念は相互に影響し、その結果、異文化接触を悪化させる。また、＜固定観念による文化摩擦＞は＜接触上の文化的差異＞を複雑化させ、＜接触上の文化的差異＞は＜固定観念による文化摩擦＞を引き起こしやすいため、両者は相互作用の関係にある。

日本語専攻大学生は、接触の中で接触の相手がいなくなることや接触の場がなくなるなどのような、＜接触条件の不備＞による困難に遭遇する。接触の相手・接触の場の安定性は、アルバイトの場合は確保できないが、大学の場合は国際交流政策や日本語学科の教育指針と密接に関わっているので、確保されやすい。このため、大学や日本語学科には、安定的な人的・情動的リソースの提供、接触活動の内容に関する後続支援が求められる。

日本語専攻大学生は、接触・接触の場に対して日本語の活用を期待していたにもかかわらず、接触の場で期待ほど日本語が使えなかったり、それに伴って目標が達成できなかったり、さらに時間などの代価が高いと認識したりすると、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞を感じてしまう。＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞は、＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞・＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞という【動機づけ】を持っている場合に生起し、その2種の【動機づけ】

から影響を受けるとともに、＜接触条件の不備＞からも影響され、その結果、＜学業重視による一時的接触の放棄＞や＜あきらめ＞に繋がりがやすい。

＜学業重視による接触の一時的放棄＞とは、教室内での日本語学習、将来に備えての日本語以外の知識の習得などを意識し、時間的バランスが取れないと感じた時、学業や知識の習得を優先的に考え、異文化接触を一時的に放棄することである。＜接触条件の不備＞は＜学業重視による一時的放棄＞に影響作用を持つ。

第四に、日本語専攻大学生は、【努力と工夫】で【困難】に対応する。【努力と工夫】には、＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞・＜対人関係の構築への努力＞・＜話題の選択・継続に関する工夫＞・＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞・＜異文化接触による客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞という8つの概念が内包されている。

＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞は、意思疎通をはかるために言語・非言語に関わるストラテジーを利用するなどして、鋭意努力することを指すが、具体的には、接触中の言語の選択・話す能力による困難への対応・聞く能力による困難への対応・コミュニケーション後の内省が挙げられる。接触中の話す能力による困難に対して、日本語専攻大学生は、話すスピードを落とすこと・簡単な言葉で代用すること・別の表現に変換すること・非言語コミュニケーションで対応する。一方、接触中の聞く能力による困難に対して、日本語専攻大学生は、文脈で意味を推測すること・相手に協力を求めることで乗り越えようとする。また、話す能力による困難、聞く能力による困難を問わず、ツールの利用・相手への確認などの努力もなされる。さらに、日本語専攻大学生は、＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞から＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞を強く持っているが、接触の場の力関係によっては中国語を多く使用することもあり、それは対人関係を維持するため相手の役に立つ言語を選択するからだとして理解される。＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞には、このように、＜対人関係の構築への努力＞に求められる一面があることが分かる。

[対人関係の工夫]には、＜対人関係の構築への努力＞と＜話題の選択・継続に関する工夫＞が挙げられる。＜対人関係の構築への努力＞は、認知面と行動面に分けられ、両者が結合して利用される。認知面における努力は、責任感・誠意・共感・積極的、柔軟、寛容な態度が内包されている。そのうち、責任感、アルバイトでの接触の場合に見られるものである。行動面における努力は、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇から構成されている。これらの努力から、日本語専攻大学生は、接触の中で中国人と接触する時に用いられる対人関係スキルを日本人との接触にも当てはめていることが見られる。そして、対人交流において、寛容志向・情熱・積極的姿勢・誠実な態度が強調される面（奥西・田中 2010）のほかに、相手を意識しながら自身の行動を調整するという対人関係構築の面も有していることが窺える。＜対人関係の構築への努力＞は、[対人関係の困難]に内包され

ている3つの概念とともに影響を与え、そして、＜コミュニケーションの困難＞と＜接触上の文化的差異＞の対応にも役に立つ。

日本語専攻大学生は、異文化接触の中で相手と接点のある話題を選択して、話題を継続していく。話題は、日本事情・中国事情・趣味、家族、日常生活というような勉強や生活に関する身近な出来事が中心である。これらの話題を選択するのは、日本語専攻大学生がまだ社会履歴が少なく、接触相手との間にそれらのような話題が接点を得やすいからである。また、日本語専攻大学生は、接触の中のみならず、普段から相手と共通点のある日本事情に関する話題を作るように心がけている。話題を自分から選択する他にも、日本語専攻大学生は、接触の中で相手から持ち出された話に合わせたり、傾聴したりすることで話題を継続していく。＜話題の選択・継続に関する工夫＞は、[対人関係の困難]に内包されている3つの困難にすべて対応し、そして、＜対人関係の構築への努力＞と＜接触に対する相手の関与姿勢＞から影響を受ける。

このように、日本語専攻大学生は、[対人関係の工夫]によって[対人関係の困難]に対応するということが明確に了解される。

[異文化間摩擦への対応]には、＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞・＜異文化接触における客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞が挙げられる。

＜異文化間知識の活用＞は、教室内外で学んだ日本の社会通念などの知識を活用し、接触相手の行為を理解し、それに対応することであり、日本語専攻大学生は、＜異文化間知識の活用＞で[異文化による摩擦]に対応する。そして、＜異文化間知識の活用＞は、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞や＜異文化接触における客観的な姿勢＞の生起に促進作用を持つ。

日本語専攻大学生は、異文化接触の中で、日中間の歴史・政治に関するデリケートな話題、相手の固定観念による中国・中国人に対する認識、日中両国の文化的差異などに対しては、回避や判断保留という姿勢をとり、＜異文化接触の摩擦への回避＞で＜固定観念による文化摩擦＞や＜接触上の文化的差異＞に対応する。また、日中間の歴史・政治に関するデリケートな話題に対しては、接触相手によっては回避する姿勢を取ることも見られるが、このように互いに回避する姿勢を取ることも見られ、互いに回避することが異文化理解に繋がり、そして、それは、異文化接触の持続に重要な意義を持つと十分考えられる。しかし、一方で、このようなデリケートな話題に直面し、相手の中国文化への固定観念を意識したとき、日本語専攻大学生には、国家アイデンティティへの気づきが生じたり、愛国心が発生したりすることが見られる。

日本語専攻大学生は、接触相手に中国・中国文化を固定観念で見られていると意識したときには、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞をするという行動をとる。ここから、日本語専攻大学生は、＜固定観念による文化摩擦＞に対して、＜異文化接触の摩擦への回避＞という姿勢のほかに、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞を通して対応

することもあるということが明らかになった。＜文化的差異についての積極的な意見交換＞の底流には、国家アイデンティティと愛国心が流れているが、意見交換が真の異文化理解を得るために有意義であると考えられる。

このように、日本語専攻大学生は、接触相手の中国・中国文化に対する固定観念には批判的な意識を持って客観的に認識し、理解するが、日本・日本文化に対しては、批判的な意識・寛容、尊重的な態度・知的な好奇心を持って客観的に認識し、理解する。日本・日本文化に対する批判的な意識は、歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人/中国人と全体の日本人/中国人などを切り分けて見る意識である。＜異文化接触における客観的な姿勢＞は、＜固定観念による文化摩擦＞および＜接触上の文化的差異＞による困難への対応に重要な意義を持つ。また、日本語専攻大学生は、中国人との対人関係構築の経験を異文化接触に当てはめるが、それが客観的な異文化接触姿勢の形成を促進する。さらに、＜異文化接触における客観的な姿勢＞は、＜接触に対する相手の関与姿勢＞に影響される。

接触上の対日態度を改善するために、ポップカルチャーを意識的に利用する日本語専攻大学生がいる。＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞は、＜異文化接触における客観的な姿勢＞に対して促進作用を持つと伺える。しかし、ポップカルチャーの利用は、必ずしもポジティブな観念しか生じさせないとは限らず、かえって日本・日本人に対する固定観念を生じさせる面があることを注意する必要がある。

このように、日本語専攻大学生は、[異文化による摩擦]という【困難】に対して、＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞・＜異文化接触における客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞などの【努力と工夫】をすることで乗り越えようとしていることが分かる。そのうち、＜異文化間知識の活用＞・＜異文化接触の摩擦への回避＞・＜文化的差異についての積極的な意見交換＞は行動面における【努力と工夫】であり、＜異文化接触における客観的な姿勢＞・＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞は認知面における【努力と工夫】である。

接触中、日本語専攻大学生は、【困難】を抱え、【努力と工夫】でそれに対応すると同時に、＜接触に対する相手の関与姿勢＞も関わってくることで、接触が阻害されたり、促進されたりする。日本語専攻大学生の異文化接触においては、【困難】・【努力と工夫】・＜接触に対する相手の関与姿勢＞の3者が相互関与しながら接触を展開していく。

第五に、接触をしているうちに、日本語専攻大学生において【効果】が顕在化するようになる。この顕在化現象には、＜コミュニケーション能力の向上＞・＜目的の達成＞・＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞・＜他情報源から得た日本認識との総合＞・＜日本人イメージの具体化（個別化）＞・＜文化理解の意識化＞・＜日本文化の受容＞・＜異文化接触の経験の共有＞が挙げられる。

日本語専攻大学生は、異文化接触のおかげで、日本語による話す能力・聞く能力・コミ

コミュニケーションストラテジー能力などが向上し、そして、それによって日本語能力に自信のないことからくる不安が緩和され、＜コミュニケーション能力の向上＞が果たされる。そのうち、話す能力・聞く能力の向上がもっとも強く実感されているが、その一方、コミュニケーションストラテジー能力の向上に関する語りは僅少である。これは、日本語教室内でコミュニケーションストラテジーの利用があまり提示・練習されておらず、そのため、そもそも学習者に自覚されていなかったためではないかと推測できる。

接触の中で、日本語専攻大学生は、視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などの目的を達成していくが、これらの＜目的の達成＞は、接触前に持っていた＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞という【動機づけ】が満たされたということの意味している。

＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は、異文化接触の情意的【効果】であり、日本語専攻大学生は、接触中、接触経験や日本人との対人関係構築によって発話不安や対人関係不安を軽減し、達成感や楽しい思いなどのような情意的満足感を獲得する。＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は、自己効力感を得る要因であり、自己効力感の生成は異文化接触の持続に繋がる。また、＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は、＜コミュニケーション能力の向上＞や＜目的の達成＞によるものが大きい。

＜他情報源から得た日本認識との総合＞は、異文化接触から得た日本認識が、日本語教師・日本語学習・マスメディア（日本と中国双方のマスメディア）・ポップカルチャーなどの情報源から得たものと総合し、日本や日本人への認識が拡大・深化することである。異文化接触の＜他情報源から得た日本認識との総合＞が＜文化理解の意識化＞と＜日本文化の受容＞を促す。一方、それが必ずしもポジティブな働きしか持たないとは限らず、ネガティブな認識を生じさせ、これからの異文化接触、さらには異文化理解を阻害する可能性もある。

異文化接触をしているうちに、日本語専攻大学生における日本人に対するイメージは、全体的・抽象的なものから具体的・個別的なものになり、具体的になった日本人イメージは日本人への好感を持たせ、＜日本文化の受容＞を促進し、個別的になった日本人イメージは日本人に対するステレオタイプを崩壊させる。また、＜日本人イメージの具体化（個別化）＞は、日本・日本人に対する偏見を修正するのに役に立つ。

＜文化理解の意識化＞とは、異文化接触を通じて、他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識・異文化理解一般に対する認識を意識化するようになることである。前の3者が緊密に繋がり、その3者に基づいて異文化理解一般に対する認識が意識化され、その結果、客観的な態度が形成されやすい。「自文化への気づき」は、それまでに気づいていなかった自文化への自覚・自文化に対する知識の欠乏への自覚・自文化に対する批判的な意識の発生という3つの要因を内包することを特筆したい。＜文化理解の意識化＞は、＜他情報源から得た日本認識との総合＞と＜日本人イメージの具体化（個別化）＞から影響を受け、＜日本文化の受容＞を促す。

<日本文化の受容>は、日本文化が好きになることや日本の社会通念を受け入れるようになることである。そして、それに伴い、日本語専攻大学生は、<異文化接触の経験の共有>で自身の肯定的な接触経験を家族や友人と共有し、家族や友人の日本に対する固定観念により影響を与えるようになる。つまり、異文化接触は、日本語専攻大学生に、日本文化に対する受容的な態度を生じさせるのみならず、その受容的な態度を他人にも輻射する。このように、異文化接触は、その当事者個人のみならず、その周囲の異文化理解に対しても重要な意義を有することが了解される。

<異文化接触の持続と拡大>とは、対人関係の形成、ツールとしての日本語の活用による目的の達成、接触チャンスの再獲得などの形で、異文化接触を持続し、拡大することである。

接触中においては、【努力と工夫】・【困難】・<接触に対する相手の関与姿勢>が相互作用した結果、日本語専攻大学生が接触を<あきらめ>てしまうこともある。これには、接触中の<接触に対する相手の関与姿勢>が影響作用を持っているが、接触の持続を決定するのは【困難】を乗り越えられるかどうかということである。【努力と工夫】をしても、乗り越えられない【困難】があれば、接触は断念せざるを得ない。<あきらめ>に陥った後、異文化接触を回復する場合、【動機づけ】から始まるプロセスが再度経過すると推測できる。しかし、前回の異文化接触の経験があるため、新たに始まるそのプロセスの質が高くなると予測され、過程がスパイラルな形で高まっていくと考えられよう。

一方、<異文化接触の持続と拡大>をもって異文化接触のプロセスが終結するのではなく、接触の持続中にも、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>・【効果】からなる過程がまた繰り返される。しかし、接触の経験が蓄積されていくとともに、持続中の接触の質は高くなると予測されるため、そこでは、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>からなる「接触中の状況」と【効果】がスパイラルの形で高まっていくものと考えられる。

第6章 異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション

能力

第5章において M-GTA という質的研究方法によって中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスはどのようなものかを解明した。そのプロセスについての記述から、接触中、日本語専攻大学生における【困難】・【努力と工夫】、およびく接触に対する相手の関与姿勢>という3者が相互作用の関係にあり、その結果、日本語専攻大学生は【困難】を伴いながらも<異文化接触の持続と拡大>をはかっていくか、【困難】を乗り越えられず、<あきらめ>に陥り、接触を断念するかということになることがと明らかになった。そこから異文化接触を持続するのに具体的にどのようなコミュニケーション能力⁴⁴が必要かということが改めて問われることとなる。

以下は第5章の研究結果に基づき、中国の日本語専攻大学生において、異文化接触を持続するためにどのようなコミュニケーション能力が必要かを同定する。同定する際、第5章において M-GTA 研究方法によって得られた概念の結果図【Figure 5.1】を利用する。

6.1 ネットワークの構築能力

異文化接触の「持続」というと、すでに接触を「開始」した後の継続状況の一段階と思われるが、本研究では、異文化接触の動機づけを持ってはいても、接触開始のチャンスがなかなか手に入らない日本語専攻大学生にも助言できるように、接触の「持続」を「開始」をも内包するものと捉える。とは言っても、接触の「動機づけ」がなければ、「開始」には及ばないと考えられるため、ここでいう「開始」は接触の「動機づけ」を持っていることを前提とする。「動機づけ」があっても、接触を「開始」するには、接触チャンスを獲得する能力が必要だということである。

日本語専攻大学生のような外国語学習者の場合、第二言語学習の環境と異なり、外国語学習の場合、ネイティブスピーカーと接触するチャンスは限られている。中国に在留する日本人数は世界的に多いが、都市間で大きな差があり、さらに、日本語専攻大学生における異文化接触となると、接触をしたければすぐにチャンスが見つかるとは限らない。人によってネットワークの構築能力が異なり、チャンス獲得の質⁴⁵も異なるため、異文化接触の持続には、「ネットワークの構築能力」が必要なのである。

⁴⁴ ここでの「コミュニケーション能力」は広義的に捉えられ、接触中に必要なコミュニケーション能力のみならず、接触の開始に必要なネットワークの構築能力も含まれるものとする。

⁴⁵ 「チャンス獲得の質」はチャンスが獲得できるか否か、どれぐらいのチャンスが獲得できるか、また、どのようなチャンスを獲得するかなどのことを指す。

「ネットワークの構築能力」は「情報収集能力」と「リソース活用能力」に分けられる。まず、「情報収集能力」とは、人的リソース（友人・教師の紹介）・物的リソース（インターネット、雑誌、SNSなどの媒介）・社会的リソース（学内・学外の異文化接触に関する広報・宣伝）を利用して、接触チャンスを獲得する能力である。「情報収集能力」は接触チャンスの獲得に大きな影響力を持っている。第5章において、日本語専攻大学生は異文化接触をしている友人や日本人のネットワークおよび日本人に関する情報を持っている教師に接触の機会を紹介してもらったり、大学の国際交流活動、部活、日本語コーナー、インターンシップなどのような学校や学部レベルで行われる日本人との接触活動の情報、および、インターネット、日本人向けの雑誌などから得た情報を利用したりして接触のチャンスを獲得することが明らかになった。ネイティブスピーカーと接触するチャンスが限られている環境において、「情報収集能力」は、これらの情報が得られるかどうか大きく寄与する。そして、第3章において、中国の日本語専攻大学生における接触の場は、「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」・「その他」があることを明らかにしたが、この「その他」は個別のネットワークでチャンスを獲得し、インターンシップやプライベートの形で行われる接触のことを指す。「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」での接触チャンスは大学の環境と密接に関係しており、集中的に利用される面があるため、ネットワークを利用すれば、より容易に情報が取れると考えられる。それに対して、「その他」は個別的な接触チャンスであるため、情報収集能力の如何に大きく左右される。集中的な接触チャンスの他に、情報収集能力を生かせば個別的な接触チャンスも獲得できることは、もっと注目されることが望ましい。

次に、「リソース活用能力」とは、近接の接触チャンスを活用する能力である。「中国語教室」や「日本料理店」という接触のチャンスは、大学の所在地と密接に関係しており、情報を収集すれば、より容易に獲得できる。しかし、そのような環境がない場合、日本人教師・留学生⁴⁶や遭遇した日本人というような直接的に接触できる人的リソースが活用できるか否かが接触の持続に影響する。

また、SNSも、接触チャンスの獲得に大きく関与する。中国の日本語専攻大学生は、SNSを情報収集の手段として活用するほか、日本人と直接接触できるアプリケーションが開発されるに伴い、SNSの文字、音声、テレビ電話機能などを利用して対面で日本人と接触することも可能になってきている。しかし、[No.20-3]（本論のp.80に掲載）の語ったように、SNSに直接接触できるアプリケーションなどの機能があるという情報を獲得することは、まずその個人の「情報収集能力」によるところが大きい。さらに、自分でその機能を探索することが「リソース活用能力」に関係するのである。SNSが新たなメディアとして

⁴⁶ 中国では、日本語専攻が設けられている大学には、たいてい日本人教師がいる。大学の国際交流政策によって日本人留学生がいるかどうかは異なるが、本研究の調査を協力するすべての調査対象大学には、日本人留学生がいる。身近に接触できる日本人のリソースがいながらも、それを利用する日本語専攻大学生もいれば、利用しない者もいる。それはリソース活用能力に影響されているためであると考えられる。

大いに利用されている現在の社会において、それが日本語専攻大学生における異文化接触のネットワークの構築、さらに、異文化接触の過程にどのような影響を与えるかがより注目されることが望ましい。

6.2 意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力

6.1の「ネットワークの構築能力」が接触の開始に関わる能力であるとするならば、本節と以下の節において同定する能力は、接触中の状況に関する能力である。【Figure 5.1】が示すように、中国の日本語専攻大学生が接触中遭遇した【困難】は、「コミュニケーション」・「対人関係」・「認知上の価値づけ」・「異なる文化」・「接触の場の維持」・「学業とのバランス」という6つの面に及んでいるが、一方、これらの【困難】に対応する【努力と工夫】は「コミュニケーション」・「対人関係」・「異なる文化」という3つの面しか含んでいない。これは、＜価値づけによる消極的な接触姿勢＞や＜学業重視による接触の一時的放棄＞は日本語専攻大学生自身の知覚や意思によって決定できることであるが、[安定的な場の喪失]は自身の【努力と工夫】でコントロールできない外部の人的・物理的・機能的要素によるためである。接触中の状況から得た上述の結果に基づき、本研究では、日本語専攻大学生が接触を持続するために、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」・「対人関係構築能力」・「異文化間能力」が必要であると考えられる。

接触中、日本語専攻大学生が抱えている＜コミュニケーションの困難＞は、言語技能の話す能力や聞く能力の未発達によって伝達不全に陥る困難のことであり、日本語能力に自信のないこと、正しい日本語への固執による不安など教室内の日本語学習からの影響で困難を感じることで、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇して伝達不全に陥ることなども含まれる。話す能力の未発達は、語彙の量が足りず⁴⁷、文法的に正しく伝えられないという文法能力の面、[No.15-12]（本論の p.87 に掲載）の語ったように、単語しか出てこず、文や段落のレベルの構造を展開できないという談話能力の面、[No.18-1]（本論の p.87 に掲載）の言及した敬語がよくできないという社会言語能力の面に、それぞれ現れている。聞く能力の未発達は、語彙が足りないことや、相手の話すスピードが速く、発音がはっきりしないことに起因すると見られた。特筆されるべきことであるが、相手の話すスピードが速く、発音がはっきりしていないと感じる困難は、教室内でのティーチャートークに原因があることが多い。「日本語能力に自信のないこと」は、「話す能力、聞く能力の未発達」からくる情意的なものであるため、その解消には「話す能力、聞く能力」の発達が根本的に求められる。

一方、これらの【困難】に対して、日本語専攻大学生は、言語・非言語に関わるストラ

⁴⁷ これは「語彙力」の問題であるが、Canal (1983) は、「文法能力」を文法語彙知識、文法的に正しく言語を使う能力であると捉えるため、本研究はそれに従い、「語彙力」を「文法能力」に内包されるものと見なす。第5章 p.86 を参照。

テジーを利用するなどして、＜意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫＞で対応する。具体的な工夫には、接触中の言語の選択・話す能力による困難への対応・聞く能力による困難への対応・コミュニケーション後の内省が挙げられる。話す能力による困難に対しては、発話速度の低下、他の語句による代用、言い換え、非言語コミュニケーションの活用などのストラテジーが取られ、聞く能力による困難に対しては、文脈から判断することや援助の要請などのストラテジーが利用される。また、話す能力による困難か、聞く能力による困難かを問わず、検索ツールの利用、相手への確認などの努力がなされる。

上述の対応状況から、以下の問題点が見られる。①本研究において明確になった＜コミュニケーションの困難＞は、「話す能力、聞く能力の未発達による伝達不全に陥る困難」であり、それには両能力の発達という本来の解決が求められるが、一方、日本語専攻大学生は、接触の中でストラテジーを活用して、便宜的にこれに対処したため、その間にギャップが生じている。なかんずく、「コミュニケーション後の内省」が [No.13-8] (本論の p.121 に掲載) の一例しか見当たらなかったことから、日本語専攻大学生は、異文化間コミュニケーションに向けて、普段から話す能力、聞く能力を高めるのに必要な知識や練習を蓄積する意識が薄く、努力不足であることが見受けられる。②日本語専攻大学生は、実際の接触の中で、言語・非言語に関わるストラテジーを多く利用していたが、ストラテジー能力による困難はインタビューデータには見つけられなかった。その間のギャップは、そもそも教室内においてストラテジー能力についてはあまり提示されなかったため、日本語専攻大学生がそれについて意識しなかった可能性があるためと考えられる。③日本語専攻大学生に現れる正しい日本語への固執という傾向は、基本的に日本語能力を高めるという意識を拠り所としている。しかし、「現実のコミュニケーションでは、間違いの有無よりも、何が伝わったかが問われる (田中 2010 : 71)」ため、正しい日本語に固執することと意味伝達を優先することとの間にギャップが生まれている。

上記の問題点への解決を講じるため、本研究は、日本語専攻大学生に「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を育てることが必要であると提案する。その能力育成の具体策には、以下の3点が挙げられる。

第一に、話す能力、聞く能力の未発達による困難は、「文法能力」・「社会言語能力」・「談話能力」の不足に起因するものが多いため、これに対しては、普段から教室内での日本語学習や教室外での異文化接触を通して、語彙の量を増やし、正しい日本語表現や場面に即した適切な言葉を覚えることと意思疎通をはかるために話を組み立てる能力を高めることについて努力する必要がある。そして、中国の日本語専攻大学生の場合は、日本語の学習に際して、文法や句型に力点を置きがちであるためもあって、聞く能力に対する練習が不十分であるという現状がある。その点の改善については、音声や画像というような物的リソースを積極的、かつ有効的に利用することが勧められる。また、ティーチャートークに起因する聞く困難に関しては、日本語教師、特にネイティブスピーカーの日本人教師に自然な日本語の発音とスピードで授業することを求めたい。「意思疎通をはかるためのコミュ

ニケーション能力」の向上は、学習者自身の努力と工夫の他に、文法や文型重視の教授法ばかりでなく、コミュニケーション・アプローチを取り入れた教育の探究という、日本語教師側からの支援も必要である。

第二に、コミュニケーションストラテジーの意識化とその利用である。日本語専攻大学生は、接触の中で多くのコミュニケーションストラテジーを利用し、話す能力・聞く能力の未発達による伝達不全の困難を補っている。そして、接触の中でストラテジーが利用できることを予期すると、日本語能力による緊張と不安が低減する。さらに、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇したときは、相手に協力を求めるというストラテジーで対処できている。このように、接触の中でストラテジーをうまく利用することは、コミュニケーションを大きく促進させると考えられる。しかし、一方、教室内でコミュニケーションストラテジーについての提示と議論が為されていないため、日本語専攻大学生は、ストラテジーの使用を意識していなかったり、十分に利用できなかったりすることが多いのではないかと推察される。したがって、異文化間コミュニケーションの中での意思疎通をはかるためには、日本語専攻大学生がストラテジーの使用を意識し、ストラテジーの質を高めることが不可欠である。これには、日本語教師が、コミュニケーションの中でストラテジーが利用できることを提示し、どのようなストラテジーが利用できるかを学習者と議論することで、ストラテジー能力の育成に力を入れるということが求められる。教師側からのこの種の支援は、日本語専攻大学生が接触中日本語能力の欠如による緊張や不安を低減させられることにも役立つため、重要視されることが望ましい。

第三に、コミュニケーションの中で、言葉の間違いより意思疎通のほうがコミュニケーションにとってより重要であるという意識を持つことが重要である。中国の日本語専攻大学生に異文化接触を日本語能力を高める手段として見る意識が強く、正しい日本語に固執する一面がある。しかし、異文化間コミュニケーションは語学の学習と異なり、言葉の間違いより意思疎通のほうがより強く求められる。日本語専攻大学生においては、接触を持続するために、正しい日本語を使わなければならないという意識から意思疎通のほうがより重要であるという意識への切り替えが必要なのではないかと考えられる。それはまた、コミュニケーション中の不安を緩和させ、異文化接触の持続に対する促進作用を持つ。

6.3 対人関係構築能力

石井（2001）は「対人関係技能」が異文化間コミュニケーション能力を構成する重要な要素であり、田中・中島（2006）、田中（2010）は「異文化間ソーシャルスキル」を唱え、異文化間コミュニケーション能力を異文化圏の人との対人関係の形成・維持・発展であるという能力観を取っている。これらの研究は異文化接触を対人関係構築の面からアプローチしていることに共通点を持っている。

本研究の第5章では、中国の日本語専攻大学生は、接触中、[対人関係の困難]を抱え、

そして〔対人関係の工夫〕でそれに対応することを明らかにした。まず、①〔対人関係の困難〕は3つの概念から構成されており、〔対人関係の工夫〕は2つの概念からなる。対人関係の構築に関する概念は、数が多く、その語りも豊富である。次に、②〔対人関係の工夫〕は、それ自体が〔対人関係の困難〕への対応になるのみならず、それに内包される〈対人関係の構築への努力〉は、〈意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫〉を促進することや〈コミュニケーションの困難〉・〈接触上の文化的差異〉に対処することができる。また、日本語専攻大学生は同国人との対人関係構築の経験を異文化接触に当てはめる面があるため、彼らの対人関係に対する考え方から影響を受けるであろう。陳(2004)は、中国人は人と接触することに対して、ただの意味の交渉や情報の交換だけでなく、感情を交流させることのほうがもっと重要で、接触しているうちに互いに近づき、距離を縮め、感情的共鳴を得ることを求めるという対人関係志向を持っていると論じている。さらに、本研究は、第2章において、日本人ホストにおける中国人留学生の異文化適応問題のうち、友人関係の形成がよく取り上げられていることを明らかにした。したがって、この中国人としての対人関係構築の観念が中国の日本語専攻大学生における異文化接触の持続に重要な意義を持つと推察できる。

〔対人関係の困難〕は〈異文化接触の対人関係の不安〉・〈接触場面における話題の選択・継続に難航〉・〈対等性の欠如による接触の困難〉から構成されている。〈異文化接触の対人関係の不安〉は異なる文化背景を持つ日本人との対人関係に不安や緊張を覚えることである。〈接触場面における話題の選択・継続に難航〉は、接触においてどのような話題が適切か、どのように話題を継続させるかに困難を感じることであるが、異なる文化背景への不安・日本文化知識の不足・対等性の欠如・コミュニケーションの困難・相性がないこと・相手の消極的な関与姿勢に起因していると分析される。〈対等性の欠如による接触の困難〉は、接触の場の性質・状況や相手が異性であること、また相手との間で年齢・社会履歴・力関係において対等性が欠如していると感じ、対人関係の構築に困難を覚えることである。

一方、〔対人関係の工夫〕は〈対人関係の構築への努力〉と〈話題の選択・継続に関する工夫〉から構成されており、〈対人関係の構築への努力〉は責任感・誠意・共感・積極的に柔軟で寛容な態度という認知・情意面での努力と、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇という行動面での努力が内包され、〈話題の選択・継続に関する工夫〉には相手と接点のある話題を選択すること、接触の中のみならず、普段から相手と共通点のある日本事情に関する話題を作るように心がけること、そして、接触の中で相手から持ち出された話に合わせたり、これを傾聴したりすることで話題を継続していくことが内包される。対人交流においては、寛容志向・情熱・積極的姿勢・誠実な態度が強調される面が強い(奥西・田中 2010) 一方、中国の日本語専攻大学生には、相手を意識しながら自身の行動を調整するという対人関係構築の傾向があることも窺える。〈対人関係の構築への努力〉は、〔対人関係の困難〕に内包されている3つの概念とともに影響を与え、そして〈コミュニ

ケーションの困難>・<接触上の文化的差異>への対応にも有効である。

以上の議論に基づき、中国の日本語専攻大学生が異文化接触を持続するために求められる「対人関係構築能力」は、以下の3つの側面から捉えられる。

- ①認知面では、責任感・誠意・共感・積極的で柔軟で寛容な態度が含まれることが一般化されるとよい。
- ②行動面では、まず、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇というような対人行動が必要である。次に、話題の選択・継続に関する能力が重要視されることが望ましい。中国の日本語専攻大学生は、社会的な履歴が少ないため、相手との間に話の接点を得やすくしようとして、日本事情、中国事情、趣味、家族、日常生活というような、勉学や生活にかかわる身近な話題をよく持ち出すということが第5章において明らかになった。趣味、家族、日常生活というような話題は、対人距離を縮めるには有効的であるとしても、相手との相性の合致如何によってその有効性に差が出るのが大きい面もあるため、日本語専攻大学生は、普段から異文化間知識を蓄積することや社会経験を積み重ねることで接触中の話題の選択を増やし、会話の継続に関する問題の解消に役立つ必要がある。そして、こちらから話題を積極的に作るという努力のほかにも、相手の持ち出された話題に傾聴することが話題の継続に有効で、対人関係の構築に重要であると見られる。相手に合わせることで話題を継続させる努力と工夫も、日本語専攻大学生によってなされてはいたが、形式的で表面的な話になってしまう可能性もあるため、注意する必要がある。また、<コミュニケーションの困難>は、話題の選択と継続に影響するため、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を高めることも対人関係構築能力の向上に有効な手立てになると考えられる。
- ③日本事情や日本文化の知識を蓄積することも不可欠である。これは、異なる文化背景に起因する不安や緊張を減らし、接触中の話題の選択と継続に関する問題に対処することにも繋げられると考えられる。

6.4 異文化間能力

本研究は異文化接触を持続するために日中両国の文化に関する困難を解決するのに必要な能力を「異文化間能力」とし、そして、そこには、異文化間知識・異文化間スキル・異文化間態度が内包されるものとする。

6.4.1 異文化間知識

第2章において、異文化間知識が従来の異文化間コミュニケーション能力モデルにおいて重要な位置を占めていることが明らかになった。Byram (1997) は、異文化間知識について、「社会集団や文化についての知識」、「個人、社会レベルのインタラクションの過程に

についての知識」などを幅広く内包するものとし、その中には、例えば、「自他国の歴史的・現代的関係（両国の歴史に残る行事、事件、また現在のそれぞれの国の政治的経済的要因）についての知識」、「異文化の対話者間の誤解の原因、プロセスのタイプ（異文化間のコミュニケーションやインタラクションにおけるパラ言語・ノンバーバルの無意識な効果や、共有の概念・ジェスチャー・習慣・儀式の他の解釈）についての知識」などが挙げられると捉えている。その中には、「パラ言語・ノンバーバルの無意識な効果や、共有の概念・ジェスチャー」のようなコミュニケーション関係の知識も含まれるが、それらもパラ言語・ノンバーバルに反映されている文化的行動規範に対する解釈と考えられるため、Byram（1997）の捉えている「知識」は基本的に自他文化に関するものと見られる。Deardorff（2004：196）は、「（異文化間）知識と理解」を「文化自覚・文化に対する深い理解と知識（文化のコンテキスト、役割と影響・他人の世界観）、特定文化の情報、社会言語意識」（筆者訳）からなるものと捉えている。上記の2研究から、異文化間知識は、他文化の認識と理解および自文化の認識と理解の両方を内包するものと考えられる。

中国の日本語専攻大学生が異文化接触を持続するには、異文化間知識が必要である。その理由としては、以下の4点を列挙する。

- ①中国の日本語専攻大学生が接触中遭遇する〔異文化による摩擦〕には、＜接触上の文化的差異＞と＜固定観念による文化摩擦＞が内包される。＜接触上の文化的差異＞は、価値観や習慣における両国間の差異による【困難】であり、基本的には両国の文化知識、特に日本の価値観や習慣に関する知識が欠如しているためと考えられるが、そこに異文化間知識に基づいた自他文化間の差異に対する気づき、発見が足りないことも注意されることが望ましい。＜固定観念による文化摩擦＞には、日本の文化知識が不足なため、日本文化をよく理解できないあるいは誤解するということによる【困難】もある。
- ②日本語専攻大学生は、接触中に＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞という【困難】も抱えるが、それは話題に取り上げられる日本事情や中国事情に関する知識が少ないことと密接に関係する。
- ③日本語専攻大学生は、相手との＜文化的差異についての積極的な意見交換＞を通して＜固定観念による文化摩擦＞に対応する際、自文化に関する知識の欠如を痛感することがある。
- ④日本語専攻大学生は、接触中、＜異文化間知識の活用＞という【努力と工夫】を通して、〔異文化による摩擦〕に対応するが、それと同時に、この＜異文化間知識の活用＞は〔対人関係の工夫〕、＜異文化接触の摩擦への回避＞、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞、＜異文化接触における客観的な姿勢＞にも影響を与えるため、その重要性が伺える。

本研究において生成した＜異文化間知識の活用＞は、具体的に教室内外で学んだ日本の社会通念などの知識を活用し、日中間の文化的差異に気づき、理解し、そして対応することを指すが、日本語専攻大学生は、接触を持続するために、日本の文化知識のみならず、

自文化に関する知識を持つ必要もあることは特筆すべきである。外国語教育においては、他文化知識の学習に偏重しがちであり、反対に、自文化知識の学習が見落とされがちである。しかし、ただ他文化を学習し、認識するだけでは、対等的ではない接触になりかねない。それが、結局、接触を持続不可能なものにも導くだろうと考えられる。一方、自文化の価値観や習慣などに関する知識を持つことは、日本文化への意識、両国間の文化的差異への認識と理解を促進することができる。そのため、異文化接触を持続するのに必要な異文化間知識は、日本の風俗習慣、行動様式、価値観、社会事情に関する文化知識などを内包し、それと同時に、自文化の風俗習慣、行動意識、価値観、社会事情などに関する文化知識をも内包することが一般化されるとよい。ただし、＜異文化間知識の活用＞は自他文化間の差異に対する気づき、発見を前提とし、自他文化間の差異に対する気づき、発見は異文化間知識に基づくものであるため（文 1999：13）、両者が相互作用の関係であると伺える。本研究の取り上げている「異文化間知識」は事実的文化知識のみならず、自他文化間の差異への気づき、発見をも含め、対処性のある知識であるものと特記する⁴⁸。

6.4.2 異文化間スキル

Byram (1997) は異文化間スキルを「解釈と関連づけのスキル」および「発見とインタラクションのスキル」からなるものと捉え、Deardorff (2004) は異文化間スキルを「聞き・発見・解釈、分析・評価・関連付け」（筆者訳）が内包されるものと見る。上記の2研究において、異文化間スキルは、知識・スキル・態度の枠組み⁴⁹に位置づけられており、そして対処的、行動的というより、認知的と認識される面が強いと見られる。

文 (1999) においては、「柔軟性」はスキルレベルの要素と見られており、「柔軟性」を持つには意識の「敏感性」と態度の「寛容性」が欠かせない。田中・中島 (2006) は、異文化間ソーシャルスキルを提唱し、それを「気づき」・「理解」・「対処」と分け、そして異文化間ソーシャルスキルが「気づき」から「理解」へ、さらに「対処」へと発達していくことが求められると論じている。西岡・八島 (2018) の捉えている異文化間態度は、技能的側面を持っており、「受容的態度」と「能動的態度」に分けられ、具体的には、「多様性尊重」、「尊敬表示」、「傾聴」、「共感」、「積極的な行動」、「意見の主張」、「協働」などが

⁴⁸ 本研究のインタビューデータでは、自他文化への気づき、発見に関する語りが顕著に見られなかったため、これらの記述はなかった。ただ、気づき・発見があれば新しい知識が得られる。一方、異文化間知識によって、自他文化に気づき、両文化間の差異を批判的に見ることもできると考えられる。異文化間知識と自他文化への気づき、発見は相互関係であると言える。

⁴⁹ 外国語教育分野の「異文化間コミュニケーション能力モデル」においては、「異文化間コミュニケーション能力」は、一般的に「コミュニケーション能力」と「異文化間能力」を内包するが、そのうち、「異文化間能力」は、「知識・スキル・態度」に分けられる。それに対して、異文化間教育分野においては、「異文化間コミュニケーション能力」そのものが、「知識・スキル・態度」と分けられることがほとんどである。両分野は、ともに、「異文化間コミュニケーション能力」を「知識・スキル・態度」の視点で捉えているものと見られる。ただ学問分野の特徴で、それぞれ取り扱う具体的内容が異なるのみである。

挙げられる。この3研究において、異文化間スキルは、認知的・行動的視点で捉えられており、対処・行動の面が特に強調されている。また、「柔軟性」、「多様性尊重」、「尊敬表示」、「傾聴」、「共感」、「積極的な行動」、「意見の主張」、「協働」というような具体的スキルは本研究に示唆を与えてくれる。

本研究においては、中国の日本語専攻大学生が、接触中、＜異文化接触の摩擦への回避＞と＜文化的差異についての積極的な意見交換＞という2種のスキルを用いていることを確認した。＜異文化接触の摩擦への回避＞は、回避や判断保留の姿勢で摩擦を避けることであるが、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞は、誤解を解消し、自分の文化を理解してもらうために、文化についての説明を行って、相手と積極的な意見交換をすることである。この2種のスキルは、認知的と言うより、行動的側面が強いと考えられる。

接触中、日本語専攻大学生は、日中両国の価値観や習慣における文化的差異に対して、摩擦が生じないように回避のスキルを用いるが、日中間の歴史・政治に関するデリケートな話題や相手の固定観念によって中国や中国人を否定する話を持ち出された時、＜異文化接触の摩擦への回避＞スキルを取る者もいれば、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞を通してこれに対応する者もいる。異なる文化による困難に対して、中国の日本語専攻大学生は、回避と判断保留・文化説明というスキルを利用するのである。しかし、一口に「回避と判断保留」と言っても、日中間の歴史・政治に関するデリケートな話題は摩擦になりやすいため、積極的に選択する場合もあれば、相手文化や自文化に関する知識が欠如しているために、説明しようにもできず、消極的に回避するしかない場合もある。後者の場合に対しては、異文化間知識を基礎に、両文化間に差異が存在することに気付き、そしてそれらを認識し理解する必要があると考えられる（西岡・八島 2018 : 106）。こういう面から、「異文化間知識」、さらに「異文化間知識」に基づいた両文化間の差異への気づき、敏感性は、「異文化間スキル」に大きく寄与すると伺える。

一方、第5章において、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞は、接触相手が日中間の文化的差異を固定観念で見ていると意識した時に成されることがほとんどであることが明らかになった。そこには国家アイデンティティ・愛国心が働いているため、反応しすぎれば、相手の反感を招くことにもなり得るため、柔軟性を持って対応する必要がある。また、＜文化的差異についての積極的な意見交換＞を行う際、日本語専攻大学生が、異文化間知識の不足で、無理な文化説明をし、葛藤を覚えるケースもあった。これは「異文化間知識」が「異文化間スキル」に影響することをさらに裏付けている。さらに、固定観念は容易に変えられないため、文化説明が接触の摩擦を引き起こす恐れもある。しかし、自国・自国文化を否定する話題を持ち出された時、回避し、自分の中で悩んでばかりいてはかえって真の異文化理解が得られない面もある。そのため、接触中、どの異文化間スキルを選択するかは、コンテクストを見極めて適切に判断することを勧めたい。

このように見てくると、本節は以下の4点で纏められる。

①中国の日本語専攻大学生は異文化接触を持続するために、異文化間スキルが必要であ

り、そしてスキルは行動的側面が強い。

- ②異文化間スキルは、具体的に、回避や判断保留の姿勢をとること、自文化についての説明を行うことを内包すべきであるが、柔軟に対応することも求められる。
- ③異文化間知識は、異文化間スキルに大いに寄与するため、日本語専攻大学生における異文化間スキルの育成を行う際、異文化間知識を重要視することが望ましい。このことは、日本語教育に示唆を与える。
- ④真の異文化理解になるには、接触中、どの異文化間スキルを選択するか、コンテキストを見極めて適切に判断することを勧めたい。

6.4.3 異文化間態度

Byram (1997) においては、「態度」を、異文化に対して好奇心にあふれ、開放的であるものや、他者の意味、信念、行動に対する不信感、判断を保留するものと捉え、文 (1999) は、「寛容性」を異文化間態度として見ている。Deardorff (2004) の「異文化間能力のピラミッドモデル」において、「態度」は、尊敬・開放性・好奇心および発現する意欲を具体化することができる力として、ピラミッドの一番下に置かれている。また、松尾・森茂 (2017 : 28) の報告では、「態度」には「寛容」、「柔軟性」、「興味・関心」などの要素が挙げられる。上述の研究で取り扱われている異文化間態度は、具体的には、「好奇心」、「開放性」、「判断保留」、「尊敬」、「発現する意欲」、「寛容性」、「柔軟性」などにまとめられるが、これらの異文化間態度は、人の内部に存在する心理的な傾向として認知的に捉えられると特徴づけられる。

異文化間態度に関しては、第一に、第5章において、中国の日本語専攻大学生が、接触中、＜固定観念による文化摩擦＞という【困難】に対してもっとも感情的な難しさを覚えると明らかにした。それは、主に以下の2点から見られる。まず、中国の文化現象を否定する話題を持ち出された時、日本語専攻大学生は、接触相手が中国・中国文化に固定観念を持っていると敏感に意識する。そして、日本人相手の固定観念による中国認知が個人ではなく、中国に向けられていると受け取り、さらに、中国・中国文化が見下ろされているように認識する。そこに「国家アイデンティティ」の自覚と「愛国心」・「民族自尊心」の生起が見られる。次に、中国の日本語専攻大学生が日本に固定観念を持っている場合、その固定観念に左右され、①日本の風俗習慣・考え方・コミュニケーションスタイルを否定的に見、②風俗習慣・考え方・コミュニケーションスタイルの差異による問題を両国間の関係問題として捉え、中国・中国文化が日本人に見下されているように認識することがある。②の場合に、「国家アイデンティティ」・「愛国心」・「民族自尊心」が見られる。上述から異文化接触の中の＜固定観念による文化摩擦＞には、「国家アイデンティティ」・「愛国心」・「民族自尊心」が常に伴っており、それらは基本的に日中間の歴史問題によるものと考えられる。日中間の歴史問題が日本語専攻大学生における異文化接触に大きく影響す

ることが十分推察できる。

第二に、第5章において、中国の日本語専攻大学生が＜異文化接触における客観的な姿勢＞を取ることで＜固定観念による文化摩擦＞に対処していることを明らかにした。①日中間の歴史問題によって、日本語専攻大学生には日本・日本文化に対する固定観念が生じがちであるが、歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見る異文化間態度は＜固定観念による文化摩擦＞への解消に役に立つ。②一方、相手に中国の文化現象を否定する話題を持ち出されたとき、批判的な意識を持って、自国の文化現象を客観的に捉え、それによって相手の発言を客観的に認識、解釈することができれば、それが＜固定観念による文化摩擦＞の軽減に繋がる。

第三に、寛容で、尊重的な態度を取ることが＜接触上の文化的差異＞の解決に有意義である。中国と異なる価値観や習慣に会った時、その面での知識が不足でも、寛容な態度で差異の存在を受け止め、そのうえで、それに柔軟に対応すれば異文化接触を促進させられる。さらに、相手の中国文化に対する不理解に対しても、客観的、寛容な態度で接し、そのうえで対応することがよいと考えられる。さらに、日本、日本文化に対して知的な好奇心を持って客観的に見る態度も＜接触上の文化的差異＞に繋がる。

上述から、異文化間態度は、[異文化による摩擦]という【困難】に対処するのに重要な役割を果たすことが十分窺える。中国の日本語専攻大学生が異文化接触を持続するには、異文化間態度が必要であり、その具体的内容は、以下の4点である。①歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見ること、②批判的な意識を持って自国の文化現象を客観的に捉え、それによって相手の発言を客観的に認識、解釈すること、③日中両国の文化的差異の存在を認め、そしてその差異を寛容で、尊重的な態度で客観的に見ること、④日本、日本文化に対して知的な好奇心を持って客観的に見ることの4点をすべて含むことが一般化されるとよい。

先行研究において、異文化間態度は、「好奇心」、「開放性」、「判断保留」、「尊敬」、「発現する意欲」、「寛容性」、「柔軟性」などであると挙げられている。これらの要素は、本研究でも見つけられ、また、文化的差異による【困難】の解決に有意義であると分かった。しかし、本研究では一般の異文化間コミュニケーションにおいて生じがちなく接触上の文化的差異＞という【困難】以外、＜固定観念による文化摩擦＞も確認され、しかもこれがもっとも感情的に難しいと認識されていることが明らかになった。これは、歴史の影響で、日中両国の国民が互いに相手の文化習慣に対して固定観念を持ちがちであり、それが異文化接触に大きな影響を与えるからである。日中両国特定の異文化接触においては、日本語専攻大学生にとって、歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見る態度、また、自文化を批判的な意識で客観的に見る態度が必要であると考えられる。

第7章 終章

中国の日本語教育においては、2000年から日本語専攻大学生に対する異文化間コミュニケーション能力の育成が唱えられ始めた。しかし、その実施は、言語至上・知識偏重のパターンに沿い、教える側を中心とする施策と教室内での教授に基づいて行われてきた。これらは、いずれも、学習者の、教室外での真の異文化接触という視点が欠落している。異文化接触は、実際の異文化間コミュニケーションの場であり、そこでは異文化間コミュニケーション能力が鍛えられ、そして、教室内の日本語教育に有意義な示唆を与え得るものと十分に考えられる。しかし、それが、中国の日本語教育者の間においては十分に認識されていない。学習者は、教室内から有効な支援やサポートを得られずに、多くの困難を抱えながら、異文化接触を経験している。そのような学習者の状況を改善するためには、まずは、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実際を十分に認識しなければならない。その上でこそ、日本語教育の現場と日本語教育者から、異文化接触を持続させるための支援やサポートの実現が期待できるのだろうと考えられる。このような問題を踏まえ、実施した本研究は、以下の研究目的を設定した。

- (1) 中国の日本語専攻大学生における異文化接触はどのようなものかを認識できるように記述すること。
- (2) 中国における日本語専攻大学生が異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を同定すること。

そして、上記の研究目的を敷衍して、以下のように課題を細分化した。

- (1) 中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状はどうであるか。
- (2) 彼らの異文化接触のプロセスはどのようなものか。
- (3) 彼らの異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力はどのようなものか。

研究課題(1)と(2)は研究目的(1)を解明するため、研究課題(3)は研究目的(2)を解答するために、それぞれ設定されたものである。本章では、研究課題の順番に沿って、本研究の各課題に対する答を述べる。それをもって、研究目的が叶えられるだろうと考えられる。そのうえで、先行研究が明らかにしてきたことを踏まえて、本研究で得た成果を確認し、さらに、中国の日本語教育改善への示唆を加え、最後に本研究の限界と今後の課題を示して本論を締めくくる。

7.1 まとめ

以下は、第3章・第5章・第6章で得られた結果をもって、それぞれ研究課題(1)・(2)・(3)への答とする。

7.1.1 異文化接触の現状

中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関して、本研究は大連市に位置している2大学に在籍の111名の日本語専攻大学生から協力を得、接触の経験、接触の持続状況、および接触の対象・接触の場・接触期間・接触頻度・接触の主な内容に対して自由記述による調査を行った。その結果としては、次の3点が挙げられる。

第一に、異文化接触の経験から言えば、異文化接触が多くの日本語専攻大学生によって実施されている。そして、大学別の接触経験者の比率は、大学の位置している環境と密接に関係している。また、学年が上がるとともに接触経験者数も上がるが、それは、日本語能力の向上、それに伴う不安の軽減、異文化間コミュニケーション能力を鍛える需要の増大、さらに、日本人と接触できるネットワークの拡大などがそれに影響する要因であろうと考えられる。

第二に、異文化接触の持続状況に関して、経験者のうち、「開始」と「持続していない」の経験者より「持続している」の経験者のほうが多いが、「持続していない」学習者も決して少なくはない。大学別の持続状況は、大学の位置している環境と密接に関係しており、安定的に利用できる接触の環境に置かれた大学では、「持続している」経験者も「開始」段階の経験者も多い。学年別接触の持続状況を比較すると、2年生においては、「開始」する経験者数が多いが、それは、日本語能力の向上、それに伴う不安の軽減、日本語をアウトプットする欲求の生起と関係するものと思われる。一方、4年生においては、「持続している」経験者数が多い。それは、学習者が接触を持続させる能力をある程度備えており、そして、接触の持続的利用が自身にとって意義を持つことを認識し始めることと関係しているだろうと推測できる。

第三に、接触の対象・接触の場・接触期間・接触頻度・接触の主な内容をそれぞれ見ると、まず、日本語専攻大学生における「接触の対象」は、日本人の「駐在員」・「主婦」・「子ども」・「教師」・「留学生」・「客」・「その他」に分けられており、そのうち、「駐在員」・「留学生」と接触した経験を持っている学習者数が最も多い。

次に、「接触の場」は、「大学」・「中国語教室」・「日本料理店」・「その他」に分けられているが、よく利用する「接触の場」は、大学の位置している環境や大学の国際交流政策に大きく影響される。学年別に利用する「接触の場」を見れば、低学年段階の学習者は「中国語教室」・「大学」・「日本料理店」をよく利用するが、高学年段階となると「その他」の「接触の場」が利用され、「接触の場」が多様化しつつあり、学習者におけるネットワークの利用も個別化を見せ始めていると考えられよう。

また、「接触期間」に関しては、「中国語教室」と「大学」での接触が安定的で、より長く継続できる一方、「日本料理店」での接触は、開始しやすい一面がありながら、長く続けられない面もある。そして、個別のネットワークを使って「その他」で開始された接触も

長くは続けられていない。「接触頻度」は、「中国語教室」・「日本料理店」の場合、学習者がアルバイトの形で行うのがほとんどであり、就業時間が決まっているため、「接触頻度」が一定しているが、「大学」での接触は、日本人教師や留学生との間で行われており、時間が一定しておらず、より自由であると同時に頻度が低い。

さらに、「接触の主な内容」は、「接触の方法・手段」と「接触の話題内容」を内包しているが、「接触の方法・手段」では、言語コミュニケーションがもっとも多く用いられ、それ以外では、その場に相応した具体的な行動も見られる。「接触の話題内容」は、「日本の文化」・「日本の社会」・「日中文化における相違点」・「語学の学習」・「日常の生活と仕事」に及んでおり、そのうち、「日中文化における相違点」が最も多く関心を持たれ、学習者が接触を通して日本に関する知識を獲得しようとする意識が強いことが伺える。そして、「日本の文化」と「日中文化における相違点」に関する話題は、すべての「接触の場」で触れられており、この2種類の話題が異文化接触の中で多く関心を示され、かつ相手に共感を持たれやすいのではないかという協力者の認識が働いているものと考えられる。

上記の日本語専攻大学生における異文化接触の現状をまとめた結果から、以下の2点の示唆が得られた。

①日本語専攻大学生における自然な異文化接触は、大学の位置している環境や各校の国際交流政策に大きく影響されている。「接触の対象」・「接触の場」が大学の位置している環境や国際交流政策に依存しているため、その環境や政策に依存した「接触の対象」・「接触の場」によって「接触期間」・「接触頻度」がパターン化を見せている。しかし、そのような環境的リソースや政策的リソースを有しない大学の日本語専攻大学生は、いったいどのように接触のチャンスが得られるのかと考えざるを得ない。しかし、インターネットの普及によって異文化接触の手段が多様化し、SNSなどの利用が接触チャンスの獲得に新たな可能性を示している。

②現在あるリソースが安定的に活用されることが望ましい。本調査において、日本語専攻大学生による「大学」での日本人教師・留学生との接触は、「たまに」の頻度で行われているのが多いことが確認された。これは、「大学」での異文化接触が十分に利用されていないということであると見て取れる。

7.1.2 異文化接触のプロセス

異文化接触のプロセスを解明するために、本研究は、大連市にある4大学における20名の日本語専攻大学生を協力者として、半構造化インタビューを行い、M-GTAによるデータの収集と分析を行った。第4章では、調査概要、およびM-GTA研究方法の選択理由を述べた。第5章においては、中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに対する記述を行った。具体的なプロセスは、以下の通りである。

日本語専攻大学生は、接触前、〈ツールとしての日本語のアウトプット欲求〉・〈ツ

ルとしての日本語の活用による目的達成>・<他者による接触意欲への刺激>・<日本人の友人獲得の欲求>という【動機づけ】を持ち、【チャンスの獲得】を通して接触を開始する。【動機づけ】から見ると、中国の日本語専攻大学生は、異文化接触を、日本語能力を高め、目的を達成するための道具として捉える傾向が強いことが分かった。

接触中、日本語専攻大学生は、【困難】に遭遇しつつも、【努力と工夫】を通してそれらに対応している。具体的な【困難】としては、<コミュニケーションの困難>・[対人関係の困難](<異文化接触の対人関係の不安>・<接触場面における話題の選択・継続に難航>・<対等性の欠如による接触の困難>を含む)・<価値づけによる消極的な接触姿勢>・[異文化による摩擦](<接触上の文化的差異>・<固定観念による文化摩擦>を含む)・[安定的な場の喪失](<接触条件の不備>・<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>を含む)・<学業重視による接触の一時的放棄>があげられ、「コミュニケーション」・「対人関係」・「認知上の価値づけ」・「異なる文化」・「接触の場の維持」・「学業とのバランス」という6つの方面に及んでいる。

一方、具体的な【努力と工夫】は、<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>・[対人関係の工夫](<対人関係の構築への努力>・<話題の選択・継続に関する工夫>を含む)・[異文化間摩擦への対応](<異文化間知識の活用>・<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>・<異文化接触における客観的な姿勢>・<ポップカルチャーに起因するポジティブな観念>を含む)から構成されており、「コミュニケーション」・「対人関係」・「異なる文化」という3つの方面に及んでいる。一方、これらの【困難】に対応する【努力と工夫】は、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション」・「対人関係」・「異文化間の摩擦」という3つの面しか含んでいない。これは、<価値づけによる消極的な接触姿勢>や<学業重視による接触の一時的放棄>は日本語専攻大学生自身の知覚や意思によって決定できることであるが、[安定的な場の喪失]は自身の【努力と工夫】でコントロールできない外部の人的・物理的・機能的要素によるためである。

【困難】と【努力と工夫】の間では、必ずしも同種類の【努力と工夫】が同種類の【困難】に対応するとは限らない。例えば、[対人関係の工夫]は、[対人関係の困難]への対処になるのみならず、<対人関係の構築への努力>は、<コミュニケーションの困難>、さらに、<接触上の文化的差異>の解決にも役立つ。対人関係の構築はコミュニケーションの困難、そして異なる文化からくる困難への対処に寄与すると言える。

接触中は、<接触に対する相手の関与姿勢>も関わり、学習者の直面している【困難】を増幅/低減させるか、また、【努力と工夫】を促進させるか否かのように作用する。日本語専攻大学生が【困難】と【努力と工夫】を経験している一方で、そこに<接触に対する相手の関与姿勢>も関わってくるため、この3者が、接触中には相互に作用するのである。その結果、異文化接触の【効果】が現れる。これらの「効果」として、具体的には、<コミュニケーション能力の向上>・<目的の達成>・<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>・<他情報源から得た日本認識との総合>・<日本人イメージの具体化(個別化)>・

<文化理解の意識化>・<日本文化の受容>・<異文化接触の経験の共有>が挙げられる。しかし、【効果】が顕在化されていないときは、【困難】に挫折して<あきらめ>に陥ることもあり、また、【効果】が徐々に現れた後で、【努力と工夫】をしても【困難】が解決できず、<あきらめ>てしまうこともある。<あきらめ>に陥った後、異文化接触を回復する場合、【動機づけ】から始まるプロセスが再度経過すると推測できる。しかし、前回の異文化接触の経験があるため、新たに始まるそのプロセスの質が高くなると予測され、過程がスパイラルな形で高まっていくと考えられよう。他方、接触の【効果】が現れ、その【効果】の促進作用で、<異文化接触の持続と拡大>を果たしていく例も見られる。しかし、異文化接触のプロセスは、<異文化接触の持続と拡大>をもって終結するのではなく、接触の持続中、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>・【効果】からなる過程がまた繰り返される。しかし、接触の経験が蓄積されていくとともに、持続中の接触の質も高くなると予測されるため、【困難】・【努力と工夫】・<接触に対する相手の関与姿勢>の3つと【効果】がスパイラルな形で高まっていくと見られる。

7.1.3 異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力

第6章は、第5章において明らかにした中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに基づき、異文化接触を持続するために、どのようなコミュニケーション能力が必要かを探求したものである。その結果、「ネットワークの構築能力」・「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」・「対人関係構築能力」・「異文化間能力」という4つのコミュニケーション能力を同定した。そのうち、「ネットワークの構築能力」は接触前に関わるものであるが、残り3能力は接触中に関わるものである。

(1) ネットワークの構築能力

日本語専攻大学生のような外国語学習者の場合、第二言語学習の環境と異なり、ネイティブスピーカーと接触するチャンスは限られている。その上、人によってネットワークの構築能力が異なり、チャンス獲得の質も異なるため、異文化接触の持続には、「ネットワークの構築能力」が必要なのである。「ネットワークの構築能力」は「情報収集能力」と「リソース活用能力」に分けられる。「情報収集能力」は、人的・物的・社会的リソースを利用して、接触チャンスを獲得する能力であるが、「リソース活用能力」は、近接の接触チャンスを活用する能力である。また、SNSが新たなメディアとして大いに利用されている現在の社会では、中国の日本語専攻大学生は、SNSを情報収集の手段として活用するほか、物的リソースとしても利用している。それが異文化接触のネットワークの構築にどのような影響を与えるかが今後注目されるとよい。

(2) 意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力

日本語専攻大学生は、異文化接触の中で多くの<コミュニケーションの困難>を抱える。それに対して<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>で対処

する。

しかし、その対応状況の詳細を見ると、次の3つの問題点が見られる。

- ①日本語専攻大学生自身に、異文化間コミュニケーションに向けて、普段から話す能力や聞く能力を高めるのに必要な知識や練習を蓄積する意識が薄く、そのための努力が不足している。
- ②教室内においては、コミュニケーションストラテジー能力についてあまり提示されていない可能性が大きい。
- ③日本語専攻大学生は、正しい日本語に固執する傾向が強い。

以上を踏まえ、本研究は「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」の重要性を提案し、そしてそれを育てる具体策を以下のようにあげる。

- ①普段から話す能力、聞く能力を高めるように努力する。
- ②ストラテジーの使用を意識し、そして接触経験の積み重ねなどによってストラテジーの質を高める。
- ③コミュニケーションの中で、言葉の間違いより意思疎通のほうがコミュニケーションにとってより重要であるという意識を持つことが一般化されるとよい。

(3) 対人関係構築能力

日本語専攻大学生は、異文化接触の中で、強い対人交流志向を見せている。[対人関係の工夫]は、それ自体が[対人関係の困難]への対応になるのみならず、それに内包される<対人関係の構築への努力>は、<意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫>を促進し、<コミュニケーションの困難>・<接触上の文化的差異>への対処にもなる。対人関係構築の観念が中国の日本語専攻大学生における異文化接触の持続に重要な意義を持つ。

本研究の提案する「対人関係構築能力」は、以下の3つの側面から捉えられる。

- ①情意面では、責任感・誠意・共感・積極的で柔軟で寛容な態度を持つ。
- ②行動面では、まず、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇というような対人行動が必要である。次に、話題能力を重要視することを勧める。普段から異文化間知識を蓄積することや社会経験を積み重ねることで接触中の話題の選択を増やすこと、相手の持ち出された話題に傾聴することが重要である。また、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を高めることで対人関係構築能力の向上に役立てられる。
- ③認知面では、日本事情や日本文化の知識を蓄積することも不可欠である。

(4) 異文化間能力

日中両国の文化に関する困難を解決するのに必要な能力は、「異文化間能力」であり、異文化間知識・異文化間スキル・異文化間態度を内包する。

異文化間知識は、[異文化による摩擦]への対処に役立ち、[対人関係の工夫]・<異文化接触の摩擦への回避>・<文化的差異についての積極的な意見交換>・<異文化

接触における客観的な姿勢>に促進作用を持つため、異文化接触の持続にも重要な意義を持つ。異文化間知識は、具体的には、自/他国の風俗習慣、行動様式、価値観、社会事情に関する文化知識などを内包することが一般化されるとよい。ここに、日本語専攻大学生が、日本の文化知識のみならず、自文化に関する知識を持つことの重要性を強調したい。

異文化間スキルは、行動的側面が強い。中国の日本語専攻大学生は、接触の中で、回避や判断保留や自文化についての説明を行うというスキルを取る。そして、摩擦に対応するときには、柔軟性が求められ、さらに、コンテキストを見極めて適切に判断する必要がある。異文化間知識は異文化間スキルに寄与するところが大きい。

異文化間態度は、[異文化による摩擦]という【困難】に対処するのに重要な役割を果たす。中国の日本語専攻大学生には、<固定観念による文化摩擦>において、中国・中国文化が見下ろされているという意識が常に伴うが、そこに「国家アイデンティティ」の自覚と「愛国心」・「民族自尊心」の生起が見られる。それらは、基本的に日中間の歴史問題によるものと考えられる。日中間の歴史問題は、日本語専攻大学生における異文化接触に大きく影響することが十分推察できる。そのため、中国の日本語専攻大学生が異文化接触を持続するのに必要な異文化間態度には、以下の4点を考えてみてはいかがかと思われる。

- ①歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見ること。
- ②批判的な意識を持って、自文化と相手の発言を客観的に認識すること。
- ③日中両国の文化的差異の存在を認め、そしてその差異を寛容で、尊重的な態度で客観的に見ること。
- ④日本と日本文化に対して、知的な好奇心を持って客観的に見ること。

7.2 本研究の独創性とその成果

本研究は、その性格を、外国語教育の視点からアプローチする、日中間の異文化間コミュニケーション研究として位置づけることができるが、その独自性と成果は、以下のように記述できる。

- (1) 中国ホストの場合の日本語専攻大学生における異文化接触を、より全面的に捉えるという方向性と目的を有する。

先行研究における日中間の異文化間コミュニケーション研究は、日本ホストの場合のものでは、日本在住の中国人留学生の異文化適応問題がもっとも多く取り上げられており、中国ホストの場合のものでは、日系企業での駐在員と現地の従業員との間のビジネスコミュニケーション問題、中でも、言語能力を中心としたコミュニケーション能力問題がもっとも注目されている。しかし、本研究のように、中国ホストの場合

の日本語専攻大学生における異文化接触を、より全面的に捉えた研究は皆無である。また、本研究は、中国の日本語教育が、異文化間コミュニケーション能力の人材育成目標を持ちながら、真の異文化接触を見落としているという状況下で、学習者が教室内から有効な支援やサポートを受けずに、多くの困難を抱えながら異文化接触を経験しているという現状を踏まえ、中国の日本語専攻大学生における異文化接触がどのようなものかを認識できるように記述すること、および中国における日本語専攻大学生が異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を同定することを研究目的としたものである。このような研究目的の設定は、先行研究においては見当たらないため、本研究は、その方向性と目的に独創性があると言える。とくに、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状（第3章）に関する箇所は、異文化接触の実際を認識するための基礎的な研究であるが、これまでにまったく為されていなかった。

- (2) M-GTA を用いて、多様な文脈における異文化接触のプロセスに対する具体的な記述を行い、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実態の一般性を求めた。

日中間の異文化間コミュニケーションに関する先行研究は、量的研究では異文化不適應や異文化摩擦の問題点がどこにあるかを提起することにとどまっているものが多く、質的研究では特定の事例に限定されており、その結果が全体像を反映しているとは限らないという問題を抱えている。本研究は、M-GTA 研究方法を用いて、中国語教室・大学・日本料理店という多様な文脈における異文化接触のプロセスについて具体的な記述を行い（第5章）、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実態の一般性を求めた。これは、本研究の用いた M-GTA 研究方法が、データに密着した説明概念を作り、それらを統合的に構成した説明力に優れた理論を生成し、さらに提示された理論にはそうした多様性に対応できるだけの一般性が求められる（木下 2003 : 25-34）という特性を持っていることに依拠するものである。

- (3) 日本語専攻大学生が異文化接触を持続するために必要なコミュニケーション能力を同定した。

本研究は、異文化接触のプロセスに対する記述に基づき、中国の日本語専攻大学生が異文化接触を持続するために必要なコミュニケーション能力を、「ネットワークの構築能力」・「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」・「対人関係構築能力」・「異文化間能力」と同定した。「異文化間コミュニケーション能力」に関しては、外国語教育の分野では、それを「コミュニケーション能力」と「異文化間能力」に分け、さらに、「異文化間能力」を知識・スキル・態度の面からアプローチするのが一般的であるが、異文化間教育の分野では、「コミュニケーション能力」を取り立てておらず、「異文化間コミュニケーション能力」そのものを知識・スキル・態度の枠組みで捉えたり、認知・行動的な視点からアプローチしたりするものが多い。両分野で取り扱われている「異文化間コミュニケーション能力」は、接触中に必要なコミュニケーション能力にだけ注目したものだが、本研究は、異文化接触がプロセス性を持っているも

のと見て、接触中のみにとどまらず、接触のプロセス全体に注目し、異文化接触を持続するために必要なコミュニケーション能力を捉えようとした。そして、M-GTA 研究方法を用いた異文化接触のプロセスへの解明に基づき、外国語教育の分野において取り扱われてきた「コミュニケーション能力」・「異文化間能力」という従来の構成要素以外に、異文化接触を持続するための「ネットワークの構築能力」と「対人関係構築能力」を新たに提出した。

以下は、日本語専攻大学生が異文化接触を持続するために必要なコミュニケーション能力に関して特筆すべきところを提示する。

まず、本研究は「対人関係構築能力」を取り上げている。「対人関係構築能力」を取り上げたのは、中国の日本語専攻大学生が異文化接触の中で強い対人関係志向を持っていることを拠り所としている。本研究では、中国の日本語専攻大学生が接触の中で寛容志向・積極的姿勢・誠実な態度・支援行動というような対人関係構築スキルを取ることが明らかにしたが、その情意的・行動的スキルに、自分の視点から出発する対人交流の特徴が見られた。これは、奥西・田中（2010）の説を支持するものである。一方、中国の日本語専攻大学生には、共感を重視すること、相手との共行動をすること、そして相手から持ち出された話に合わせたり、傾聴したりすることのような、相手を意識しながら自身の行動を調整するという、特徴的な対人関係作りも見られた。これは、従来の日中間における異文化間コミュニケーションに関する先行研究において言及されることが稀であった点である。

本研究は、「対人関係構築能力」の中では、話題の選択・継続に関する能力が重要視されることが望ましいと主張した。工藤（2003：25-26）は、異文化友情形成には適切な話題の選択能力が重要であり、そして、自文化の価値観を相手に押し付けないことや、親密になるまでは、対立する事柄を巡っての議論を避けることの重要性を指摘した。佐々木・張・鄭（2012：111）は、中国人留学生が日本人と友人関係を構築するために、プライベートな話題を遠慮すること、限られた話題で話すこと、考えてから聞くこと、相手の反応によって判断することというような、話題の選択に関する工夫をすることに言及した。両研究とも話題の選択に関する能力を強調しているが、工藤（2003）は主に異文化による摩擦への回避のほうから、佐々木・張・鄭（2012）は対人コミュニケーションのほうから、それぞれにアプローチしており、アプローチする角度が異なるとは言え、話題選択の異文化接触に対する重要性が十分伺える。しかし、両研究に日中両国の異文化接触に特化した、適切な話題の選択に関する能力の記述は見当たらない。本研究は、中国の日本語専攻大学生における異文化接触は、相手との間に話の接点を得やすくしようとするため、日本事情、中国事情、趣味、家族、日常生活というような、勉学や生活にかかわる身近な話題をよく持ち出すことを明確にし、話題の選択・継続に役立つ具体策を提案した。

次に、本研究は、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を提示してい

る。先行研究では、中国ホストの場合の日中間異文化間コミュニケーションにおける、言語能力を中心としたコミュニケーション能力問題がもっとも注目されているが、日本ホストの場合の中国人留学生の異文化不適應問題に関して、コミュニケーション能力が特に取りあげられていないことが明らかになった。中国人と日本人の両者にギャップが生じているのは、日本ホストの場合、日本に在住しているうちに言語能力が向上し、相手が、正しい言葉より意思疎通のほうを求めていることを認識するようになるからだと推測できる。本研究においても、日本語専攻大学生がコミュニケーション能力に強く困難を覚えていることが判明したが、これは中国ホストの場合、コミュニケーションに用いられる言語能力に対する学習者の意識が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。外国語教育の分野においては、目標言語能力が大いに強調されているため、学習者は、接触の中で正しい外国語を求め、外国語の使用に固執することになりがちであり、それが余計な緊張や不安を引き起こし、意味伝達、対人関係の構築にも影響を与えて、異文化接触に支障をきたす。本研究では、「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を提示し、日本語専攻大学生が異文化接触するときは、正しい外国語・外国語の使用という束縛から自らを解放し、意思疎通のほうにより重要であるという意識に切り替えることの重要性を主張した。このような主張は、日中間の異文化間コミュニケーションに特化した先行研究においては、皆無に等しい。

また、本研究の提示している「異文化間能力」は、異文化間知識・スキル・態度という枠組みからアプローチされているが、これは外国語教育分野における従来の「異文化間能力」に対する捉え方と一致している。ただし、日中間における異文化間コミュニケーションに特化しているため、本研究の取り上げている「異文化間能力」に文化一般性のほか、以下の4点に見るような文化特殊性も特定できる。

- ①異文化間知識に関しては、中国の日本語専攻大学生が接触の中で自文化に関する知識の欠如を痛感し、それまでに気づいていなかった自文化に自覚するようになったことを明らかにした。ここに、中国の日本語教育においては、日本文化知識の学習に偏重する一方で、中国文化知識の学習が見落とされている可能性が推察される。そのため、本研究の取り上げた「異文化間知識」は、日中両文化の風俗習慣、行動意識、価値観、社会事情などに関する文化知識、そして自他文化の差異に対する気づきと認識を強調したものである。中国ホストの場合の日本語専攻大学生にとって、自文化知識の蓄積と自文化への気づき・認識が特に重要視されるべきであるということは、先行研究においてほとんど提示されていないことであるため、注目されることが望ましい。
- ②異文化間スキルに関しては、中国の日本語専攻大学生が回避や判断保留の姿勢をとったり、自文化についての説明を行ったりするというスキルを使用していることを明らかにした。また、柔軟的に摩擦に対応することやコンテクストを見極めて適切な判断をすることの重要性も強調している。これは、日中間の歴史問題に

よって、日中間で互いが固定観念を持つこと、中国の日本語専攻大学生が接触の中で愛国心・国家アイデンティティを自覚することと密接に関係している。この「異文化間スキル」に対する捉え方は、日中間の異文化間コミュニケーションに特化した先行研究においては見当たらないものである。

③本研究で提示した「異文化間態度」には、歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見ることや、批判的な意識を持って自国の文化現象を客観的に捉え、それによって相手の発言を客観的に認識・解釈することが内包されているが、これは、日中間の歴史の影響で日中両国の国民が互いに相手に対する固定観念を持ちがちなためである。

④本研究は、「異文化間能力」の構成要素間の関係に関して、「異文化間知識」が「異文化間スキル」や「異文化間態度」に影響することを確認した。これは、異文化間コミュニケーション能力の養成において、「異文化間知識」が利用される必要があることを示唆している。ただし、ここで提示した「異文化間知識」は、事実的文化知識のみならず、自他文化への気付き・発見を含め、対処性のある知識であることを特記する。

(4) 異文化接触に影響を与える情意的要素、およびその変容を確認した。

本研究では、動機づけ・不安・態度という情意的要素が中国の日本語専攻大学生における異文化接触に影響を与え、かつ、異文化接触を通してそれらの情意的要素が変容することを確認した。そのうち、態度の要素に関して、本研究は、中国の日本語専攻大学生が異文化接触の中で、「国家アイデンティティ」を自覚し、「愛国心」・「民族自尊心」が生じることを明らかにし、さらに、この3者の区別を試みた。

まず、異文化接触の動機づけに関しては、中国の日本語専攻大学生が異文化接触を、日本語能力を高め、目的を達成するための道具として捉え、したがって、異文化間コミュニケーションを日本語コミュニケーションと見ている傾向が強いということが分かった。それによって、日本語のみの使用という認知による不安や正しい日本語への固執による不安が生じることも確認された。本研究は、また、異文化接触をしているうちに、日本語専攻大学生に日本文化に対して受容的な態度が生じることを明らかにした。日本文化に対する受容的な態度は、異文化接触の持続に対する促進作用を持っているため、それがさらなる異文化接触の動機づけになると考えられよう。こういう面から言えば、中国の日本語専攻大学生は、道具的動機づけを持って異文化接触を開始することが多いが、異文化接触をしているうちに、それが統合的動機づけに変わっていくと見られよう。

次に、異文化接触中の不安に関しては、八島（2004）が、外国語コミュニケーションにおける「不安」に、「特性不安」・「状態不安」・「コミュニケーション不安」・「外国語の学習に関わる不安」・「異文化接触の不安」などが挙げられるとしているが、こ

れらは、概ね、対人コミュニケーション不安・特定の間や状況に対する不安・外国語によるコミュニケーションの不安・異なる文化による不安に纏められる。本研究では、＜コミュニケーションの困難＞においては日本語によるコミュニケーションの不安、＜異文化接触の対人関係の不安＞においては対人コミュニケーション不安と異なる文化による不安、＜対等性の欠如による接触の困難＞においては特定の間や状況に対する不安が、それぞれ存在することを確認した。さらに、本研究では、異文化接触の【効果】として、＜コミュニケーション能力の向上＞・＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞が生じたことから、異文化接触中の不安は、接触経験の蓄積に伴い、緩和されるように変容することが確認された。

また、異文化接触に対する態度に関しては、歴史的・社会的要因の影響で、日中間のコミュニケーションにおいて偏見が大きな影響要素になっていることが多くの先行研究で報告され、言及されてきた（吉 2001；葛 2007；一二三 2008；小林 2010；李 2007；殷・青木 2017 など）。本研究でも同じことを確認した。しかし、本研究では、中国の日本語専攻大学生における日本文化に対する「態度」には、感情的偏見と認知的ステレオタイプの両方があるが、それらを区分せずに包括的に「固定観念」としたうえで、歴史問題によって日中両国の国民が互いに偏見を持っているという事象的捉え方を取っている先行研究とは異なり、一歩踏み込んで、日本語専攻大学生における日本文化に対する固定観念が異文化接触の中でどのように顕わになるのか、そのメカニズムを解明した。中国の文化現象を否定する話題を持ち出されたとき、日本語専攻大学生は、まず、接触相手が中国・中国文化に偏見を持っていると敏感に意識し、そして、相手の日本人の固定観念による中国認知が、個人ではなく中国に向けられていると受け取り、さらに、中国・中国文化が見下ろされているように認識する。ここに、日本語専攻大学生における、日本に対する固定観念が見られ、「国家アイデンティティ」の自覚と「愛国心」・「民族自尊心」の生起が伺える。一方、中国の日本語専攻大学生が日本文化に固定観念を持っている場合、風俗習慣・考え方・コミュニケーションスタイルの差異による問題を両国間の関係問題として捉え、中国・中国文化が日本人に見下されているように認識することがある。その場合にも、「国家アイデンティティ」・「愛国心」・「民族自尊心」の働きが見られる。

本研究では、日本語専攻大学生における異文化接触に大きな影響を与える「固定観念」そのものが確認された。さらに、「固定観念」は、異文化接触の過程の中で、＜日本人イメージの具体化（個別化）＞・＜文化理解の意識化＞・＜日本文化の受容＞を通して多元的、ポジティブな方向へ導かれて変容するという事実も見られた。

さらに、本研究では、「国家アイデンティティ」・「愛国心」・「民族自尊心」の区別に関して、以下のような考察を試みた。まず、「国家アイデンティティ」は、他国や他文化と比較するときの、自国や自文化の一員としての自己認識である。次に、「愛国心」は、自分の国家に対して愛着や忠誠を抱く心情であり、「国家アイデンティティ」と比

べると、情動的側面が見受けられる。最後に、「民族自尊心」は、「愛国心」とは表裏一体の関係である。「民族自尊心」は、「中国」をまとめた一つの「民族」と見る捉え方であり、中国人が「自分」を「国」とを一つにする意識である（陳 2004 : 272）ために、「国家アイデンティティ」と比べて、自分が国と一体となって、国の立場を守るといった情意的側面が強調されていると解釈される。相手の日本人の固定観念による中国認知が、個人ではなく中国に向けられていると受け取ることや中国文化が見下ろされていると認識することの中に、このような「民族自尊心」が見うけられる。

- (5) 日中間の異文化間コミュニケーションに生じる特定の異文化摩擦を発見し、そしてその摩擦の生じる原因を掘り下げた。

本研究では、＜接触上の文化的差異＞に関するインタビューデータに対する記述から、日中間の異文化間コミュニケーションに生じる特定の異文化摩擦を発見した。それは、中国の日本語専攻大学生が日本人を「冷たい」とか「温情がない」とか認識し、それに葛藤を覚えて、接触の維持が難しいと感じることである。これは、「公」と「私」、および「間」に関する対人関係構築の仕方が異なることに原因があると考えられる。まず、中国人は、対人関係に強い親縁性と人情感を持っており、接触しているうちに互いに近づき、距離を縮め、感情的共鳴を得ることを求める（陳 : 2004）ため、「公」と「私」の間の境界線が明確でない。しかし、日本人の場合は、「公」と「私」の間の境界線が一般によりはっきりしていると見られる。日本語専攻大学生は、日本人の生徒（「中国語教室」）と「私」的關係になることを期待していても、「公」的關係のままにされてしまうので、そこに葛藤を覚えるのである。次に、中国人は、人と接触するとき「間」のない心理的距離を望み（陳 2004 : 205）、長く付き合えば、礼儀やマナーにこだわる必要がなくなり、それによって相手との心理的距離が近くなり、温情が生まれると認識するが、日本人は「親しき仲にも礼儀あり」という意識が強い。このため、両方が接触するときには、相手との親しさの感覚にギャップが生じることが十分に考えられる。

7.3 中国の日本語教育への示唆

本研究は中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状とそのプロセスを解明し、その異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力はどのようなものかを探求したものである。そのため、本研究は、中国の日本語専攻大学生の視点による教室外での真の異文化接触からの発信と言えよう。彼らからの発信は、外国語によるコミュニケーション能力獲得を国家レベルでの目標とする、現代の中国の日本語教育の中で重要視されることが望ましい。本研究から得られた、中国の日本語教育への示唆は、以下に列挙するようなものである。

- (1) 中国の日本語教育において、「異文化間コミュニケーション能力」に対する定義を明

確化し、人材育成の目標に方向性を示すことが望ましい。

2018年に中国の教育部によって作成された『普通高等学校本科專業類教學質量國家標準』は、外国言語文學類專攻の學習者に対して、外国語運用力や異文化間能力が重要な能力として求められると明記しており、外国語專攻における人材育成の目標として教育機關が準拠すべき枠組みを明示している。今後、この枠組みに基づき、中国の日本語教育は日本語專攻における人材育成の目標を策定すると考えられるが、その際、「異文化間コミュニケーション能力」に対する定義を明確化し、人材育成の目標に方向性を示す必要がある。というのは、2000年に「異文化間コミュニケーション能力」が獲得すべき能力として提起されて以来、それに対する明確な定義は為されず、教育現場ではこれを単に「日本語＋日本の文化を知っていること」と理解し、人材養成を行ってきたという現状があるからである。では、その定義をどのように示すかについて、本研究からは、具体的に以下のことが示唆される。

- ①日本語のみでのコミュニケーションを行う際には、正しい日本語に固執するより、意思疎通のほうがより重要であるという意識が重要視されることが効果的かと思われる。
- ②日中間に特化した異文化間コミュニケーションにおいては、対人関係構築能力が注目されることが望ましい。また、中国の日本語專攻大学生は、同国人との対人交流スキルを日本人相手との異文化接触に当てはめる傾向が強いため、コミュニケーションの中で、日本人相手の「相手の存在を意識した双方向的な調整」という対人関係構築の特徴（奥西・田中：2010）に十分注意を払う必要がある。さらに、対人関係構築能力に関しては、話題能力の重要性が認識されることが一般化されるとよい。
- ③異文化間能力は異文化間知識、スキル、態度から構成されている。異文化間知識には、日本の文化知識のみならず、中国文化の知識もしっかり位置づけられることが望ましい。そして、「異文化間知識」は、事実的なもののみならず、自他文化への気付きや発見を含め、実際の異文化接触の困難に対処できるような知識であると理解されたい。異文化間スキルには、回避と判断保留の姿勢をとること・自文化についての説明を行うこと・日中間の異文化間コミュニケーションにおいて持たれがちな固定観念を配慮し、柔軟的に対応すること・コンテキストを見極めて適切な判断をすることがすべて含まれる。異文化間態度は、歴史と現在、政治と国民間のコミュニケーション、一部の日本人と全体の日本人を切り分けて考えること・日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見ること・批判的な意識を持って自国の文化現象を客観的に捉えることをすべて内包することが一般化されるとよい。

「異文化間コミュニケーション能力」について、以上の示唆を取り込むような定義が明確化されてこそ、そのような定義に基づいて、「異文化間コミュニケーション能力」の育成のためのカリキュラムやシラバスが改訂され得るであろうし、現役日本語教師の意識改革や新しい教育観を持つ教師の養成も行われ得るだろうと考えられる。

(2) 大学や日本語学部からは、異文化接触に対しての支援が与えられることが望ましい。

第3章の分析から、中国の日本語専攻大学生は、所属する教育機関からの体系化された支援を得られずに、困難を抱えながら、異文化接触を経験していることが伺えた。異文化接触は、日本語専攻大学生にとって重要な意義を持っているため、大学や学部からの支援は、教育理念からして不可避かつ不可欠である。本研究からは、その支援に関して、以下の2点を示唆し得る。

①異文化接触のできる場づくりやチャンスの提供

第3章において、日本語専攻大学生における異文化接触は、大学の位置している環境や各大学の国際交流政策に大きく影響されていることが明らかになった。大学の位置している環境は変えられないものの、各大学が、日本語専攻大学生に有効な支援が与えられるように、国際交流政策の指針を策定し、調整することは十分に可能であると考えられる。それは、学校や学部が提供・開設した、国際交流活動（交流会、語学学習の交換支援など）、部活、日本語コーナー、インターンシップなどのような日本人との接触活動や、外国人教師・留学生とのコミュニケーション支援のためのアプリケーションが、多くの日本語専攻大学生に利用されていること（第3章および第5章参照）からも支持される。

大学には、異文化接触ができる場づくりに有利な国際交流政策を策定し、日本人留学生を受け入れ、日本語専攻大学生と交流できるチャンスを多く設けることが、そして、日本語学部には、大学の政策を十分に利用し、その推進に積極的に関与することが求められる。日本語学部は、さらに、学内では部活や日本語コーナーと、そして、学外では日系企業や民間の日本人団体と、それぞれ連携をとり、交流活動やインターンシップなどのような多様な接触の場を作ることも考えてほしい。

さらに、機関レベルではないが、本研究では、日本語専攻大学生が日本人とのネットワークを持つ日本語教師から接触のチャンスを紹介され、これをよく利用していることも明かとなった。これは、日本語教師が、学習者に個別の接触チャンスを紹介する一方で、教室内でこのようなネットワークの構築方法を提示・指導することもできることを示唆している。本研究は、また、日本人と直接接触できるアプリケーションが開発されるに伴い、日本語専攻大学生が SNS を利用して、対面で日本人と接触することも可能になってきていることを確認した。異文化接触に有利な環境や政策的リソースを有しない大学においても、日本語教師が日本語専攻大学生に対して、SNS の機能を利用して異文化接触が可能であることを提示・指導することも、大いに勧められるところである。

②接触の場に対する後続支援

第5章において、日本語専攻大学生は接触中、[安定的な場の喪失]（<接触条件の不備>・<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>を含む）という困難を抱えていることを確認した。それは、交流会、インターンシップ、部活、日本語コーナーなどの

ような接触の場を設けられた後で、その継続に対する大学や日本語学部の手当が不十分であることに原因がある。大学や学部は、交流会、インターンシップ、部活、日本語コーナーなどの安定的な利用や利用の内容などに関心を持つとともに、それらの接触の場に対する継続の支援を心がけるべきではないかと考えられる。

(3) 日本語教師による支援が不可欠である。

本研究から、日本語専攻大学生の異文化接触に対する日本語教師からの支援として、具体的には以下のようなものが示唆される。

① コミュニカティブ・アプローチを取り入れた教育の探究

本研究においては、日本語専攻大学生が接触の中で多くの<コミュニケーションの困難>を抱えていることが明らかになった。これは、教師が文法や句型重視の教授法に偏った指導をしているせいであろうと考えられる。したがって、教師には、文法偏重の教授法を脱してコミュニカティブ・アプローチを取り入れた教育方法を探究し、日本語専攻大学生の異文化接触を支援することが求められる。その探究の方法についての示唆は、具体的には、第6章で論じた「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」を参照されたいが、ここにそのうちの2点を挙げる。

まず、中国の日本語専攻大学生は、<コミュニケーションの困難>に関して、ストラテジーによる困難を語らなかったにも関わらず、実際には言語・非言語に関わる種々のストラテジーを多く利用していた。それは、コミュニケーションストラテジーそのものがそもそも教室内においてあまり提示されていないため、日本語専攻大学生がそれについて意識しなかったからではないかと考えられる。そのため、日本語教師は、コミュニケーションの中で各種のストラテジーが使用できることを示し、さらに、それをどのように活用するかを指導して、学習者と議論しつつ、ストラテジー能力の育成に力を入れることが求められる。日本語教師からのこの種の支援は、日本語専攻大学生におけるコミュニケーションの困難への対処、そして、日本語能力の欠如による緊張や不安の低減に役立つはずである。

次に、日本語専攻大学生はコミュニケーションの中で、聞く能力による困難を強く感じているが、そのうち、ティーチャートークに起因するものに関しては、日本語教師、特にネイティブスピーカーの日本人教師が自然な日本語の発音とスピードで話すことを心がければ、相当程度に低減させることができるものと思われる。

② 異文化間コミュニケーションの情意的要素への関心

本研究は、動機づけ・不安・態度という情意的要素が、中国の日本語専攻大学生における異文化接触に大きな影響を与えることを明らかにした。これは、日本語教師が異文化間コミュニケーション能力の獲得を目指す人材育成を行い、異文化接触の支援に当たる際、それらの情意的要素に関心を持つことを実践してみるのもよからう。

本研究において、中国の日本語専攻大学生には、異文化接触を道具的に捉える傾向が強いということが示されたが、その一方では、彼らが異文化接触を通して日本文化

に受容的な態度を生じさせ、それがさらなる接触の動機づけになることも確認した。これは、日本語教師が教室内での日本語学習において、日本語専攻大学生に対して日本文化に対する興味を高めるように工夫することの重要性を示唆している。

本研究はまた、日本語専攻大学生には、接触中に、対人コミュニケーション不安・特定の間や状況に対する不安・日本語によるコミュニケーションの不安・異なる文化による不安が存在することを確認した。それらの不安は、異文化接触の持続のみならず、異文化接触開始を阻害する可能性を持つことも十分考えられる。そのため、日本語教師には、それらの不安に注意を払い、さらに、不安の軽減や解消に役立つような支援を行うことが強く求められる。

さらに、本研究は、中国の日本語専攻大学生が、日本・日本文化に固定観念を持っており、そして、＜固定観念による文化摩擦＞にもっとも難しさを感じていることを明らかにした。そのような固定観念には、日中間の歴史問題によるものもあれば、文化的差異によるものもある。学習者の対日態度の形成には、教師が重要な役目を果たすため、中国人教師も日本人教師も、授業に臨んでいるときは、日本文化を客観的な態度で捉えることが欠かせない。また、日本語専攻大学生は、＜固定観念による文化摩擦＞において、接触相手に中国文化を見下ろされていると受け取る傾向があるため、日本語教師が、自文化に対して自信を持つことの重要性をアピールすることも必要である。また、本研究では、＜ポップカルチャーに起因するポジティブな観念＞が＜異文化接触における客観的な姿勢＞の形成に促進作用を持つことも明らかになっていることから、教室において、学習者の日本のポップカルチャーに対する興味を育てる工夫が為されるとよいであろう。

7.4 本研究の限界とこれからの研究課題

本研究は、「7.2」節で述べた研究の方向性や「7.3」節に挙げた中国の日本語教育の改善に向けての有益な示唆に独創的な側面を持つものの、諸所の制約に起因する限界と問題点を有するものでもあると認識している。それらの限界と問題点を、その解決に向けた今後の課題も含めて以下にまとめ、本研究の論述の最後とする。

まず、第5章において、日本語専攻大学生における異文化接触が、自身の【困難】と【努力と工夫】、および、接触相手の関与姿勢との相互作用によって成立したものであることが明らかにし、その＜接触に対する相手の関与姿勢＞は、日本語専攻大学生の直面している【困難】を増幅/低減させたり、【努力と工夫】を促進させたりさせなかったりするということのように作用すると結論付けた。しかし、その2点は、日本語専攻大学生の視点を中心に筆者の解釈を交えながら描いたものであるため、今後、その接触相手である、日本人の駐在員とその夫人や子ども、日本人教師、日本からの留学生などの視点を研究の視野に取り入れる必要がある。さらに、筆者が接触の現場に立ち入り、参与観察の手法を用いて、その

接触をトライアングレーションで掘り下げるような質的研究を行うことを今後の課題としたい。

次に、本研究は、中国遼寧省大連市にある大学の日本語専攻大学生を調査協力者にして行ったものであるが、それは、大連には在留する日本人が比較的多く、日本語専攻大学生が多様な接触のチャンスを持っていることを前提としたものであった。しかし、第5章で言及したように、中国に在留する日本人の数は、地域によって大きな差があるため、中国における日本語専攻大学生一般に適用できるような知見を得るためには、大連と異なる文脈で勉学・生活する調査協力者を対象に新たな調査を行うことが求められる。これも、今後の課題と考えている。

また、本研究は M-GTA を用いて、中国の日本語専攻大学生における異文化接触に関する理論を構築したのだが、筆者自身は研究者であると同時に、大学教師という教育実践者でもある。したがって、今後は、本研究により得られた知見に基づき、日本語教師として、日本語専攻大学生の異文化接触に対して実際の支援を行い、現場に貢献していく所存である。さらに、現場で応用したことで得られる結果を理論に反映させることで、理論のさらなる精製を行っていくつもりである。これこそが、筆者の最大、かつ最も長期にわたる課題になるであろう。今後も、研鑽を心がけたい。

参考文献

和文文献：

- 青木香代子（2018）「海外日本語教師アシスタント実習プログラムにおける異文化間能力 —日本人性に着目して—」『異文化間教育』47, pp.34-49
- 鮎戸弘（1970）『イメージの心理学』潮新書
- 池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子（2010）『社会心理学』有斐閣
- 石井敏（2001）「異文化間コミュニケーション能力とは何か —構造と構成要素のモデル化の試み—」『獨協大学外国語教育研究』19, pp.97-116
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編（1997）『異文化コミュニケーション・ハンドブック 基礎知識から応用・実践まで』有斐閣選書
- 殷梦茜・青木紀久代（2017）「在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』19, pp.49-59
- 閻立（1996）「日中異文化コミュニケーション摩擦の実証的研究 —中国における日系企業を中心として—」『異文化コミュニケーション研究』9, pp.91-110
- 王媛（2016）「異文化コミュニケーション能力に関する既存モデルの比較研究」『城西国際大学大学院紀要』5, pp.61-74
- 奥西有理・田中共子（2009）「多文化環境下における日本人大学生の異文化接触における対応：AUC-GS 学習モデルに基づく類型の探索」『多文化関係学』6, pp.53-68
- 奥西有理・田中共子（2010）「中国人ホストにおける日本人留学生との異文化接触 —AUC-GS 学習モデルに基づく異文化への認知と対応の整理—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』30, pp.65-79
- 温露（2012）「中国日系企業におけるコミュニケーションギャップに関する考察 —依頼、意見陳述、報告の場面を中心に—」
参照先：https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7_folder/symposium/pdf/10/02.pdf
- 片岡信之・三島倫八編著（1997）『アジア日系企業における異文化コミュニケーション』文真堂
- 片桐準二（2015）「文脈アプローチによる言語学習ビリーフの形成・変容過程の質的研究」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文
参照先：https://nagoya.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19803&item_no=1&page_id=28&block_id=27
- 葛文綺（2007）『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社
- 唐沢かおり（2006）『社会心理学』朝倉書店
- 河先俊子（2010）「日韓両文化に対する態度構築のプロセス —留学経験を持つ韓国人日本研究者の場合—」『異文化間教育』31, pp.76-89
- 吉沅洪（2001）「在中日本人留学生の異文化適応に関する研究 —ビリーフ・システムと自

- 我同一性の観点から一』『広島国際研究』7, pp.183-199
- 工藤和宏 (2003)「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力 —留学生の知覚に基づくモデル化の試み—」『ヒューマン・コミュニケーション研究』31, pp.15-34
- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 木下康仁 (2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」『富山大学看護学会誌』6(2), pp.1-10
- 倉八順子 (1998)『コミュニケーション中心の教授法と学習意欲』風間書房
- 金玉花 (2012)「中国の日本語専攻生における日本人のイメージ —大学入学前後のイメージ変化に着目する—」『日本語教育研究 (長沼スクール編)』58, pp.112-124
- 呉正培 (2008)「日本人イメージの形成に対する直接経験の影響 —韓国人大学生の場合—」『言語科学論集』12, pp.61-72
- 高希敏 (2013)「『中国における日中間異文化コミュニケーション』に関する研究現状について」『城西国際大学大学院紀要』2, pp.141-152
- 小林亮 (2010)「留学生の社会的アイデンティティと対日イメージとの関連について —ドイツ人留学生と中国人留学生の比較—」『異文化間教育』32, pp.64-79
- 小松翠 (2013)「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12, pp.71-86
- 斎藤耕二 (1993)「アカルチュレーションの心理学」中西晃 (編)『国際教育論』創友社
- 佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲 (2012)「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究—」『異文化間教育』35, pp.104-117
- 周宝玲 (2000)「中国における日系企業の異文化コミュニケーション」『立命館経営学』39(1), pp.265-298
- 周宝玲 (2003)「中日間の異文化経営と異文化コミュニケーション」『立命館経営学』42(3), pp.151-178
- 周宝玲 (2007)『日系企業が中国で成功する為に —異文化経営が直面する課題—』晃洋書房
- 瀬尾匡輝 (2011)「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化 —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る—」『日本学刊』14, pp.16-39
- 曹圭福 (2005)「日韓小学生間のチャット交流授業 —外国人に対する偏見の変容—」『異文化間教育』22, pp.95-109
- 田中共子 (2010)「異文化適応とソーシャルスキル」『日本語教育』146, pp.61-75
- 田中共子・中島美奈子 (2006)「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」『異文化間教育』24, pp.28-37
- 譚紅艷・今野裕之 (2012)「中国人留学生における日本人への信頼感と適応の関連」『青年心理学研究』24, pp.15-30

- 張勇 (2013)「日本語学習者の異文化態度に関する意識調査 ―日本語専攻の中国人大学生を対象に―」『日本語教育』154, pp.100-11
- 辻周吾 (2007)「中国日系企業に従事する日本人と中国人とのコミュニケーションに関する調査研究 ―注意喚起表現、依頼懇願指示表現、称賛表現、断り表現の特徴及び誤解や摩擦の解明をめぐって―」『日中対照言語学研究論文集 ―中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴―』彭飛編, 和泉書院, pp.453-482
- 辻周吾 (2011)「中国進出日系企業における日本語コミュニケーション教育：日本人駐在員の使用する「注意表現」、「指示表現」、「断り表現」、「称賛表現」の在り方」『スピーチコミュニケーション教育』24 (0) , pp.61-82
- 湯玉梅 (2004)「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究：対人行動上の困難の観点から」『国際文化研究紀要』10, pp.293-328
- 中島祥子・板倉ひろこ (2003)「日本語学習者と母語話者の異文化理解の形成 ―電子メールプロジェクトワークを通して―」『異文化間教育』17, pp.87-95
- 西岡麻衣子・八島智子 (2018)「異文化間能力の変容から見る異文化間協働学習の教育的効果 ―接触仮説とその発展理論の可能性―」『異文化間教育』47, pp.100-115
- 西田ひろ子 (2000)『人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション』創元社
- 西田ひろ子 (2007)『米国、中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦』風間書房
- 根橋玲子 (2003)「心理的要因」西田ひろ子 (編)『異文化間コミュニケーション入門』創元社, pp.101-131
- 班偉 (2004)「中国人留学生の異文化不適応と日本コンプレックス」『山陽論叢』11, pp.105-125
- 一二三朋子 (2008)「留学が中国人学生の文化的アイデンティティに与える影響に関する一考察：中国人留学生と中国本国の学生との比較を通して」『筑波大学地域研究』29, pp.101-111
- 本間理恵 (2012)「中国の日本語学習者の対日イメージとその情報源について ―中国浙江工業大学の学生を対象に―」『日本語教育論集』21, pp.50-57
- 松浦依子・宮崎玲子・福島青史 (2012)「異文化コミュニケーション能力のための教育とその教材化について ―ハンガリーの日本語教育教科書『できる』作成を例として―」『国際交流基金日本語教育紀要』8, pp.87-101
- 松尾知明・森茂岳雄 (2017)「異文化間能力を考える ―多様な視点から―」『異文化間教育』45, pp.19-33
- 松尾知明・森茂岳雄・工藤和宏 (2018)「異文化間能力を生かす ―実践に向けて―」『異文化間教育』47, pp.1-15
- 八島智子 (2004)『外国語コミュニケーションの情意と動機 研究と教育の視点』関西大学出版部

山岸みどり (1997) 「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11, pp.37-51
李洋陽 (2007) 「中国人の日本人イメージとその形成要因」東京大学社会情報学博士論文

中文文献：

鍾華・樊葳葳 (2013) 「中国大学生跨文化交際能力量具構建的理論枠架」『中国外語教育』3, pp.19-28
鍾華・白謙慧・樊葳葳 (2013) 「中国大学生跨文化交際能力自測量表構建的先導研究」『外語界』3, pp.47-56
修剛 (2008) 「中国高等学校日語教育的現状与展望 —以專業日語教学為中心」『日語学習与研究』5, pp.1-5
陳向明 (2004) 『旅居者和“外国人” —留美中国学生跨文化人際交往研究』教育科学出版社
文秋芳 (1999) 『英語口語測試与教学』上海外語教育出版社

英文文献：

Bandura, A. (1977) Self-Efficacy : toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review* 84, pp.191-215
Byram, M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*, New York: Multilingual Matters
Canal, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. Richards and R. Schmidt, (Eds.) *Language and communication*. London: Longman
Crooks, G., & Schmidt, R. W. (1991) Motivation: Reopening the research agenda, *Language Learning* 4, pp.469-512
Deardorff, D. K. (2004) The identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization at institutions of higher education in the United States.
参照先 : <http://120.52.51.15/www.jsps.go.jp/j-bilat/u-kokusen/seminar/pdf/h201104-sympo/rep016.pdf>
Dörnyei, Z. (1990) Conceptualizing motivation in foreign-language learning, *Language Learning* 40(1), pp.45-78
Dörnyei, Z. (1994) Motivation and motivating in the foreign language classroom, *Modern Language Journal* 78, pp.273-284
Eccles, J. S., & A. Wigfield. A. (1995) In the mind of the actor : The structure of adolescents' achievement task values and expectancy-related beliefs. *Personality and Social Psychology Bulletin* 21, pp.215-225
Fantini, A. E. (2009) Assessing Intercultural Competence: Issues and Tools, In D. K. Deardorff (2009), *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, SAGE Publications, pp.4

- Gardner, R. C. & Lambert, W. E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*, Rowley, MA: Newbury House
- Gardner, R. C. (1985) *Social psychology and second language learning :The role of attitudes and motivation*, London: Edward Arnold
- Kelman, H. C. (Ed.). (1965) *International behavior: A social-psychological analysis*, New York:Holt, Rinehart and Winston
- Lustig, M, & Koester, J. (1996). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures*. New York: HarperCollins
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. (1998) Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation, *Modern Language Journal* 82, pp.545-562
- Martin J. & Nakayama, T. (1997) *Intercultural communication in contexts*. Mountain View: CA: Mayfield
- Nishida, H. (1985) Japanese intercultural communication competence and cross-cultural adjustment, *International Journal of Intercultural Relations* 9, pp.247-269

参考資料

外務省領事局政策課 (2017) 『海外在留邦人数調査統計 (平成 30 年版)』外務省領事局政策課

参照先 : https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html

教育部高等学校教学指導委員会編 (2018) 『普通高等学校本科專業類教学質量国家標準』高等教育出版社

添付資料

(1) 中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自由

記述調査許可願い

私は城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻博士課程在学の高希敏と申します。現在「中国の日本語専攻大学生における異文化接触」について調査を実施しております。お忙しいところご迷惑をおかけいたしますが、調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

調査は自由記述によるものです。名前、性別、出身地、大学、学年、班、異文化接触の経験などを記述していただきますが、学会や論文の発表などで個人が特定されるようなことは一切ありません。また記入していただいた回答用紙は、調査者の指導にあたる教員と調査者以外は見ることはありません。記入していただいた回答用紙は、5年間保存させていただきます後、処分いたします。

何かご質問などありましたら、調査者へご連絡ください。

同時に、皆様が日本人と異文化接触する中で何か困ったことがあって、私と交流したいと思えば、どうぞご連絡ください。私の連絡先は xxxxxx です。

城西国際大学大学院人文科学研究科 比較文化専攻
高希敏

(2) 中国日本語専攻大学生における異文化接触の現状に関する自

由記述調査票

- ① 以下の調査票は中国語または日本語で記入してください。
- ② 質問3の表にある「接触の対象」に関して、もしあなたの接触する対象の日本人のタイプが違う場合は、そのタイプごとに記入してください。それに準じて「接触の場」以降の欄もそのタイプごとに記入してください。
- ③ 質問2で触れる異文化接触には、「日本人教師の授業」を含まないこととします。

〇〇〇〇年〇日〇日

名前_____ 性別_____ 年齢_____ 出身地_____
 大学_____ 学年_____ 班 _____

質問1 あなたは日本人教師の授業以外、日本人と接触したことがありますか。ご自身に当てはまる状況に「○」をつけてください。「あり」と回答した場合、質問2に進んでください。「なし」と回答した場合は、調査は終了します。

あり_____ なし_____

質問2 あなたの異文化接触は、今も続いていますか。「はい」か「いいえ」で回答したあとに、質問3に進んでください。

はい_____ いいえ_____

質問3 質問2で「はい」と回答した方：

接触の対象 (日本人駐在員/日本人主婦/日本人の子ども/ 日本人教師/日本人留学生/ その他___)	接触の場 (中国語教室/日系の 会社/翻訳会社/大学/日 本料理店/その他___)	接触期間 (__年__月~ __年__月)	接触頻度 (___回/週 ___時間/回)	接触の主な内容

--	--	--	--	--

注：「接触の主な内容」は例えば、「国際交流短期訪中団の日本人大学生と異文化交流をし、グループで日本のアニメや日本の若者文化について情報交換をした」、「中国語教室において日本人の主婦に中国語を教えて、中国での生活についていろいろと情報交換をした」のようにご記入ください。

質問2で「いいえ」と回答した方：

接触の対象 (日本人駐在員/日本人主婦/日本人の子ども/日本人教師/日本人留学生/その他___)	接触の場 (中国語教室/日系の会社/翻訳会社/大学/日本料理店/その他___)	接触期間 (__年__月~__年__月)	接触頻度 (___回/週 ___時間/回)	接触の主な内容

注：「接触の主な内容」は例えば、「国際交流短期訪中団の日本人大学生と異文化交流をし、グループで日本の漫画や日本の若者文化について情報交換をした」、「中国語教室において日本人の主婦に中国語を教えて、中国での生活についていろいろと情報交換をした」のようにご記入ください。

ご協力、まことにありがとうございました！

(3) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに関する

インタビュー調査許可願い

私は城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻博士課程在学の高希敏と申します。現在「中国の日本語専攻大学生における異文化接触」について調査を実施しております。お忙しいところご迷惑をおかけいたしますが、調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

調査はインタビューによるものです。名前、性別、出身地、大学、学年、班、異文化接触の経験などをインタビューしますが、学会や論文の発表などで個人が特定されるようなことは一切ありません。インタビューさせていただいた音声は、5年間保存させていただいた後、処分いたします。

何かご質問などありましたら、調査者へご連絡ください。

同時に、皆様が日本人と異文化接触する中で何か困ったことがあって、私と交流したいと思えば、どうぞご連絡ください。私の連絡先は xxxxxx です。

城西国際大学大学院人文科学研究科 比較文化専攻

高希敏

〇〇〇〇年〇日〇日

(4) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに関する

インタビュー調査の概要

- 1、日本人との異文化接触を持続しているか。持続しているのなら、なぜ持続しているか。持続していないのなら、原因は何か。
- 2、今までの日本人との異文化接触はどのように行ったか。
- 3、異文化接触の中で、困難があったか。あればどのような困難か、さらに解決したか。解決した場合はどのように解決したか/解決しなかった場合、どうしてか。
- 4、日本人と異文化接触する前後、自分に何の変化があったか。
- 5、日本人と異文化接触する時、自分に何か足りないところがあると思うか。

(5) 分析ワークシート：中国日本語専攻大学生における異文化接触 のプロセス

語りの引用の最初の部分に調査協力者の番号と逐語録のページ数を記入してある。語りの中に個人が特定できる情報がある場合、匿名化のため、調査対象者番号はすべて0とし、発言者を区別するためにアルファベットを割り振った。

例) No.1-2→調査協力者番号1番、逐語録2ページ

No.0-A1→調査協力者番号0番(=匿名化)学生Aの語り1

No.0-A2→調査協力者番号0番(=匿名化)学生Aの語り2

No.0-B1→調査協力者番号0番(=匿名化)学生Bの語り1

No.0-B2→調査協力者番号0番(=匿名化)学生Bの語り2

語りに出ている人名は「○○」で表記し、その他の固有名詞は「△△()」と表記し、その名称が国家名、地名、組織名などのいずれであるかを、筆者が()内で説明した。

例) ○○先生、△△(国家名⁵⁰)、△△(市名⁵¹)、△△(会社名⁵²)、△△(汉语教室名⁵³)。ただし、1つの語りに2つ、ないしは2つ以上の人名、国家名、地名、組織名などがあつた場合は、「○○A 老师⁵⁴、○○B 老师」、「△△A (会社名)、△△B (会社名)」のように区別して表記する。

具体例内の[]は筆者の補足、[I:]は筆者の発言を意味する。

⁵⁰ 日本語では「国名」である。

⁵¹ 日本語では「都市名」である。

⁵² 日本語では「会社名」である。

⁵³ 日本語では「中国語教室名」である。

⁵⁴ 日本語では「先生」である。

概念名 (1)	ツールとしての日本語のアウトプット欲求
定義	異文化接触で日本語をツールとして利用して日本語能力を向上させようとする欲求のこと。
具体例	<p>No.1-2</p> <p>后来还是觉得，嗯，既然想把这个语言作为一个以后长时间学的那种技能学下去，就是考试是一方面吧，还是应该其他的嗯，像是口语呀，交流呀，日常会话这种的，如何就是地道地表达日语，这些都挺重要的。毕竟可能你考得高，书本上的内容都会了，说不出来还是挺觉得挺不好意思的！那种困的时候也挺多的。</p> <p>No.2-6</p> <p>因为我觉得就是比如说咱们大三下学期没有课了，就大家肯定不能像老师看着你那个时候，每天都读课文啊，然后每天都说日语啊，每天都听日语，就是没有那个氛围了。然后还有就是我自制能力可能也不是太强，所以说我就是通过这个兼职，让我有机会每天可以说每天可以听，所以我觉得也是给我创造了一个学习的环境。</p> <p>No.2-6</p> <p>然后还有一点就是如果你不去交流不去说，就像我，你看谁平时都知道在早上说“おはよう”，中午说“こんにちは”，晚上说“こんばんは”。我和日本人见面明明是早上却说“こんばんは”！你就发现如果你不去实践的话还是不行。</p> <p>No.3-1</p> <p>就是说有这么个机会可以锻炼口语，又可以就是挣钱嘛，做兼职。</p> <p>類似例：</p> <p>No.3-3</p> <p>因为平时说的话没有人就是跟谁说，就感觉如果跟同学说，也是说那些基本的。嗯，跟老师说？也没有吧。[I：就是为什么不愿意跟老师讲呢？]跟老师讲有点害羞吧。</p> <p>[I：跟同学讲呢？]没什么可讲的。[I：哦，但是用中国话讲的话，还有好多话题的吧？]对对对，但是可能大家就是用日语聊天感觉好做作啊。因为没有人就是说我们直接拿日语聊天啊，不过我觉得其实用日语聊也挺好的，但是大家的日语水平都那样，聊的就是也都是没戏。</p> <p>No.3-14</p> <p>首先可以接触到日本人，我想多锻炼锻炼日语。</p> <p>No.3-18</p> <p>[I：想去汉语教室兼职的原因是？]想去锻炼，可以更多地用日语说话，平时用日语说话的机会比较少。</p> <p>No.4-14</p>

就是我觉得学校里学的当然是重要，但是需要有养分来辅助这个东西。[I: 这个养分是什么?] 就是课外的和日本人接触。

No.7-17

这学期上了一个月的课以后觉得有点惰性了。上课抓得也不是像原来一样有小考，觉得学习日语的主动性没原来好了。想通过一个方式让自己多接触日语。

No.8-1

想去试试看自己的日语水平。当时是大一下学期，我觉得自己学了将近一年了想去试一试。是锻炼一下自己，看看能不能在店里发挥一下自己的口语。现在不都说学校的学习是学好了笔上的，但是说话还是说不出来。

No.8-3

我其实不是很在乎能挣多少，是锻炼，体验过程。

No.8-5

如果我口语水平够的话，我有时候会跟他们搭两句话。

No.9-9,10

学外语嘛，就是我们最后是要跟外国人说话的，然后你不只是要学语言吧，你要学他的各种方面，他是怎么想的，他是怎么认为的，就这方面，跟在说话过程中，我觉得都能得到体现，然后我们，嗯，学日语嘛，怎么说最后不是进日企啊，要不然可能会去日本。现在我觉得就是应该做好这些准备。然后跨文化交流吧，就这也是外语学习者一个必备的能力吧。我觉得这是。如果你不知道交流，都不知道怎么去交流，怎么去跟外国人打交道的話，那这个就算你那个外语学得有多好，你也是不行的呀，所以现在找日本人说话呀，也不算刻意，就是去找打工啊，那样也是想现在就开始锻炼这种能力吧。

No.12-8

毕竟是学这个就是能多说一点，其实还是多说一点的好。

No.13-2

大二的时候就觉着自己是这个专业，然后，但是如果说不出去，就觉着跟别人交流，就是如果说我是日语专业，我会语法，但是我不会说就感觉好丢人，然后就觉着，嗯，还是去练。

No.13-4

因为是专业，所以我觉得我特别想说得好，这口语能练好，然后就是为了口语好，所以你需要词汇量大，然后你不能一说话就全是错。

No.13-4

我觉得就是一直都是为了自己，就是真的是能，就是不说出去自己是这个专业的，不让别人就是觉得很害羞的那种，就是能特别堂堂正正，说我就是专业的学生，说出来就是和别人不一样。

No.14-3

	<p>也想接触，想看看自己和日本人交往的过程中自己的日语能力到底是什么水平，而且也可以在交流中纠正那些没被老师点出来的问题。</p> <p>No.18-1</p> <p>我认为是多练多听吧，找一个练习的环境来和日本人交流来练习日语口语，感觉有些东西真的不用的话就不会，学了的话还是需要一个环境。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ “还是应该其他的嗯，像是口语呀，交流呀，日常会话这种的，如何就是地道地表达日语，这些都挺重要的。(No.1-2)” →日本語をアウトプットすることが重要である。異文化接触を通して、コミュニケーションしたい、日本語らしい日本語を話したいなどという意欲が見られる。 ・ “就是考试是一方面吧，还是应该其他的嗯，像是口语呀，交流呀，日常会话这种的，如何就是地道地表达日语，这些都挺重要的。”(No.1-2) →「試験が重要だ」と思う学習者がいないか？→いる。異文化接触を開始しないこと・<価値づけによる消極的な接触姿勢>・<学業重視による接触の一時的放棄>に繋がっていく。 ・ “所以说我就是通过这个兼职，让我有机会每天可以说每天可以听，所以我觉得也是给我创造了一个学习的环境。”(No.2-6) →異文化接触は、アウトプットできる。日本語学習の環境が作れるのである。それは、基本的に異文化接触を日本語能力の向上のための手段として見ているということである。 ・ “然后还有一点就是如果你不去交流不去说，就像我，你看谁平时都知道在早上说‘おはよう’，中午说‘こんにちは’，晚上说‘こんばんは’。我和日本人见面明明是早上却说‘こんばんは’！你就发现如果你不去实践的话还是不行。”(No.2-6) →実際の異文化接触となると、緊張や不安で間違えてしまうことになりかねないため、日本語をアウトプットし、実践する必要があるということである。 ・ No.3-3→日本語教師とでは恥ずかしく、クラスメートとではレベルが同じであるため、能力が上がらないし、わざわざ日本語で話し合うのもおかしい。話すチャンスを作ろうと思っても、なかなかそれができずに悩んでいる。日本語をアウトプットする欲求が強く見られる。また、接触の場づくりに対する支援が求められることも窺える。 ・ 協力者「No.13」に「専攻大学生」として相応の日本語能力を持たなければ恥ずかしいという意識が窺える。それが日本語をアウトプットする欲求に繋がったのである。

概念名 (2)	ツールとしての日本語の活用による目的達成
定義	日本語を、目的を達成するためのツールとして利用すること。目的の主な内容は、視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などである。
具体例	<p>No.3-1 就是说有这么个机会可以锻炼口语，又可以就是挣钱嘛，做兼职。</p> <p>No.3-3 平时周末也没有什么事情干，然后觉得可以看看外面的世界。</p> <p>No.3-14 首先可以接触到日本人，我想多锻炼锻炼日语。在与他们接触交流过程中可以感知不同文化的差异，会很有意思。</p> <p>No.4-1 就觉得多点零花钱挺好的。大家都去兼职了，我们寝室那个时候几个人一起就都兼职，就凑个热闹也去了。</p> <p>No.4-8 觉得自己既然学了这个东西，然后又想接触社会，那么不如利用自己的专业去找相关的东西。嗯，然后就这样一点一点积累起来，然后你能得到的机会也越来越多。</p> <p>No.4-8 因为我觉得作为一个大学生的话，嗯，不应该只在学校里，它是一个过渡期，然后，嗯，还是应该多接触一些别的东西。</p> <p>No.4-15 [I:你为什么跟日本人接触?]我觉得首先是我想往接触社会上动，其次呢，是我想锻炼自己的专业。嗯，然后是钱。</p> <p>No.4-15 我要丰富自己的生活，我觉得要天天呆在一个地方，我觉得很无聊，我要把自己的生活弄得很有意思一点。</p> <p>No.4-16 首先是能利用自己专业，我会日语，我可以去做这个事儿。嗯，然后可以赚钱，嗯嗯然后还可以就是学习很忙，那时候就白天课很多，嗯，白天上课之后，嗯下午可能7点到10点，我在那我没有把它当做是兼职，我是把它当做我自己去放松自己了。</p> <p>No.5-4 因为是时间比较充裕，然后想挣点钱。然后就是觉得自己是日语系的嘛，就是说去</p>

	<p>日料店打工吧，挺合适自己的。</p> <p>No.7-2</p> <p>然后当时去的时候，就是单纯地说弄点零花钱。然后想着要是能跟日本人交流就更好了。(略)。</p> <p>No.8-5</p> <p>料理店的话，我比较喜欢他们的美食，我觉得比教日本人说汉语更丰富一点，我可以接触不一样的人，很多很多日本人。如果我口语水平够的话，我有时候会跟他们搭两句话。</p> <p>No.11-3</p> <p>我觉得跟他们联系能听到地道的日语。我之前都没怎么见过外国人。来这个学校之后见得越来越多，也挺新奇的。</p> <p>No.15-5</p> <p>我喜欢做音乐的人，还有就是那个在网上YouTube我不知道中文怎么说，他们都用推特。我也就跟过去了。</p> <p>No.15-7</p> <p>我当时为啥想去呢，我当时一个是觉得这个也算是一种锻炼，我觉得这个确实是对我的水平是一种锻炼，另外一个也算是一种实际经验，然后还有一个就是还能挣点钱。</p> <p>No.17-3</p> <p>我的第一志愿是△△大学的对外汉语专业，就当时的志向是要教外国人学汉语，但是呢，因为阴差阳错就上这来了。上这来了之后，当时就是每次开一门新的课程，从大一开始自我介绍的时候，我都是会直接明确地说我的人生理想，就是教外国人学汉语。</p> <p>No.17-4</p> <p>对外汉语好像挺有意思的哈，既能和外国人交流又能传播中国文化，好我就想干这个了，就是这么一个思路啊。我学了日语之后就觉得利用日语教日本人学汉语也挺好的，所以就觉得还不错。然后我就跟很多人说我当时报的是对外汉语，然后现在学日语，就是为了以后用日语教日本人学汉语。我就一直都是这么说的。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ <ツールとしての日本語の活用による目的達成>には、2つの特徴がある。1つは、日本語をツールとして活用することである。もう1つは、日本語を用いた異文化接触を通して目的を達成することである。 ・ No.3-1→異文化接触の目的は、資産形成である。日本語を利用してアルバイトする。 ・ No.3-3→異文化接触の目的は、視野の拡大である。外の世界を見る。 ・ No.3-14→異文化接触の目的は、視野の拡大か、日本に関する知識の獲得であ

る。

・ No.4-8→異文化接触の目的は、社会経験の蓄積である。

・ No.4-15→異文化接触の目的は、生活の充実である。

・ No.8-5→異文化接触の目的は、趣味の楽しみである。

・ “首先可以接触到日本人，我想多锻炼锻炼日语。在与他们接触交流过程中可以感知不同文化的差异，会很有意思。”（No.3-14）、“料理店的话，我比较喜欢他们的美食，我觉得比教日本人说汉语更丰富一点，我可以接触不一样的人，很多很多日本人。如果我口语水平够的话，我有时候会跟他们搭两句话。”（No.8-5）

→日本語を利用して異なる文化における相違点を知る。GardnerやLambertら（Gardner & Lambert,1972）は、第二言語学習の動機づけは「統合的志向(Integrative Orientation)」と「道具的志向 (Instrumental Orientation)」があると論じている。

「統合的志向」とは、学習者が目標言語話者の文化、言語、その言語集団などをもっと知り、自分もその集団の中に溶け込みたいという動機づけであるのに対して、「道具的志向」とは、ある目的を達するための道具的、実用的なものである。

Dörnyei（1990）は、目標言語文化とは空間的に隔てられ、日常的に目標言語話者との接触が少ない外国語学習の状況では、むしろ道具的動機づけの方がより重要であると主張した。中国における日本語専攻大学生の場合、日本語をツールとして日本文化に近づくという志向を持っているが、それが日本語を鍛えるという道具的目的といつも並行して持たれている。Dörnyei（1990）の研究を支持している。

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (3)	他者による接触意欲への刺激
定義	同級生の異文化接触の開始や効果に接触意欲を刺激、触発されること。
具体例	<p>No.2-6 像我同学她大一下学期好像就出去教课,所以后来她的水平到大三的时候明显提高了好多。包括说也噯里啪啦,她就一个劲儿地说,特别厉害呀,听也是特别厉害。然后我觉得跟她做这个兼职有很大的关系。</p> <p>No.3-3,4 ○○老师就是推荐我们班上同学去了△△[汉语教室]。[I:你看到他们去当时你是怎么想的?]因为他们的学习比较好嘛,他们去我们也能去啊,为什么我们不能去呢?因为学习成绩只是一个书面的一种测评,我觉得口语方面大家都是也差不多,我感觉。</p> <p>No.4-1 就觉得多点零花钱挺好的。大家都去兼职了,我们寝室那个时候几个人一起就都兼职,就凑个热闹也去了。</p> <p>No.19-8 最开始大家都去做兼职了,我就觉得要不然我也去做吧。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・「他者」はクラスメートや、他のクラスの同級生を指していることが多い。クラスメートも広義的同級生であるため、定義するとき、「他者」は同級生を指すものと提示した。 ・“说也噯里啪啦,她就一个劲儿地说,特别厉害呀,听也是特别厉害。然后我觉得跟她做这个兼职有很大的关系”(No.2-6)→クラスメートの異文化接触の効果に接触意欲を触発された例である。“说也噯里啪啦,她就一个劲儿地说,特别厉害呀,听也是特别厉害。”→日本語の話す能力と聞く能力は、異文化接触を通してもっとも鍛えられ、そして顕在化しやすいという側面があるため、このような他者の成功例は、日本語をアウトプットしたいという欲求を持っている学習者に刺激を与えやすいと考えられる。こういう面から、＜ツールとしての日本語のアウトプット欲求＞は、＜他者による接触意欲への刺激＞に影響を与えることが判明した。 ・No.3-3,4→日本人教師が、日本語能力の高いクラスメートに中国語教室でアルバイトするチャンスを推薦したのを見て、刺激された例である。 ・No.4-1→ルームメートによる異文化接触の開始に刺激され、自分もそれにならって異文化接触を開始した例である。

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (4)	日本人の友人獲得の欲求
定義	異文化接触を通して、日本人の友人を作って交流したいという欲求。
具体例	<p>No.5-6</p> <p>因为〇〇老师是刚来大连嘛，对大连也不熟悉，她也想逛一逛大连，然后我们说也和老师认识认识就一块出去了。</p> <p>類似例：</p> <p>No.17-11</p> <p>就是刚才说那个非要带外教去看我们舞蹈演出的，那个她就很积极地喜欢和日本人交流。</p>
理論的メモ	<p>・この欲求は、興味や関心や類似点に基づいた友人関係を求めることであり、＜ツールとしての日本語の活用による目的達成＞と比べて、日本語の媒介語としての役割、目的遂行の実用性より、友人が作れて楽しいという統合的、かつ情意的一面が強い。</p>

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (5)	人的リソースの利用
定義	教師や友人から接触の機会を紹介してもらうことや、日本人教師・日本人留学生・偶然遭遇した日本人などとの接触チャンスを利用すること。
具体例	<p>No.1-2 这个兼职也是○○开始的，她有一个面试机会，她可能挺忙的，然后她就让我去了。</p> <p>No.1-2 当时我之前因为她们已经开始做这个兼职了，我也就说如果有机会的话，嗯，你们要是告诉我，我也想去，所以她就留意了就告诉我了。</p> <p>類似例： No.1-14 当时我们班同学我都问过，就是你去不去啊什么的。</p> <p>No.1-17 当时那个学校想找一个教日本小孩英语的老师，○○那时候已经在△△(汉语教室)教课了，我想着教英语也是锻炼，就去面试了。</p> <p>No.2-1 那个时候就是同学们都去那，然后就说那挺好的挺好的，就是○○，是哪个班的来着，然后她在那块做兼职，她说这个挺好的，你可以去试试。</p> <p>No.2-2 我参加了△△社团。是通过○○○ [同学名] 接触到的。就是一个负责和外国留学生交流的社团。</p> <p>No.2-20 后来○○给我介绍一个日本女留学生，(略)。</p> <p>類似例： No.3-3 但是就是现在我们那个地方从大二学生中招老师，我也跟好多人说，(略)。</p> <p>No.5-6 我是后来是因为○老师还有一个他认识那个△△，就是有另外一家机构，然后我去那边面试然后面试之后通过，然后△△是可以接受男生的。</p> <p>No.7-1 [I: 然后你找别的同学介绍的吗?] 嗯，找的○○○介绍的。[I: 你和她很熟吗?] 还好，我们寝室离的很近，有时候有走动。</p> <p>No.10-1 然后两个月前，○○老师 [日本老师] 给我介绍了个兼职，是教日本人汉语。再就</p>

是在微信上，有和日本人聊天，好像是老师的朋友，是他加我的，有时候就聊一下。

No.10-7

其他的日本人是被○○老师推荐参加大连马拉松认识的。

No.11-2

大一的时候进了○○老师的日语强化班，每周都要参加老师的课，强化班结束之后由于和老师建立了很好的关系，就经常和老师沟通，老师也愿意和我们接触，而且老师还经常带我们参加一些活动，介绍日本人日本人给我们认识。

No.12-6,7

[I: 你说的那个留学生，你们是怎么建立联系的呢?] 也没有，其实也没有联系，就是偶尔能在晨读的时候碰到，然后简单的交流。

No.13-2

然后因为我们学校大二的时候是有一个日语的强化班，是外教组织起来的，然后我也去参加，然后也是跟外教的接触的机会也比较多，(略)。

No.13-5

然后就是前段时间也是○○○老师介绍了一个留学生，(略)。

類似例：

No.15-4

○○他好像是在便利店打过工，他说他在便利店，然后那个日本人过来买东西，然后他看了一眼就说：“あなたが日本人ですか”，然后他俩就认识了，然后接着介绍我认识。

No.15-6

然后○○老师就说我们有△△大学的留学生，这次好像也想参加这个日语角，可以把他们带过来。然后我们就协商了一下，(略)。

No.16-6

我觉得老师这边相对来说会多一些，最开始的时候不会，等到后来我们会主动跟老师去提，有没有什么留学生啊，今年派了几个人啊，这样的。我们主动去认识一下。

No.16-6

老师说大二以后可以适当地跟日本人聊一聊。我们的一个外教，在他给我们上最后几节课的时候，特别安排了一节课，找了几个日本的留学生来跟我们来交流一下。

No.16-7

但是我们学校日本留学生的数量不是很多，大概每年有那么几个人，可能也就十个八个那样，就尝试跟他们联系一下。有的时候会通过我们这边的外教，或者是通过我们专业的老师去联系外教。主要还是从老师这边来，不一定是外教，是老师都可以。

No.17-3

所以后来也是一个老师就跟我说，他有一个这个关系，意思就是有这样一个教汉语

	<p>的机会，问我想不想去，于是我就去了。嗯，就是这样的一个契机。</p> <p>No.17-11</p> <p>嗯，然后她也很喜欢○○老师，○○老师最开始是想给她介绍，然后她就说唉呀那个○○想当汉语老师就带着她一块去吧，于是我们俩一块去面试了，结果她没面上我面上了，桥段就很香港的那个星探经常发生的桥段。</p> <p>No.20-3</p> <p>通过就是有一个社交软件，但是就是那个社交软件里面有很多就是日本人，然后可以就是和他们聊天。[I:你是怎么知道这个软件的呢?]是沈阳的哪个学校的朋友，他有一次就发个朋友圈，然后我就问他这是什么东西，然后他就告诉我了啊。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・No.1-14→異文化接触を開始した学習者が、まだ開始していない学習者にチャンスを紹介するというケースである。異文化接触のチャンスは、人的リソースを利用して獲得できることがわかった。 ・No.20-3→友人の紹介によってSNSで接触チャンスを得たという例である。SNSの活用を重視する必要がある。日本人と直接にコミュニケーションできるアプリケーションが開発されるに従い、SNSが異文化接触のチャンスとして活用できる。しかし、どのようなアプリケーションが利用できるかなどの情報を得る必要がある。これは、<人的リソースの利用>や<情動的リソースの利用>によるところが大きい。さらに、日本語教師には、それを把握し、学習者に提示する支援が求められる。 ・すでに異文化接触をしている友人に依頼して、同じ種類の接触のチャンスを紹介してもらうことでチャンスを獲得する例もあれば、No.10-1のように、日本人のネットワーク、および日本人に関する情報を持っている日本人教師、中国人の日本語教師に異文化接触のチャンスを紹介してもらう例もある。 ・No.11-2、No.12-6,7→日本人教師、留学生との出会いを生かして、それを積極的に利用する例である。

概念名 (6)	情報的リソースの利用
定義	大学の国際交流活動、部活、日本語コーナー、インターンシップなどのような学校や学部レベルで行われる日本人との接触活動の情報、および、インターネット、日本人向けの雑誌（ホテルやレストランに無料で配布され、日本人に中国での生活情報を提供するもの）などから得た情報を利用すること。
具体例	<p>No.7-3 就是在一个学校有那种兼职群，QQ群，它会发，就是哪个哪个店招兼职，然后让我们自己去联系，有电话。</p> <p>No.11-3 最近我还找到那个大连市剑委会，决定10月份开始跟他们联系。[I:你是怎么获得剑委会的信息的呢?] 剑委会我是在那个饭店门口放的那种免费资料上看到的，就是那种提供一些日本人在中国生活时需要的信息的那种。</p> <p>類似例： No.13-5 我觉得如果没有的话，我可能就会去日韩角之类的地方。</p> <p>No.15-4,5 我还有在网上用推特之类的跟那个日本人聊天。(中略)。我喜欢的做音乐的人，还有就是那个在网上YouTube，我不知道中文怎么说，他们都用推特。我也就跟进去了。</p> <p>No.17-1 我从大二下学期开始，有一个像学伴似的这种。因为我们学校也有那种国际交流学院，各个国家学生过来学汉语那种的。然后呢就几乎是同龄的一个日本的小姑娘，这样的学伴。[I:你是怎么找到她的?] 就是自己去国际交流学院然后去问留学生。</p> <p>No.17-1 在大二的2、3月份，那应该是下学期马上就要开学的时候，就学了一年半的时候，然后就是那个交换访问团，就一周。然后我们中国的学生和日本学生一起交流。嗯，然后是我们学校在我们大二的时候，来了一拨日本学生，好像是〇〇大学的，我不太确定，有点忘了，嗯，但他们也就呆了一周，他们就回去了，他们也是一个访问团。可能有10来个20来个学生这样的。[I:你是怎么获取这些信息的?] 就是学校说来了访问团，让我们日语专业的学生去交流、接待一下。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.7-3→SNSを通して接触チャンスに関する情報を得る。 ・ No.11-3→日本人向けの雑誌（ホテルやレストランに無料で配布され、日本人に中国での生活情報を提供するもの）から異文化接触チャンスに関する情報を得

	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none">・ No.13-5→協力者「No.13」は、「日本語強化班」を通して日本人教師とのプライベートな接触を始めたが、もしそのようなチャンスがなければ、「日本語コーナー」に行っていたという。中国では、「日本語コーナー」は、大抵日本語学部によって設けられるものであり、これも情報的リソースと言える。・ No.7-3 はSNSを、情報を取る手段として利用しているのに対して、No.15-4,5 はSNSを、異文化接触をする手段として利用する。SNSの利用方法は異なるが、その活用のしかたは日本語教育にとって示唆に富む。・ No.17-1→大学から国際交流に関する情報を得、それを利用する。
--	---

概念名 (7)	コミュニケーションの困難
定義	言語技能の話す能力、聞く能力の未発達による伝達不全に陥る困難のことであり、日本語能力に自信のないことや正しい日本語への固執による不安など教室内の日本語学習からの影響で困難を感じるものの他に、方言や幼児言語などのような学習経験のない言葉づかいに遭遇して伝達不全に陥る問題も含まれる。
具体例	<p>No.1-3 一开始刚学的时候我也没有那个日语基础，啊，然后就对自己发音可能有不自信的情况，就是不管什么条件不太敢说就是那样。</p> <p>No.1-4 可能我有的时候说得多，他还不懂的这种情况也有。</p> <p>No.1-4 [I: 在跨文化接触中你有什么困难?] 嗯，我感觉我的日语其实基础还是不太好。嗯，就是好多之前我大一大二吧，就是书本上记得不是特别准确啊，就是可能多数还是靠感觉，觉得这个不太好。我去日本还是应该就是学一下，就是好好的，就是不能说我这个意思懂就行，还是应该按照那个正确的语法呀，那种地道那种。</p> <p>No.1-5 还是都能看懂，听也能听懂，还是自己表达的时候感觉差点儿。(中略)。就是好像还应该提高点儿质量。(中略)。就是好像一直也有这个意识，一直就觉得不太准确，自己用的话不太准成儿。嗯，而且用错的情况还挺多的。</p> <p>対極例： No.1-11 还是可能是因为中国人你跟他语言相通吧。</p> <p>No.2-1 就是刚开始的时候紧张，就特别简单的日语你都可能说错。</p> <p>No.2-20 用我当时笨拙的日语。当时特别尴尬，两个月我都没说出来[日语]。一些“日期”[日语中的“日期”的说法]我就更蒙了。我觉得我当时很不自信。</p> <p>No.2-20 我就总怕听不懂。然后我就真的听不懂。</p> <p>No.3-2 嗯，还有的就是比如说关西那边京都和大阪这块人说话我有点听不懂。</p> <p>対極例： No.3-3</p>

但是就是现在我们那个地方从大二学生中招老师，我也跟好多人说，他们就觉得唉呀我的日语不好啊，我不敢去，我说没事，我当时也都是不会，也不知道怎么说，后来慢慢习惯了。

No.3-4

比如说就是像和日本人，假如说聊天的话哈，有一些就是真的就是说不出来，卡住了。

No.3-10

我教过一个，嗯，他 30 多岁，挺年轻的。嗯，对，是京都的，好像是。他说关西方言，然后老是那些词，我听不懂，我一查原来是方言，是关西方言。

No.3-11

还有一个就是给小孩上课，有的时候就是他们说的是小孩式的语言，有的时候感觉和我们说的学的不太一样，有一点点差别，就是和他们说话的时候他们不太明白。这时候他妈妈过来帮忙解答一下。

No.4-13

就感觉自己的日语水平还是不够，嗯，有很多时候想表达的可能是没有表达得很好。

No.5-7,8

[I: 啊，那你原来的时候觉得紧张拘束主要是怕什么呢？] 主要怕自己可能日语说不好啊，或者哪一个表达有错误啊听不懂啊，或者造成尴尬呀。

No.5-8

我说日语就想用日语给他翻译，但是我觉得这个怎么翻译都翻译得不对。然后可能双方都有点尴尬。

No.5-8

困难可能是有的时候我刚开始去吧，就比较紧张，有时候就是感觉这个表达我翻来覆去说不明白，我比较尴尬。

No.5-10

就是有的时候可能嗯，因为和日本人交流，就是他和我们关系很融洽，就有的时候想表达一些东西还是表达不出来，就是我和中国人交往，我们开玩笑啊，或者说点什么我都能说得出来，但是和他们的话嗯，脑袋里面想的很多，然后想说很多，但是有时候表达不出来，这样的。

No.5-15

那就是因为不自信，所以就强度不太高，不太敢。觉得唉呀我还没学到那个水平我去和日本人说话我能说得了吗，这种感觉。

对極例：

No.5-16

[I: 跟中国人交流，就是你是主要是觉得有啥能说啥这样的？] 是，我就觉得唉呀和中国人就比较放得开，就是和他说话啥都能说明白，跟日本人说有的说不明白，

我说唉呀就不太不太嗯 [满意]。

No.7-9

我没办法就是很流利地讲出一句话，我只能说只言片语的，然后回答他。

No.7-9

就是感觉他们说话挺快的，有点跟不上，然后感觉就是……（中略）。嗯，他俩 [2名日本老师] 说话挺清晰的，外教说话还是挺清晰的，但是正常跟别的日本人说就 [不行]。就是外教自己也说了，他说你很少能看到像我们一样讲日语这么清晰的人，就是你们遇到别的日本人对话，你就会发现他说话你有点听不懂，就有点含糊那种。

No.7-10

可能有点不太自信吧，就是口语不太好，其实。[I：不自信就是因为觉得口语不太好？] 啊，觉得可能人家说的我听懂了，但是我不知道怎么跟他交流，就是因为自己的口语没到位，然后感觉交流会有困难。

No.7-18

也是没词，也是紧张脑袋空白。最怕听不懂，有的人吐字清晰还好，有的人不是年龄大就是口齿不清的感觉。就经常听不懂就很可怕。

No.8-1

我刚去的时候真的是说不出来，只会说欢迎光临。在客人点单的时候，可能他说的话是会话课学过的内容，但是他一说我瞬间懵了，完全反应不过来。再加上日本人本身语速也快，在学校外教跟我们说日语的时候语速是尽量放慢，而且发音、吐字特别清晰。但是在日料店的日本人，尤其在点单的时候，本来菜的名字是专有名词，我当时还没有完全记下来，在点菜的时候，虽然很少让我点菜，但是我有在旁边听，不是很能听懂。

類似例：

No.9-10

就是只有在课堂上学到了那些基础的，才能做到跟日本人交流吧。

No.10-5

就是有过双方不太理解的时候，我得好好想想怎么表达，因为我词汇量不够。

No.11-7

现在听反正大概八九不离十。然后说的还是语速慢，有时候也挺结巴。现在说的时候还是会有一点紧张，有时候出口也不成章的。

No.12-8

就是可能还是有点不好意思，不好意思，嗯，因为能力比较差，然后交流，估计障碍也会挺大的。噢，就越来越往后退缩。

No.13-5

所以就是交流的时候，我就觉得啊，如果说有什么话就特别失礼的话，就感觉特别

不好意思。

No.13-7

好多时候就是想真的是想没有障碍的去交流，不要用那种零零散散的句子去交流，我觉得就是，嗯，还有很长的路啊。

No.13-7

但是如果真要跟那种完全不认识的日本人来说，来沟通的话，其实真的是有障碍，比如说我们有一次上老师的课的时候，老师有叫留学生来，就是属于给我们指导吧。然后留学生会有提问环节，然后留学生在提问的时候就感觉嗯怎么说呢？就是大家的感受就是我们都在下面都在讨论，就是说感觉他们只能听到一个句尾，然后句子就已经结束了。然后我们都就完全不知道他们到底在说啥，所以如果真的是到了日本那种环境的话，可能沟通真的是有问题。

No.13-8

说完话以后我可能我自己会琢磨，事后我会琢磨，反正就是想想一想我这个话到底说的有没有问题，后来恍恍惚惚，然后觉得啊，应该是说错了这样的，然后以后再去改。

No.14-1

第一是单词量不足。第二是听力不好。所以有时可能对方说得太快或者说的有些词是我不知道的话就会不知道怎样去反应。

No.14-3

最大可能还是语言上的吧，因为毕竟和中国人交谈没有语言上的困难。

No.14-4

包括之前运动会上和日本老师的交谈也只是局限于赛场上同学们的比赛以及老师所教过的学姐之类的，所以感觉当时差不多可以应付的，不会的地方再用其他的词语解释一下就可以。但是还是与中国人交流有差别，毕竟日语不是自己的母语，自己的词汇量、听力、口语上的不足等等也有一些困难。

No.15-8

基本都紧张在我本身交流能力比较差，不知道怎么说。

No.15-12

需要改善的方面，我觉得应该是语言的组织能力，我一着急就只能蹦出单词。

No.15-12

就是有的时候，你说几个词什么的，他也能明白什么意思，所以就勉强能沟通过来，但是我觉得以后继续交流的话还是得改一下。

No.16-2

因为我们的外教在上课的时候不会讲特别复杂的话，但是他课后去跟我交流的话，能感觉到他是在让我听明白，特别是大二之前的时候。他是会让我听明白他讲的这个话是什么意思，然后再去跟我进行沟通。到大三以后再去跟他们聊，他们就会把

语速给提高一些。按听懂的话，我一直没有太多的问题，但是怎么样去回答很困扰我。我们讲的日语正常情况下外教肯定是能听明白的，但是有一些地方我们的说法是不对的，或者说是很不自然的，一听就是外国人在说日语。在外教这方面，听力没有太多的负面的反馈，我主要是口语的问题，觉得自己有一些东西还没有表达明白。

No.16-5

还不能太表达清楚，但是如果是日本人向我去提一些问题，除了个别的词之外，能听懂。

No.16-6

求职之后，和职场上的日本人有了一些简单的交流。刚开始去的时候，他对日语的要求不会太多，会讲差不多就行，这方面的要求相对来讲比较低。但是能够感觉出来他们那边更侧重日语实用性，或者是更接近那种工作方面的日语。用词什么的，就跟平时与留学生交流，或者跟日本的老师交流有一些区别，可能措辞方面需要注意的东西就会多一点。

No.16-9

其实有的时候是自己不会说，不是说他那边要求的太复杂。

No.17-2

当时我觉得最大的干扰就是这个，比如说今天吃炒茄子，茄子我不会说。可能课文里学的都是那种，虽然也都是日常交流的用语，但没有详细到各种蔬菜怎么怎么叫啊，就顶多可能知道苹果、香蕉这些。你真要问我黄瓜怎么说什么金针菇怎么说，茄子怎么说那我就不会了。嗯，有时候中国的菜名你想再翻译过去有时候也挺费劲的，然后西红柿炒蛋这个很好翻，一个是番茄トマト、卵这个就行了，你给你来个什么夫妻肺片那样的，酸菜鱼的就真的就蒙圈了，就解释不了。那酸菜鱼的话也是难。

No.18-1

口语的话可以交流，但要是想再上一层的话还是需要更加努力的。可以交流，但是在一些场合说日语啊，比如敬语什么的，还是需要更加努力。

No.18-1

开始的时候就觉得自己口语可烂了，第一次去上课（汉语教室）特别紧张。

No.18-8

其实我觉得表达方面还是不太好，有的时候我表达出来的和他们说出来的还是不一样，可能是我的逻辑问题，有些问题以他们说出来就会很简单，但是以我要是说出来的话，就会啰嗦一大堆。

No.19-1

也不知道什么时候才能达到心里想要的那种能够自然交流的那种感觉。比如说和正常的日本人交流的时候，他不把我当成中国人，就是用外国人交流的那种交流方式来与我交流的时候我能够听懂，并且能有正常的回应，大概是这样。

	<p>No.19-9</p> <p>我发现就是嗯，怎么说呢，就是，嗯，可能让我在这想一会儿再说，说出去的话会更安全，然后直接这种你一句我一句的这种压力，然后我就想表达这个意思，用别的话表达不出来的时候就遇到困难了。(中略)。但是对方的语速过快的话还是有问题的啊。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・“然后就对自己发音可能有不自信的情况，就是不管什么条件不太敢说就是那样”(No.1-3) → 発音が良くないと自己認識し、日本語能力に自信がない。 ・“嗯，就是好多之前我大一大二吧，就是书本上记得不是特别准确啊，就是我可能多数还是靠感觉，觉得这个不太好。”(No.1-4) → 正しい日本語に対する固執による不安である。正しい日本語を求めることは日本語能力の向上に有意義であるが、しかし、求めすぎるとコミュニケーションの不安を引き起こすこともあり得る。 ・対極例：“还是可能是因为中国人你跟他语言相通吧”(No.1-11) → 中国人とは言葉が通じるため、難しくないという。反対のほうから言えば、日本人と接触する場合、言葉が通じないため、難しいのである。言語技能の未発達による困難である → <コミュニケーションの困難>。 ・No.2-20 → 日本語能力に自信のないことによる困難である。 ・No.3-2、No.3-10 → 方言という学習経験のない言葉づかいに遭遇して、伝達不全に陥る困難である。 ・No.3-11 → 幼児言語という学習経験のない言葉づかいに遭遇して、伝達不全に陥る困難である。 ・No.5-8 → 話す能力の未発達により伝達不全に陥る困難である。 ・No.7-9、No.8-1 → ティーチャートークに起因する聞く困難である。相手の話すスピードが速い、発音がはっきりしていないからである。日本人教師が学習者に分からせるために、はっきりした発音や遅いスピードのティーチャートークを使用したということである。第二言語学習と異なり、外国語学習の場合、ネイティブスピーカーの言葉がいつも聞ける環境ではないため、日本語専攻大学生がそのようなティーチャートークに慣れてしまうと、一般の日本人の話が分かりにくいものになる。 ・正しい日本語への固執やティーチャートークによる<コミュニケーションの困難>に対しては、教室内からの日本語教師による支援が必要である。

概念名 (8)	異文化接触の対人関係の不安
定義	異なる文化背景を持つ相手との対人関係に不安や緊張を覚えること。
具体例	<p>No.2-6 就是刚开始的时候挺紧张的，毕竟对方是外国人。</p> <p>No.2-6 然后还有一点就是如果你不去交流不去说，就像我，你看谁平时都知道在早上说“おはよう”，中午说“こんにちは”，晚上说“こんばんは”。我早上和人见面的时候我居然说了“こんばんは”！你就发现如果你不去实践的话这个东西还是不行。</p> <p>対極例： No.2-6 就是后辈们也是，要走出去跟日本人去接触，就是你只有接触了以后，了解他了，相处了以后你才觉得他没有那么吓人，甚至你还觉得其实他们还挺好，挺友好的。</p> <p>No.7-10 就是觉得自己不是那么健谈，就是不知道跟人家说啥，本来自己也不是特别健谈，然后更何况又是一个外国人，我就说有时候就觉得……你说我跟人家说啥呀？</p> <p>No.7-13 我觉得我不是那种很有眼力见的那种，也不是很有眼力见，就是很不会见人说人话，见鬼说鬼话那种，就我觉得我有点很多时候不太会察言观色的那种，我觉得如果一个人是一个察言观色，就是说不好听，见人说人话，见鬼说鬼话那种，他跟什么人都能相处的很好，就不论是哪国人他都能相处得很好。</p> <p>No.15-9 非常担心，就是说话特别小心，一句话说错了就会被讨厌了。</p> <p>対極例： No.15-9 网上它主要是说话的时候，可以思考够了再说。它就不是那种当面的像你问我一句，马上我就回这样速度太快了。但是另外一个我也是有点反射弧特别长，说一句话，我可能先回答了，然后我再琢磨琢磨不对。</p> <p>No.18-6 我和日本人的话，就是很少有能够特别深入地说他们的感受或心情一类的吧，不会说的太深，我也是。</p>
理論的メモ	<p>・「異文化接触の不安」という概念で不安に関するすべての要素を収めるか。→ いいえ。例えば、日本語能力に対する自信のないことは、あくまでもコミュニケーション能力によるものであるため、＜コミュニケーションの困難＞として扱</p>

う。

・ “就是刚开始的时候挺紧张的，毕竟对方是外国人” (No.2-6) → 相手が異なる文化背景を持つ「外国人」であるため、不安や緊張を感じる。

・ “就是后辈们也是，要走出去跟日本人去接触，就是你只有接触了以后，了解他了，相处了以后你才觉得他没有那么吓人，甚至你还觉得其实他们还挺好，挺友好的” (No.2-6) → 異文化接触の対人関係に不安を覚えていない対極例である。なぜ「不安を覚えていない」か？ → “相处了以后你才觉得他没有那么吓人，甚至你还觉得其实他们还挺好，挺友好的”、“就是你只有接触了以后，了解他了，相处了以后” → 接触経験が不安の軽減に役立つのである。

・ No.7-10 → 相手との対人関係に不安を感じるため、どのような話題をすればいいかわからない。 → <異文化接触の対人関係の不安>は、<接触場面における話題の選択・継続に難航>に影響を与える。

・ “非常担心，就是说话特别小心，一句话说错了就会被讨厌了” (No.15-9) → 相手が異なる文化背景を持っている場合、間違えたら相手に嫌われるかもしれないと予測して相手との対人関係に不安を抱える。

概念名 (9)	接触場面における話題の選択・継続に難航
定義	接触において、どのような話題が適切か、どのように話題を継続させるかに困難を感じることに。
具体例	<p>No.1-11,12 然后我在想就你看的书少，平常时是了解的少，你跟他们沟通，就是尤其是跟老师沟通，就是总在那个面上，就不能深入地就是表达自己的那个见解。嗯。就是现在我跟，嗯，就是主妇们上课的这种我还行，但是我觉得想要深入的，以后嗯，上学提高学历还是得就是话题深入些。</p> <p>No.1-12 她就说那如果要是这样的话，那你怎么办呢？你被问到这样的问题，你怎么回答呢？我就先用笑掩饰一下尴尬，然后我就努力想怎么回答，但是真的是自己想脑子里没有想法也想的很少也说不出，就特别…… [难为情的样子]。</p> <p>No.5-11 还有就是可能自己见识方面吧，就是也有一些不足。就是不知道要和一些成年的人，就是那些年长的人和他们唠什么。</p> <p>No.6-12 他们都是在公司当部长啊什么级别的，像我教的有△△A公司的技术部部长和△△B公司的技术部部长，在咱们这大连的日企吧，反正他们给我名片，我就觉得天呀，好荣幸啊。看到名片就是什么部长啊什么的，还级别挺高的。</p> <p>No.8-3 然后我就会问他们。现在日本说什么什么，年轻人都说什么嗯，就是就这样的感觉，就跟日本人问才知道。</p> <p>No.9-8 有些时候我会刻意找一些共同话题，就是在这个共同话题上面我觉得还是欠缺一些，怎么说，因为还是不了解人家的文化，所以不知道你想聊什么。</p> <p>No.10-7 接触到的大部分都是日企高管，他们在认识到我还是一个学生这样的身份，加上我当时日语其实还不好，交谈上的话题其实很浅。</p> <p>No.14-4 我觉得我还是相对缺乏的。比如如果谈到动漫的话我可能会顺利进行下去，但是如果谈到日本的政治、经济、历史等等，因为我自己本身对这方面的兴趣很少，本身也没有太多的了解，如果谈到这方面可能就会不太顺利。</p> <p>No.18-8</p>

	<p>还有就是能不能聊到一起吧。其实我到现在还没有那么自如，有的时候上课上到一段时间一个话题深入下去就会不知道再说什么了，就会突然断片了。</p> <p>No.18-8</p> <p>有的时候他们说到一个话题，我不知道我接下去他们会不会介意，我就会不说，避开这个话题，对，就会换下一个话题，就直接跳过去了。我有的时候也在想这样到底好不好。</p> <p>No.19-8</p> <p>有的日本人特别开朗，你和他说什么都会很开心。但是有的日本人不太愿意和你交流，他就想学习，就是朝着学习来的，也没有什么话题能够吸引他的，我主动往外拽话题都拽不出去，日本人和日本人性格都不一样。</p> <p>No.19-8</p> <p>其实中国人也是这样，但是日本人勾画得更加明显，我感觉中国人更加随和吧，也是我和中国人了解比较多，找话题的方面就会比较广泛。但是和日本人的话，政治、经济或者他工作的方面我都不太了解。</p> <p>No.19-8,9</p> <p>我其实挺愿意，就是抓这种机会，有这种机会其实挺宝贵的，就是有一点会担心就是，唉呀，和人家说啥好啊？（中略）。然后会不会太无趣了，然后能不能一直持续下去？有点担心，有点没有信心，能不能一直长期持续下去。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・No.1-11,12、No.1-12→先生に多く質問されたが、その面での知識があまりなく、話の継続がしにくくなった。→文化的差異が＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞を引き起こす。＜接触上の文化的差異＞に繋がる。 ・No.1-11,12、No.1-12は教育分野における文化的差異である。特定の分野に限らず、No.8-3、No.9-8のように、日本の社会、文化などに関する知識が少ないため、話題の継続が難しくなる場合もある。 ・No.5-11、No.6-12、No.10-7→自分より社会履歴の長い相手とどのような話題をすればいいかわからない例である。→＜対等性の欠如による接触の困難＞と関係する。 ・＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞は、話題の選択、および話題の継続に難航することを内包する。 ・“加上我当时日语其实还不好”（No.10-7）→日本語能力は話題の継続に影響する。→＜コミュニケーションの困難＞に繋がる。 ・“比如如果谈到动漫的话我可能会顺利进行下去”（No.14-4）→興味のある話題なら継続できる。では、興味のない話題ならどうなる？→継続しにくいかもしれない。→＜接触場面における話題の選択・継続に難航＞には、話題に興味があるかどうか起因するものがある。

	<p>・ No.19-8→相手はその話題に応じてくれるかどうかは話題の継続に影響する。 →<接触に対する相手の関与姿勢>に繋がる。</p>
--	---

概念名 (10)	対等性の欠如による接触の困難
定義	接触の場の性質・状況や相手が異性であること、および、相手との間で年齢・社会履歴・力関係において違いが大きいことなどから、相手と対等性を感じることができず、対人関係の構築に困難を感じることに。
具体例	<p>No.2-6 又要去他们家里教，然后教的又是四、五十岁的一个男的。奥さん很少。都是男的，就还是那种印象的こわい，所以我就不想接触，就害怕。[I:你说的こわい指的是就是单身男性，来自于这种的こわい吗?] 对对对，就我觉得危险，危险的感觉。</p> <p>No.3-4 当时有点害怕，有一点点害怕。他们这么厉害，我们这么low。 対極例：</p> <p>No.3-7 其实有就是像我们传统观念会想啊，去人家上课，而且是个男的，是日本人，可能有点想法。但是我就没有想那么多。我是说想那么多干嘛，多累啊，也不会那样的。人家都是正经上班的人。然后我就劝她们，她们也就是有点打怵。</p> <p>No.4-14 我得看这个人是什么样的人。他的话不会说，人家是个总经理，我有什么资格说人哪。</p> <p>No.4-19 他也比较严肃，而且让我有被雇佣的感觉。[I:能举个例子吗?就是是什么让你觉得是被雇佣的感觉呢?] 就是不像其他学生他们是在主动靠近你是像交朋友那样的，这个学生就是单纯的雇佣关系，就像老板雇佣员工。被雇佣的感觉……就是他会说你好，走的时候会给我开门。很正式的那种。其他学生都是像朋友似的挺随意的。</p> <p>No.5-10 看是什么场合，如果就是普通的日常的场合还是可以的，但是如果稍微正式一点的就有点怯场了。</p> <p>No.5-13 感觉自己这个能力还不是很，因为毕竟人家都是比较有社会经验的人，可能人家和你接触只是他接触当中的一部分，然后我的接触面很窄嘛，因为我没有办法，我的那个交际能力没有跟他在一个水平线上，还是会有这种不安吧，就是我们只能有一个简单的维系，就是唠一些普通的嗑，不会有特别深的接触吧。</p>

	<p>No.10-7 接触到的大部分都是日企高管，他们在认识到我还是一个学生这样的身份，加上我当时日语其实还不好，交谈上的话题其实很浅。</p> <p>No.15-11 还是平时这个行为礼仪方面，像我跟○○老师有点什么事，交流一下的时候，每发一句我都先琢磨半天。[I:为什么?]因为怕说错。因为我现在交流的人少部分是跟我同辈的，就是那种用平常的语言可以说话，像其他基本上都是长辈或者老师之类的，或者说比我大十来岁的，基本上都是敬语的时候，说话都特别注意。</p> <p>類似例： No.15-14 当时社团活动时日本留学生因为都是年纪大的，而且以前是上班族，所以没邀请。 [I:那这个社团活动中为什么韩国人多呢?]因为韩国留学生都跟我们年纪差不多啊。</p> <p>No.0-F1 只有一个女的，其他的就全都是一水都是男的，就不会想要私人想再和他们有什么瓜葛就是这种感觉。(中略)。哪怕从人身保护这个安全角度上讲，我可能也不想和他们有什么太深的瓜葛，有这种私人的联系。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・No.2-6→相手が異性であり、そして、場が公共的なところではない。異性、場による対等性の欠如に困難を感じる。 ・No.3-7は、対極例である。協力者「No.3」は「今」相手がちゃんとした仕事を持っている人なので、怖くないと認識しているが、それはもともと気にしないというのではなく、その対等性の欠如を意識し、考慮した上で、怖くないという判断をしたのだと考えられる。 ・No.4-14、No.5-13、No.10-7、No.0-F1→社会履歴における違いが大きいため、対等性が欠如している。そのうち、No.0-F1はNo.4-14、No.5-13、No.10-7とは反対のほうから感じている。No.0-F1の場合、協力者「No.0-F」自身は上からの視線を取っているが、No.4-14、No.5-13、No.10-7は自身が見下げられていると捉えている。 ・“让我有被雇佣的感觉”(No.4-19)→力関係における対等性の欠如に困難を感じている。 ・No.15-14→興味・関心・態度が類似していないから日本人留学生を呼ばなかったか、サラリーマンとは対等的な立場でないため、抵抗感があったか?→両方である。興味・関心・態度が類似していないことも、対等的でないことの現れである。

概念名 (11)	価値づけによる消極的な接触姿勢
定義	異文化接触と比べて、他にもっと価値を認めることがあるため、異文化接触に対する態度が消極的になること。
具体例	<p>No.4-14 我觉得是他不懂得取舍，嗯，就是太多的情况下，你要么你就得把自己弄得很累，就什么都要，要不然就得放弃一些东西。</p> <p>対極例： No.4-16 然后还可以就是学习很忙，那时候就白天课很多，嗯，白天上课之后，嗯下午可能7点到10点，我在那我没有把它当做是兼职，我是把它当做我自己去放松自己了。[I：那学校里的复习怎么办？] 10点回来再复习呗，不是一天都有课，下午有课[汉语教室的课程]的话我上午去图书馆。</p> <p>No.12-2 我是不愿意学语言，所以我不是因为它是日语，我是不想学语言。[I：为什么不愿意学语言？] 我就觉得我语言天赋其实不是特别好，然后再一个就是，嗯，不擅长学那种语法的，然后也比较懒嘛，死记硬背了。</p> <p>No.12-6 [对跨文化接触] 就是没有那种，你让我一心一意投入其中的这种兴趣的推动，没有兴趣我觉得就是会差一些。(中略)。就是像我这种，就是我从小就属于那种兴趣不到就不愿意学这样的。</p> <p>No.14-1 [I：为什么没有持续和外教的交流呢？] 我认为可能我并不是百分之百地把我的精力全投入到日语上，我虽然很喜欢日语，觉得学习日语对我而言是一个很大的助力，但是我觉得光靠日语的话没办法在社会上立足。像大连这个环境，日语专业是非常棒的，但会日语的人才也非常多。如果只是日语水平高的话并不是一个非常大的竞争力，所以我还是会想去学一些其他的東西。比如日语的簿记，现在也拿到了N2证书，也考过了N1，过一阵子还想去学一下商务日语和英语、俄语。所以我觉得有得必有失吧，这种感觉。</p> <p>No.14-3 但是由于我经常因为时间上的问题，就有些没抓住机会吧。</p> <p>No.14-3 我虽然喜欢日本文化比如动漫、小说等等，但只是兴趣，并不是像他一样狂热，所以投入的精力也不能与他们相比，因为我自己的投入不够，所以收获也没有他</p>

	<p>们多。</p> <p>No.16-7</p> <p>我考完研究生之后，曾经想过找工作。当时是这样的，大部分的人是不赞成我去找工作的，他们认为我应该接着去做一下研究，如果今年不行〔没考上研〕的话，也不是说非得要差这么一年的时间。但是我当时的想法是去看一看，如果行的话，也不一定就是哪个路线〔考研〕自己非要去走，也没有哪件是必须得做的，不一定非要去。但是去看了之后就会感觉〔企业〕条件也不是说那么的理想，相对来讲现在很多企业，用本科生的条件去工作，不管是待遇各方面还是以后的发展都不是说非常的理想。</p> <p>No.17-1</p> <p>另一个呢是上了岁数的，就是可能已经退休了，然后去我们这边的，他是因为我的朋友，想接触，我就跟着了。然后我们有一个很喜欢和外教交流的我的好朋友，她就觉得应该让外教也去看看，虽然我本人并没有这样的想法，那既然如此，我那就好吧。就帮外教搞了一张票，然后给他，告诉他怎么去怎么回事在哪，就算唯一的一次和这个外教私底下的接触。嗯，就跟这个岁数大的外教接触就是一次，而且还是被动的接触。是我们班学委或者是班长，然后要有这个情况拉着我一块去的，我觉得我应该不是不是主动的。</p> <p>No.17-8</p> <p>但因为我的理智告诉我这样做会帮助我的专业的能力，所以一旦有这个机会，我还是会去抓住它的，就是这样的。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.4-16→協力者「No.4」は、教室内の日本語学習以外、教室外の異文化接触をも積極的に実施している。その前提は、異文化接触の価値づけを認めていることである。その価値づけを認めているからこそ、教室内の日本語学習と教室外の異文化接触が両立できるのである。→異文化接触の価値づけを認めていない場合はどうであるか？→No.4-14 が語ったように、異文化接触に消極的な姿勢をとり、その代わり、「学生会の活動」や「資格試験や他の試験の準備」などに力を入れる学習者がいる。 ・ 協力者「No.12」は、異文化接触に消極的な態度を取る。No.12-2、No.12-6 が語ったように、それは日本語に興味がないためである。 ・ 協力者「No.14」は、将来の就職に役に立つ資格試験や技能学習に重きを置いている。そのため、異文化接触にあまり積極的でない。 ・ “相对来讲现在很多企业，用本科生的条件去工作，不管是待遇各方面还是以后的发展都不是说非常的理想”（No.16-7）→大学院に進むことに価値づけを認めている。 ・ No.17-8→協力者「No.17」は、異文化接触が重要であるとわかる。しかし、“就

算唯一的一次和这个外教私底下的接触。嗯，就跟这个岁数大的外教接触就是一次，而且还是被动的接触。是我们班学委或者是班长，然后要有这个情况拉着我一块去的，我觉得我应该不是不是主动的”（No.17-1）と語ったように、友達に連れられて日本人教師と一度接触したのであるが、消極的であった。興味がなかったからである。→異文化接触を重要に認識しているが、自分の興味と比べ、それほどでない。基本的にもっと重要なことと比べて、異文化接触の価値づけをそんなに認めていないのである。

・協力者「No.12」、「No.14」、「No.17」は同じことを語っている。異文化接触と比べてもっと重要なことがあり、その重要なことに時間を多く使うため、異文化接触に積極的でないことである。

・Eccles（1995：215-225）は、「価値」を4種類に分けている。そのそれぞれは、「獲得価値（attainment value）」・「内部価値（intrinsic value）」・「外部実用価値（extrinsic utility value）」・「代価（cost）」である。「獲得価値」は、あるタスクに従事し、その成功が自分に望ましい場合、そのタスクに「獲得価値」があると認識される。「内部価値」とは、タスクに従事することによって楽しさが得られること、あるいはタスク自体に興味がある場合のことを指す。タスクに従事することが将来の職業的な目標の達成に寄与する場合、そのタスクには「外部実用価値」がある。「代価（cost）」は、タスク自体や失敗に不安を持ち、また、選択に伴ってコストを払わざるを得ない側面のことである。本研究で言えば、教室内での日本語学習とその成績、将来の就職に繋がるための資格試験や他の知識・技能の学習は「外部実用価値」であり、部活、学生会活動、自分の趣味などは「内部価値」であると考えられる。それらの「外部実用価値」・「内部価値」のほうに価値を認め、反対に、異文化接触に時間をかけ、持続しようとすることを、「代価」を払うことと見て、これに消極的な態度を取るののである。

概念名 (12)	接触上の文化的差異
定義	日中両国における価値観の相違や習慣の文化差によって困難や葛藤を覚えること。
具体例	<p>No.1-10 别的话还是了解对方的那种环境的东西还是比较少，对他们生活的环境，不单是生活的整个这个国家，还有各个文化环境，嗯，就是习惯上，嗯，嗯，了解的都比较少吧。</p> <p>No.1-11 就问了你好多好多。然后我就感觉她有点为难我。后来我那个学姐告诉我，其实不是，她就是想知道你的想法怎么想。觉得她还是挺看重你的思考能力的。</p> <p>No.1-12 其他的不足可能是，就是，作为日本人吧，就是很重视一些细节的东西。然后像他们那些商务礼仪什么就那种。怎么说呢，就是比如说就上次我主持的时候没穿丝袜，就那个可能觉得有点不习惯。但是作为中国人，我觉得他可能理解你这种，所以可能你不懂啊啥的，他也不说出来我也不知道。但是后来的时候比如说听老师说了，我又看看电视啊什么的，我知道这样不对，但是我要提前不知道我可能就这么做了，我也不知道我错了。</p> <p>No.2-14 我觉得他们吧，就表面上都会看起来跟你很好，真的心里怎么想，不太知道。</p> <p>No.2-14 绝对不一样，嗯，肯定不一样。就是我觉得比如说咱中国人哈，要是不喜欢的话就很容易表现出来，但他们不喜欢的话可能也不会表现的。</p> <p>No.3-2 就是可能我遇到过一个人，那个人 40 岁吧，差不多，嗯，我那时给他代了一次课。嗯，上课期间就是说我大，就是说我大きい。然后在上课期间就说起了这个吃东西，他说他喜欢在楼下超市里买香蕉啊、柿子啊什么的，我说我也喜欢吃香蕉，他说噢怪不得你这么大。然后上课之间一直在说我大。但是我就是嗯没有就是不开心怎么样，我就觉得啊可能就是你是开玩笑或者怎么样，但是没有多心。但是我觉得这样对于初次见面的人来说那样说不太好。</p> <p>No.3-10 但是基本我感觉日本人对他们来说，主要是以老师引导话题为主，他们不会主动提出一些话题。也有，但是很少。</p> <p>No.5-2</p>

说实话，我觉得日本人的话就是还是生性比较冷淡，是比较冷漠的，就是没有中国人的那种温情，温情比较少。

No.5-9

和中国人交往的时候，就是嗯你交往的时间长了，你可能就是关系越来越好了，就是感觉这个温情的感觉更多一些，啊，就是可能交往时间越长，我们礼貌少了，但是温情多了就是互相呀，心更近一点，然后就不拘小节了，但是日本人呢，虽然交往的时间长，但是这个礼节还是要注意。就是他们，而且就是感觉现在心的距离也没有那么近，就是我们虽然认识、熟悉，交往时间也很长，但是你还是你我还是我，咱俩关系就是师生关系，然后就是普通的朋友关系，就不会走得特别近。（中略）。就不太好，他们也可能比较就是除了那些课上的东西，他也不会啊不会给你唠其他的，也不愿意跟你唠，就是嗯这样，就感觉有点冷たい。

No.5-11

而且就是和咱们外教沟通的话，因为咱们都是在中国人的环境当中的。嗯，嗯，因为咱们外教是在中国人环境当中吧，所以他们可能会比生活在本土中的日本人就是顾及的东西更少，就是更中国的习惯就是可能就是相对深入了一些，所以说就是你因为外教沟通和与，比如说，要是真的去日本本土和日本人沟通的话，可能嗯，难度更大的还是就是嗯。

No.7-10

给我的印象就是我看不出他是什么样的人，我很难通过他的就是外表……。和〇〇A老师比较，〇〇B老师还比较容易看出来，他挺好玩的，就是挺八卦的那种。〇〇A我就是完全完全看不出她这个人是怎么样的一个人，就是一般的老师上个两堂课，基本上就能觉得这个老师是平时是一个什么样的人，〇〇A老师完全不知道，他是一个就挺優しい的，但是你又觉得他很……。我总觉得她是第一次来上课，然后大家都很有客气那种。

No.7-10

他们比较不一样的地方……就他们比较客气吧，嗯，就是会比较客气，然后他们讲一些很……就是他们会讲一些事情，会讲着讲着就很激动的那样的。就是他们如果两个人聊天的时候，讲到一件事情，就可能是挺严肃的吧就会……。我就是挺……怎么说呢，就是我总觉得他们的话题有点严肃，虽然我听不懂……。[I:你怎么知道她的话题是严肃的呢?]就是我……我老觉得他们就是很压抑，给我的感觉就是很压抑。就是很压抑，你很少看见两个人坐在一起吃饭，就是很随意的那种，像朋友一样的聊天，给人感觉很压抑地。（中略）。嗯，就很压抑，好像怕让人知道似的，怕人知道他俩在说啥的。[I:是说的是ビジネス方面的吗?]嗯……那我没怎么听清，就是会听不到他在说什么。嗯，就在那块儿，声音还很小。声音很小的那种，嗯嗯，感觉就是特别压抑。

No.7-11

嗯，看两个人性格吧，如果他是个典型的日本人，我觉得就没办法交流。[I：为什么？] 典型的日本人，他就像老师上课讲的那样，他就会很注重一些东西，说话的方式啊，然后永远不会跟你靠得太近，然后如果典型的中国人他就很健谈呀，什么事都跟你说那种，两个人就没办法走到一起啊，但是有的中国人，不一定所有的中国人就都会那样，有的中国人也很不愿意跟你就很熟，他就能跟这样的日本人相处得很好。

No.7-12

[I：你觉得会哪个方面有困难？] 我觉得……我觉得就是很简单的说话方式就很难，就是你把所有的事情都要绕一个弯，再跟他说。

No.7-12

但是他着急的时候，他想表达一件事情的时候，他一定会用日语，他表达自己观点的时候，他就会说话说得很快，然后用日语说，他就会把有的事情绕一个弯再说，虽然他很不满意这件事情，但是他也除非是跟他比较熟的同学和朋友那种直来直去的，但是当他表达一个，就是比如说他对学校的一些东西的看法的时候，他就会绕一个弯儿说。

No.8-6

首先可能是口语表达，口语表达提上来之后，别的问题的话，可能是我对他们的文化了解还不够，交流的时候也许会出现一些常识性错误。

No.12-7

就是他们对中国的一些东西，就感觉很不理解，他们对中国不了解、不理解啊，就是有一些现象。具体的想不起来了。

No.13-5

但是我觉得就是大家真的是有差异。想法上会有很多差异，就很多时候，中国我觉着特别理所当然的话，可能在日本人感觉就是，嗯，就感觉可能他们就没有办法理解。我说不上来，我现在想不起来，但是我一直都有这种感觉，就是可能大家真的是因为生长的环境不一样，所以想法真的是不太一样。

No.14-4

不过有些时候我们观点上也有不同需要互相理解。要是这种“日式思维”有一定的理解的话交流就会比较顺利了。

No.15-4,5

在网上用推特之类的跟那个日本人聊天的时候就觉得他们真的超级麻烦。就是礼仪特别麻烦，就是推特因为像咱们微博似的，但是他们特别麻烦。我去关注人家，我要先说失礼了我要关注你，然后人家说谢谢，这才能关注，要不然就会生气。特别麻烦，就哪怕没有设置，你也要先说一声すみません。然后别人要是回了，你也得说すみません。他们那个套话就是日本礼仪中的一部分，那种感觉我觉得也算是相当麻烦。你像中国人的微博关注就关注了，那就完事了，想关注就关注不想关注就

取消，在日本就不行！[I：为什么不行啊？]这不人家会觉得你没有礼貌嘛。他会在他自己的里边[推特]说：“那个人不说一声就来关注我，很生气。”

No.16-8

我自己接触的，因为他们那种初次见面的寒暄，给我感觉就是非常的仪式化，没有像跟中国人接触的时候给你那么热情的感觉。就是与日本人刚开始见面的时候，可能会觉得他这个人比较的冷淡，会有一点这样的感觉。可能相对来说人际交往上，我觉得会有那么一点差异。日本人做事情的话，态度比较严肃，比较认真，这个我觉得也确实是怎么回事，可能是自己接触还不太多吧应该。（中略）。有的事情是不需要，或者说不应该用严肃的态度去对待的。可能是因为自己接触的还少，但是多少有一个样本会简单地感受一下。

No.18-4

感觉开始交往的时候肯定会有一些[问题]，因为开始交往的时候不太了解嘛，比如说他们说话很委婉，我开始的时候没有适应这个过程。有一次就是[日本人邀请我]说：“要不要一起去吃饭”什么的，就邀请我，因为他当时说的很委婉嘛，然后我就含糊其辞没有回答，但是后来我就发现我这个表现让他不太开心。就发现原来他的表达方式是这样的，他其实就是想让我去，但是他说的很委婉，让我以为我听出的意思是可能是去不去都可以啊这种，稍微有一点点，我猜不出他的意思来，所以我当时也就含糊其词地回答了，他当时的表情我还记得，就觉得自己的表现不太好，要是坦率回答一点就好了。当时我是代他的课，代了一段时间，他可能是[在中国]挺长[时间]的了，两三年左右吧。因为当时我对他也不太了解，我是代了一段时间他的课，因为当时课程要结束了，他当时是想感谢我一下。但是当时我感觉也挺不好意思的，我就带人家一小段时间，就要请我吃饭什么的，就感觉挺有愧的，所以当时的回答就含糊其词了。

No.18-4

整体的话应该是很顺利。不过中间也有我以前不知道的东西，就是稍微有点不同。算不上摩擦，就是有一点点违和感。[I：什么地方有违和感呢？]比如说一个是交流方式上，他们都比较暧昧、比较委婉说的。

No.18-4

还有就是他们的思维感觉有一点点，就是，怎么说呢，可能就是日式思维吧。有的时候[和中国人]不太一样，考虑的事情也不太一样，唠唠唠着可能我正在说这个话题，可是他不想说这个话题，他就会说到别的话题上，就感觉可能是思维不一样的原因，我当时就想。

No.18-4

还有比如说送礼物，他们送お土産给我，我以前就在大三刚做这份兼职的时候，我的一个学生送给我一份お土産，就当时我就以中国的方式来说，不用立即还回去，过两天就可以吧，我当时是这样想的，然后这个事儿就拖了很久，大概一周多的时

	<p>间吧。后来有一天我就去找我同学，我的同学也是当时正在教日本人汉语。她就是收到了学生的礼物，她就在想回送给学生什么礼物。我当时就问她：“你这么着急干吗？”然后她就说早点送出去早点安心，就是……</p> <p>No.18-6</p> <p>他们经常会问你，你想要什么礼物，他们会问一下，什么类型的。开始的话我会不好意思，就会觉得自己张口的话会有种像是和他们要东西一样，但是后来就感觉还可以，可能是他们出于礼貌吧，想迎合你的心意。</p> <p>No.18-8</p> <p>有的话比较委婉他们不说，我有的时候就不知道。</p> <p>No.19-5</p> <p>就是最开始是一个冲击，当时特别害怕，因为连邮件都要帮我改，我都连邮件都不太敢发，但是现在想想真的是对我帮助挺大的，真的是对我是一个冲击。</p> <p>No.19-10</p> <p>和日本人之间可能就是礼节上还是就是知道的有点少。嗯，我记得我不知道，之前不知道那个礼节之前，好像嗯引导别人的时候，真的是就走在人家后面之类的。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.1-11→日中間における教育観が異なるため、違和感を覚える例である。 ・ No.1-12、No.18-6、No.19-10→日中間における風俗習慣が異なるため、困難を覚える例である。 ・ “我觉得他们吧，就表面上都会看起来跟你很好，真的心里怎么想，不太知道”（No.2-14）、“绝对不一样，嗯，肯定不一样。就是我觉得比如说咱中国人哈，要是不喜欢的话就很容易表现出来，但他们不喜欢的话可能也不会表现的”（No.2-14）→感情や意見の表し方における日中間の文化的差異によって困難を覚える。 ・ No.3-2、No.7-12、No.7-12、No.18-8 など→日中間の言語コミュニケーションスタイルの差異に違和感・困難を覚える。 ・ No.3-10→話題作りの態度における日中間の文化的差異に違和感を覚える。 ・ No.5-2、No.5-9、No.7-10、No.7-10、No.7-11、No.15-4,5、No.16-8、No.19-5 など→行動様式における日中間の文化的差異に違和感、困難を覚える。 ・ No.5-2、No.5-9 など→日本語専攻大学生が日本人を「冷たい」、「温情がない」と見て、葛藤を覚える例である。日中間における具体的異文化摩擦であり、これに対しては詳細な考察が要る。 ・ No.5-11、No.8-6、No.12-7、No.13-5、No.14-4→文化的差異の存在によって困難を覚える。具体的文化的差異を提示していない例である。 ・ <接触上の文化的差異>は感情的に違和感を感じるだけであるが、<固定観念による文化摩擦>は接触の相手に中国に否定的な話題をされ、愛国心、民族自尊心を生じさせ、感情的に困難を覚える面がある。<接触上の文化的差異>と<固

	<p>定観念による文化摩擦>という2つの概念は感情的に、受け入れの度合いが異なる。</p> <ul style="list-style-type: none">・ “有的话比较委婉他们不说，我有的时候就不知道”（No.18-8）→異文化間知識が不足であるため、困難を覚えた面もあれば、教室内からその面での事実的知識を教わったが、接触の中でそれに気付かなかったため、困難を覚えた面もあると考えられる。→異文化間知識は事実的知識だけでなく、知識への気付きをも内容にすることが一般化されるとよい。
--	--

概念名 (13)	固定観念による文化摩擦
定義	相手の、中国に対する固定観念による言動に苛立ちを感じる事、または自身の日本に対する固定観念によって異文化接触が阻害される事。
具体例	<p>対極例：</p> <p>No.1-6 这方面，因为我还真的是没有什么偏见，我觉得。可能过去是距离咱们现在也挺远的，嗯，之前历史影视剧什么的我也看得挺少的，所以就是脑子里没有很多这方面的影响。</p> <p>No.2-11 我说这个可能就跟家庭有关系了。我说毕竟你说中国跟日本就像我们父母的那一代，肯定是觉得特别不喜欢日本人，因为有这种民族间的问题，然后所以说可能女孩会受家里影响比较大。所以她们不会去找一个日本人结婚。</p> <p>No.2-13 然后就是总说什么以后我可能在日本就职了，然后找一个日本人结婚，我心里想我才不会找一个日本人结婚。</p> <p>No.2-16 我觉得他们说，就是好像他们站在高的地方看，这个不好的。</p> <p>No.2-16 就是我跟他相处感觉到他不喜欢（中国）。</p> <p>No.2-22 其实我感觉这个东西是怎么说呢？就是我爸爸，他属于特别爱国的那种类型，而他们给我影响也大。</p> <p>No.3-2 有一次上课的时候，那个人是 50 岁左右，嗯，外面突然放炮了，就特别讨厌那种眼神，为什么会这样呢？中国为什么要放炮？特别不理解。我说就是习惯吧，我说日本不放炮吗？他说嗯就是民众没有就是随便这么放的。后来他就表现出一种比较讨厌的那种感觉，（略）。</p> <p>No.3-2 这样的事情遇到了两次，因为上课 [汉语教室] 的时候确实是比较吵，然后 [爆竹] 放了很长时间，说话听不清楚，我感觉就是有一点是文化的差异嘛，但是我觉得就不应该用那种那样的眼神来看我们的文化，就是表现出了一种特别讨厌的眼神，我觉得这个不太好。</p> <p>No.3-4,5</p>

选完之后告诉我爸。我爸就有点有点不太高兴，怎么选日语了？[I：为什么呢？] 就感觉对日本就是一种，怎么说呢，因为那会儿也闹得不太好吗？可能历史方面呀，钓鱼岛这些问题。就是感觉学这个没有什么前途。[I：就是找工作的意思吗？] 嗯嗯嗯，对发展啦各种的都会有问题。[I：你爸就挺关心政治的吗？] 对，然后现在也经常给我发一些什么，昨天又发了一个就是微信的链接，就是说美国的一个学者研究日本在多少年以后将那个岛会沉没，然后转移到中国、美国、韩国这些国家，然后后来发说你还敢去吗？

No.3-9

比如说就像放炮那个事情，我觉得啊，就是不要再说了，就可以了。就是不要说我们的国家怎么样，你们的国家怎么样，就不要那么说了。

No.4-19

[I：期间他一直是对中国比较否定的态度吗？] 也有好的，大部分是否定的。说东北的女人太粗暴。

对極例：

No.5-8

话题方面的摩擦，就是可能像战争啊那种就比较敏感的话题，我一般会避开，就是不谈就是不说。或者说是最近中日关系，有的时候会说唉中日关系不好，他说啊是，他就也不深聊，我就不愿意再深聊。[I：那为什么你不想就深聊呢？] 还是因为我也怕就是产生，就是他是这么想的，我不知道我是不是会很生气，我说的话会让他生不生气，这样的话对双方都不太好。

No.6-3

他们也说中国人错了也不道歉，我觉得挺不舒服的。就觉得他们不了解中国。

類似例：

No.6-16,17

还有就是我教的那个小孩，他们就是学英语的挺多，我就从他们妈妈对他们那种期望的眼神就能看出来，他更希望就是把英语学好，可能大家都是这样，但是我觉得可能一种微妙的感觉，我就觉得他就觉得唉呀，好像美国是一个很厉害的[国家]或者怎么样那样的。（中略）我当时想他现在不是在中国生活吗，我心想为什么不让孩子学中文呢。中国也是一个挺大的国家，你将来在这儿发展我觉得也没啥不好。（中略）通过这我就觉得，哎呀，你咋不学汉语呢，汉语怎么了，你为什么不喜欢[汉语]要学英语，这样的。

No.7-5

嗯……烦……就是麻烦，觉得这个东西就，很简单的一件事情，它就是说得很复杂[笑]，就是各种接续啊，我最讨厌最讨厌助词[笑]，就是各种助词啊，就记不住，然后ですます，唉，那个时候就ですます都不懂，就是因为上课不听，所以就觉得，唉，怎么这么麻烦呀，就是明明中文，很简单的一句话，它就各种接续，各种时态，

语态就……。最初学发音的时候就觉得日本人好像压低声音说话似的，就感觉挺压抑的。

No.9-7

在教那几个日本人上课的时候，嗯，不是所有人都这样，但是有些人确实是感觉就是中国怎么怎么样，怎么怎么样。就有的时候，可能是跟他们熟了吧，他们就会特别没有忌惮地去说这些话题，但是就一说到这就感觉我是中国人，我也不能替你，就是帮你说，我说中国不好了，然后每到这个时候，我就挺尴尬的。

No.11-2

△△（城市名）没有什么日企，外企什么的都挺少的。再加上家里边挺传统的，对日本印象都不是特别好。觉得学了以后就业也不是特别明朗，就不太支持我。

No.14-4

这也是因为我家里有人当过兵，然后给我的影响吧。

No.14-4

我在平时学习的时候在日本外教那里了解到的也是要是想和日本人真正当上朋友的话这个过程也是十分漫长的。

No.16-8

还有一种比较负面的一些感觉，我就觉得日本人相比于中国人来讲，不是说非常的阳光的那种。有的时候不阳光，它和单纯的性格其实不是一个事情，我是觉得他们有可能受到了比如说文化的影响，或者是工作压力这种，不是说人存在什么性格缺陷，而是整个人给人的感觉不是非常的阳光，是比较郁闷那种，有好多的人会有这样感觉，特别是职场上的人。

No.19-3,4

[I：你之前想象当中的是什么样的呢？] 工作狂啊。然后可能做什么都比较认真，也不太会和你比较好的交流或沟通那种，最开始真的是这种感觉。[I：最初是什么影响你有这种感觉的呢？] 就是看日剧的时候，比如说《半泽直树》啊这种，这种社会压力。我还看过《first class》全都是这种社会压力，特别变态，一整就下跪啊，平时不苟言笑的，平时拿着公文包匆匆忙忙的那种，对自己的妻子也是那种眼神不太对劲那种的，最开始的时候我觉得这种特别吓人。

No.19-4

其实日本人之间，尤其是我最近看了很多报道嘛。就是他们心里想的东西不会太表现到外部上，而是在背地里面来弄一些东西，我特别害怕这种，尤其前两天听说“line”[一种聊天工具]上，他们[日本人]就是互相建一个群组，又会建另外一个群组里面没有其中一个成员，然后专门骂这个成员这样。（中略）。这是日本的一个社会现象，然后我不太喜欢这种，正好这些人就是日本的中学生或者大学生，然后正好我去日本的时候大概就会是这些人是我的同事，我就会感觉挺恐怖的，尤其还是外国人。

No.0-A1

嗯，然后就是只要不谈一些敏感的话题之外他人还是挺好的。对，他就跟我谈过一次，就是南京大屠杀的那个。然后他就问我相不相信有这个事儿，然后我说我当然相信了。然后他就说这个可能是假的，怎么怎么样，然后说因为那个什么录像啊什么的，又不是真实经历，可以伪造。然后我当时就觉得，唉呀，不知道怎么说。

No.0-A2

他说现在日本的企业，因为随着中国的什么就是工资就是那叫什么劳动力的实惠的那个时代，他说已经慢慢要过去了，所以他们现在把工厂转到什么泰国呀、越南那些地方。然后他就说什么中国人如果不改不讲理的这个毛病，他说以后就是什么，日本的这些企业呀，就会慢慢地，还有别的国家企业也不会在中国再呆多久，说就会挪到那个泰国呀、马来西亚那些国家。（中略）。觉得他可能也有点个人的情绪在里面。但是我问了一下就在美国留学的那个人，他说根本不是这个原因，他就是因为现在越南和泰国比中国劳动力便宜所以才走的，并不是说因为中国人不讲理呀、做东西不认真的原因。

No.0-A3

然后吧，就发现她们好像比如说不用东西就是，比如说我要回国了，我就把我这东西留给你你来用吧，她可能觉得中国人是不是可能没发展，还穷，所以说我把这个东西给你？

No.0-A4

就是说如果我答应给他们解决什么问题，我一定要给他们解决。就是我不想让他们觉得我们中国人是那种就是特别糊弄事儿。然后就是因为现在中国人很多，特别日本他们觉得他们自己认真，然后觉得中国人干什么都马马虎虎的，我就不想让他们有这种印象。所以说只要我答应你我帮你解决，我帮你问什么我帮你怎么样，一定要给你办好了。就觉得我帮他办好了我就腰板挺得老直了。

No.0-A5

就特别是那种奥さん，就是我跟她相处的时候，我觉得她挺喜欢中国的，但是有时候谈到一些问题，我发现她其实还挺瞧不起中国的。就是她说咱中国那个车不让人吗，她说她在日本做实验，所有车都给她让。就是说所有人都给她让，虽然她违反规则了，但是所有的车都给她停下来。我感觉她说的时候还挺自豪。嗯，然后觉得咱们中国挺不思議的。

No.0-A6

他就问我中国怎么样，我说中国高中之前是不允许谈恋爱的，如果要是谈恋爱了学校会有一定的就是惩罚。然后他就说了一句话，他说呢，恋爱这种东西怎么能阻止得了呢，与其把这个精力放在阻止早恋上，不如管一管中国的这些孩子们。他们成天拿着那个手机，拿着iPad打游戏，“ばか、あほう”。他用“ばか、あほう”这样的语言形容我们的孩子。我其实当时心里听了挺难受的。就是说这句话，因为我觉

得为什么我们中国人要被这么说成是傻瓜呢？我就很难受。

No.0-A7

后来还有一次，其实在后半期的时候，我们在讲课的时候，我给他讲课我有一点排斥了，就不太想给他上课了。因为什么呢？外面又放鞭炮了，每次一放鞭炮他就可不乐意了。他的脸就特别不乐意的样子，然后每次一这样的时候，我得跟他说一句“すみません”。虽然我不说也可以哈，但是我觉得打扰到他了，就给他道个歉吧？然后他就说那不是你的错什么的，然后说了好多，最后来了一句“不思議な国”。他说的“不思議”就是我感觉好像就我就觉得我们不就是放鞭炮了，咋就能“不思議”了？我觉得带有讽刺的意味，所以说我心里挺难受的。

No.0-A8

对，我心里难受，因为我觉得我们有这种文化。我也知道我们放鞭炮又打扰别人，又污染环境，然后可能还存在着安全隐患。我也知道呀。但是我们国家几千年传下来这种习俗了，有的好事也放，不好的事也放。我也知道不好，但是它不是说一朝一夕就能改变的对吧？我们也需要时间，我就觉得为什么就不能以一种宽容的态度去对待这件事？就是日本也不一定说什么都好，你们就没有自己的毛病吗？就是虽然比我们发达吧，但是就不想让他们居高临下的态度对待。就是如果你不说这种讽刺性的语言，你跟我讲，比如说放鞭炮这件事情污染环境，给别人带来烦恼，又有安全隐患，觉得这件事是不对的。然后呢我觉得中国以后会慢慢改进，如果你这样跟我讲 [就容易接受]。

No.0-A9

看不起我们，就是他要从很多我们不好的地方说。这就让我们特别心里面特别难受。后来就是他说了一个这个“不思議な国”的时候，我觉得他已经讽刺到我们的国家的时候，就从那件事，我就特别不喜欢他。

No.0-A10

但是我也用日本的化妆品，很多日本的东西，（中略）。我也会买日本的东西，我也知道中国有些东西质量不好，但是一到真正的问题上面的时候，我就自然而然地我就站到自己国家立场考虑。

No.0-B1

一个△△△公司的总经理，嗯，不是很顺畅。也顺畅，也可以称为顺畅，但是就感觉不一样。嗯，就是他也挺照顾我的，但是就总感觉很中间隔了一座大山。[I：这个大山是什么呢？] 嗯，就是我感觉他对中国的认知，嗯，他就觉得中国不好，嗯，真是无法跨越的鸿沟。（中略）。他会给我讲很多中国从日本学的东西。嗯，然后，嗯，中国人那个很多不好的方面。（中略）。他总说中国存在的各种问题，说中国这不行那不好。我就有时候有点生气。但是后来想想他说的也没错。[I：然后他说了什么中国什么让你受不了呢？] 他说中国假的东西太多了，什么都是假的，全部都是假的。

	<p>No.0-C2</p> <p>像学日本历史啊什么的,所以我对他们就是没有特别浓厚的兴趣。就是说它的传统,我不太喜欢它的传统文化,(中略)。「I:不喜欢什么地方?」嗯,因为我看他们以前那种战争啊打仗啊,还有说是他们那种嗯,日本人的那种性格的分析啊,就是觉得他们这个民族有挺多不好的地方。(中略)。而且他们不能正视这个东西,就是他们一直以来就是没有,啊,就是他们,他们整个民族都对中国就没有那种就是一点点那个抱歉的心态都没有。我感觉还是挺不好的。</p>
<p>理論的メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ “这方面,因为我还真的是没有什么偏见”(No.1-6) →日本に固定観念を持っていないという対極例である。→<異文化接触における客観的な姿勢>に繋がる。 ・ No.2-13→日本人と結婚するかもしれないと言われたとき、反感を持っていた例である。日本・日本人に固定観念を持っているからだと考えられる。“这样的事情遇到了两次,因为上课的时候确实是比较吵,然后放了很长时间,说话听不清楚,我感觉就是有一点是文化的差异嘛,但是我觉得就不应该用那种那样的眼神来看我们的文化,就是表现出了一种特别讨厌的眼神,我觉得这个不太好”(No.3-2) →中国の風俗習慣を否定的に見られ、中国に嫌悪の念を抱き、偏見を持っているのではないかと協力者が認識し、心痛を覚えている。⇒<固定観念による文化摩擦>は、相手の中国に対する固定観念によるものと自身の日本に対する固定観念によるものに分けられる。 ・ 類似例: No.6-16,17→接触の相手に直接的に中国を否定されているわけではないが、間接的に否定されているように認識している。中国が見下げられているように認識している。 ・ “但是有些人确实是感觉就是中国怎么怎么样,怎么怎么样”(No.9-7)、“但是就一说到这就感觉我是中国人,我也不能替你,就是帮你说,我说中国不好了”(No.9-7) →相手から中国・中国人に対する固定観念による発言をされたとき、国家アイデンティティを自覚し、愛国心を生じさせる。 ・ No.0-A1→固定観念は、日中間の歴史によるものが多い。 ・ No.19-3,4, No.19-4, No.0-A2→固定観念は、日中間の歴史によるものばかりでなく、現代の日本/中国の文化に対して持っているものもある。 ・ No.0-A3→「日本は中国を見下している」という日本人への固定観念が持たれている。そのような固定観念に左右され、風俗習慣の差異による問題を両国間の関係問題として捉えている。 ・ No.0-A4, No.0-A6, No.0-A7, No.0-A8 など→民族自尊心の発露。No.0-A5 など→中国が見下されているように認識している。No.0-A10 など→愛国心の発露。⇒民族自尊心、愛国心はみな相手に固定観念による発言をされた時に触発され、

	<p>生じたのである。</p> <ul style="list-style-type: none">・「国家アイデンティティ」は、他国や他文化と比較するときに生じる自国、自文化の一員としての自己認識である。他国、他文化に否定、批判されたときは、一般的に抵抗感を持つと見られる。中国語の「民族自尊心」は、民族（中華民族であり「国家」と同様に扱われる）の尊厳と民族の利益を守ることと深くつながり、そして「自分」と「民族」を1つにする一面を持っているため、「国家アイデンティティ」と比べて、情意的側面を持っている。「愛国心」とは、自分の国家に対し、愛着や忠誠を抱く心情であり、それは、また「民族自尊心」と表裏一体の関係である。
--	--

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (14)	接触条件の不備
定義	接触の相手がいなくなったり、接触の場がなくなったりしたため、安定的に接触できる条件が整わなくなり、異文化接触の維持が難しくなること。
具体例	<p>No.4-10 他工作调到韩国去了。</p> <p>No.4-17 但是中间不是连续的，包括了两家店，有一家中间闭店了。</p> <p>No.10-7 因为他比较忙，总计也就三四回，之后就没有了。</p> <p>No.15-14 嗯，〇〇老师 [日本老师] 也是前几次来后来就不来了。</p> <p>No.16-6 不是说非常的常态性，因为日本留学生首先数量不是说很多，另外一个就是，他们那边会有自己的事情，并不是说特别的常态，相对来讲比较常态的可能是学院的一些社团活动。社团活动我在大二之前参加过，然后大三之后就再也没有过了。</p> <p>No.17-2 挺愉快的，但说实话没有什么印象，主要就是介绍学校里这是什么，今天吃什么，这是什么东西，然后吃完了他们去上课，我们去上课，就这种感觉，也没有什么深厚的友情，就是完成任务的感觉，回来也没……。之后也没有什么联系。</p> <p>No.20-2 就是对方也很忙，然后因为我也是课很多，又有各种考试，所以后来就不联系了。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.4-10、No.10-7、No.15-14、No.20-2→接触の相手がいなくなれば、接触の条件が整わなくなる。No.4-17→店が経営難などの原因で閉店した場合、接触の場がなくなり、その場での接触が続けられなくなる。⇒「接触条件」は、接触の相手、接触の場を指すものと理解できる。 ・ “社团活动我在大二之前参加过，然后大三之后就再也没有过了” (No.16-6) →「部活」という接触の場がなくなったら、その場での接触が持続できなくなる。→日本語学部による「部活」に対する後続支援が求められる。 ・ “就是完成任务的感觉，回来也没……。之后也没有什么联系” (No.17-2) →接触の相手、場がなくなる。→大学、日本語学部には、「交流会」を実施した後の、学習者の異文化接触持続に対する後続支援が求められる。 ・ “然后因为我也是课很多，又有各种考试，所以后来就不联系了” (No.20-2) →〈学業重視による接触の一時的放棄〉、〈あきらめ〉に繋がっていく。

概念名 (15)	日本語の活用についての期待と実際とのギャップ
定義	日本語の活用を期待していたのに対して、接触の場では日本語が期待ほど活用できず、かつ、そのわりに時間などのコストが高いなどのことも生起するため、期待と実際の間ギャップが生じること。
具体例	<p>対極例：</p> <p>No.1-17 下了课一起回来的路上会用日语聊天。和 [汉语教室的] 学生们也一起去吃过饭，过程中也会用日语。挺锻炼人的。</p> <p>No.2-20 后来○○○ [同学名] 给我介绍一个日本女留学生，汉语说得老好了，和她在一起也用不上日语。</p> <p>No.4-18 而且后来觉得不是特别能锻炼口语，心里想去语言学校 [汉语教室] 兼职。(中略)。因为忙起来的时候没有时间和客人用日语说话。</p> <p>No.5-4 没有什么就是深的接触，就是无非就是打一个招呼，然后送走客人，然后点个菜，很简单地就是普通的交流，没有深层次地讲。</p> <p>No.5-5 [I: 为什么停止了昵?] 就是挺辛苦的，而且给的工资也低。</p> <p>No.7-1, 2 三个人在一个日料店 [打工]，然后另外一个人在别的日料店。就都在日料店兼职，后来就都不干了。[I: 为什么?] 怎么说呢? 就是它不像那种，就是有的人去做那种给日本人讲课的那种家教，挣得会多一点。像我每天晚上去三个小时，就是6点到9点，然后每个小时挣十块钱，就觉得太辛苦了，然后就算了吧，也没有时间学习了，感觉就有点累，然后就都不干了。没赚很多钱，然后也觉得没有什么收获。根本没有时间去让你去学跟日本人交流什么的，因为活特别多，就新来的嘛，肯定就都让你干活。然后就，就三个小时连轴转，就也没干啥，其实就只干活了，然后就放弃了。</p> <p>類似例：</p> <p>No.13-3 然后下个学期以后，大家因为好多人觉得累，然后就放弃了。(中略)。就是大家可能觉得就是有自己的想做的事，有自己的安排和计划，可能不想跟着老师的节奏走。</p> <p>類似例：</p>

	<p>No.15-13 还是来参加的人太少了，经常不知道干嘛。办了几次人太少了，就开不起来了。所以也没什么参考性质。前半学期新大一还没来的时候有几个每次都来，大一来了之后大二的就不来了。大一的又有几个每次都来然后到大二就不来了。[I：你觉得为什么对大二的没有吸引力了呢？] 因为是面向大一讲一些大二早就知道的东西吧。日本事情课上差不多都学过的。另外就是我们这届途中退出的特别多，到大三就全都退了。</p> <p>No.16-7 但是跟日本人的来往的话，主要是面试的时候比较多，工作[实习]的时候跟日本人来往就很少了。因为我们当时的主要工作是虽然说是日语相关的工作，但我们能做的工作都属于比较简单的工作。我觉得一般大连这边的日企应该不会把特别简单的工作交给日本人来领导，大概就是一些30岁都没到的[中国人]，但是他们日语讲得都非常好，而且比较年轻的。跟他们有的时候会有一些[日语]来往，但是这方面的交流并没有成为必需品，有的时候讲不明白的话，直接想想用汉语去讲就可以。有的时候没有这个力量来压着你，根本就不会想去用日语来讲，特别是我想讲又讲不了那么清楚，这种时候肯定不会去想用日语。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ “后来○○○[同学名] 给我介绍一个日本女留学生，汉语说得老好了，和她在一起也用不上日语。” (No.2-20) →日本語をアウトプットできるという期待を持っていたが、実際、相手とは日本語があまり使用できず、その間にギャップが生じた。 ・ “因为忙起来的时候没有时间和客人用日语说话” (No.4-18) →日本語をアウトプットできるという期待を持っていたが、実際、「日本料理店」でのアルバイトは、日本語を使う時間がなかった。日本語を十分にアウトプットできる例があるか。→はい。No.1-17が語ったように、日本語が多く使用でき、満足した。 ・ No.5-4→簡単な挨拶だけで、十分にアウトプットできない。 ・ No.5-5、No.7-1,2→待遇がよくないわりに、代価も大きい。「外部実用価値」が得られないうえに、「代価」が高いと判断すれば、その接触を放棄しかねない。 ・ “大家可能觉得就是有自己的想做的事，有自己的安排和计划，可能不想跟着老师的节奏走” (No.13-3)、“因为是面向大一讲一些大二早就知道的东西吧。日本事情课上差不多都学过的” (No.15-13) →期待が叶えられるが、代価が大きいケースの類似例である。 ・ No.16-7→日本語の使用が必要ではないため、実際は期待との間にギャップが生じた。 ・ No.2-20、No.4-18、No.5-5 など→<ツールとしての日本語のアウトプット>や<ツールとしての日本語の活用による目的達成>という【動機づけ】を持っている

	るからこそ、＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞が生じるのである。
--	---

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (16)	学業重視による接触の一時的放棄
定義	教室内での日本語学習、将来に備えての日本語以外の知識の習得などを意識し、時間的バランスが取れないと感じたとき、学業や知識の習得を優先的に考え、異文化接触を一時的に放棄すること。
具体例	<p>No.1-14 她没时间，主要是考研还是干嘛的。就是现在有的要考研要找工作了，现在可能她们马上就要实习了，没有那么多时间了，没有时间。</p> <p>No.1-18 [I: 也做了比较久。后来为什么辞掉了呢?] 我也去准备日语等级考试了一段时间，(略)。</p> <p>No.4-1 大三上是想好好备考N1，就没去。</p> <p>No.4-19 [I: 然后你说○○当时想辞掉在汉语教室的工，她是因为什么呢?] 她因为要准备考研。</p> <p>No.5-5 [I: 为什么停止了呢?] 因为那个工作到后来就是忙起来了，要考级啊，要干嘛的。</p> <p>No.7-17 大三上是想好好备考N1，就没去 [利用日语打工] 。</p> <p>No.8-5 后来寻思寻思，想好好学习。所以后来就没去 [日本料理店] 了。这学期我想去来着，都马上就要去了，但是后来我想了一下我报了四个考试，我觉得分不开那个时间，怕两头都弄不好，我觉得我就先学习为主，毕竟还在上学。如果我这学期能把所有日语的考试，专四、N1、还有英语都考完的话，我大三轻松一点能再找兼职。</p> <p>No.13-5 但是因为我就是考试，然后不停的有考试，所以出来玩的机会也比较少。</p> <p>No.13-6 因为后来一直就有是各种事。特别忙，然后嗯，就没有时间去，然后原来去过一两次 [日语角]。</p> <p>No.20-2 就是对方也很忙，然后因为我也是课很多，又有各种考试，所以后来就不联系了。</p>
理論的メモ	・No.1-14、No.4-19→大学院に進む準備のために異文化接触を一時的に放棄する。

・No.1-18、No.4-1、No.5-5、No.7-17、No.8-5→控えている資格試験が多かったため、学業を優先して、接触を一時的に放棄する。

・“我大三轻松一点能再找兼职”（No.8-5）→楽にならなければどうなる？→＜あきらめ＞になるかもしれない。

・“因为后来一直就有是各种事。特别忙，然后嗯，就没有时间去，然后原来去过一两次 [日语角]”（No.13-6）→＜日本語の活用についての期待と実際とのギャップ＞？＜学業重視による接触の一時的放棄＞？→＜学業重視による接触の一時的放棄＞である。両者は似ている面があるが、前者は消極的で、後者は積極的であることで異なる。協力者「No.13」は、異文化接触に積極的であるが、学業を優先に考え、接触をやめざるを得なかった。＜学業重視による接触の一時的放棄＞である。

概念名 (17)	意思疎通をはかるためのコミュニケーション上の工夫
定義	意思疎通をはかるために、言語・非言語に関わるストラテジーを利用するなどして、鋭意努力すること。
具体例	<p>No.1-3 你只要慢慢地给他讲，然后啊，这次你发现说得不对，回去好好准备一下，下次就一下能说出来了。</p> <p>No.1-4 刚开始的时候就是想多说一点，觉得说得越多他可能越明白。</p> <p>No.1-4 就是也是跟学生的水平就是不一样的，有的学生他可能零基础，我就说得多一点。</p> <p>No.1-13 就是嗯，现在就是有的时候刚开始可能大一大二的时候就是用课堂学的那种，问题就直接就回答了，后来我就会看比如说我之前教过的主妇，她怎么跟我说的话，后来我会再跟别人就是模仿她那么说。</p> <p>No.1-17 [汉语教室] 讲课时日语汉语都有用，解释的部分用日语较多。[I: 嗯，你说是为了对方听得更方便是吗?] 他们的汉语水平没有很高，几乎是日语解释。</p> <p>No.1-17 我还教过一个备考HSK6级的，他应该是我学员里水平最高的，也是得日语解释。</p> <p>No.1-17 在备课的时候也会想这个怎么用日语说对方能懂。</p> <p>No.1-18 和〇〇太太交往的过程中也是用日语比较多。因为汉语对日本人来讲，也是有一定的难度，有些在中国已经生活了3、4年的日本人，想要用汉语正常交流也是很难。而且她们很忙，每周学汉语的时间也只有几个小时，在了解了这些情况以后，我会用日语跟他们交流。</p> <p>No.2-1 然后慢慢就觉得一些就是表达，比如特别日本語らしい的那种说不出来，但是用简单的单词啊什么的，一说他就明白了，就是慢慢地就敢说了。</p> <p>No.2-2 一般跟他们就是交流的时候，除了课以外内容几乎都是用日语。说汉语，他们也听不太懂。</p> <p>No.3-3</p>

就虽然也有一些词听不懂，后来我说什么，然后就一边查手机，但是我基本感觉会话都挺好的。

No.3-4

那一个就是一个词一个词蹦吧，那没办法，就是聊到那里了，不能就停下了，不过他也能理解，日本人也能理解，大概能听懂意思是什么，他就会拿日语再说一遍。

No.3-10

嗯，但我没有说请你说普通话。他真的说话特别快，我说你能说慢一点吗？我说我的日语也不是特别好，慢一点吧？然后但他还是很快，那我也没办法，我不能说是你强烈要求人家。后来我就说“もう一度お願いします”，那他就再说一遍了。

No.3-14

不算是有意识，就是不自觉地，自然而然地。而且也便于他们理解我所讲的意思。

[I：对孩子呢，全是日语吗？] 是的，全日语。他们的汉语不太好。 [I：有三个小孩儿学英语是用什么语？] 用日语解释。

類似例：

No.4-1

中文好一些的我就中文说的多一些，程度不太好的学生我就中文说的少一些。

No.5-7

那和他们接触之后就是觉得哪一些方面可能需要注意一下，比如说嗯怎么说，就是有的时候就是一些语言的用法吧，就可能他听得懂听不懂，你知道哪一种说法他可能更能理解一些。这些方面。就是因为我主要是上课，坐着说话主要是靠说话，就是语言方面可能交流方面更能让日本人听得懂，就是他们更能理解我说的想表达什么意思。

No.7-18

如果听懂一点点会让他再慢一点、说一遍。

No.9-6

嗯，这种担心肯定是会有的呀，怕说错呀，也怕怎么样，但是你还是得说呀，就是你虽然听不懂也是，就是，你就问吧，不耻下问了，你不问怎么进步啊，就算现在也是跟他们日本人说话的时候，也是我自己能感觉到。唉呀这个，我说这个话说出来肯定不是地道的，就有那种感觉，但是就是问完了之后，他们会犹豫一会儿，然后之后我再给他们解释一下我想问的是什么意思，然后他们再说，然后最后问一遍，嗯，就是不要不要害羞吧。

No.10-6

教汉语的时候，一个单词解释不清楚，就需要查字典，用字典的那个解释他才明白，或者是说换一个词。

No.12-7

	<p>嗯，和外国人交流都差不多吧，都需要有肢体，其实主要就在肢体语言和和的表现动作上。</p> <p>No.12-9</p> <p>但是因为正常和老师交流的时候，老师都会嗯，用汉语辅助一下，至少还能好一点，前后意思，然后自己捋一下，然后再根据那个词的意思，然后就能推出了，大概讲的是什么呢。</p> <p>No.13-7</p> <p>然后，○○老师因为她属于在中国待了很长时间，所以有的时候跟她实在说不明白了，加两个汉语也是可以，她也能听明白，她其实都能听明白。</p> <p>No.13-8</p> <p>说完话以后我可能我自己会琢磨，事后我会琢磨，反正就是想一我这话到底说的有没有问题，后来恍恍惚惚，然后觉得啊，应该是说错了这样的，然后以后再改。</p> <p>No.16-9</p> <p>我觉得跟日本人沟通的时候，措辞上会需要更注意一点。但是这个注意有的时候不见得是出于文化需要，而可能是单纯的是对这种文化的交流需求还不是特别的清楚，就需要想一想，怎么说这个话最合适？</p> <p>No.18-6</p> <p>一开始的时候 [日语] 什么都不会，就张不开嘴，迈不开腿 [笑]。就是我表达的意思他听不懂，现在也有这种情况，但是比以前好的多，现在就是他不懂的话我就会换一个简单点的方式说。</p> <p>No.19-4</p> <p>因为日本人无论如何看到我是一个中国人之后，说话方式都会改变，所以大部分情况下是能听懂的，但是也有听不懂的词，这个时候就会问他，或者是他换一个方式说。</p> <p>No.19-4</p> <p>尴尬倒是不会，就是有的时候没听懂，没听懂的时候我也会问他，也不会在那里，因为我比较愿意说话。</p> <p>No.19-5</p> <p>开始的时候我也不太敢说话，也是从○○老师的课开始我才敢说话的，后来的时候因为比较能说嘛，也不管说的是对还是不对，先说了再说。</p> <p>No.20-9</p> <p>含混带过，这样的哈完了，通过下一句话来判断刚才那个什么意思，这样的。</p>
理論的メモ	<p>・ “后来我就会看比如说我之前教过的主妇，她怎么跟我说的话，后来我会再跟别人就是模仿她那么说” (No.1-13) → 日本人相手の真似をする。</p>

- ・No.1-17、No.1-18、No.2-2→中国語教室での接触の場合、日本語専攻大学生は、日本語と中国語を両方とも利用するが、相手の中国語がコミュニケーションできるレベルに達していないとき、日本語を多く用いる。→相手の中国語がコミュニケーションできるレベルに達した場合どうする？→No.4-1 が語ったように、中国語を多く使用する。→接触の場において力関係が働いている。その場での対人関係を維持するために言語の選択を行う。
- ・“但是用简单的单词啊什么的”（No.2-1）→簡単な言葉を使用する。
- ・“一说明他就明白了，就是慢慢地就敢说了”（No.2-1）→＜意思疎通するためのコミュニケーション上の工夫＞を施せば、話せるようになる。＜意思疎通するためのコミュニケーション上の工夫＞は、コミュニケーションの不安を軽減させられる。
- ・No.3-3→検索ツールを利用する。
- ・No.3-10、No.7-18→相手に協力を求める。
- ・“就是不要不要害羞吧”（No.9-6）→恥ずかしがらずに相手に確認する。→では、恥ずかしかったらどうなる？→不安を感じる。＜コミュニケーションの困難＞になる。
- ・“或者是说换一个词”（No.10-6）→言葉の借用というストラテジーを利用する。
- ・No.12-7→非言語コミュニケーションを活用する。
- ・No.12-9、No.13-7→接触相手が助けてくれる。→＜接触に対する相手の関与姿勢＞に繋がっていく。
- ・No.13-8→コミュニケーション後の内省をする。
- ・“现在就是他不懂的话我就会换一个简单点的方式说”（No.18-6）→別の表現で言い換える。
- ・No.20-9→ごまかして、前後の文脈で判断するストラテジーを用いる。

概念名 (18)	対人関係の構築への努力
定義	接触相手とよりよい対人関係を構築するために、責任感・誠意・共感・積極的、柔軟、寛容な態度などの認知面、および、共行動・支援行動・国籍で差別しない接遇の行動面の双方から努力すること。
具体例	<p>No.1-4 然后拼音啊告诉怎么发，告诉他发音的技巧，就是教的时间长了我也有技巧了，就是怎么讲怎么讲怎么告诉他，他可能一下就懂了。</p> <p>No.1-4 还有有的时候就是别的情况下可能没用，但是教日本人比如说这个语法我给他们讲过，举过这几个例子，就是感觉这个，嗯，比如说助词那个“得”，“玩儿得好”、“吃得完”、然后“听得懂”这几个例子，我就能一下想出来，然后他们一下收获挺多那种。就教授法方面，就跟老师经常备课，然后下次给学生们讲就是一下，按套路来。</p> <p>No.1-10 一个月左右，我当时记得是她用银行卡，然后转账，她买了一个那个就是有机的蔬菜，给那个人转账。(中略)。然后我跟她去银行，然后之后我们两个去吃饭的，然后还聊了挺多天的。</p> <p>No.1-10 嗯，然后就是相处还是就是按自己平常跟中国人那种相处，也进行得挺顺利的。</p> <p>No.1-11 比如说现在中国它哪方面特别发达呀，像现在不是摩拜单车流行吗，我要是这方面知道多就是也多告诉他们，嗯，也挺好。</p> <p>No.1-12 嗯，然后这个我不知道是不是日本人喜欢，反正我觉得他们肯定有就是遇到困难的时候挺多的，我就是能尽量解决，就是从头到尾，我也不会怕麻烦，就是能够帮他们解决这种事情还挺多的。</p> <p>No.1-14 我想我主要是能够为他人着想吧。</p> <p>No.1-16 平常跟谁接触不是都是这样的？就是跟谁都一样的。</p> <p>No.1-18 有的我觉得她能听懂的，或者之前上课讲过的，会故意用汉语问她，也算是测试一下她学没学会。</p>

No.1-18

在决定去日本留学以后，给她上完最后一节课后，我把以前的合照打印出来给她，告诉她虽然我不教她汉语了，但有什么不懂的随时都能来问我。

No.2-2

我们内容也不一定说非得就讲课的那种，有时候也讲了些什么中国的事啊，日本的事，就比较自由。

No.2-5

就是跟他们见面、给他们讲课、每天备课啥的都挺认真的。

No.2-12,13

嗯，我感觉没有什么规定的。就是比如说第一节课，你刚跟他见面肯定没有什么特别多好谈的。就是讲课，然后你慢慢慢慢相处大概就能知道这个人的性格开不开朗，就有的日本人就像他就自己愿意跟你聊。然后有的日本人就是一门心思地就讲课。也根据人。

No.2-15

我觉得如果你很认真，然后你也是就是将心比心吧。我觉得无论哪一个国家这一点，如果你认真地对待，你也是真正地是心照不宣地对待他们，他们应该能感觉到。

No.3-1

就是在对日本人交往这方面，我感觉我比较开朗一些、主动一些。就像平时 [汉语] 上课的时候，聊天呀，都能够聊得比较开心，有一些话题。

No.3-2

就是因为有的上课时间比较长，有的是2个小时有的是3个小时，不可能一直都是看课本。课本上的内容也比较枯燥，我们就聊一聊天啊，比如说讲到这里了，突然想到一个话题比较好玩比较感兴趣，就问他一句，然后两个人就来回一问一答这个聊起来了。

No.3-2

但是我就是嗯没有就是不开心怎么样，我就觉得啊可能就是你是开玩笑或者怎么样，但是没有多心。但是我觉得这样对于初次见面的人来说那样说不太好。(中略)。要不然如果想的不好，感觉对自己的心情也不好。所以我觉得还是想得开一点。

No.3-6

以前都是每天都上课前认真备课，天天备课啊，这个词怎么说，该说什么呀？

No.3-7

其实有就是像我们传统观念会想啊，去人家上课，而且是个男的，是日本人，可能有点想法。但是我就没有想那么多。我是说想那么多干嘛，多累啊，也不会那样的。人家都是正经那上班的人。

	<p>No.3-10 或者就是讲到这个我们突然就聊这么两句，比如说我们中国怎么样啊，也有这个东西啊。</p> <p>No.3-11 要尊重人家。</p> <p>No.3-12 嗯，就是和小孩上课的时候就是有点最累的就是他们有的时候上课就容易困，我教那个就是个5岁的小孩，他也学中文，有的时候就是因为小孩可能会多动，就是怎么样抓住就是他感兴趣的，比如做游戏啦唱歌啦来激发他的兴趣。</p> <p>No.3-14 [I:用汉语交流是因为觉得对方是学汉语的所以为他考虑是吗?]是的。而且他们也想多用汉语交流，锻炼口语。就像我想锻炼日语一样[笑]。</p> <p>No.3-15 微信上，有时候相互问候。或者有什么问题了，就问一下。</p> <p>No.3-15 现在微信上都会相互问候生活，彼此近况。会社员的话就是我先发送节日祝福。</p> <p>No.4-11 我可能会有意识地，我觉得如果是说交往过程中的话，比如说中国人也一样，比如说我是一个北方人，我要认识这这样一个朋友，他是南方人，我觉得交往过程中去多考虑那个他的一些东西也是很重要的。就是交往的时候，就都大家都是互相考虑吧，对，如果就各说各话，那就不叫交流了。</p> <p>No.4-12 有时候一开始没意识到，因为有时候会把日语用错，然后他们[日本人中国语学习者]就那个就会笑，后来我觉得自己欸，这玩意也挺有意思。嗯，他们有时候也会给我讲笑话，就是反正讲课也挺无聊的，就讲笑话呗。</p> <p>No.4-13 我比较喜欢把人往好了想。那就是说其实是讨厌的人的话，你也不会让这个矛盾冲突，也会想办法把大而化之之大而化小。不搭理。</p> <p>No.6-1 他们基本上好多都是汉语零基础，然后就是简单地问一些问题，比如说：你的兴趣爱好是什么？然后平时喜欢听歌吗？或者你平时喜欢看什么样的电视节目之类的。通过这样的，然后发现他对哪些比较感兴趣，就是这样，通过他看的电视节目，比如说是哪种类型的就能发现他内向或者外向的。</p> <p>No.7-17 如果是比较健谈的学生，会有意识地说[日语]。</p> <p>No.7-18</p>
--	--

对方如果比较健谈我会主动讲 [日语]。明显感觉他不咋愿意听，我就不说了。

No.7-18

有的人对中国的外卖还有滴滴一些新的东西比较感兴趣，我会教他使用。

No.9-3

大二上学期的时候，当时不是○○A老师跟○○B老师刚来吗，然后当时○○B老师一来就跟我们关系处得非常好，就跟他一起出去吃饭哪什么的。

No.9-6

不经常，主要是出去吃饭。(中略)。○○A老师是AA制，○○B老师总是请客我都不好意思，然后之后就是○○B老师请一次，我们请一次那样。

No.9-6

嗯，是也就偶尔的时候就吃了两次饭嘛，当时不是很频繁的那种。

No.9-8

就是不要表现得太自我吧，就是你就算有什么想法，你不要说出来，就顺着他的意思来呗。

No.9-8

比起自己的意见吧，我比较喜欢听别人的意见，就是尊重一下别人那样，嗯，不想让别人感到不愉快呀，那种感觉。

No.10-5

就第一次见面时聊了很长时间，平常的话，自己感觉也不太方便打扰人家。

对极例：

No.10-6

也就是过节的时候发条问候。我这个人从小到大对朋友也不是很主动去追求的，就追求一种自然而然的吧，感觉强求来的都不是特别好。

No.11-6

我们学校这些日本人好多都比较喜欢运动。要是一起玩，就能成为朋友。[I：是吗？你是怎么判断出他们挺喜欢运动的？是偶尔的机会吗？]今年新来了两个比较年轻的留学生。他们来了以后就问我各种体育社团的事，我还会一点羽毛球，然后跟我玩的时候，他们好像就挺喜欢的感觉。

No.11-6

因为日本人毕竟有他们的特点，我们也不太了解。要是遇到什么不舒服的地方，那肯定要抑制自己，再慢慢观察一段时间，说不定就有新的变化。

No.11-7

几乎都认识，时不时的都在一起。有一起写作业的同学，就是单独学习，然后一起运动的，还有一个想当老师，是教日本留学生汉语。他在辅导别人，他自己来的时间比较长，汉语也还不错，就辅导着别人。那个时候我也会去帮忙。(中略)。反正自己也跟他们在一起学到不少，我觉得能帮的就尽量帮助，会比较安心。他

们毕竟来这还是学汉语为主的。我跟他们玩太多的话，就觉得有点捣乱的性质，能多帮助他们一点我会比较安心。也是从这个学期，这两个比较年轻的开始。之前那些认识的都 30 多岁，上学期就跟他们吃吃饭聊聊天之类的，其实要叫他们一起玩他们也挺高兴的，上学期都没发现。这学期通过新来这两个人才发现的。之前比较钝感。我现在在改变。

No.13-5

我觉得和正常中国人交流时就是一样的，说话最起码不能让对方觉得跟你说话不高兴。

No.17-1

一个是因为他比较年轻，就是 30 来岁的样子，他当时刚来我们学校，周围环境也不熟悉，可能帮他去超市买东西，就这样的一种接触。

No.17-6

也是根据学生的水平，他如果能用汉语交流，这个我觉得也是一个职业操守的问题，就是虽然我是一个日语专业的学生，按理来讲我是想尽量用日语，就是练习我的日语口语，但是我在这里开始了上课时间，我是汉语老师，他们来交钱上我的课，我觉得我应该尽量用汉语，嗯所以如果这个学生展现出我觉得足够可以用汉语跟我交流的这个能力，我就会调整到汉语模式，如果实在不行了，或者说到了讲解语法的时候，那我就会用日语来说。

No.18-5

在上课之前的话我们会用日语唠一会，然后上课之后就看他水平，如果他水平是入门的话大多数会用日语讲，如果他汉语水平高的话，他也有这个需求嘛，你需要用汉语和他交流。

No.18-7

有一次，我有两个学生是连着上课的。比如前一个学生 10 点下课，第二个学生 10 点上课，然后我给第一个学生上课时上的特别投入，就上超了，没看表。第二个学生就在教室外面坐着等，他就往教室里看看，确认一下是不是自己的老师还没有来，他就看到了我，我当时在上课就和他对视了一眼，因为我当时在上课嘛，就没有和他打招呼，我就是瞅了一眼然后继续上课，因为我第二个学生说话特别直，就和普通的日本人不太一样，也有可能是他生气了，当时我出来之后已经上课过去十分钟了，也没看表，我就挺不好意思的，就和他说了“太不好意思了，我上超了。”他就很直接的说“先の先生がつめたいです。”当时我就傻眼了，我就说“什么时候？！”他就说“有点受伤。”我说“不好意思，我当时在上课就没和你打招呼。”当时他表情都有点不对，我就可难受了，我真的没看见时间，是我的错。后来回去我又和他在微信上道了歉。（中略）。开始的时候和他道歉，后来我又调节了一下气氛，他就好一些了，（略）。

No.18-7

	<p>我这个人可能性格比较好吧，他们如果对一件事的看法和我有冲突的话我不会立即去反驳他们，会比较温和的处理问题，所以如果有冲突的话，我不会以特别激烈的形式表现出来，虽然我不擅于言谈，但做事的话会比较踏实吧，所以和他们相处起来弥补了表达这方面的不足。</p> <p>No.18-8</p> <p>换下一问题 [笑] 对，就是缓解一下当时的气氛。有的时候他们说到一个话题我不知道怎么接下去的时候，我也会说“はい、次に行こう。”</p> <p>No.19-5</p> <p>因为我们当时上课 [汉语教室] 的时候是一对一的上，一个半小时左右，也不能说两个人没有话可以说，必须要找一些话题来说。然后找这些话题的过程中，也是成长了。</p> <p>No.20-10</p> <p>我觉得主要还是人与人之间嘛，不管是日本人啥的就是人与人之间。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.1-4、No.2-2、No.2-5、No.3-6、No.3-12、No.17-6 など→責任感をもって日本人相手に中国語を教える。 ・ “然后我跟她去银行，然后之后我们两个去吃饭的，然后还聊了挺多天的” (No.1-10)、No.17-1→相手を助けることで対人関係を構築する。 ・ “然后就是相处还是就是按自己平常跟中国人那种相处，也进行得挺顺利的” (No.1-10)、No.20-10→国籍で差別しない接遇をすることで対人関係を構築する。 ・ No.2-12,13、No.18-7→誠意をもって人と接触する。 ・ No.2-15、No.3-14、No.4-11、No.9-8→相手との共感を重視し、感情を取り入れることで対人関係を構築する。 ・ No.3-1、No.3-15、No.3-15、No.6-1→積極的な対人態度をとる。→積極的でない態度をとる人はいないか？→いる。No.10-6 は相手との興味・関心・態度の類似を求めるが、無理には求めない。消極的でない。「誠意」を持って対人関係を構築すると考えられる。 ・ No.3-2、No.3-7、No.4-13→積極的で寛容な態度をとる。そして、このような態度で<接触上の文化的差異>に対応する。 ・ “就很温柔。然后也挺开朗，我开个玩笑他们也能懂” (No.4-12) →接触相手の関与姿勢が関わってくる。<接触に対する相手の関与姿勢>に繋がっていく。 ・ “对方如果比较健谈我会主动讲 [日语]。明显感觉他不咋愿意听，我就不说了” (No.7-18)、No.13-5→接触の中で相手を意識しながら自身の行動を調整する。 ・ No.9-3、No.9-6 など→接触相手と共行動をとる。 ・ “就是不要表现得太自我吧，就是你就算有什么想法，你不要说出来，就顺着

	<p>他の意思来呗”（No.9-8）→相手に合わせる。これはいいか。→相手の好感を得るのにいい面があるが、形式上のコミュニケーションにとどまる面も考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none">・ “所以和他们相处起来弥补了表达这方面的不足”（No.18-7）→<対人関係の構築への努力>は<コミュニケーションの困難>の解決に役立つ。・ No.18-7→<対人関係の構築への努力>は<接触上の文化的差異>の解決に役立つ。
--	--

概念名 (19)	話題の選択・継続に関する工夫
定義	適切な話題を探索すること、および、話題をどのように継続するかを工夫すること。
具体例	<p>No.2-2 我们内容也不一定说非得就讲课本的那种，有时候也讲了些什么中国的事啊，日本的事，就比较自由。</p> <p>No.2-11 [I: 你觉得问多大岁数，问家庭的话可能反而比较好一些?] 就是我觉得好像这样聊聊，就是觉得能让关系变得近一点。但我也不会跟他聊你跟你妻子关系怎么样。</p> <p>No.2-11 [I: 你不问他工作上的事对不对?] 因为我感觉工作上的事会不会有一些隐私性……</p> <p>No.2-12 我不会问一个人你结没结婚怎么样，比如说我说你单身赴任? 然后他就是嗯。噢，那他说如果带着夫人的话，那他应该就是结婚了，然后有的时候聊聊聊，就会说，比如说有时候赶上什么节日了呀什么的，噢，就问日本怎么怎么过的呀，你们家怎么过呀，就有时候谈到孩子几岁了几岁了，就慢慢慢慢就知道了。噢，太隐私性的问题不问，除非他自己说。</p> <p>No.2-13 然后就根据人吧。有的人他就像这个事情有一段特别喜欢和你聊人生，他就愿意和你聊人生，问你咋想的，然后怎么怎么地。</p> <p>No.2-14 和他说的确实涉及了很多家庭上面的话题。还有的就是问他们一些日本的这个事儿，那个事儿啊的。就根据人吧，像有的人他就是喜欢学习，他就是看书，然后也不跟你聊别的，就是你说一句他就答一句说一句他就答一句。但是有的是跟你谈人生。</p> <p>No.3-9 我感觉和主妇聊天的时候就感觉聊得顺畅的时候啊，就是主要是开头以孩子为基础会比较合适。觉得孩子的孩子怎么怎么样啊，家庭怎么样啊，这样的。</p> <p>No.3-9 然后还有平时就感觉就聊天当中就对他就是个人隐私就是不要太多过问，就还是要上课的那种。(中略)。比如说更加细的一些方面，就是感觉涉及到他人隐私啦，</p>

就感觉不要再说。我也不太想就是说太多。假如聊天，我也就是说比如上两个小时的小课，嗯上了40分钟，我们可以聊上十分钟。

No.3-9

就是像就是说像聊天嘛，就是该说的说，不该说的就不要说。

No.3-9,10

嗯，但是嗯就是如果是上了挺长时间课了，相处的比较久了的话，就聊些别的东西。比如说那天上课就会聊起来，问她和丈夫是初恋吗？她说不是。就了解了她的初恋，聊起来就有些眼眶湿润的感觉。

No.3-9,10

一开始讲课的时候就是互相不认识嘛，一般就是由我来引导各种话题。最后，比如说上课，谈了很久，半年一年的话，3、4个月都是大家都比较熟悉的话题。

No.3-15

有的，比如最近日本很热，就关于这个也聊了聊，觉得她们挺“大变”的。[辛苦的表情] [I:是说热才“大变”吗？还是其他的？]哈哈，体感温度都40多度了，说热的受不了。我觉得她们“大变”。[担心的表情]

No.3-16

其次就是寻找一下彼此的话题点，由此可以展开深入的交流。特别是聊到对方感兴趣的话题，或者他的爱好。

No.5-12

我们就说一些可能是我说我的学校呀，然后会唠我的感情啊，女朋友啊，他也会比较愿意问你有没有女朋友？就聊一些比较私人的问题。然后他也会跟我讲他儿子他会说他儿子，他说他儿子跟我差不多大呀，然后说他儿子喜欢足球啊，然后问我喜欢什么，就是这些一些比较私人的问题啊，家庭啊、生活啊、感情啊，这些。

No.5-15

怕经常打扰人家人家也烦嘛。只是偶尔会问一问。就是说就有时候会问他们，假如说前两天广岛大学来，我问他们唉在日本人当中，广岛大学是一个怎么样的大学，咱们就觉得这个大学怎么样？他们觉得挺好，就是是很不错的大学，就是这样就是跟他们唠一唠那些有问题的会问。比如前两天他还跟我说说，那假如说你去了日本去了广岛，我们公司在那边有一个办事处，就说你有什么难处了，可以去那边找他们。然后我说啊行。

No.6-1

跟他教课教久了以后，我可能发现了他有些感兴趣的地方，我也会问一些问题，就是课下[汉语课]的时候，找到那个共同的话题。

No.7-18

[I:你都找什么话题?]就和课程[汉语教室中的课程]相关的。如果是购物一

类的会讲一下在中国的购物体验、网购啥的。

No.7-18

就课本涉及到的中国文化地理什么的，还有像是对中国明星音乐比较感兴趣的人，会聊一聊。

No.9-9

这个话题也是关于日本的问题嘛，所以他会非常有兴趣。他说他们当时日本人都是看那个新闻都是很高兴的感觉。（中略）。谈到这些话题的时候挺有意思的。嗯，他会跟你说他的想法，日本人想法嗯。

No.10-6

跨越语言这个障碍之后，需要的东西就是话题。我现在对日本了解的还不太多。接触的除了日剧也就没什么了，比如说日本流行的话题什么的，虽然可以把手机主页设置成日本雅虎主页，打开手机就可以看几条什么的，但是有时候也做不到。对日本流行的话题，对更深层的思维方式什么的了解的还不是很够。

No.15-6

我不咋喜欢运动……就这样聊不下去，没有共同话题了。但是那次碰到一个偶然碰到一个也喜欢看动画的，我们聊得很开心。

No.15-12

当时也是因为○○老师来我们日语角一起玩来着，然后我们聊的不多，但是确实聊过，就是说点关于北海道，还有兴趣爱好。

No.15-13

[I: 你会主动找话题吗?] 会，新发售的游戏之类的。

No.15-13

聊了挺多中国的事还有游戏的事。我跟○○还有他都玩游戏所以我们仨说了会游戏。（中略）。聊点游戏还有日常。

No.19-8

话题上来讲应该是能继续下去的，因为我比较能说，但是对方感不感兴趣来说，有的时候是真的不感兴趣。因为年龄不一样、时代不一样，有的时候还是会找对方感兴趣的话题来说，但是有的时候真的找不到一个能让对方特别特别感兴趣的话题，还是摸索着来。

No.20-9

比如说中国高考的时候就是有的，就是为了因为我们省人太多，所以报考的时候会户口移到别的省之类的。（中略）。个人喜好交流了一下。

No.0-A11

我心里寻思啊，他这个课讲完了聊点别的吧，缓解一下这个紧张的氛围。我就问我说你家里有几个孩子呀，他说有两个孩子，我说那是男孩还是女孩啊，他说我有一个女儿，还有个儿子。然后说我的女儿已经结婚了，当然心里：“唉？他的

	<p>女儿已经结婚了？”我说你夫人呢？怎么没跟你一起来呢？然后他就跟我说他夫人还是比较喜欢待在日本，然后就没跟他过来，然后聊聊他的家庭啊，聊到家庭以后，他给我一说他的家人以后我可能稍微有一点安心的感觉了。</p>
<p>理論的メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.2-2→日本や中国の事情に関する話題を選択する。No.2-11、No.3-9,10などは、よりプライベートな話題を選択する。 ・ “[I：你觉得问多大岁数，问家庭的话可能反而比较好一些？] 就是我觉得好像这样聊聊，就是觉得能让关系变得近一点”（No.2-11）、No.3-9,10→プライベートな話題を取り上げたのは、お互いの関係を近づけるためである。→<対人関係の構築への努力>は、<話題の選択・継続に関する工夫>に影響を与える。 ・ No.2-13、No.2-14→相手の取り上げた話題に合わせて話題を継続させる。 ・ “就是感觉涉及到他人隐私啦，就感觉不要再说”（No.3-9）→相手の感情を取り入れて話題を選択する。 ・ “一般就是由我来引导各种话题”（No.3-9,10）→積極的に話題を作る。 ・ No.3-15、No.3-16、No.6-1など→共通の話題を作ることで話題を継続させる。 ・ “但是有时候也做不到。对日本流行的话题，对更深层的思维方式什么的了解的还不是很够”（No.10-6）→異文化間知識の欠如によって共通の話題が作れない。→<異文化間知識の活用>に繋がっていく。

概念名 (20)	異文化間知識の活用
定義	教室内外で学んだ日本の社会通念などの知識を活用し、日中間の文化的差異を理解し、これに対応すること。
具体例	<p>No.1-13 就是就是还是平常多注重礼节吧，多注重礼节这方面。</p> <p>No.1-13 嗯，现在我感觉就是嗯，已经知道，就是就是教授，我有那个嗯，觉得自己那个方向有点明确了。就是嗯，就是因为也有这么长时间的经验了吧，可能就会越来越容易做到就是日本人比较接受的那种。往那方向贴近。</p> <p>No.3-7 他们就喜欢送礼物，就是比如说回日本啦，或者是去哪旅游了，都会带礼物回来，就是小点心啊，或者巧克力啊，或者是那种小钱包啊什么的。我觉得虽然不是什么贵重礼物，但是让我感觉挺开心的。而且我们在课上 [教室内的日语课] 也知道了这种日本人愿意送小礼物的习惯，所以后来我就也是回赠他们，比如说我寒假回来我就送他们那个奶酪啊什么的。</p> <p>対極例： No.4-5 就是我的学生 [学汉语的日本人学生] 在说一些否定中国的话的时候，我就是感到挺无力的，就是觉得哎呀自己就是知识太贫乏了，就是不知道该怎么解释。</p> <p>No.14-3 包括我在与他们约定时间的时候，也会注意不会迟到。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ “就是就是还是平常多注重礼节吧，多注重礼节这方面” (No.1-13) や “包括我在与他们约定时间的时候，也会注意不会迟到” (No.14-3) → 日本人の風俗習慣、行動様式に関する知識を接触の中で活用する。 ・ “而且我们在课上也知道了这种日本人愿意送小礼物的习惯，所以后来我就也是回赠他们，比如说我寒假回来我就送他们那个奶酪啊什么的” (No.3-7) → 教室内外から日本人の風俗習慣、行動様式に関する知識を得、それらを接触に活用する。 ・ “就是我的学生在说一些否定中国的话的时候，我就是感到挺无力的，就是觉得哎呀自己就是知识太贫乏了，就是不知道该怎么解释” (No.4-5) → 中国を否定する話を持ち出されたとき、どう対応すればいいかわからず、自文化を説明するにもできない無力感を感じた語り手は、それを「知識に欠けている」ことに帰着している。ここでの「知識」は、中国または両国の文化的差異に関するものである。中国または両国の文化的差異に関する知識が欠乏すると、<文化的差異について

	<p>の積極的な意見交換>が有効にできないことが窺える。反対に<異文化間知識の活用>は、<文化的差異についての積極的な意見交換>を促進し、<固定観念による文化摩擦>への対応にも役に立つと言えよう。</p>
--	---

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (21)	異文化接触の摩擦への回避
定義	日中間の歴史や政治などのようなデリケートな話題、相手の固定観念による中国・中国人に対する認識、日中両国の文化的差異に、回避や判断保留で摩擦を避けること。
具体例	<p>No.1-10 嗯，就是我们平常也没有就是针对某种就是当下那种实事问题进行讨论，就是特别长的讨论，平常也就是日常生活的聊天啊，这种简单的。</p> <p>No.1-10 我自己是没主动提出过，她当然她也没主动就是说过，这样的。</p> <p>No.2-12 反正尽量不要去谈敏感话题。</p> <p>No.5-8 话题方面的摩擦，就是可能像战争啊那种就比较敏感的话题，我一般会避开，就是不谈就是不说。或者说最近中日关系，有的时候会说唉中日关系不好，他说啊是，他就也不深聊，我就不愿意再深聊。</p> <p>No.9-7 也不算烦恼吧，就是在上课的时候就尽量不说这方面的话。(中略)。这样知道想法不同了，那我不跟你往这边说了。</p> <p>No.9-7 [I: 那你就也会因此而产生一定的想法，对他会有一些的想法吗?] 那倒没有，因为怎么说国家看国家的看法那都是早就形成了，那我们也改变不了啊，只要不直接冲突就行了。</p> <p>No.13-7 我觉得就是中国人的思维就是根深蒂固，他们的思维也是根深蒂固，只能说你注意着去说，尽量少，不能说完全没有。</p> <p>No.18-7 而且我们交流的时候会避开一些两个国家之间不同的地方，真的是有意避开，比如说政治问题，我有一次就谈到了政治问题，他会有意避开，我也会有意避开，我俩都不说。</p>
理論的メモ	<p>・“我自己是没主动提出过，她当然她也没主动就是说过，这样的”(No.1-10)、“我有一次就谈到了政治问题，他会有意避开，我也会有意避开，我俩都不说”(No.18-7) →接触の両側がデリケートな話題を回避するようにしている。→<接触に対する相手の関与姿勢>は、<異文化接触の摩擦への回避>に影響を与える。</p>

・ No.2-12、No.18-7→日中間の歴史問題の関係で、両国の歴史・政治などに関するデリケートな話題は、摩擦を引き起こしやすい。そのため、日本語専攻大学生は、回避のスキルを使用する。

・ “因为怎么说国家看国家的看法那都是早就形成了，那我们也改变不了啊” (No. 9-7)、“我觉得就是中国人的思维就是根深蒂固，他们的思维也是根深蒂固” (No. 13-7) →固定観念は、簡単に変えられないものと認識して回避せざるを得ないという語りである。その場合の「回避」は、やや消極的に見られる。では、積極的な回避があるか。→あると考えられる。インタビューデータにははっきりと現れなかったが、歴史・政治に関する話題は多くの要因が関わっており、そう簡単には解決できないため、積極的に回避の行動をとることが十分考えられる。

概念名 (22)	文化的差異についての積極的な意見交換
定義	誤解を解消し、自分の文化を理解してもらうために、文化についての説明を行って、相手と積極的な意見交換をすること。
具体例	<p>No.2-18</p> <p>然后接触好多日本人，他就问我为什么不想留在△△（城市）？有时候我就觉得△△（城市）人脾气不好，说啥都跟干仗似的。然后那个他们说不是所有的中国人都是这样？我说不是所有的中国人都是这样的，我说南方人挺好的，他们可客气了，有可能是△△（城市）人的性格。我说他说话那个方式也不一定他是坏人，跟他说话的方式就感觉给人一种压力。然后他说原来是这样的。然后就得把这个事啊和每个日本人都说一遍。中国人不是所有人都是这个样子，就不想让他们对我们有不好的印象。</p> <p>No.3-2</p> <p>我说唉那个 [放鞭炮] 是我们的习惯啊，因为图一个喜庆，嗯，就是传统的文化就是这样的。</p> <p>No.12-8</p> <p>[I：你会回避自己的一些主张见解去跟他交往吗？] 嗯，看情况吧，有的是需要回避的，有的就该说的时候还是要说的。嗯，不能一味地回避，我觉得一味回避就是太，嗯，就是太过于形式化了。</p> <p>No.18-7</p> <p>有的日本人刚来中国不适应就会说一些中国的不好的地方。[I：那这个时候你是怎么反应的？] 这个时候我就会说是有问题。比如说交通问题，他们说很多闯红灯的，汽车也不看红绿灯，开得特别快，他们会特别害怕。我会说是有点快，下次过马路的时候小心些，然后怎么怎么样。如果他们说的不对的话，我就会说也不是这样吧，有的时候不这样，也会反驳的。</p> <p>No.0-B2</p> <p>啊，我想起来了，他说中国东西都是假的的时候我说中国料理是真的。然后他说对。（中略）。因为当时生气，明明爱吃中国饭那我必须要强调中国饭是真的。</p>
理論的メモ	<p>・ No.2-18、No.3-2、No.18-7、No.0-B2→相手が中国の文化現象を固定観念で見ていると意識したとき、日本語専攻大学生は、積極的に文化説明を行い、相手に中国文化を理解してもらおうとするのである。原因は、“中国人不是所有人都是这个样子，就不想让他们对我们有不好的印象”（No.2-18）と述べたように、中国人に対してよくないイメージを持ってもらいたくないということである。日本語専攻大学生においては、相手の中国文化への固定観念を意識したとき、国家アイデ</p>

	<p>ンティティに気づいたり、愛国心を生じさせたりすることが見られる。</p> <ul style="list-style-type: none">・“不能一味地回避，我觉得一味回避就是太，嗯，就是太过于形式化了” (No.12-8) <p>→ 自国・自国文化を否定する話題を持ち出されたとき、回避し、自分の中で悩んでばかりいてはかえって真の異文化理解が得られない。そのため、接触中、どの異文化間スキルを選択するかは、コンテクストを見極めて適切に判断することが望ましい。</p>
--	---

概念名 (23)	異文化接触における客観的な姿勢
定義	接触中、日本・日本文化に対して寛容で尊重的な態度・知的な好奇心を持って、客観的に認識し、理解すること、また、中国・中国文化に対して、批判的な意識を持って客観的に認識し、理解することを内包する。
具体例	<p>No.3-11 有的时候就是看电视剧之后有那种感觉，但是看完之后就觉得那个是以前的事情。而且很多我感觉不是特别真实的吧，但是历史发生的确实是有，但是我觉得就是现在还是不太一样。</p> <p>No.3-11 我就说这是真的吗？真的会沉没吗？那他们那个或者一个国家不可能这么轻易地 [沉没]。但是可能就是嗯自然地理现象可能会有发生，地壳也是在活动嘛，但是我就是感觉我在有生之年应该不会吧，我就没想过。</p> <p>No.3-16 由于异文化的差异，觉得首先还是需要相互理解，相互认同吧。</p> <p>No.5-3 但是长大了之后像我登陆日本雅虎啊或者怎么样，就是看他们底下一些日本人的评论，我就会发现他们对于中国人没有太多好感，(中略)。确实看到那些评论，是中国人的话，都会觉得有点嗯，不太乐意，但是可能网上这些言论只是一部分人的言论吧，不代表所有日本人，但是看了还会觉得很难受。</p> <p>No.5-12 也有这样，他们有说就是可能中国人比较吵，然后会说中国交通比较乱，说这些问题。[I：那你当时怎么说的呢？] 我说这没办法，我说这些方面交通方面是确实是这些治安方面没有办法和日本相比。但是他们也会说中国的好，就是说这个的人他也会说噢中国现在发展真的很快，然后怎么样，也不会生气的，他其实说的确实是事实。</p> <p>No.5-12,13 [I：啊，就是不会因为这个你说我要保护我的国家，然后跟他争论这样的是吧？] 不会。[I：不会这样的，啊，就是也都是很客观地去看待。] 嗯，他说得很客观。</p> <p>No.8-3 我觉得文化不同肯定都有不一样的地方，当时也是觉得很新鲜，看一看他们是这样的。</p> <p>No.12-2 我觉得我对日本也不是特别不喜欢，就是可能没什么感觉那种，然后嗯，家庭影响</p>

也有吧，因为家里是以前是△△（城市）过来的，然后嗯，就是上几辈的时候，可能跟那个就是有点关系。（中略）。[I：你对日本人的过去的日本人的印象是什么样的呢？] 嗯，好像没什么印象，因为没什么接触，然后只局限于书本，我就觉得太片面。

No.12-8

我觉得很正常，因为每个国家情况都不一样，因为我们对他们也不理解，就觉得嗯，比如说他们那个啊，有时候就是比如说就拿过马路这个事情，嗯，我们可能就比较随意，中国式过马路，他们就是特别遵守那个规范。

No.12-8

如果除掉语言障碍的话，其实就是一个性格的问题，一个是性格，然后再一个，就是对他们文化尊重一下，彼此尊重一下文化就好了，我们各个文化就不一样。

No.14-4

而且我觉得这不单单只限于日本人，毕竟有的时候与中国人一言不合可能还会吵起来呢。就是大家互相理解的一个程度吧。

No.14-5

其实我觉得，假如需要我和别人相处得特别好的话这个过程也是十分漫长的，短期的话大家并不是互相知根知底互相了解的情况下，不仅是日本人，我们一样的中国人想要敞开心扉的交流也是一件很困难的事。

No.17-14

我觉得我是属于对这种事情看得还哪怕是从政治角度讨论这个问题，我也算比较看得客观公正的那伙人，我觉得，就能客观。（中略）。所以我觉得历史问题是历史问题，就是不管日本的政府是怎样的一个什么，我们是接触的每一个人每一个人每一个人对不对？所以我们不能把对于这个国家或者对于这个国家的这个政治方面的偏见带到这个人身上。

No.18-2

当时没有考虑那么多，就觉得那只是历史上的日本人留下的东西。嗯，那只是历史。

No.0-C1

其实并没有什么影响，网上的一些言论也是一些个别人的言论，就好比中国的网络喷子一样，其实这些人也不能代表所有日本国民的想法，所以我不会把“反中情绪”标签套用在所有日本人身上。而且很幸运，我碰到的日本人对待中国和中国人的态度都比较亲切友善，也不排除有一些是因为在中国工作，身边都是中国人，被迫装友善，实则反感中国人的。不管是哪种，在现实交往中，可能是日本人磨炼出来的人际交往礼仪比较好，并没有对交往产生什么影响。

No.0-D1

我们并不是像有的人一提日本什么又侵华又这个那个的，对日本有特别多不好的印象。我觉得历史是历史，不能相提并论，有些人还带着那种扭曲的心理看历史，我

	<p>觉得不行。而且学日语跟那个是没有关系的，我学日语不代表我觉得日本最好，就是学一门手艺，这也没有什么吃亏的地方。</p>
<p>理論的メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ “但是历史发生的确实是有，但是我觉得就是现在还是不太一样” (No.3-11) → 歴史と現在を切り分けることで日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に認識する。 ・ “但是可能网上这些言论只是一部分人的言论吧，不代表所有日本人” (No.5-3) → 一部の日本人と全体の日本人を切り分けて、日本/日本人を客観的に認識し、理解する。 ・ “我说这没办法，我说这些方面交通方面是确实是这些治安方面没有方法和日本相比” (No.5-12)、“也不会生气的，他其实说的确实是事实” (No.5-12) → 相手の中国の文化現象に関する認識に対して、批判的な意識を持って、自国/自文化を客観的に再認識する。 ・ No.8-3 → 知的な好奇心を持つことも、日本・日本文化を客観的に認識することに役立つ。 ・ “不仅是日本人，我们一样的中国人想要敞开心扉的交流也是一件很困难的事” (No.14-5) → 寛容な態度をとることが重要であると示唆している。 ・ “所以我觉得历史问题是历史问题，就是不管日本的政府是是怎样的一个什么，我们是接触的每一个人每一个人每一个人对不对？所以我们不能把对于这个国家或者对于这个国家的这个政治方面的偏见带到这个人身上” (No.17-14) → 歴史と現在、政治と国民の間でのコミュニケーションを切り分け、日中間の異文化コミュニケーションを客観的に捉える。 ・ “在现实交往中，可能是日本人磨练出来的人际交往礼仪比较好，并没有对交往产生什么影响” (No.0-C1) → 接触相手の捉える友好的な態度が日本語専攻大学生における客観的な姿勢の形成を促進する。＜接触に対する相手の関与姿勢＞が＜異文化接触における客観的な姿勢＞に影響を与える。

概念名 (24)	ポップカルチャーに起因するポジティブな観念
定義	日本のポップカルチャーに興味を持ち、ポップカルチャーの利用によって日本・日本人に対してポジティブな観念を持つこと。
具体例	<p>No.1-2 就是一开始大家有时候看了很多日剧什么的，就挺喜欢日本这个国家的，然后在日剧里看他们就是人跟人相处那种感觉，我也挺喜欢的。</p> <p>No.1-5 嗯，但是后来我发现真的是因为喜欢上那个日本那个组合“嵐”了，然后就是，嗯，他们的综艺我也看挺多。然后，嗯，就是他们的那个就是还是感觉日本文化，嗯，他们艺人就是质量还是很高吧，全能型那种感觉，艺人都是唱歌啊，跳舞、主持什么都会那种。嗯，就感觉挺有魅力的吧。</p> <p>No.5-3 就是他们那个现代的，就像动漫啊游戏啊那些，其实对年轻人来说有吸引力的，还是挺喜欢的。</p> <p>No.11-1 初二的时候，跟我哥看了一集日本动画片，我觉得挺不错的，然后就一直看着看着，就迷上了。自己又找了好多别的动画，慢慢的就迷上了日语，觉得动画里他们说的话挺帅的。(中略)。有喜欢日语的这个原因，然后也有是自己除了日语，好像没有什么特别喜欢的了。(中略)。跟日语有关的这个动画片，还有日剧啥的总有好看的、吸引我的东西。实在无聊的时候，就把以前的动画片再看看有啥吸引我的。我大部分都看过。</p> <p>No.12-2 就是可能以前吧，小时候我们比较就是，大概就是这个因素比较大吧，就是可能有点反日心理那种的，反正就是因为受些影响，所以我和日本老师接触的时候我觉得也不太积极。然后本身的话，我不像他们其他人，其他人就是他们，可能小时候看日漫的，我也不看日漫。嗯，我也不看日剧什么，就是对日语方面接触的比较少。但是后来我觉得总是这样不行，得改变一下自己，于是我也开始看日剧，反正印象挺好的，觉得不是日本人不是我想象中的那样。</p> <p>No.15-2 比如说日本的那个动画、动漫，然后还有那个就是日本的文化，对，一开始是日本的文化，就是比如说像神社之类的和风文化非常感兴趣。还有就是其他的，像日本的什么音乐啊，电影什么的我也都看。所以总之就是对这个文化比较感兴趣。</p> <p>No.15-2</p>

	<p>当时就是看了动漫，然后不太记得了，反正我也忘了我那时候是怎么开始学的，就是打算想学嘛，觉得那个日语听起来挺好听的，然后我就想自己学着说，然后就学了，然后也没进什么教室，就自己完全是自己学的，就正规的书我都没看过，完全是自己看，就是看着动漫，然后把台词记下来。</p> <p>No.15-3</p> <p>那个是我特别特别小的事。我还没上学的时候，我妈妈给我订了一个儿童杂志，那个周杂志里边有一期就是介绍日本的那个年中行事，就是各种各样的什么お盆啊、雛祭啊什么的，全都有介绍，然后我非常感兴趣，因为就是看起来特别有意思嘛，所以我觉得挺感兴趣的。</p> <p>対極例：</p> <p>No.19-3,4</p> <p>[I：你之前想象当中的是什么样的呢？] 工作狂啊。然后可能做什么都比较认真，也不太会和你比较好的交流或沟通那种，最开始真的是这种感觉。[I：最初是什么影响你有这种感觉的呢？] 就是看日剧的时候，比如说《半泽直树》啊这种，这种社会压力。我还看过《first class》全都是这种社会压力，特别变态，一整就下跪啊，平时不苟言笑的，平时拿着公文包匆匆忙忙的那种，对自己的妻子也是那种眼神不太对劲那种的，最开始的时候我觉得这种特别吓人。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・“但是后来我觉得总是这样不行，得改变一下自己，于是我也开始看日剧，反正印象挺好的，觉得不是日本人不是我想象中的那样” (No.12-2) →日本のポップカルチャーの利用は日本に対するポジティブな観念の形成に有意義であると意識し、それを利用して対日イメージを変えようとする例である。→これは<異文化接触における客観的な姿勢>の形成に役立つと考えられる。では、意識的にポップカルチャーを利用するのではない例があるか→ある。協力者「No.1」、「No.11」、「No.15」などは趣味として日本のポップカルチャーを利用している。これはポジティブな日本観念に繋がる。 ・No.19-3,4→ポップカルチャーの利用がかえって日本・日本人に対する固定観念を生じさせる側面もある。その場合、<固定観念による文化摩擦>の形で現れる。

概念名 (25)	接触に対する相手の関与姿勢
定義	接触に対して相手の取っている積極的な、あるいは消極的な態度のこと。
具体例	<p>No.1-11 学生人也都挺好的，可能也有这个原因。</p> <p>No.1-17 嗯，这个主妇还是好的。</p> <p>No.1-18 聊天有时候我会主动问他们，主妇们有时也会主动谈起生活中的事，比如这附近哪里有超市，理发店什么的。</p> <p>No.1-18 因为要适应在中国的生活，还要照顾在中国上学的孩子们，感觉她生活中需要用到汉语的地方有很多。除了上课内容以外，她更多的是问我一些生活当中的问题，比如如何用淘宝买东西，如何用微信，这个东西的说明书是什么意思。她会把我当成在中国的朋友一样，从日本回国也会带礼物给我，邀请我一起去看画展，当时还拍照留念了。上完课在她家做大阪烧和她们一家人一起吃，这些都让我感觉○○太太性格开朗热情，想跟她做朋友。</p> <p>No.2-1 是他性格可好了，就是感觉，之前有同学教过他，然后所以说还相对来讲更熟悉一点。他人也不奇怪，然后还会英语，交流起来就没那么困难。他的性格也挺好。</p> <p>No.2-2,3 就是他人挺好的。我第一次给他讲课可能说挺投缘的。然后他从第一节课开始他就也挺喜欢我给他上课的。然后后来我不是不教他了嘛，然后就是说△△[汉语教室名]那边人就说给他安排老师不太好安排。就是别的老师总觉得他特别特别的，那个学生总觉得他特别吓人，然后就看起来就特别严肃那种，但跟我相处的过程当中就感觉是一个特别やさしい的，比较舒服。然后后来他就是给他讲课的过程当中他人挺好的。</p> <p>No.2-3 后来他看出来那是我第一次上他家教，然后他看出来我挺紧张的。打那以后他就不让去他家了，一直在教室教，后来他跟我说他说我那次看出来你在我家讲得比较紧张，所以我就不管多冷，天多冷，他说我都来教室给你让你给我讲课。</p> <p>No.2-5 一般就是你说中国式的日语啊，他意思能听懂他也不会太计较。</p> <p>No.2-14</p>

和他说的确实涉及了很多家庭上面的话题。还有的就是问他们一些日本的这个事儿，那个事儿啊的。就根据人吧，像有的人他就是喜欢学习，他就是看书，然后也不跟你聊别的，就是你说一句他就答一句说一句他就答一句。但是有的是跟你谈人生。

No.3-10

我就是有一个 50 多岁的一个叫爷爷的一个人，他有两个孩子，一个孩子已经上研究生，还有一个孩子上高中。嗯，50 多岁嘛，头发有点白，和他上课的时候他总是就是给我讲很多东西，比如说他去出差了，去菲律宾了，就一节课就给我讲菲律宾的事情。

No.4-12

[I: 那顺畅的原因是什么呢?] 就很温柔。然后也挺开朗，我开个玩笑他们也能懂。

No.4-13

[I: 然后这三个人还有包括就是有一个有一年的那个人哈，一年的那个人也挺顺畅的吗?] 嗯，他那个就是挺随意的，和我一样。

No.5-7

还有就是他们性格也好，虽然他们比我年长了，但是他们也没有说是板着呀或者什么，还是很幽默地愿意跟你唠嗑。

No.5-8

但是对方会主动就是噢就是化解尴尬，就是说对是这个意思吗？就是咱们查一下吧，可能这样的话还会化解掉。他们会主动化解一下。

No.5-8

话题方面的摩擦，就是可能像战争啊那种就比较敏感的话题，我一般会避开，就是不谈就是不说。或者说是最近中日关系，有的时候会说唉中日关系不好，他说啊是，他就也不深聊，我就不愿意再深聊。[I: 那为什么你不想就深聊呢?] 还是因为我也怕就是产生，就是他这么想的，我不知道我是不是会很生气，我说的话会让他生不生气，这样的话对双方都不太好。

No.5-11

是他主动提出来的。因为学校有规定说不能让学生请吃饭或者干吗，但是我说我跟他说我们学校 [汉语教室] 不让，他说没有关系，一块去吧一块去吧。

No.7-2

也会接触到一点，就是有的日本人像比较健谈，就是你去给他端茶水的时候，他就主动跟你聊天。

No.7-18

他能看出来我没听懂，就再带一点中文，然后我再猜一猜。

No.9-2,3

	<p>大二上学期的时候，当时不是○○A老师跟○○B老师刚来嘛，然后当时○○B老师一来就跟我们关系处得非常好，就跟他一起出去吃饭哪，这怎么就那个时候就开始有点敢跟老师说话了，一开始怎么说，○○C老师，她害怕。就是说话也是说一两句，但是不是说说那么多，然后○○B老师就是怎么说呢，一开始跟老师说交流也是非常简单的句子，然后后来就慢慢慢慢能感觉能听懂更多的话，就感觉说话，这方面○○B老师就是挺重要的。</p> <p>No.9-7</p> <p>○○老师就怎么说，就感觉像我们的朋友一样，不像是老师的感觉，因为我们说什么话题都能理解，非常通，而且我们因为都是女生嘛，然后跟老师也是有什么说什么的，嗯，而且○○老师很喜欢跟我们说话嘛。</p> <p>No.10-5</p> <p>新来的两个外教，感觉他们的年龄小了十岁左右吧，他们给你的感觉就是年轻人，就是你的朋友一样，有什么话他都可以说。</p> <p>No.10-6</p> <p>他们会考虑到你是个学生，所以他们就会一些简单的，或者说他们就会尽量的迎合你的思维方式去表达。</p> <p>No.15-5</p> <p>他挺健谈的。比我能说。一般聊天他找我比较多，他有一些问题问我说汉语，嗯对。基本上汉语相关的，我想想，问过我那个就是广告语就有一个日文的想翻成中文怎么办？问我翻的对不对？像这样。</p> <p>No.18-4</p> <p>我现在在教课，感觉他们都挺優しい的，我教的都是大叔级别的。他们都很優しい，也很宽容的。</p> <p>No.18-4</p> <p>后来就发现他们都特别優しい，就宽容我，说“错了也没关系”之类的，给了我很大鼓励。到现在也是一点一点在进步。</p> <p>No.0-A12</p> <p>然后后来他就是给他讲课的过程当中他人挺好的。然后也挺爱他的家庭的，就是跟我说他的媳妇啊，他的女儿怎么，每次过节都给他们准备礼物。嗯，我觉得50多岁的一个日本男人能这样还挺好的。</p> <p>No.0-A13</p> <p>他那个人就跟另外一个人比起来相处可轻松了。就是他特别客观地分析就中国哪儿不好哪儿好，然后日本哪儿不好哪儿好，还跟我说特别多日本也有不好的地方，就比较客观地看待。</p>
理論のメモ	<p>・“她会把我当成在中国的朋友一样，从日本回国也会带礼物给我，邀请我一起</p>

	<p>去看画展，当时还拍照留念了”（No.1-18）→対人関係の構築に対して、相手が積極的に関わってくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ No.2-5→接触相手が正しい日本語を求めない。意思疎通できればいい。 ・ “像有的人他就是喜欢学习，他就是看书，然后也不跟你聊别的，就是你说一句他就答一句说一句他就答一句”（No.2-14）→相手が接触において消極的な姿勢を取ることは、日本語専攻大学生における異文化接触の【困難】を増強させ、接触をある程度阻害すると考えられる。 ・ “有的时候会说唉中日关系不好，他说啊是，他就也不深聊”（No.5-8）→デリケートな話題に対して、相手が意識的に回避する。 ・ “然后〇〇B老师就是怎么说呢，一开始跟老师说交流也是非常简单的句子，然后后来就慢慢慢慢能感觉能听懂更多的话，就感觉说话，这方面〇〇B老师就是挺重要的”（No.9-2,3）→＜接触に対する相手の関与姿勢＞は、＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞に影響を与える。 ・ No.10-6→日本語専攻大学生のわかりやすい表現を使ってくれる。 ・ No.0-A13→中国の文化現象を客観的に認識してくれる。 ・ 相手の積極的な関与姿勢が日本語専攻大学生による【努力と工夫】を有効なものにさせる。それと同時に、日本語専攻大学生による【努力と工夫】も、＜接触に対する相手の関与姿勢＞を促進するだろうと推測できる。両者は、相互関与の関係であると考えられる。
--	--

概念名 (26)	コミュニケーション能力の向上
定義	異文化接触を通して、日本語による話す能力・聞く能力・コミュニケーションストラテジー能力などが向上すること、及びそれによって日本語能力に自信のないことからくる不安が緩和されること。
具体例	<p>No.1-3 嗯，就就是随机应变那个感觉变强了，口语的那种。</p> <p>No.1-4 嗯，而且听他们日本人的发音的话，也能纠正自己就是那个发音，也是一个间接学习机会吧，毕竟天天跟老师上课的时间还是有限的。</p> <p>No.1-13 听力是有进步。</p> <p>No.1-17 我觉得做这份兼职，提高最多的就是口语。多了用日语的机会，在备课的时候也会想这个怎么用日语说对方能懂。听他们说的日语，也能让我学会更贴近生活的口语，会模仿他们的语音和表达。</p> <p>No.2-1 一说他就明白了，就是慢慢地就敢说了。</p> <p>No.2-5 我感觉 80% 以上的我就能听懂。</p> <p>類似例： No.2-5 就有这种感觉。也学了一些单词，然后一些表达，觉得唉，这样表达原来是日本語らしい的。然后以前的那个表达是不对的。</p> <p>類似例： No.2-6 象我同学她大一下学期好像就出去教课，所以后来她的水平到大三的时候明显提高了好多。包括说也噤里啪啦，她就一个劲儿地说，特别厉害呀，听也是特别厉害。然后我觉得跟她做这个兼职有很大的关系。</p> <p>No.2-6 我就听、说方面还是有很大的进步。</p> <p>No.2-6 我感觉不能说非常大的提高，但是有相对来说的提高。</p> <p>No.2-6</p>

	<p>现在比如说我听那个 2 级啊、1 级啊这样的听力，我以前的时候完全凭运气，现在就觉得大概我能听懂那种感觉。然后有的时候那个听力里边说的啥，这个好像以前有日本人也是这样说的，就是还是有帮助的。</p> <p>No.3-3</p> <p>我感觉通过一年多的就是给日本人上课，我的口语锻炼很多，以前就是不太敢说，现在就是上课的时候就随便聊天啊。</p> <p>No.4-11</p> <p>后来就是也没有把它太怎么当作正经事，后来有一天是那个我室友他们跟我说唉感觉那个什么口语好的。</p> <p>No.5-7</p> <p>就是更能听懂我的话了。</p> <p>No.7-18</p> <p>很大提高我倒没感觉出来，就是能克服那种要张口说日语没有词的紧张感了。</p> <p>No.8-2</p> <p>那个时候我们还没有学祝酒词之类的，后来我学到那了之后，因为好像听过他们说过，因为当时还不会特别多的日语，听的时候觉得好像听过又好像没听过，但是学了之后发现我见过，这个是说的带头敬酒啊，我觉得挺有意义的，也能留点印象，学的时候会好学一些。我记得我当时学那块的时候记得挺快。</p> <p>No.8-5</p> <p>因为我一开始去的时候我什么都听不懂，后来两个月之后，我感觉我慢慢去仔细听，我能知道他们在说什么，虽然可能我答不出来，再后来是也能说一两句了。</p> <p>No.9-2</p> <p>我说的话他能听懂，他说的话，我也能听懂。</p> <p>No.9-2</p> <p>这样的然后感觉就上 2 年级的时候，不知道怎么了，就上了○○老师的那个 1 级班，然后就感觉好像能力真的提高了挺多的，然后就感觉也跟日本人敢说话了。嗯，然后上学期开始又找了那个跟教日本人汉语的那个打工，就跟他们就这样说话，就感觉越来越有自信了。</p> <p>No.9-3</p> <p>教他们过程中感觉也是知道挺多地道的日本话，就不是书本上的内容。有些时候我把那个书本背下来，内容我就有的时候会说出来嘛，我自然地说出来，那他们就说日本都不用这些话，然后就感觉挺好玩的。</p> <p>No.10-5</p> <p>他课文的话，给他讲完之后，某些知识点，范文用日语解释完之后，他会把所有的汉语用日文给译一遍，让我听对不对。我感觉这方面对我也是挺有帮助的。</p> <p>No.17-6</p>
--	--

	<p>就是当我和日本人讲日语的时候，我不打怵。嗯嗯，不紧张。就是跟日本人讲话了，不害怕。就即便有时候我知道这个东西，我不知道用日语怎么说，那我也不害怕，我就知道反正我拐弯抹角地连比带画的这个事能说，反正要实在说不明白呢就拉倒。就是实在说不明白了就不说了，就换一个话题，或者说拿手机或者拿什么东西出来查，就总而言之我没有那种恐惧的心理。“啊我要是说说不明白怎么办呀我要是不会了怎么办呀我张不开嘴”，我就没有这个心理压力。</p> <p>No.17-6</p> <p>我觉得应该是在我日语口语这个能力方面应该是给了一个非常正面的一个影响。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.1-3→コミュニケーションストラテジー能力が向上した。 ・ No.2-1→<接触に対する相手の関与姿勢>によって、不安が軽減され、話せるようになった；No.3-3→聞く能力・話す能力の向上に従い、日本語能力に自信がないことによる不安が緩和された；“就跟他们就这样说话，就感觉越来越有自信了”（No.9-2）→外国語による不安が接触経験の積み重ねによって軽減された。 <p>⇒<コミュニケーション能力の向上>には、日本語能力に自信のないことからくる不安が緩和されることが内包されるべきである。不安の軽減は、<接触に対する相手の関与姿勢>、聞く能力・話す能力の向上、接触経験の積み重ねによるところが大きい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ “教他们过程中感觉也是知道挺多地道的日本话，就不是书本上的内容”（No.9-3）→教科書から覚えた日本語が日本語らしい日本語になりつつある。 ・ “听他们说的日语，也能让我学会更贴近生活的口语，会模仿他们的语音和表达。”（No.1-17）；“然后有的时候那个听力里边说的啥，这个好像以前有日本人也是这样说的，就是还是有帮助的。”（No.2-6）→コミュニケーションするとき、相手に分かるように言葉遣いを工夫すること自体や、相手の日本語の発音・言葉・表現を真似する具体策などが話す能力の向上につながる。 ・ “就即便有时候我知道这个东西，我不知道用日语怎么说，那我也不害怕，我就知道反正我拐弯抹角地连比带画的这个事能说，反正要实在说不明白呢就拉倒。就是实在说不明白了就不说了，就换一个话题，或者说拿手机或者拿什么东西出来查，就总而言之我没有那种恐惧的心理”（No.17-6）→接触の中でコミュニケーションストラテジー能力が鍛えられる。コミュニケーションストラテジー能力の向上に関する語りはそれほど多く見つからなかったが、それは、その利用が教室内ではあまり提示されておらず、学習者に自覚されていなかったからではないかと推測できる。

添付資料 (5) 中国日本語専攻大学生における異文化接触のプロセス

概念名 (27)	目的の達成
定義	視野の拡大・社会経験の蓄積・生活の充実・資産形成・趣味の楽しみ・日本に関する知識の獲得などの目的が達成すること。
具体例	<p>No.3-1 就是上课一方面挣钱嘛，另一方面就是感觉上课挺开心的，就感觉生活挺丰富的，也长很多见识。尤其他们很多上班的就是年龄就 30，都在 30 岁以上，感觉和他们交流也学到了很多，反正每次上完课出来我都很开心，感觉。</p> <p>No.5-7 首先就和我交流，和我相处，那些日本人他们都属于比较有社会经验的，然后资质比较高的，年龄比较大的，见识比较广的。就有时候和他们聊天的话还是能收获很多东西。</p> <p>No.17-11 工资挺好，虽然说能教汉语，这也是一个原因，但是你看我现在扪心自问，我觉得工资可能是更主要的原因，也没有很好，但是作为一个本科学生来讲，稳定的持续的，人家一个月还跟家长要零花钱的，我自己就能赚，我家长还给我，就觉得自己是富婆，想买什么都能买什么啊，然后干的这个工种呢工作内容我还挺喜欢的，所以我就觉得能继续下去。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語専攻大学生は、接触を通して、視野の拡大、社会経験の蓄積、生活の充実、資産形成などの目的を達成する。 ・“感觉上课挺开心的”、“反正每次上完课出来我都很开心，感觉”(No.3-1) → 満足感の獲得。＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞に繋がっていく。

概念名 (28)	対人関係の不安の軽減と満足感の獲得
定義	接触経験や日本人との対人関係構築によって発話不安や対人関係不安を軽減し、達成感や楽しい思いなどのような情意的満足感を獲得すること。
具体例	<p>No.1-3 嗯，但是跟日本人接触教课，我觉得它是一个还挺放松的一个状态，你跟他熟了以后，就你们两个嘛，有的时候你说错什么也没有关系，他能听懂。</p> <p>No.1-3 然后以后就是可能嗯，外面突然碰到日本人啊什么的，你也能，他问你，你也是敢说一下的，就是敢说了。</p> <p>No.1-4 后来的时候他们唉呀一下懂就那表情，嗯嗯我也感觉挺有成就感的。</p> <p>No.2-1 但后来慢慢的就是每个星期就是一天当中后来就没什么课 [大学里的日语课] 了吗，学校，就说就一天当中有个几乎每天都有课 [汉语教室的汉语课]，所以说每天都能见到日本人，然后就习惯了。</p> <p>No.2-5 就感觉我现在如果跟一个日本人，如果见面了，我肯定没有原来那么紧张。但该有的紧张可能还会紧张，但是没有那么那么紧张，然后可能也敢说了，这是挺重要的。</p> <p>No.3-1 就是上课一方面挣钱嘛，另一方面就是感觉上课挺开心的，就感觉生活挺丰富的，也长很多见识。尤其他们很多上班的就是年龄就都在 30 岁以上，感觉和他们交流也学到了很多，反正每次上完课出来我都很开心，感觉。</p> <p>No.3-4 大家都是最大的感受是，就是我们平时也交流嘛，就是最深的感受，就是感觉敢说了，嗯，能表达出来。</p> <p>No.3-12 感觉日本人就是他们年龄虽然 4、50 岁，但有时候表现出来就是不像中国的 4、50 岁的人那种给我的感觉。他们好像偏年轻，有时候说话的时候也就是比如说他们个别的人那种习惯，就像我教的一个 45 岁的这个人，他就有时候自己说错了什么，他就咋就趴桌子上了。</p> <p>No.3-12 有时候上课挺开心的，还有上课就是挺高兴。比如说比如说他说一些东西说错啊</p>

或者怎么样就挺好玩的，挺搞笑的。嗯嗯就挺总的来说，上课就挺愉快。（中略）。有的时候异文化真的有不同的文化、不同的认识。这样导致上课的时候，反正说话包括语言的问题特别好玩啊，有的时候我们同学几个都上课的我们有时候坐在一起聊天，就说起来更多的学生好玩的事情，就是大家一起笑。

No.5-10

其实之前的话就不太敢开口说日语，但接触之后就是更敢说了。

No.5-14

但是慢慢地地发现啊他们也是普通人，也就是说的话呀、干的事啊、唠的嗑啊，他们在日常生活中还是很随和很平易近人的，也就不会那么紧张了，也不会说和他接触就得板板整整的，就是该干嘛干嘛。

No.5-15

但慢慢的话觉得那和日本人接触挺有意思的，

No.5-16

但是和日本人交流也觉得挺有意思，嗯，挺开心。

No.6-4

之前我发朋友圈她也给我评论了一下，我觉得天呀，这么久都没有联系……我一直觉得日本人的性格是不太想跟人有过多的、深的交往，或者是太频繁的接触。但是她给我评论我还挺惊喜的，毕竟都好久没联系了。

No.8-5

对我自己的日语学习有了一定的鼓励的作用。因为我一开始不是很想学这个，当时一直在纠结大一要不要转专业。但是打工之后我觉得好好学一学的话还是能取得一点小成就，它打消了我转专业的想法。

No.10-5

○○老师现在四十多岁吧，当时觉得挺严厉的，当然现在也挺严厉的，但是慢慢熟悉了之后，也能够经常聊一些话题，挺幽默的。

No.10-7

我觉得在日语学习中和日本人进行接触是很重要的，对于我自己而言也是比较愉快的经历。

No.15-11

先有第一次接触之后就心里有底了。所以就觉得自己更多去接触一下也可以。

No.17-5

就是我所以我觉得从这个侧面来讲吧应该也是对我教学水平的一个肯定。

No.17-13

嗯，会开心的，而且也会想，嗯，这个知识点，这样解释比较好，下次我还这么干，就会有这种想法。

No.18-7

	<p>开始的时候其实很紧张，心扑通扑通的跳，怕自己教不好。后来慢慢慢慢的，也是对这个人有所了解，还有就是自己语言水平可能也提高一些了，就会自由一点，想说什么就说什么吧，也会有拘谨，但是还是比以前放的开。</p>
<p>理論的メモ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・＜対人関係の不安の軽減と満足感の獲得＞は情意的異文化接触の効果である。 ・“你跟他熟了以后，就你们两个嘛，有的时候你说错什么也没有关系，他能听懂”（No.1-3）→どうして「相手と長くなったら、2人だけですから、間違っても大丈夫です。相手が分かってくれるから」なのか？→「対人接触の経験」と関係する。どうして「2人だけですから」か？→初対面における日本人と接する際に生じる不安である「他人からの評価」を意識しなくてもいいからか？→はい。これは何を意味しているか？→＜接触に対する相手の関与姿勢＞に繋がっていく。相手が優しくなくても緊張しない具体例もあるか？→その場合＜対人関係の構築への努力＞が必要である。対応できなければ【困難】に負けて＜あきらめ＞につながっていく。 ・No.5-14→相手が異なる文化背景を持っていても、やさしくて、普通の同国人と同じようであると意識している。それが対人関係の不安の軽減に役立つ。→教師側が対人関係構築の異文化接触に対する重要性を提示することが不可欠である。 ・“还有就是自己语言水平可能也提高一些了，就会自由一点，想说什么就说什么吧，也会有拘谨，但是还是比以前放的开”（No.18-7）→＜コミュニケーション能力の向上＞は、接触上の不安の軽減に繋がっている。

概念名 (29)	他情報源から得た日本認識との総合
定義	異文化接触から得た日本認識が、日本語教師・日本語学習・マスメディア（日本と中国双方のマスメディア）・ポップカルチャーなどの情報源から得たものと総合し、日本や日本人への認識が深化すること。
具体例	<p>No.3-13</p> <p>感觉他们学校的活动也比较多。噢，对，有一次上课呢，突然那个主妇接电话，然后就是告诉我稍等一下，他们好像是有那个消防演习，就是学校出什么事情，老师通知她这一个人，然后由这个人再通知别的嗯小组的感觉。就是打电话说怎么了。当时想，是这样啊。[I：你是觉得这个消防演习这个事比较新鲜啊，还是说他们传播的这个方式不一样呢？] 就是我感觉我上小学的时候没有这样的消防演习，学校就是学校，让我们赶快跑下去，抱头啊，没有说家长啊什么的。就是家长对这个学校方面呀就是了解。（中略）。平时我们只有家长会，其余的时间都和老师的交流比较少。（中略）。他们都是各种方面，学习啊生活呀，以前也看日剧的时候看到一些。就是那个开运动会的时候，那个形式也比较多，他们的，都是父母都去，然后就拿那个摄像，就开始录。然后中午说是在嗯什么学校体育馆里面一起吃带的饭，都放一起吃。</p> <p>No.6-3</p> <p>随着这个学的东西多了以后，然后大二就是去面试，接触就是教日本人，刚开始学生少，然后教的多了以后发现很多和我们不同的地方。而且学校老师也会讲一些就是有关文化的一些东西，自己看日剧什么的也能发现日本文化的一些传统啊什么的，我就对日本这个国家也产生了兴趣，就是想更多地了解一下 [日本] 到底怎么回事。</p> <p>No.6-6</p> <p>然后我的学生 [学汉语的日本人学生] 还挺能送我礼物的，我倒也不是说我觉得 [送礼物] 怎么样，送礼物也体现了他们的一份心意，他们也可以不送。然后还有看日剧吧，对有些 [日本人] 积极的一面，对生活的有些态度，比如说，很多很多方面，比如说家居风格，或者是为人处事，然后还有他们日剧里面总是有很多经典的那个台词什么的，就比较印象深刻。然后就慢慢的，我就会跟我父母唠叨这些。</p> <p>No.13-8</p> <p>但是看动画或者是问日本留学生。嗯，那电视剧就是感觉他们大学生好像就很轻松，有自己就是需要去打工，需要怎么样可能学习没有那么重视，然后，但是就哪怕是上课，他们都是那种感觉很不认真的感觉。我觉得没有，我觉得这个他们真的是没有我们认真，但是可能到了真正到了进入社会以后，可能他们的整个环境的影响吧，</p>

	<p>我觉得都特别认真，然后比如说○○A老师和○○B老师他们真的特别认真。</p> <p>No.19-4</p> <p>其实日本人之间，尤其是我最近看了很多报道嘛。就是他们心里想的东西不会太表现到外部上，而是在背地里面来弄一些东西，我特别害怕这种，尤其前两天听说“line”[一种聊天工具]上，他们[日本人]就是互相建一个群组，又会建另外一个群组里面没有其中一个成员，然后专门骂这个成员这样。(中略)。这是日本的一个社会现象，然后我不太喜欢这种，正好这些人就是日本的中学生或者大学生，然后正好我去日本的时候大概就会是这些人是我的同事，我就会感觉挺恐怖的，尤其还是外国人。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.3-13→異文化接触から得た日本認識と日本のドラマから得た日本認識との総合。No.6-3、No.6-6→異文化接触から得た日本認識、教室内で日本語教師から得た日本認識、日本のドラマから得た日本認識との総合。それらを通して、日本・日本人への認識を深める。＜文化理解の意識化＞に繋がっていく。さらに、その深化した日本認識が日本・日本人への興味をそそる。“然后就慢慢的，我就会跟我父母唠叨这些”(No.6-6)と述べたように、＜日本文化の受容＞、さらに＜異文化接触の経験の共有＞に繋がっていく。 ・ No.19-4→＜他情報源から得た日本認識との総合＞は、必ずしもポジティブな日本認識しか得られないわけではなく、ネガティブな日本認識になる可能性もある。そのネガティブな日本認識が固定観念になり、その後の異文化接触、さらに異文化理解を阻害する可能性もある。

概念名 (30)	日本人イメージの具体化 (個別化)
定義	日本人に対するイメージが全体的・抽象的から具体的・個別的になること。
具体例	<p>No.1-11 他有的时候说的感觉还是挺直接的,就是日本人还是有的时候,她虽然表面当然他做的就是挺礼貌呀挺什么的,反正就是给你留下印象都是好的印象。</p> <p>No.4-18 他们比较有礼貌,吃饭的时候会笑的很大声。</p> <p>No.5-10 就是还有一点就是我发现就是日本人时间观念特别强,但是有的时候他们也会有一些松懈,比如说今天几点上课呀,今天几点下课啊,咱们早点下课吧,所以说嗯提前假如说一般都是说提前一天要改那个上课时间。他会说唉呀今天实在不好意思啊,我有点累了,咱们今天怎么怎么样,就是改一下上课时间?那也行。这都可以。就是没有特别的对这个时间较真啊或者怎么样,有这样的。(中略)。可能在公司里面他们会比较严守时间,但是在生活中,他们可能还是没有那么过多的要求。</p> <p>No.7-8 包括外教啊,包括兼职的时候,我就发现日本人最大的一个特点就是他们会背一个大书包,他们所有人,基本上所有人都会背一个特大书包,里面不知道装什么塞得鼓鼓的,我也不知道在干嘛,然后他们喜欢穿运动鞋,他们特别喜欢穿运动鞋,不管男女,就不管他上面穿的是什么,他底下一定会穿着运动鞋,噢,除非是那种穿西服的那种,就是工作的呀,大部分就是去吃饭呀,两个人没什么事去吃饭,都会穿运动鞋。</p> <p>No.7-8 还有就是他们都说日本人不太喜欢和别人交流吧,但是我觉得也分人,有的会像那种比较健谈的,就尤其的健谈,然后不爱说话的,就会经常一个人去吃饭,默默的吃饭,然后也不和人打招呼的那种,就分两种,好像是挺极端的,我感觉。</p> <p>No.7-18 [I:对日本人印象如何?现在。]很准时,这个印象比较深刻。</p> <p>No.7-18 理工科一类的学生上课很无聊、很刻板。然后很不会聊天那种。理解能力很强,会话能力很弱。然后做生意的学生就开朗很多,有关中文的知识面也很广。</p> <p>No.8-7 有一个是我觉得比较奇怪,一开始大家都说日本人吃饭在饭店里特别安静,但其实不是。他们吃饭喝酒什么的,跟中国也一样,一群人喝了几口酒之后高兴了,噪</p>

门也挺大的。我觉得这个让我挺奇怪，当时不是大家都说日本人吃饭的特别安静吗。

No.8-7

还是挺热闹的，没有那么轻声细语。但是我也不知道他们是在日本声小，在中国这可能是受中国影响了？我不知道是什么原因，反正是跟我当时听到的不一样。

No.9-6

其实我对日本人没什么感觉，就是来上大学以后就感觉怎么说呢，看○○A老师和○○B老师就真的感觉他们活的就是特别累，但是就每一件事都做得非常井井有条的那种感觉。这件事做完了那件事，我该做这个事的时候，我就不做别的事，就这点，我真的特别佩服。嗯，就是怎么说呢，就是勤奋吗，这是。还有，以前也经常听说日本人就是挺注重时间的，但是来这[大学]以后，真的是亲身体会到了。特别就是○○A老师的话，可能就更是时间段安排得非常有效率，非常注重时间。

No.9-7

日本人非常有礼貌，嗯，就是不管在时间啊，还是在对你的态度上，包括一起坐电梯啊，这些小细节都能感觉出来。就应该是我们先让他进去嘛，但是他就是不进，然后就等着你进，而且手一直把着电梯门那样就非常有礼貌。干什么都是这个。

No.10-5

就不像以往日本人给你的严谨的那种态度，很轻松。

No.10-7

但是从中也能感受到对日本人的一些认识，比如说彬彬有礼，考虑周全之类的。

No.12-7

我觉得就是日本干净，嗯，然后比较利索，日本人的印象就比较利索。但是，嗯，偶尔看到那个留学生可能会也会比较邋遢一点。

No.12-7

挺萌的，这个萌萌怎么说呢？嗯，就是比较可爱。[I：嗯，那你主要说的是对年轻的日本人的一些？]包括我们外教也是。[I：那你就是从外教那个地方获得就比较萌的那种感觉是吧？]啊？嗯，但是嗯，就是，嗯，平时可能挺萌的，但是工作上还是挺严格的。

No.12-7

他俩里边都有吧，萌的那个是一个，嗯，大叔吧，我们这么说大叔，然后他就是比较和蔼，就能比较玩得开。然后嗯，严格的那位是老师，她就是挺严格的，但是嗯，平时的时候还是觉得挺可爱的。

No.13-8

但是他们的认真好像就是在进入工作以后，可能就是学生时代他们可能跟我们比没有我们认真。

No.14-3

但是和日本人接触的时候感觉。嗯..时间观念吧，他们真的对时间观念非常的说严

苛可能有点过，但是他们真的非常遵守时间观念，比如说在什么时候要做什么都会提前计划出来。

No.14-4

我在学日语之前对日本人有一些误解，这些误解建立在不了解的基础上。我印象比较深的是在一次运动会上，我那时在做志愿者。当时有一位曾经在我们学校任职的日本老师，她是回来看她曾经教过的学生比赛。当时和她有过短暂交流，觉得她很温柔，和自己想象中的日本人不同，所以从当时起就有所改观。（中略）。之前的感觉就是比较严肃，认真，非常不活泼。

No.14-4

以前因为对日本人不了解，所以对他们的印象都是基于自己的猜测或者家庭环境的影响吧，觉得他们可能非常刻板、严肃。但是通过之后对之前运动会遇到的老师或者通过与日本外教的交流，对他们的印象更加鲜活了，觉得他们其实也很活泼。虽然我们语言不同，但是他们有的也很活泼，并不像我之前想象中的千篇一律，大家都非常严肃的那种。像我的爷爷奶奶之前给我讲的关于日本和我国的历史之类的。包括我家是在东北这一带，家里以前有人当过兵，所以他们对日本的评价都不是那么中肯吧。我觉得他们的评价给我对日本的想象都有一定的影响，但是果然还是需要自己亲自去接触和交往才能认识到日本人到底是什么样的。

No.18-8

刚去兼职的时候不会倒酒，然后有一桌日本人是常客，发现我是新来的服务生，就叫我过来倒酒，还会提醒我，在旁边笑着看着我加油的那种，他们都会叫来服务生倒酒而不是自己倒酒。感觉他们在工作和平常娱乐的时候还是有很大不一样的地方。

No.19-3

和我想象中的还是不太一样的，没有我想象当中那么严格，我感觉他们比较厉害的就是在工作之余吧，可能有的人比较辛苦，工作之后会去那种吃饭的地方再喝酒谈一些事情之类的，这种就是比较辛苦。还有就是日常生活之中，大部分人都是尽可能有自己的爱好的，比如说有的人特别喜欢音乐，会自己在家弄音乐，自己买相关设备、自己作曲。还有的人会弹吉他。我感觉这方面两国差异就比较大，如果是中国人工作很累的话可能之后就不会再弄这些东西，但是日本人的话可能就是这是工作，这是我的一个爱好，无论怎么样都可以给他坚持下去，我认为这一点而言挺让我佩服的。和我想象的真的不一样，而且人都比较温柔。[I：你之前想象当中的是什么样的呢？]工作狂啊。然后可能做什么都比较认真，也不太会和你比较好的交流或沟通那种，最开始真的是这种感觉。

No.19-4

我感觉外教对我的影响还是挺大的，尤其是〇〇A老师，她特别特别认真，就是她给我影响最大的就是她是我第一个接触到的日本人，而且她是特别传统的日本人，

	<p>就是她可以提前两个月就把两个月之后的事情计划到每分每秒，然后大概也是教了我挺多。比如说我给她发邮件的时候，老师会从头到尾把我的邮件也帮忙改正了，就是特别感谢她，也是从最开始让我可以了解日本人的一个契机。再后来是○○B老师，她对我的影响最大，开始的时候是在N1的班，我坐在后面，感觉她特别的厉害，什么都是有道理的能把这些事情都做好。</p> <p>No.0-A14</p> <p>那个主妇比较喜欢跟我谈问题聊天，然后我说那你后来我们俩就谈，我说你丈夫在公司里面是什么职位呀？然后她说我不知道！她丈夫应该在公司里面是课长。她说我不知道。然后每次一问，然后有的时候我问他丈夫，我说这个假期，我说你准备去哪儿去哪儿，他说我就在家呆着，然后我说那你妻子，我说就是她不学汉语了，她忙着呢？她忙啥呢？他说我不了解。然后我就觉得，唉？[奇怪]你说他俩关系好都不知道双方在干啥。</p> <p>No.0-A15</p> <p>还有我就发现他们相处过程当中就特别有意思的一个点嘛，就是我教一个△△[公司名]的一个叫○○A的一个人，然后后来我又教他太太。所以说然后我就觉得他们俩，我教○○B，就感觉他跟他妻子关系可融洽了，就有的时候要视频啊，然后各种的给女儿给妻子准备礼物啊，然后就可浪漫了，然后那个○○A跟他夫人我就感觉两人好像是不是不交流啊，根本，就是○○A，象○○A他在△△A[国家名]待了六年，他会△△A[国家名]语。然后后来他学中文也将近学了两年多了吧，然后后来我有一天我教了○○A以后好像第二天就教他妻子，然后去了以后我就没想跟他说说我教你丈夫，然后她自己看到那个签名，她说，唉？这个○○A是不是戴眼镜的那个，在△△[公司名]什么工作的那个？我说对，她说那个是我老公。然后我说，啊？我只能装作非常那个吃惊的样子，“啊？你老公？”她说他也学汉语吗？我说对呀，我说他的汉语水平很高呀，她说他在家没说过我不知道。然后后来就我俩。那个主妇我感觉她不太喜欢学习，就比较喜欢跟我谈问题聊天，然后我说你丈夫在公司里面是什么职位呀？然后她说我不知道！她丈夫应该在公司里面是课长。她说我不知道。然后每次一问，然后有的时候我问○○A，我说这个假期，我说你准备去哪儿去哪儿，他说我就在家呆着，然后我说那那那那妻子，我说就是她不学汉语了，她忙着呢？她忙啥呢？他说我不了解。然后我就觉得，唉？但是你说他俩不恩爱吗？○○A从去△△A[国家名]的时候也带着妻子去，然后在△△B[国家名]的时候是没办法，只待了一年，没有带妻子去。妻子后来中国也是一直带着他妻子来。</p>
理論的メモ	<p>・“反正就是给你留下印象都是好的印象”(No.1-11)、“但是果然还是需要自己亲自去接触和交往才能认识到日本人到底是什么样的”(No.14-4)→日本人イメージが具体化するに伴い、日本人に好印象を持つようになる。<日本文化の受容>に</p>

	<p>繋がっていく。</p> <ul style="list-style-type: none">・ “可能在公司里面他们会比较严守时间，但是在生活中，他们可能还是没有那么过多的要求” (No.5-10)、“反正是跟我当时听到的不一样” (No.8-7)、“和我想象中的还是不太一样的，没有我想象当中那么严格” (No.19-3) →日本人イメージが具体化するに伴い、前に持っていた日本人イメージが個別化するようになる。→ステレオタイプの崩壊。・ 異文化接触から得た具体的、個別的イメージは、偏見という固定観念を修正する作用を持つ。→異文化接触が両国間の互いに持っている偏見の減少に繋がり、異文化理解に役立つことを示唆している。
--	---

概念名 (31)	文化理解の意識化
定義	他文化への認識と理解・自文化への気づきと批判的な意識・両文化の共通点と相違点の認識・異文化理解一般に対する認識などを意識化すること。
具体例	<p>No.1-5 就是就像我每次结束，嗯，上完这个，可能不再教他，最后的时候，他就会给你礼金、红包，然后给你礼物这种的，然后上面还写一句话。也感觉他们平常的话，嗯，平常的话，可能感觉挺讲究的，还是然后送你的礼物都包装得特别精致。</p> <p>No.1-6 另外她们就是主妇呀，就是日本女人还是特别やさしい的，性格就是很好很柔。嗯，她们那个就是在外国的生活那个适应能力还挺强的，嗯，就是自己又照顾孩子，然后还想学好多东西，就是不光问你汉语的一些问题，还问你就是比如说怎么用手机买东西啊，怎么叫“滴滴”打车呀，我觉得能学会吗？就是后来她真的学会了！还有日本主妇发现她有个特点，就是她比如说将一个消息通知给别人，她就把它当作很重要的事，联络来联络去的，就是那种。</p> <p>No.2-11 他说中国的女孩和父母的关系很亲密，他的意思是父母什么都要管着，但是在日本可能就不是这样了。</p> <p>No.2-18 就觉得特别是日本人，如果他说中国不好的话，有的地方我也能接受，像现在我过马路，我说那车不让人我心里可火了。</p> <p>No.3-2 比如说就是端午节。我给他们介绍端午节的时候他们也有端午节，我以前听说过日本、韩国有，但是具体不太明白，那日本说是子供の日，然后我说那我们吃粽子，他说他们也吃粽子，与咱们的材料是相同的，也是糯米做的。我说呀，原来是这样啊。嗯，包括这种各种文化方面的东西，感觉噢，原来是这样，日本也有相同以及不同的地方。</p> <p>No.3-7 不过他们平时他们穿着什么都挺干净的。</p> <p>No.3-12 她们都是主妇，每周经常都要去学校做志愿活动，上次是什么图书馆去贴画，干什么东西收拾啊，妈妈都要去的，就是要轮。还有什么游泳啊，要去参观。然后每个学期好像都有一两次就是家长一起到学校去参观看孩子观摩怎么生活呀，怎么学习啊，朋友啊，很多可以去参观的。固定的一个日子他们基本都是爸爸妈妈一起去，</p>

我总感觉就是在教育方面他们的父母都很关注孩子的教育，以及开运动会的时候也是父母要参加活动，中国的幼儿园可能也有，我们那个时候没有。嗯，就感觉当时也是妈妈就在我上学的时候感觉爸妈对我的就是这么没有这么关注。在日本就感觉他妈妈可能是就是不工作，全职为了孩子，我感觉这个对孩子的这个教育感觉挺有帮助的，每天都可以陪伴孩子身边。

No.3-13

还有就是有一次上课呢，突然那个主妇接电话，然后就是告诉我稍等一下，他们好像是有那个消防演习，就是学校出什么事情，老师通知他这一个人，然后由这个人再通知别的嗯小组的感觉。就是打电话说怎么了。

No.3-13

我就感觉你们[日本]的学校原来是这样的啊。有一点感觉他们个性就是人才的培养，感觉挺重视的哈。

No.4-19

但是就是换个角度看吧。他那么说也有那么说的理由。无可厚非。(中略)。后来我想确实假的东西挺多的。

No.5-4

但是看他们就是也会发现他们身上一些优点，就是看到了就觉得日本人素质很好，吃饭的时候声音很小，就哪怕唠嗑的话也不会吵到旁边的人，吃完饭之后桌子上特别干净，感觉很很惊讶的感觉。

No.5-7

还有，就是嗯，但是他们很有礼貌很谦虚，这点也很值得学习。

No.5-8

这些就比较琐碎了，就可能有的时候课本上有一些知识会问一些日本相关的，让他用中文说，听到一些表述就能听就是能听到一些，比如说他们有一些家庭观念呀，就是像我有一个学生他有三四个女儿，然后我就问他为什么要生这么多女儿？他说他还想要一个儿子，我说噢原来日本人也有这种儿子的观念。

No.6-6

还有就很重要的一点原因是我跟日本人有了接触，就是讲课，我觉得普通民众[日本]，根本就没有政治层面想的那么复杂，就是很单纯的，你对我好，我也对你好，没有说是有那么深的民族仇恨。然后我的学生还挺能送我礼物的，我倒也不是说我觉得[送礼物]怎么样，送礼物也体现了他们的一份心意，他们也可以不送。

No.7-8

之前也是有学习惰性，不愿意接触也不愿意了解，会有点误解。主要还是和个人性格有关。跟国家好像没啥关系。

No.7-18

很准时，这个印象比较深刻。

No.8-3

我觉得第一方面是对日本的行为、习惯、生活方式有了一定的了解。

No.8-6

[I: 这个本身不是你学了日语之后才有这种意识, 原来的时候也是这种想法, 是吗?] 是日语让我更注重这个了, 因为日本的礼节方面特别是繁琐还很重要, 日本人很重视这个地方。

No.8-6

他们吃饭的时候如果有汤的话, 他们会先用勺子舀一口汤。去吃饭的时候, 他们会把饭吃得很干净, 盘子上装饰的萝卜泥, 他们也会拿走吃掉, 整个盘子他们都会吃得很干净, 不会像中国人剩个底儿大手大脚的不要了。而且有的人他会保持桌面干净, 有的人他不会, 我觉得这可能是个人方面, 但是可能也是日本的一个文化, 是會注意一下餐桌整洁。吃完了之后, 周边的那个纸巾他们会放到一边, 不会放到哪都是, 中国人的话可能就会随手放了。

No.8-6

他们有榻榻米的屋子, 吃完饭出来的时候见到服务员他会点一下头, 我们鞠躬回应一下, 觉得自己受到了尊重, 如果在中国餐厅如果当服务员的话不会这样, 中国人可能会对你吆五喝六的喊一声过来了, 见到你跟看不见一样, 日本人他看着你会跟你点点头。

No.9-10

跟日本人交流, 确实是感觉学到了很多東西。嗯, 就是刚才说到就是他们日本人的生活方式啊, 什么各种各种态度啊, 包括我们看什么, 他们看就是不一样的。嗯, 就是这种, 换个角度看, 我觉得挺有意思的, 就是中国人是这么想的, 你们认为是这么想的, 这个, 这个不是说什么课本上的知识, 这个我觉得就是了解这方面, 我觉得对跨文化那个交流是挺有帮助的。

No.10-6

还是比较严厉, 比如说○○老师, 这个学生不及格的话, 就是不及格, 不会给你合格的, 但是中国老师, 可能会给你想办法, 这算是人情方面的吧。

No.10-6

有件事感触比较深的。他问我老家是哪, 我说是河北邯郸, 他说邯郸是秦始皇的老家, 我想秦朝是在山西那边吧, 老家怎么在邯郸。就怀疑了一下, 不自信就在百度上查了一下, 确实是, 秦始皇是在邯郸出生的。当时我就说对不起, 我错了。他说你为什么道歉。我觉得作为一个中国人很惭愧。我问他你好像对三国很了解, 他说看日本的漫画, 就是把三国改编成漫画了。感觉自己如果出糗, 感觉特别丢人, 自己对本国的文化不了解。这个学期以来, 还不怎么忙的时候, 我下了一本《颜氏家训》, 有纸可以倒过来竖着写, 每天晚上写一张, 一天写一张。算是练字, 也算是了解一下中国古代的文化。(中略)。反正当时算是对自己冲击挺大, 感觉特别惭

	<p>愧。</p> <p>No.10-6</p> <p>和〇〇老师交流的时候，有些是中国特有的东西，比如说乞丐，日本几乎看不到，她说这么多年见过的不超过五个，但是中国几乎每天，你出去逛街街就能看到一大片。</p> <p>No.10-6</p> <p>而且看书的话，会着重选取一些和日本有关的。买书的话，会着重中日两国的对比，比如说，近藤大介写的一本《中国缺什么，日本缺什么》，还有《疯狂周刊》的从另一个角度看日本。</p> <p>No.10-7</p> <p>更重要的是通过某些事情感受到行为方式以及思考方式的不同，能更好地理解日本以及日本文化。</p> <p>No.16-8</p> <p>我感觉日本人和中国人不是说非常的像。从相貌上来讲，两者可能没有那么大的区别。但是性格上来讲，可能相对来讲自己接触不是特别的多，不管是职场上日本人还是职场上的中国人都是一样的，但是可以根据我见过的进行一个比较，如果是职场上的日本人的话，感觉上是日本人做事相对来讲更认真一些，对事情的态度比较严肃一点。不是说中国就不好，肯定不是这种意思，我觉得日本人对这些东西他照顾得相对来说比较全面。</p> <p>No.18-6</p> <p>不一样的地方挺多的吧。首先感觉礼尚往来比较多，还有就是他们的挨拶这个地方比较注重，对。我还觉得他们特别有思いやり，特别好。</p> <p>類似例：</p> <p>No.0-A16</p> <p>但是我问了一下就在美国留学的那个人，他说根本不是这个原因，他就是因为现在越南和泰国比中国劳动力便宜所以才走的，并不是说因为中国人不讲理呀、做东西不认真的原因。</p> <p>No.0-A17</p> <p>您看像中国不好的地方我就看那个车，你看车现在哈，如果我要是没学日语，没接触日本人，我总觉得是正常，车就不应该让人，那我现在学了，你接触的日本人，我就寻思怎么就不能跟人家国家学习？</p> <p>No.0-A18</p> <p>你们天天就这么这么做，中国人咱自己就好说了，你给人外国人啥印象？</p>
理論的メモ	<p>・“感觉噢，原来是这样，日本也有相同以及不同的地方”（No.3-2）→両文化の共通点と相違点の認識ができた。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ “但是看他们就是也会发现他们身上一些优点” (No.5-4)、“这点也很值得学习” (No.5-7) など→他文化への認識と理解を深めた。 ・ “我觉得普通民众 [日本], 根本就没有政治层面想的那么复杂, 就是很单纯的, 你对我好, 我也对你好, 没有说是有那么深的民族仇恨。” (No.6-6) →<文化理解の意識化>は、<日本文化の受容>に影響を与える。 ・ “换个角度看, 我觉得挺有意思的, 就是中国人是这么想的, 你们认为是这么想的, 这个, 这个不是说什么课本上的知识, 这个我觉得就是了解这方面, 我觉得对跨文化那个交流是挺有帮助的” (No.9-10) →日本語専攻大学生は、異文化接触に際して、文化間に存在する差異を認めるような異文化理解の重要性を認識するようになる。日本語専攻大学生は、日本人に具体的なイメージを形成し、それによってそれまでに抱いていた偏見が減少し、異文化理解に対する認識ができるのだ。→<日本人イメージの具体化(個別化)>が<文化理解の意識化>に影響を与えることをさらに裏付けた。 ・ “感觉特别丢人, 自己对本国的文化不了解” (No.10-6) →中国文化への気付き。→日本語教育における中国文化重視への配慮が足りないことを示唆している。 ・ “我就寻思怎么就不能跟人家国家学习” (No.0-A17) →接触が継続しているうちに、日本語専攻大学生は、自文化を批判的に見るようになり、さらにそれによって他文化への固定観念を修正し、<日本文化への受容>を促す。
--	---

概念名 (32)	日本文化の受容
定義	日本文化が好きになることや、日本の社会通念を受け入れることのように、日本文化に受容な態度をとること。
具体例	<p>No.1-1 [I: 为什么想去日本留学?] 跟日本人接触也有关系吧。嗯, 就是想去看一看, 切身去日本体会一下那种。</p> <p>No.1-2 他们就是人跟人相处那种感觉, 我也挺喜欢的。</p> <p>No.1-6 嗯, 日本人还是挺讲究的, 我觉得。就是就像我每次结束, 嗯, 上完这个, 可能不再教他, 最后的时候, 他就会给你礼金、红包, 然后给你礼物这种的, 然后上面还写一句话。也感觉他们平常的话, 嗯, 平常的话, 可能感觉挺讲究的, 还是然后送你的礼物都包装得特别精致。对, 挺讲究的, 然后送你的礼物都包装得特别精致。 (中略)。就是前两天我有两个学生都是教他完, 对, 他有送我钢笔啊什么的, 嗯, 就感觉还是挺讲究。</p> <p>No.1-13 嗯, 现在我感觉就是嗯, 已经知道, 就是就是教授, 我有那个嗯, 觉得自己那个方向有点明确了。就是嗯, 就是因为也有这么长时间的经验了吧, 可能就会越来越容易做到就是日本人比较接受的那种。往那方向贴近。</p> <p>No.2-6 甚至你还觉得其实他们还挺好, 挺友好的。</p> <p>No.14-2 通过和日本人的接触我觉得日本人不是我想象的那样, 对他们改变了印象。我的家乡在东北, 家里的长辈有很多对日本有一些偏见, 这也是我尽可能想让他们改变他们自己的观念的地方。</p> <p>No.18-6 就是第二次再上课的时候就顺手 [把礼物] 带过去了这样, 以后我也就养成这样的习惯了。</p> <p>No.18-6 后面也就我会反过来问他们“你们喜欢吃什么”或者“你们有什么想吃的吗?”, 一般我都是送吃的, 用的非常少。用的话就可能是小本子啊, 做笔记的时候用这样的, 送一些小礼物。</p> <p>No.0-E1</p>

	<p>文化我感觉我都挺喜欢，文化我就是刻意不去接触明治维新之后二战那段时间的历史，其他的我都看，像什么江戸时代的历史，我也会偶尔接触一下。对日本人嘛因为在网上老去日本的网站，所以日本的那种右翼分子我也都能看见，像什么说中国要发射核弹，中国威胁论什么的也都看见过，但是那种看看就算了，我觉得我接触过的日本人都挺好的。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.1-1 ; No.14-2 → 異文化接触は、日本への留学、家族の日本への固定観念を減少させようとする意識に繋がる。日本に対する受容の態度が生成した。 ・ “可能就会越来越容易做到就是日本人比较接受的那种。往那方向贴近” (No.1-13)、 “以后我也就养成这样的习惯了” (No.18-6) → 日本の風俗習慣などのような社会通念を受け入れ、接触している間、日本人の相手と同様な行動をとる。これも、日本に対する受容の態度の現れである。

概念名 (33)	異文化接触の経験の共有
定義	肯定的な接触経験を家族や友人と共有することで、家族や友人の日本観により影響を与えること。
具体例	<p>No.6-5</p> <p>基本被我灌输的现在已经他们就能很正面地看待这个事情。我觉得我爸妈讨厌日本很大的一部分原因就是因为他们战争，虽然好像他们没经历过，但是他们因为中国人那种民族感，反正就很讨厌日本。就是可能不好听一点吧，就是有的时候电视报道，因为中国跟日本的电视总会报道对方的一些不好，就是政治层面，我也不知道为啥，但是总是有一些地方，报道对方的不好。之前日本地震什么的，我妈妈就，可能说的不好听了点，就是我说：我的天呀怎么死了这么多人。我妈就说他们[日本军队]当时杀了这么多人那么多人。她是无心那么一句话，也没有多想。但是现在如果遇到那样事情，我妈肯定不会说这样的话。就觉得现在跟过去那些没有关系。</p> <p>No.6-6</p> <p>就通过我学日语，就是日语系的老师什么的就是也会说毕竟你要学这个语言，你必须得了解他嘛，然后了解多了以后，还有就很重要的一点原因是我跟日本人有了接触，就是讲课，我觉得[日本的]普通民众，根本就没有政治层面想的那么复杂，就是很单纯的，你对我好，我也对你好，没有说是有那么深的民族仇恨。然后我的学生还挺能送我礼物的，我倒也不是说我我觉得[送礼物]怎么样，送礼物也体现了他们的一份心意，他们也可以不送。然后还有看日剧吧，对有些[日本人]积极的一面，对生活的有些态度，比如说，很多很多方面，比如说家居风格，或者是为人处事，然后还有他们日剧里面总是有很多经典的那个台词什么的，然后就慢慢的，我就会跟我父母唠叨这些。</p> <p>類似例：</p> <p>No.14-2</p> <p>通过和日本人的接触我觉得日本人不是我想象的那样，对他们改变了印象。我的家乡在东北，家里的长辈有很多对日本有一些偏见，这也是我尽可能想让他们改变他们自己的观念的地方。</p>
理論的メモ	<p>・“基本被我灌输的现在已经他们就能很正面地看待这个事情”(No.6-5)、“然后就慢慢的，我就会跟我父母唠叨这些”(No.6-6) →自身の肯定的な接触経験を、家族や友人と共有し、彼らの日本に対する固定観念により影響を与える。→異文化接触が日本語専攻大学生自身の<日本文化の受容>の態度を生じさせるのみならず、それを他人にも輻射する。異文化接触が異文化理解に対して重要な意義を有する。</p>

	<p>・ “这也是我尽可能想让他们改变他们自己的观念的地方” (No.14-2) →まだ<異文化接触の経験の共有>を実施していないが、その意欲を持っている。その意欲は<日本文化の受容>に根差していると考えられる。</p>
--	--

概念名 (34)	異文化接触の持続と拡大
定義	対人関係の形成、ツールとしての日本語の活用による目的の達成、接触チャンスの再獲得などの形で、異文化接触を持続し、拡大すること。
具体例	<p>No.1-2 然后后来就嗯，就学生也挺多，所以就一直做了挺长时间。</p> <p>No.1-16 上得也挺顺利，就一直就这样挺自然地持续下来了。</p> <p>No.1-17 她会把我当成在中国的朋友一样，从日本回国也会带礼物给我，邀请我一起去看画展，当时还拍照留念了。上完课在她家做大阪烧和她们一家人一起吃，这些都让我感觉〇〇太太性格开朗热情，想跟她做朋友。在决定去日本留学以后，给她上完最后一节课[汉语]后，我把以前的合照打印出来给她，告诉她虽然我不教她汉语了，但有什么不懂的随时都能来问我。恰巧她老家在△△[日本的县名]，她同样也说在△△[日本的县名]遇到问题可以问她……这些都是我们能够一直到现在保持联系的原因吧。</p> <p>No.3-15 [我们的话题]比如关于毕业，还有工作。感觉成为朋友了。</p> <p>No.3-15 我记得有一个，那个学生觉得我讲的内容比较好理解，上课挺轻松的。后来我就继续教他了。[I:是他主动要求学校换人的吗?]是的。</p> <p>No.4-18 [I:你说有1、2个料理店的客人后来变成了你的学生。是怎么回事呢?]因为他去我们店里吃过两次饭，都是和他朋友去的，说话什么的也比较放松，他就说他想找老师学汉语，就加了我微信，后来我有时间了我就联系他了。</p> <p>No.10-1 然后两个月前，〇〇老师给我介绍了个兼职，是教日本人汉语。再就是在微信上，有和日本人聊天，好像是老师的朋友，是他加我的，有时候就聊一下。</p> <p>No.11-4 下学期，要是能想到什么交流会[中日学生交流会]的更新颖的方法，可能会再办办。</p> <p>No.11-6 先开始还不熟的时候，我跟他们说话，他们虽然非常礼仪都非常周到，但是他们开始是有一个对我比较反感的。那时候就感觉有一段距离。有一段时间挺难交流的。</p>

	<p>不过后来慢慢地就好了。[I: 为什么好了呢?] 先开始一看我这个人比较老实, 也没啥意思。后来一起玩一起学习什么的, 慢慢就成为朋友了。</p> <p>No.11-6</p> <p>平常跟他们[日本留学生]一起玩。他们有不知道的问题, 都挺喜欢问我的, 有时候会叫着我一起学习。</p> <p>No.15-10</p> <p>毕竟挑朋友的时候就从兴趣爱好开始筛了, 所以之后就没什么聊不来的就一直坚持下来了。</p> <p>No.15-10</p> <p>可能是更积极一点想去接触这个。</p> <p>No.17-11</p> <p>工资挺好, 虽然说能教汉语, 这也是一个原因, 但是你看我现在扪心自问, 我觉得工资可能是更主要的原因, 也没有很好, 但是作为一个本科学生来讲, 稳定的持续的, 人家一个月还跟家长要零花钱的, 我自己就能赚, 我家长还给我, 就觉得自己是富婆, 想买什么都能买什么啊, 然后干的这个工种呢工作内容我还挺喜欢的, 所以我就觉得能继续下去。</p> <p>対極例:</p> <p>No.17-11</p> <p>就我教的这些学生一个也没有, 因为我没有他们私人的联系方式。[I: 你也不想要?] 对, 我也没想过要。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・No.1-2、No.1-16→異文化接触を通して満足感を獲得した。それは、異文化接触の持続に繋がった。→<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>は、<異文化接触の持続と拡大>に繋がるのである。 ・No.1-17、“感觉成为朋友了”(No.3-15) など→友人関係が構築されたため、異文化接触が持続できた。異文化接触の【効果】に「友人関係の構築」という概念が生成されなかったが、<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>に「友人関係の構築」による満足感が内包されているため、これは<対人関係の不安の軽減と満足感の獲得>が<異文化接触の持続と拡大>に影響を与えることを裏付けた。 ・No.4-18、No.10-1→<対人関係の構築への努力>をして、接触相手に認められ、新しい異文化接触のチャンスを獲得した。新しい異文化接触のチャンスの獲得で「異文化接触の拡大」ができたのである。 ・No.17-11→目的を達成したため、異文化接触を持続する。→<目的の達成>が「異文化接触の持続」に繋がっている。 ・“我也没想过要”(対極例: No.17-11) →プライベートな対人関係が形成されていなかったし、接触相手もいつか帰国するにもかかわらず、日本人に中国語を

	<p>教えるアルバイトを続けている。アルバイトという接触の場があり、接触の相手もいて、異文化接触に必要な条件が満たされているため、異文化接触が持続しているとみなされる。</p>
--	--

概念名 (35)	あきらめ
定義	異文化接触を断念すること。
具体例	<p>No.7-1, 2</p> <p>三个人在一个日料店 [打工], 然后另外一个人在别的日料店。就都在日料店兼职, 后来就都不干了。[I: 为什么?] 怎么说呢? 就是它不像那种, 就是有的人去做那种给日本人讲课的那种家教, 挣得会多一点。像我每天晚上去三个小时, 就是 6 点到 9 点, 然后每个小时挣十块钱, 就觉得太辛苦了, 然后就算了吧, 也没有时间学习了, 感觉就有点累, 然后就都不干了。没赚很多钱, 然后也觉得没有什么收获。根本没有时间去让你去学跟日本人交流什么的, 因为活特别多, 就新来的嘛, 肯定就都让你干活。然后就, 就三个小时连轴转, 也就没干啥, 其实就只干活了, 然后就放弃了。</p> <p>No.12-7</p> <p>我可能就是交流特别累, 嗯, 比较困难啊, 所以就干脆我就回避掉了。</p> <p>No.14-1</p> <p>[I: 为什么没有持续和外教的交流呢?] 我认为可能我并不是百分之百地把我的精力全投入到日语上, 我虽然很喜欢日语, 觉得学习日语对我而言是一个很大的助力, 但是我觉得光靠日语的话没办法在社会上立足。像大连这个环境, 日语专业是非常棒的, 但会日语的人才也非常多。如果只是日语水平高的话并不是一个非常大的竞争力, 所以我还是会想去学一些其他的東西。比如日语的簿记, 现在也拿到了 N2 证书, 也考过了 N1, 过一阵子还想去学一下商务日语和英语、俄语。所以我觉得有得必有失吧, 这种感觉。</p> <p>No.16-7</p> <p>我考完研究生之后, 曾经想过找工作。当时是这样的, 大部分的人是不赞成我去找工作的, 他们认为我应该接着去做一下研究, 如果今年不行 [没考上研] 的话, 也不是说非得要差这么一年的时间。但是我当时的想法是去看一看, 如果行的话, 也不一定就是哪个路线 [考研] 自己非要去走, 也没有哪件是必须得做的, 不一定非要去。但是去看了之后就会感觉 [企业] 条件也不是说那么的理想, 相对来讲现在很多企业, 用本科生的条件去工作, 不管是待遇各方面还是以后的发展都不是说非常的理想。</p> <p>No.20-2</p> <p>就是对方也很忙, 然后因为我也是课很多, 又有各种考试, 所以后来就不联系了。</p> <p>類似例:</p> <p>No.0-B3</p>

	<p>他会给我讲很多中国从日本学的东西。嗯，然后，嗯，中国人那个很多不好的方面。</p> <p>[I: 他跟你讲的时候你是怎么反应的呢?] 我很惊讶。我停顿这么一两秒，但是就是但是还是要正常交流下去。然后我说我能不能不教他了? 语言学校那个老师他觉得麻烦，我如果辞了，他又得再带 6 个人开着车去他 [日本人汉语学习者的] 公司面试。</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ No.7-1,2→<日本語の活用についての期待と実際とのギャップ>が埋められなかった。 ・ No.12-7→<コミュニケーションの困難>に対応しきれなかったためである。 ・ No.14-1、No.16-7→<価値づけによる消極的な接触姿勢>を取ったためである。 ・ No.20-2→<接触条件の不備>と<学業重視による接触の一時的放棄>が複合的に作用しているため、断念した。 ・ No.0-B3→相手に中国を否定する話題をされ、相手との<固定観念による文化摩擦>にどう対応すればいいかわからず、戸惑ったため、断念した。